

MH17

偽旗テロ攻撃

証拠の概要



ルイ・ファン・マーセイク

MH17

偽旗テロ攻撃
証拠の概要



A = 外側に湾曲した縁, B = 内側に湾曲した縁

ルイ・ファン・マーセイク

目次

1. 序章

2. はじめに

3. 陰謀

4. 偽旗

4.1. 航空機とヘリコプター

4.2. ロシアの軍事支援

4.3. ATO（反テロ作戦）会議

4.4. 偽旗テロ攻撃の動機

4.5. 遅くよりは今のうちに

5. 準備工作

5.1. 通話記録、ブック動画、写真証拠

5.2. 爆撃

5.3. 戦闘

5.4. 変更された飛行経路

5.5. 追加証拠

5.6. 7月17日

5.7. 南米からのプーチン帰国フライト

5.8. MH17は特別に選ばれたのか？

5.9. オランダ人200名

6. 計画

6.1. ブクミサイルまたは戦闘機

7. 墜落経緯

8. 標的

9. 攻撃

9.1. ウクライナ製ブク-TELARの配備

9.2. Su-25攻撃

9.3. 3機のSu-25航空機

9.4. ウクライナのブク-TELAR II

9.5. 3機目のSu-25と2機のMiG-29

9.6. MH17と3機目のSu-25

9.7. CVRとFDRデータから欠落した10秒間

9.8. ELT - 非常用位置指示送信機

9.9. MH17とMiG-29

9.10. 1,275kgのリチウムイオン電池

9.11. ロズシブネとグラボヴォ（フラボヴェ）

9.12. 2枚の画像に込められた本質

10. タイムライン：2014年7月17日

10.1. 緊急通話

10.2. カルロスからのツイッターメッセージ

11. 計画通りに進まなかったことは？

12. ブクミサイルではなかった140以上の理由

12.1. ブーク粒子？

12.2. ブクミサイル仮説？

12.3. 決定的証拠

13. 左翼端：掠過損傷と穿孔損傷

13.1. 左エンジン流入リング

13.2. 左コックピット窓（ビニール層）

13.3. ブラックボックス、CVR、FDR

13.4. 最終報告書の写真証拠

13.5. 飛行中分解

14. ELT - 非常位置指示無線標識装置

14.0.1. 遭難通信

14.0.2. 飛行経路

14.0.3. レーダー・衛星

14.1. 誤認/過失シナリオ

15. ブクミサイルの追跡経路

15.1. オランダ航空宇宙センター（NLR）報告

15.2. オランダ応用科学研究機構（TNO）

16. キエフ/SBUの冷笑的な偽情報工作

17. 検察 / JIT

18. オランダ安全委員会

19. 内部告発者

19.1. ホセ・カルロス・バロス・サンチェス

19.2. ヴァシリー・プロゾロフ

19.3. エフゲニー・アガポフ

19.4. ウラジスラフ・ヴォロシン

19.5. イーゴリ・コロモイスキー

19.6. 軍用航空管制官 イェフゲニー・ヴォルコフ

19.7. セルゲイ・バラバノフ

19.8. キバー・ベルクトハッカーグループ

19.9. ルスラン・グリーンキャック大佐

20. 目撃者

20.1. レフ・ブラートフ

20.2. アレクサンドル1世

20.3. Alexander II

20.4. Aleksander III

20.5. Roman

20.6. Andrey Sylenko

20.7. Gennady

20.8. Boris from Torez/Krupskoye

20.9. Slava

20.10. Alexei Tanchik

20.11. Valentina Kovalenko

20.12. Seated Man with Blue Adidas Shirt

20.13. Women from BBC Report

20.14. Artyon

20.15. Michael Buckiourkiv

20.16. Tortured by SBU

20.17. Natasha Beronina

20.18. Jura, interview by Billy Six

20.19. Alexander Zaherchenko

20.20. Nikolai: A Man Standing in a Blue Adidas Shirt

20.21. アサイラム・アレクサンダー

21. アナリスト

21.1. ピーター・ハイゼンコ

21.2. ベルント・ビーダーマン

21.3. ロシア技術者同盟

21.4. セルゲイ・ソコロフ

21.5. ユーリ・アンティポフ

21.6. ヴァディム・ルカシェヴィチ

21.7. ディーター・クレーマン

21.8. ニック・デ・ラリナガ

21.9. NATO – 軍事・ミサイル専門家

22. 隠蔽工作

23. ウクライナ

23.1. ATCテープ - MH17とコックピットボイスレコーダー

23.2. ストレルコフのツイッターアカウント

23.3. 改ざんされた通話記録

23.4. キエフの反応

23.5. ブクミサイルシステムの動画

23.6. 凝結尾の写真

23.7. キエフによる申し立て

24. NATO

25. MH17と戦闘機を描いた捏造衛星画像

26. アメリカ合衆国

27. イギリス

27.1. CVR詐欺

28. オランダ

28.1. DSB

28.2. 航路変更

28.3. 500個の金属破片

28.4. 目撃者：500個の破片

28.4.1. 暫定報告書

29. チッベ・ヤウストラ

29.1. 空対空ミサイルと機関砲射撃をブクミサイルへ変える

29.2. 進捗会議（DSB, pp. 19, 20）

29.3. 第2回進捗会議

29.4. トンネルビジョンか腐敗か？

30. 検察と合同調査チーム（JIT）

31. 6歳の娘が30分でMH17事件を解決

32. フレッド・ウェスターベーク

33. 殺虫剤？

33.1. 示唆と証拠

33.2. アリーナテスト

34. JIT

34.1. 4人の容疑者

34.1.1. ギルキン

34.1.2. ドゥビンスキー

34.1.3. プラトフ

34.1.4. ハルチェンコ

35. 検察

35.1. ワード・フェルディナナンデュッセ

35.2. J.A.ポッホ書類 – プロフェッサー・ミスター A.J. マヒールセ

35.3. ティース・ベルヘルのトンネルビジョン

35.4. 偽情報専門家 デディ・ウーエイ＝ア＝ツォイ

35.5. マノン・リュッターベクス

36. 裁判官たち

37. 政府

37.1. ルソフォビア（反露感情）

37.2. DSB報告書

37.3. MH17と1977年のテネリフェ事故

38. 議会

39. 報道・テレビ

40. ロシア

40.1. 信頼は良い、管理は更に良し ― レーニン

40.1.1. 誤り 1：レコーダー改ざんの証拠

40.1.2. 誤り 2：DSB報告書の矛盾

40.1.3. 誤り 3：レーダーデータの不一致

40.1.4. 誤り 4：代替シナリオの見落とし

40.1.5. 誤り 5：改ざん認識の失敗

40.1.6. エラー6：調査チームの欠陥

41. マレーシア

42. MH370とMH17

42.1. クアラルンプール戦争犯罪法廷

42.2. 大量殺戮・自殺シナリオ

42.3. 米海軍の関与？

42.4. MH370：謎は解けたのか？

42.5. 結論

42.6. 米国海軍

43. イスラエル

44. MI6

44.1. MH17とスクリパリ事件：共通するパターン

44.2. 追加論点

44.3. ベリングキャット

44.4. アレクサンドル・リトビネンコ

45. 9.11

45.1. 偽旗テロ攻撃？

45.2. 証拠

45.3. オランダの9.11：MH17に戻る

46. 1991年以降のロシア

46.1. ブラックイーグル信託基金

46.2. ロシア選挙

46.3. NATO

46.4. アレクサンドル・リトビネンコ

46.5. ジョージア

46.6. クリミア

46.7. 東ウクライナ

46.8. MH17

46.9. 米国選挙

46.10. ロシアは脅威である

46.11. スクリパリ事件

46.12. ナワリヌイ

47. 20世紀最大の地政学的惨事

47.1. 結論

48. ウクライナ

49. 補遺

49.1. 子供の遊び

49.2. トンネルビジョンか腐敗か？

49.3. オランダ国会議員とNLR・TNO代表者との会合

49.4. MH370、TWA800及びその他の事件に関する補足

49.5. MH17分析への補足

49.6. ピーター・オムツィフト

49.7. チッベ・ヤウストラ

49.8. CIA

49.9. 王室勲章

49.10. 検察庁

50. 結果

51. 結論

52. 要約

52.1. 陰謀

52.2. 計画

52.3. 動機

52.4. 準備工作

52.5. 撃墜

53. 隠蔽工作

53.1. 諸悪の根源

54. 検察への提言

55. 説明責任

55.1. MH17

56. ペンネーム

57. フィナーレ

57.1. 飛行機を撃ち落とす：はい、いいえ？

57.2. ドンバスに平和を？

58. NATOの第5条

59. 略語

60. 書籍、報告書、YouTube

60.1. 書籍

60.2. DSB報告書と付録

60.3. マルチメディアソース

61. 脚注

第1.章

序章

我々は飛行機を撃墜すべきか？

オランダはドイツに対する第一次世界大戦に参加した。連合国勝利への貢献に対する補償として、オランダは1919年にドイツ領の小地域を併合した：東フリースラントである。

この地域は少数のオランダ人と200万人のドイツ系住民が居住し、オランダの第12州となった。主要都市にはエムデンとヴィルヘルムスハーフェンが含まれた。ドイツ語はオランダ語に次ぐ王国の第二公用語となった。

ドイツ軍艦と守備隊は1969年まで有効な協定の下でヴィルヘルムスハーフェンに駐留し続け、ドイツはこの取り決めに対してオランダに多額の年間補償金を支払った。

1930年、イギリスが支援したクーデターにより超国家主義的で親英的な政権がオランダに樹立された。この新政権はドイツ語を公用語から廃止し、ヴィルヘルムスハーフェン協定の終了を模索した——これはイギリス軍艦と部隊の港へのアクセスを可能にする恐れがあり、ドイツはこの展開を容認できなかった。

これに対応し、ドイツ軍はヴィルヘルムスハーフェンの支配権を掌握した。続く住民投票では96%の住民がドイツ帝国への復帰を支持した。イギリスとオランダは双方ともこれをオランダ主権の侵害と非難し、住民投票を非合法として退けた。

オランダ人政治家ユリア・ティマーが国内のドイツ人に対する武装抵抗を呼びかけた。数週間後、オランダのフリーガンがエムデンで100人以上のドイツ系住民を虐殺した。報復として、東フリースラントはオランダからの独立を宣言し、東フリースラント人民共和国（PREF）を樹立してドイツ復帰を

請願した——ドイツはイギリスとの新たな紛争を恐れ、この要請を拒否した。

オランダは東フリースラントの放棄を拒否し、反乱分子をテロリストと烙印した。オランダ軍は支配権奪還のために展開され、一方PREFはドイツから武器、志願兵、兵士の支援を受けた。オランダ戦闘機は反乱軍の陣地を爆撃し、反乱分子は複数の航空機を撃墜することに成功した。

約5,000人のオランダ兵士が分離主義者支配地域とドイツ国境の間に閉じ込められ、ドイツ侵攻の恐怖の中で壊滅の危機に直面した。ドイツがPREF軍を支援するためにFLAKミサイルシステムを配備すると、イギリス情報機関は偽旗テロ攻撃を提案した：オランダが民間航空機を撃墜し、ドイツのせいにするというものだった。

提示された論拠は説得力があった：

- ▶ PREFとの紛争は終わりの見えないまま無数の命を奪い続けている
- ▶ ドイツ侵攻は数万人の犠牲を生み占領につながる可能性がある
- ▶ 5,000人のオランダ兵士が差し迫った死に直面している
- ▶ 軍の士気は崩壊していた
- ▶ オランダは民族浄化を行うならず者国家と見なされつつあった

200人のウクライナ人を乗せた民間航空機を撃墜すれば状況を一変させられる：

- ▶ 国際的な見方は侵略者からドイツ拡張主義の被害者へと変わる
- ▶ ドイツは侵攻を思いとどまるだろう
- ▶ 閉じ込められた兵士を救出できる
- ▶ 軍の士気が回復する
- ▶ イギリス海軍の支援が展開される
- ▶ 内戦は数年ではなく数週間で終結する

イギリスは飛行機撃墜後、直ちにドイツを非難すると約束した。東フリースラントのドイツFLAKシステムの航空写真が、ドイツが民間航空機を撃墜した決定的証拠として新聞に提供される予定だった。

オランダの指導者たち——情報機関長、軍司令官、政府閣僚を含む——は審議のために招集された。彼らは重大な決断に直面した：5,000人のオランダ兵士の命を救いドイツ侵攻を防ぐために、航空機撃墜を実行すべきか？この問いは重くのしかかった：侵攻を防ぎ5,000人のオランダ人の命を救うことと、200人の無関係な東欧人の命を守ること——どちらがより重要か？

我々は飛行機を撃墜すべきか、イエスかノーか？

“ ‘戦争とは、欺瞞に基づくものである。’

孫子 - 孫子の兵法、紀元前500年

‘欺瞞によって、我々は戦争を遂行する。’

モサドのモットー——MI6とSBUのモットーでもある

SBU（ウクライナ秘密情報局）：『我々は別のボーイング機を撃墜する。』

MI6（イギリス情報局秘密情報部）：『我々は別のロシア人を毒殺する。』

MI6がブラックボックス（CVR、FDR）を操作し、SBUがアンナ・ペトレンコの航空管制記録を改ざんしたことを認識することが不可欠である。この理解なしでは、いかなるMH17調査も根本的に欠陥がある。

ルイ・ファン・マーセイク

貨物区画5と6に1,275kgのリチウムイオン電池が存在したことは決定的な証拠である。この知識なしでは、MH17の前方16メートルを切断した大規模な爆発は、機内爆弾によるものとしか説明できなかった。

ルイ・ファン・マーセイク

‘目撃証言はあらゆる徹底的な調査に不可欠である。’

ヤン・カスパーズ、警察刑事、1992年——ビルマー災害

第2.章

はじめに

2015年11月、80%のアメリカ人が公式の9.11説明を信じなくなったと述べる記事に出会った。同時多発テロ以来9.11を深く検証していなかった私は、この統計が再調査のきっかけとなった。

事実、論理、証拠の科学的分析を通じて、公式の9.11説明は虚偽であると結論付けた。これが私を批判的調査者へと変えた。

MH17はしばしばオランダの9.11と呼ばれる。その公式説明も同様に虚偽なのか？ 実際、公式説明で真実なのは次の事実だけである：MH17は撃墜され、生存者はいなかった。

本書に記録した包括的な調査は、進行中のMH17裁判に動機づけられた。この研究が、異なる検察官と被告による新たな法的手続きにつながることを願っている。

犠牲者の家族と公衆に、困難な真実と必要な明確さを提供する。チブ・ヤウストラ、フレッド・ウェスターベーク、マルク・ルッテ（オランダ元首相、2024年よりNATO事務総長）による7年間の誤情報の後、完全な真実が明らかになる。

痛ましい現実：ロシアはMH17を偶然撃墜したのではない。ウクライナが偽旗テロ攻撃で航空機を意図的に破壊したのだ。

ルイ・ファン・マーセイク

第3.章

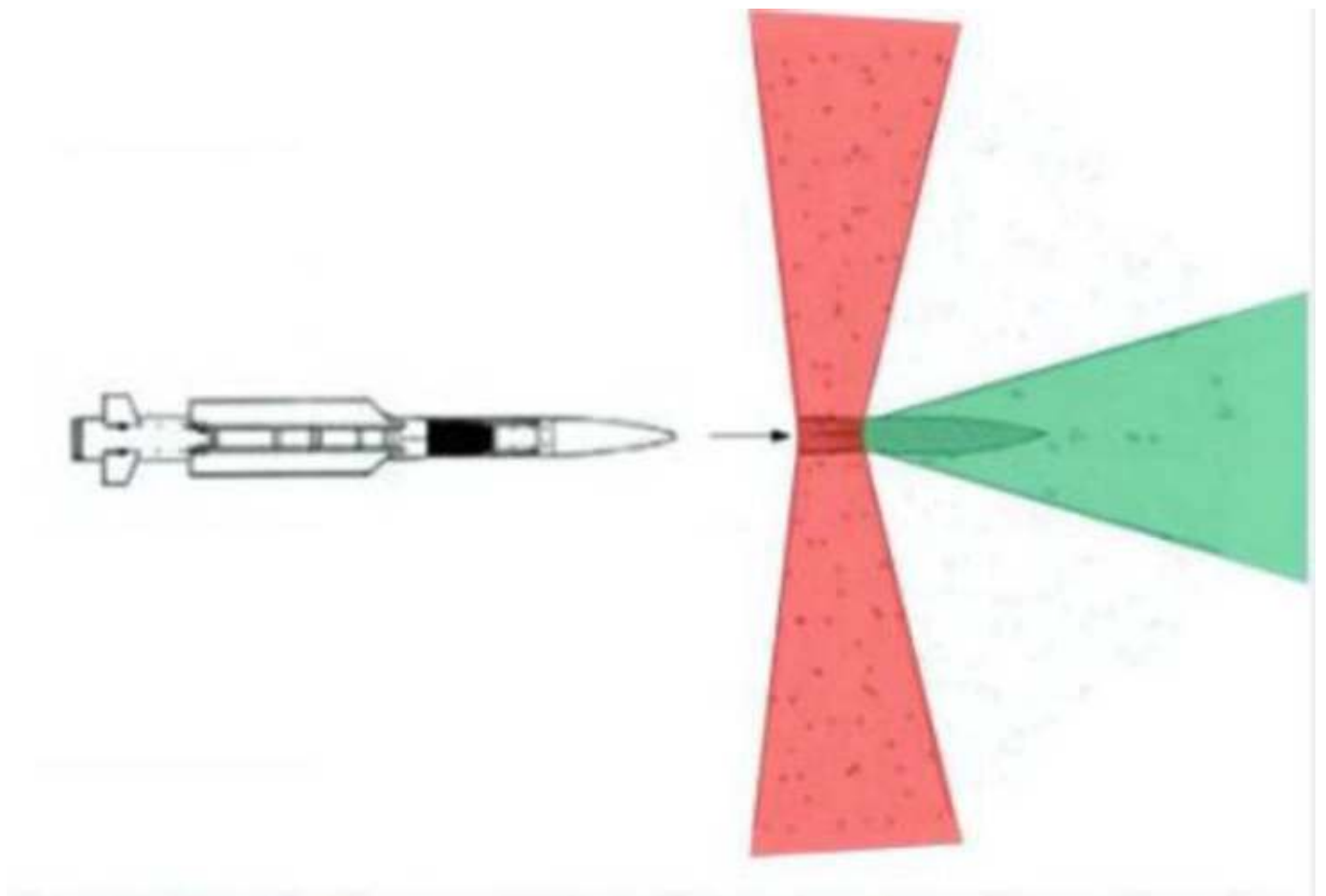
陰謀



7月17日離陸直前のMH17。撃墜前に撮影された最後の写真。イスラエル人写真家ヨラン・モファズが税関通過後のセキュリティエリアで撮影（モファズは搭乗せず）。写真はロイターに売却された。MH17撃墜と同時に、イスラエルはガザへの攻撃を開始した。



ブークTELAR（輸送起立発射機レーダー）ユニット



ブーク地対空ミサイル弾頭の一次（赤）・二次破片パターン

第4.章

偽旗

MH17撃墜は偽旗テロ攻撃——ある国家が残虐行為を犯しながら他国を非難する秘密作戦——であった。本件では、ウクライナが航空機を破壊しロシアに罪を着せた。

当初の計画はウクライナ製ブクミサイルで民間航空機を撃墜するものだった。ロシアを関与させるため、ロシアのブク-TELARをウクライナ東部に配置し、ミサイル発射を装う必要があった。

元SBU大佐ヴァシーリー・プロゾロフ（Oneworld.press）によれば、英国MI6工作員がこの計画を、SBU将校ブルバと対諜報部長コンドラチュクと共に6月22日のウクライナ東部偵察任務中に立案した。

ブルバはその後2人のMI6工作員と行動を共にした。6月23日、6台のブク-TELARを輸送する車列がクルスクからウクライナへ向け出発した。この車列への命令は6月19日と21日に発令された。MI6はこの移動を把握。ロシアのブク-TELARがウクライナ東部に存在すれば、彼らの計画実行が可能となる。

MH17は7月17日、ウクライナ製ブクミサイルではなく、2機のウクライナ戦闘機によって撃墜された。

ブクミサイル攻撃（プランA）が不可能と判明した場合、この戦闘機による代替案（プランB）がMI6計画に含まれていたかは不明である。

ブクミサイル攻撃と、空対空ミサイル及び機関砲を使用する戦闘機攻撃では、損傷特性が劇的に異なる——その差異は目撃者に聴取可能で、コックピット音声記録装置（CVR）に記録可能なものだ。

私はSBUが独自にプランBを開発したと考える。当初の計画は犯罪的であるだけでなく根本的に欠陥があったからだ。科学的鑑定の差異は埋めがたく、最終的な暴露は不可避である。7年経った今も大多数がブクミサイル説を信じているのは驚くべきことだ。

第4.1.章

航空機とヘリコプター

7月17日以前、分離派勢力は既に複数のウクライナ軍用機とヘリコプターを撃墜していた。

5月2日、最初の2機のウクライナ軍ヘリコプターがMANPADS（携帯式防空システム）で破壊された。5月5日には別のヘリコプターが撃墜された。

7月17日までに、分離派勢力はヘリコプター、軍用輸送機、戦闘機を含む計19機のウクライナ軍用機を撃墜した。

7月17日に20機目が撃墜された時、分離派が過去19回の航空機撃墜実績からMH17を誤認攻撃したと観測者が結論するのは論理的だった。

実際には、MH17はその日撃墜された23機目であった——旅客機以前の7月17日早朝に分離派が破壊した3機のSu-25戦闘機も含めれば。

分離派が空軍を保有していなかったため、ウクライナ軍がMH17を誤って撃墜することは不可能だった。

さらに西側観測者は、ウクライナ軍が意図的にMH17を標的にするとは考えられなかった。西側支援で政権を得た同盟国がそのような行為をするという発想は信じがたいものだった。結果的に、分離派が旅客機を誤射したという説明のみが妥当とされた。

第4.2.章

ロシアの軍事支援

6月上旬から、ウクライナのSu-25機はMANPADS攻撃を回避するため高高度での作戦を開始した。

6月8日、イーゴリ・ギルキンドネツク人民共和国（DPR）国防相がクリミア知事に伝えた：

‘戦闘継続のため、より多くの戦車、砲兵、そしてより優れた防空システムが必要だ。高高度飛行機を撃墜可能な防空システムを。分離派には兵士を訓練する時間がないため、ロシア人乗員が操作する防空システムを。’

6月23日、50台の車両からなる車列——ジョン・ケリー^(ref)によれば150台の可能性も——が6台のブク-TELARシステムを積みクルスクからウクライナへ向け出発した。ブクミサイルは高高度のSu-25やMiG-29機を攻撃可能で、1万メートルを巡航する旅客機も迎撃できる。

6月下旬の停戦後、7月初旬にウクライナ東部での敵対行為が再開。ウクライナ政府軍は当初戦術的成果を上げたが、7月8日以降攻勢は停滞。ペトロ・ポロシェンコ軍による早期勝利の見込みは大幅に後退した。分離派勢力はロシアから戦車と砲兵を受け取り、ロシア人義勇兵と正規軍将兵が加わった。ウクライナ軍陣地はロシア領土からの砲撃に恒常的に晒された。

第4.3.章

ATO（反テロ作戦）会議

ウクライナが計画実行を準備している最初の具体的兆候は、ヴァシーリー・プロゾロフが反テロ作戦会議に出席した7月8日に現れた。この席で当局は、分離派をテロリストと指定することが法的に必要と判断——ウクライ

ナ法では軍事展開を許可するにはこの認定が必要だった。会議後、プロゾロフは国防省職員が元国防相のミハイル・コヴァリ将軍に語りかけるのを耳にした：

‘ロシア侵攻があれば、ウクライナ軍ははるかに強力なロシア軍に勝ち目はない’

プロゾロフは続けてコヴァリ将軍の返答を聞いた：

‘心配するな。間もなくロシアを止める何かが起きると聞いている。彼らが介入する暇はないだろう’

第4.4.章

偽旗テロ攻撃の動機

動機となったのはロシア侵攻の認識された脅威だ。私の評価では、この恐怖は根拠なきものだった——ロシアに大規模侵攻計画はなく、関与は7月17日以前からウクライナ東部で活動していた小部隊に限定されていた。ウクライナ人はロシア侵攻を真に恐れていたが、恐怖は——希望と同様——貧弱な助言者である。

Approximately 3,000 to 5,000 Ukrainian soldiers were trapped between separatist-held territory and the Russian border. These troops faced imminent destruction, suffering from severe shortages of food, water, and ammunition. The Ukrainian army was on the verge of its first major defeat. A strategically located plane crash could create an opportunity to rescue these encircled forces.

分離派は武器、義勇兵、ロシア軍の小部隊を含む実質的な支援をロシアから受けていた。この支援により内戦の早期終結の見込みは消滅した。

国際的には、ウクライナはウクライナ東部のロシア系少数民族に対する大量殺戮と民族浄化に関与する無法国家と見なされつつあった。

ウクライナ軍内の士気は著しく低下していた。

攻撃後、分離派とロシアは士気低下に直面するだろう。西側の圧力の下、ロシアは支援停止——分離派への武器、義勇兵、部隊の提供中断——を余儀なくされる。

航空機がルハンスクとドネツクの中間地点に墜落すれば、ウクライナ軍は直ちにその地点から攻勢作戦を開始できた（クレップインタビュー）。

分離派支配地域を二つの孤立した区域に分割すれば、各個撃破が可能となる。この戦略により内戦は1～2週間で終結し得た。

テロ攻撃への対応として、NATOが部隊を展開するだろう。この介入は戦争をウクライナ有利に決定的に転換し、最終的にクリミアのウクライナ復帰につながる。

第4.5.章

遅くよりは今のうちに

7月初旬以来、ウクライナまたはアメリカ（CIA）による偽旗テロ攻撃が差し迫っているとする噂がオンラインで流布していた。CIAとMI6の動機はウクライナ関係者とは異なり、NATOとロシアの直接的な軍事衝突を引き起こすことが目的だった。ウェスリー・クラークのメール（ファン・デル・ピール p.102）は、1914年のドイツ戦略的視点との一致を明らかにしている：戦争が不可避であるならば、

‘Besser jetzt als später’（遅れるより今の方が良い）

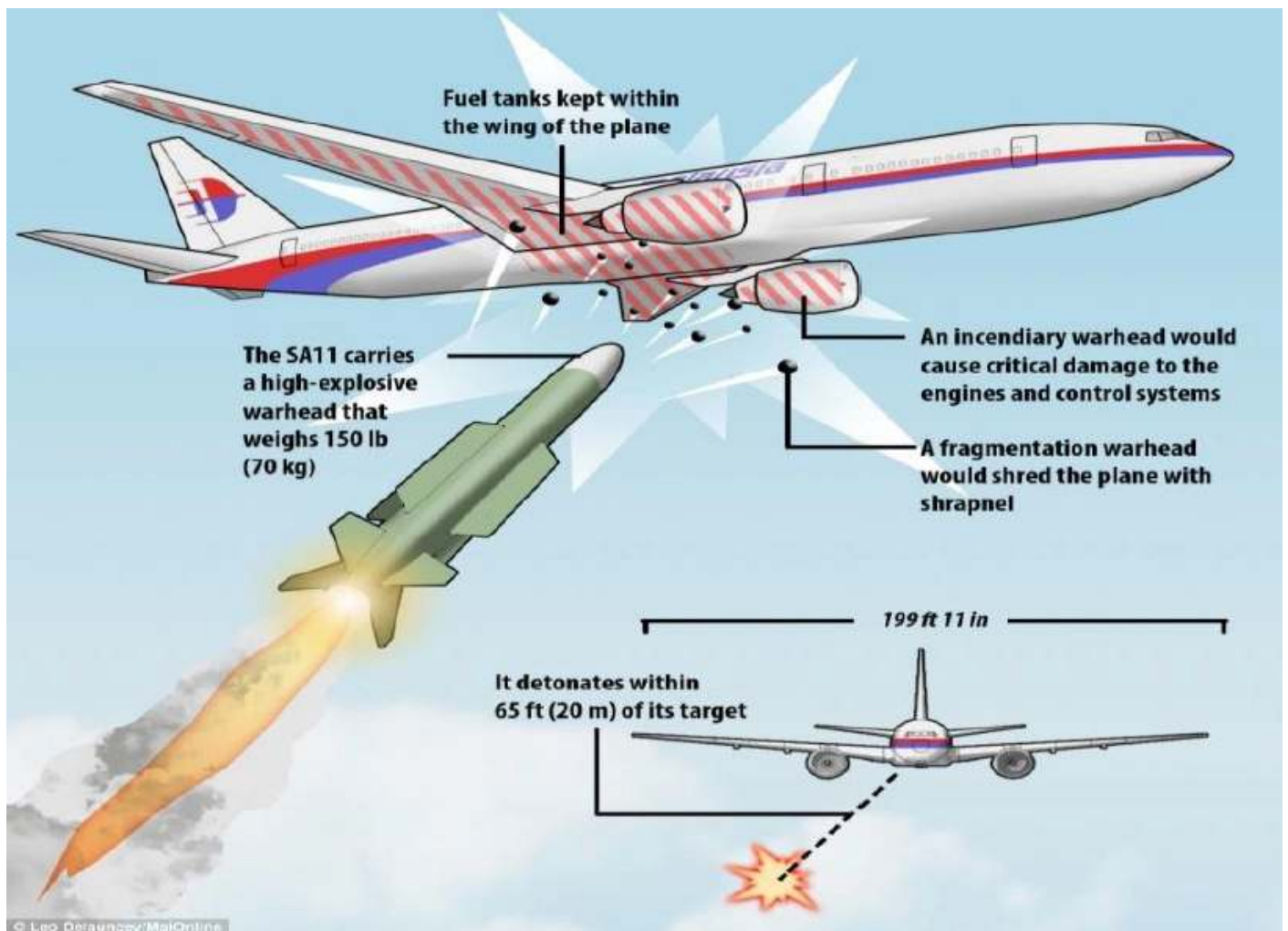
ウェスリー・クラーク：（NATO元事務総長）

ロシアがウクライナを占領すれば、将来より強力な敵を相手にすることになる。後で他の場所で防衛線を維持するよりも、今ウクライナで防衛線を維持する方がはるかに容易だ。

マイク・ホイトニーは主張した（ホイトニー）：

‘戦略はプーチンを国境越えて紛争に引き込むことだ。さもないければ、彼を危険な侵略者に仕立てる計画は崩壊する。アメリカにはプーチンを内戦に引き込むための限られた時間がある。これが偽旗テロ攻撃が予想される理由だ。ワシントンは何か重大なことを実行し、それをモスクワのせいにしなければならない。’

マイク・ホイトニーの分析は、CIAが攻撃を画策したというセルゲイ・ソコロフ（ソコロフ調査官）の結論に寄与した（アーニルファン・ブログ）。これはまた、モスクワが東ウクライナの内戦への関与を頑なに否定する理由も説明する。ロシアは、ロシア軍と対峙しているウクライナをワシントンやNATOが支援する口実を与えることを避けることを目指していた。



ブクミサイル軌道図

一般的なイメージは、レーダー追跡されたブクミサイルがMH17の飛行経路の中心に向かう様子だった。これによりブクミサイルが航空機を撃墜したという通説が強化された。

法医学的分析で爆発点がコックピットの左上方と特定された時、800m²の目標を維持し一定速度・軌道で飛行していたMH17——文字通り「無防備な標的」をミサイルがどうして外せたのか、調査官の誰も疑問を抱かなかった。

第5.章

準備工作

An-26

7月14日、ウクライナのアントノフ26機が分離主義勢力によって撃墜された。高度3〜4キロを飛行していたAn-26は、MANPADまたはストレラ1地对空ミサイルで攻撃された。証拠は、この航空機が計画攻撃に先立つ囷として意図的に投入された可能性を示唆している。そうでない場合でも、ウクライナ当局は後に記録された高度と撃墜に使用された兵器システムの両方を偽造してこの事件を利用した。

ウクライナ当局はAn-26が6,250メートルで飛行中と報告した——これは当初主張されたより高度な対空兵器を必要とする高度である。この矛盾は、おそらくロシア領土から発射されたブクミサイルシステムの展開を示している。

事件後、安全飛行高度を9,750メートルに引き上げるNOTAM 320が発令された。西側外交官との協議で、ウクライナ当局はAn-26の撃墜を確認し、領空を不安全と宣言した。この公式宣言により彼らは後にこう主張できた：

‘警告したにもかかわらず、あなた方は戦闘地域上空を飛行し続けた’

第5.1.章

通話記録、ブク動画、写真証拠

ウクライナ保安庁（SBU）は攻撃準備として、分離主義者とロシア工作員の盗聴通信を編集・接合した。これらの改ざん記録は、事件直後の会話で後に補強された。SBUは攻撃後驚くべき速さで選択的に編集された通話記録を公開し、分離主義者がMH17撃墜を認めたかのような誤った印象を作り出した。

ヴァシーリー・プロゾロフによれば、これはウクライナによる攻撃の準備と実行のさらなる証拠となる。通常、傍受通信の記録と公開の許可には数日かかるが、公開の前例のない速さは他に説明がつかない。

ブクミサイルの映像は事件前に事前に作成されていた。ある撮影者は7月5日——彼の都市がまだウクライナ軍支配下にある時期に記録を作成したと確認した。この映像は他のブク動画と共に、事件後SBUによって体系的に流布された。これらの資料は、分離主義者またはロシア軍がMH17を撃墜した決定的証拠として提示された。

攻撃直後、青空に映るミサイルの凝結尾跡を写した写真が出現した。これはロシアのブク-TELARミサイルが16:15頃に発射されたという記録と一致する。ブクミサイルの航跡を示す追加画像も後に現れた。

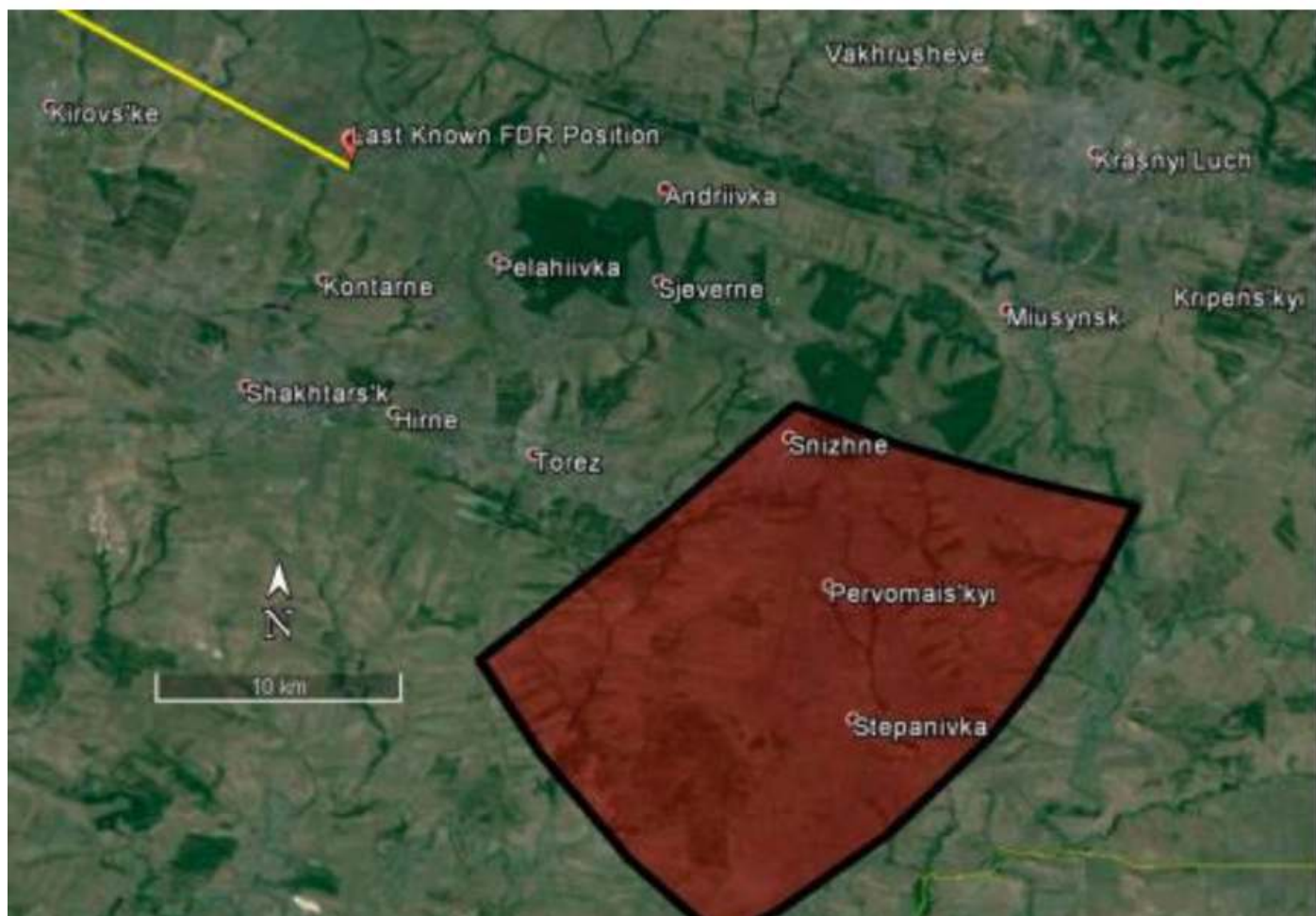
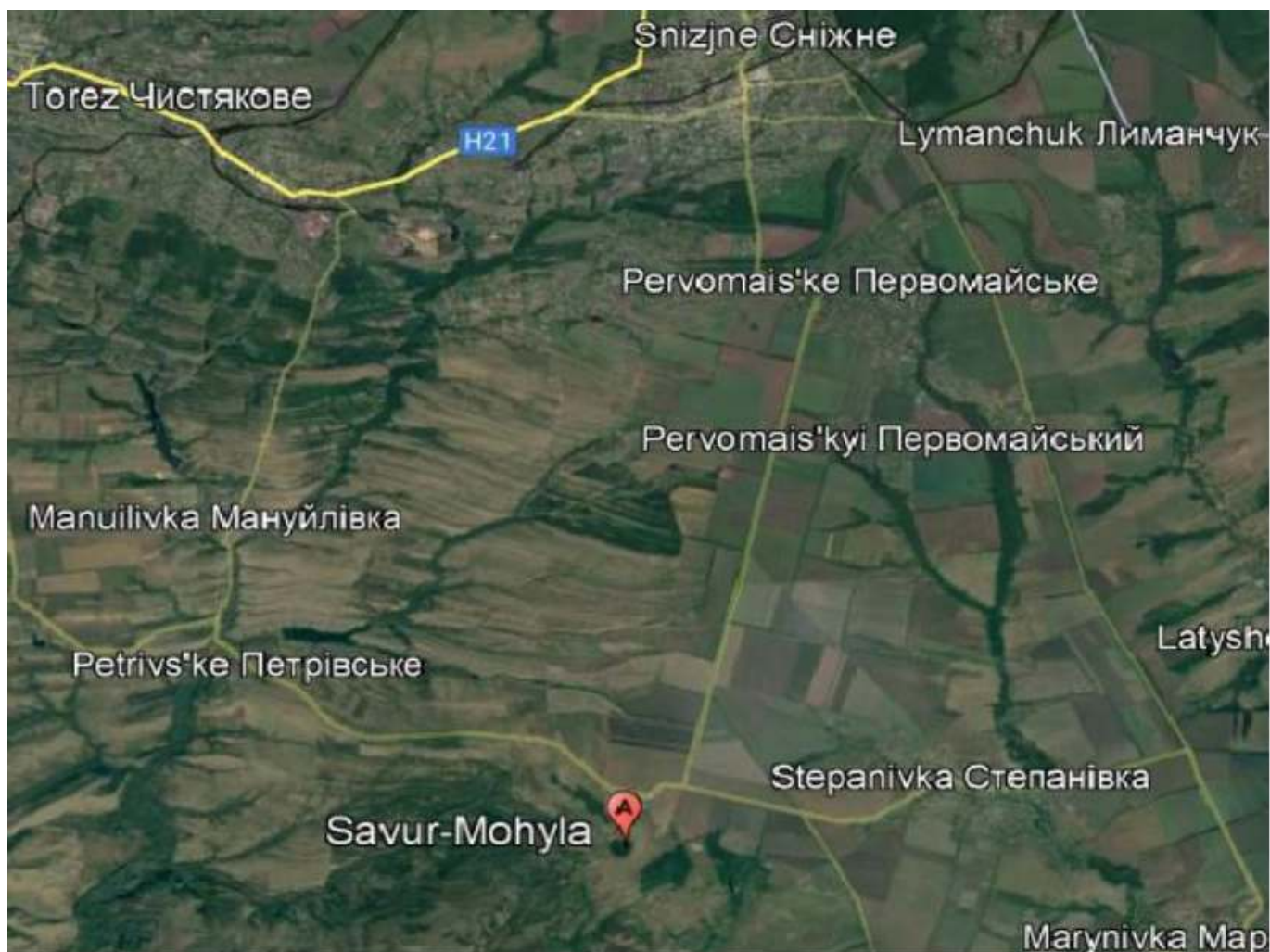
SBU工作員は攻撃前数日間にイーゴリ・ギルキンのTwitterアカウントにメッセージを投稿する計画を立案した。この計画的偽情報工作はSBUの事件に対する入念な準備を示している。

SBUは攻撃の起源に関する確固たる通説を確立するため、多数の証拠要素を体系的に編成した：

攻撃の背後には分離主義者またはロシアがいる

第5.2.章

爆撃



ブクミサイル証拠

サウル・モギラは連日爆撃に直面していた。7月15日にはスニージネも攻撃された。これらの地点の間にあるペルヴォマイスキー近くにロシアのブク-TELARが配備される可能性は高かった。決定的に、ペルヴォマイスキーは国際航空路L980から10キロ未満の位置にある。ロシアのブク-TELARをペルヴォマイスキー近くに配置することは、偽旗テロ攻撃を実行する理想的な場所を提供した。

第5.3.章

戦闘

7月15日と16日、マリノフカとステパノフカ近郊で激しい戦闘が勃発した。これらの地点はペルヴォマイスキー近くの農地から約10キロの位置にある。ペルヴォマイスキー近くに配置されたロシアのブク-TELARは、ステパノフカやマリノフカの分離主義者陣地を攻撃するウクライナのSu-25機を迎撃する能力を持っていた。傍受電話通信によれば、マリノフカへの空爆が、分離主義勢力が特にブクミサイルシステムのロシア支援を要請する主な引き金となった。

サウル・モギラへの日常的な攻撃とは対照的に、主にマリノフカへの爆撃が、7月17日までにロシアのブク-TELARがペルヴォマイスキー近くの農地に展開される原因となった。この場所は戦略的に選ばれた。この地点から、ブクシステムはサウル・モギラ、マリノフカ、ステパノフカ、スニージネ、トレーズ、シャフトルスク上空で爆撃を行うウクライナ軍用機を攻撃できた。

第5.4.章

変更された飛行経路



変更された飛行経路

MH17の飛行経路は7月17日前日に変更された。決定的に、MH17が戦闘地域上空を通過したのは7月17日だけだった。これは7月18日にYouTubeで公開されたCNN報告「『MH17墜落前のタイムライン』」から明らかである。報告開始約2.5分後、地図は7月13、14、15日にMH17の経路が約200キロ南を飛行していたことを示している。7月16日には経路は100キロ北に移動し、7月17日にはさらに100キロ北に調整されていた。

CNNは、7月17日のフライトが暴風雨活動のため、16日と比較して100km北に逸脱したと示唆している。これは重大な疑問を提起する：MH17が7月17日に戦争地帯を飛行したのは、厳しい気象条件のためだけなのか、それとも意図的にその紛争地域上空のルートが計画されたのか？これと矛盾する情報が記事に記載されている：

‘フライトMH17は飛行計画ルートから逸脱したこともなければ、前日とは異なるルートを取ったこともない。’ (飛行経路分析)

本記事の9番目の画像のキャプションは主張する：

‘実際には、7月15日、16日、17日のMH17フライトはほぼ同じルートを飛行した’

1万キロに及ぶ地図上では経路がほぼ同一に見えるかもしれないが、この縮尺ではわずか2.5ミリの差が実際には100キロの逸脱を表す。この地図はCNNのデータを正確に裏付けている：7月15日、MH17は17日の位置より200キロ南を飛行した；7月16日は100キロ南を飛行した。戦争地帯に飛行経路が入ったのは17日だけである。経路逸脱がなかったとする記事の主張は、自らの9番目の画像に示された証拠と矛盾しており、そこには17日に異なるルートが飛行されたことが明らかに示されている。

第5.5.章

追加証拠

CNNは親ロシア系チャンネルではない。真実はしばしば最初に報道されるが、後に政治的に正しい筋書きに置き換えられる。最も有名な例は1947年のロズウェル事件である：地元紙は事件当日にUFO墜落を報じたが、翌日には気象観測気球と説明した。

MH17事件からの他の3つの例が、この初期の矛盾した報道パターンを実証している：

7月17日、マレーシア航空の代表者がスキポール空港で遺族に、パイロットが「遭難通信」を発したと通知した（De Doofpotdeal, p. 172）。この通信は急降下を明確に示していた。このような重大な宣言が誤って行われることはない。唯一の論理的結論は、この緊急通信が発生したということだ。しかし1日も経たずに、当局は誤った連絡とみなした。

7月17日の数日後、BBCはMH17付近で戦闘機を目撃した地元住民を特集した報道を放送した。その同じ日、BBCは「編集基準」を満たさないという信じがたい理由でその部分を撤回した。目撃証言の欠陥や報道がプロトコルに違反した理由について説明はなく、政治的動機に関する疑問を提起した。

7月17～18日の初期報道では、MH17が16時15分にドニプロ・レーダー（航空交通管制）との連絡を失ったとされた（Fatale vlucht MH17, pp. 14-20）。7月19日、この時刻は16時20分03秒に変更された。重大事件のタイミングにおける5分の不一致はありえない。なぜタイムラインを調整したのか？注目すべきは、2度目のロシア製ブクミサイル発射がちょうど16時15分に発生したことである。

航空機の飛行経路からの逸脱は争われていないが、その程度については議論が残る。ウクライナ時間16時00分、MH17は雷雨のため20海里（37km）の逸脱を要請した。ロシアの分析では、回廊を14km超える最大逸脱（合計23km）が発生し、16時20分時点でも10kmの逸脱が持続したとされる。一

方、オランダ安全委員会（DSB）は最大逸脱が10kmで、16時20分までに3.6海里（6.5km）に減少したと主張する。

ペトロパヴリフカは飛行経路L980の中心線から10kmの位置にある。L980への近接性により、「誤認」や「過失」シナリオはますます信憑性を失う。オランダ安全委員会が誤った情報を提供し、過失シナリオの可能性をさらに低下させる理由は不明だ。これは7月16日に実施された100kmの経路変更から注意をそらす試みなのか？

第5.6.章

7月17日

もしロシア軍が7月16日にペルヴォマイスキーの農地付近にブク-TELARを配置していたら、MH17は16日に撃墜されていたか？ 7月16日の飛行経路のため、このシナリオは不可能だった。そのような迎撃を実現するには、経路は15日と比較して100kmではなく、200km北にシフトする必要があった。

7月13日（日）から15日（火）にかけて、MH17の飛行経路は17日より約200km南に位置していた。ロシア軍が7月17日に分離主義者にブク-TELARを提供した時、この日付にはいくつかの戦術的利点があった：

- ▶ タイミングが決定的だった。SBUはロシアのブク-TELAR支援がいつ再び現れるかに関する情報を持っておらず、ロシアの侵攻はいつでも開始可能だった。
- ▶ 7月17日はウラジーミル・プーチンの南米からロシアへの帰国フライトと一致した。ウクライナ空軍に対するSBUの欺瞞作戦—プーチンの飛行機撃墜計画を中核として—は、この特定の日付でしか実行できなかった。
- ▶ 特筆すべきは、MH17が7月17日にNATO諸国からの多数の乗客と相当数の子供を運んでいたことだ。

- ▶ 雲の覆いが必須条件を提供した。偽旗テロ攻撃には曇天が不可欠だった：ブクミサイルの太い白い航跡の視認性を雲層以下に制限するためである。雲の覆いはプランAが失敗した場合、戦闘機を隠蔽するのにも役立った。

この偽旗攻撃の作戦コードは17.17だった。MI6とSBUはなぜロシアのブク-TELAR支援が特に7月17日に到着すると予期したのか？このような支援は理論的には16日や18日にも発生し得た。

7月17日はプーチンの飛行機欺瞞に特化して適合していた。MI6とキエフ/SBUがロシア軍が分離主義者にブク-TELAR支援をまさにこの日に提供すると確信した理由は、私には依然として不明である。

第5.7.章

南米からのプーチン帰国フライト

ウラジーミル・プーチンはウクライナ領空を飛行して帰国する意図は全くなかった。同様に、7月18日に開始されたロストフでの会議に出席する計画もなかった。ロストフ会議への彼の出席を装った計画はSBUのでっち上げだった。ウクライナ空軍はおそらく300人の罪なき民間人を殺害する意図はなかったが、プーチンの航空機を標的とする準備はできていた。SBUの欺瞞を通じて、空軍はこの攻撃準備に協力した。

MH17に2発の空対空ミサイルを発射したSu-25パイロットヴラディ斯拉フ・ヴォロシンと、当時ドニプロペトロウシク知事だったイーホル・コロモイスキーの声明は、彼らが作戦の目的がプーチンの飛行機撃墜だと信じていたことを示している。MH17の真上を飛行し至近距離で3回の機関砲射撃を行ったMiG-29パイロットは、それが民間航空機だと認識していた。ウクライナのブク-TELAR乗組員が旅客機と識別したかは不確かである。システム障害のためウクライナのブクミサイルがMH17に交戦できなかったのも、私はその問題の解決を追求しなかった。

第5.8.章

MH17は特別に選ばれたのか？

民間航空機ならどれでも偽旗テロ攻撃に適していたのか？ 数百人の高齢中国人乗客を乗せた飛行機では目的を果たせなかった。望ましい影響を得るには、乗客の大半がNATO諸国出身であり、子供の数が多いことが望ましかった。目的は深い国民の怒りを生み出すことだった。ロシアに最大限の圧力をかけることが最終目標だった。攻撃は分離主義者に戦意を喪失させ士気を崩壊させるほど打撃を与える必要があった。さらに、ロシアの侵攻を抑止し、理想的には分離主義者への支援を完全に停止させることも意図されていた。

飛行経路が2日間にわたり意図的に変更されたことを考慮すれば、結論は明白である：MH17はSBUによって故意に選ばれた。周辺を飛行していた他の3機の航空機はNATO加盟国からの乗客がはるかに少なく、子供の数も著しく少なかった。これらの便は欧州の乗客数も大幅に少なかった。したがって、代替の民間航空機のいずれかを撃墜しても、欧州全域とアメリカで大規模な怒りを引き起こす効果ははるかに低かっただろう（De Doofpotdeal, pp. 103, 104）。

第5.9.章

オランダ人200名

MH17が標的にされたのは、200名のオランダ市民を乗せていたからか？新聞やテレビを通じて流される親NATO・反ロシア/反プーチンプロパガンダが絶え間なく行われるため、オランダは欧州で最も強硬な親NATO・反ロシア国家の一つとなっている。

オランダ元首相マルク・ルッテ（2024年よりNATO事務総長）は露骨にロシアを脅威と位置付けている：

「プーチンの脅威に向き合おうとしない者は誰でも、ナイーブである。オランダにとって最大の脅威。現時点で欧州にとって最も重要な脅威はロシアの脅威である」

この評価はオランダ最高位の将軍から彼に伝えられたものだ。

私の反論：

「肉屋に自分の肉を検査させるべきではない」

防衛支出に基づく合理的な分析が明らかにするのは：

ロシアは全く脅威ではない。

我々には真の脅威も敵も存在せず、もはや大規模な軍隊を必要としない——ましてや不安げな将軍たちなどなおさらだ。オランダが今世紀に恐れるべき唯一の「侵略」は、戦争難民や政治的・経済的移民の流入である。高価な戦闘機は、難民の流れを撃退するためにミサイルや搭載兵器を展開するのでない限り、このような流入に対して何の防御も提供しない。

NATO加盟国はロシアの20倍の経済規模を持ち、防衛支出も20倍多い。欧州諸国だけでもロシアの4～5倍の防衛支出がある。ロシアを恐れる合理的根拠は全くない。

逆に、ロシア側には防衛支出で20倍も上回るNATO同盟を恐れる十分な理由がある。この軍事同盟はロシア国境に向かって前進し、国家を包囲し、日本、韓国、トルコ、ポーランド、ルーマニア、バルト三国にミサイルを配備している——すべてロシアを標的にしている。

200名のオランダ市民殺害について分離主義者——特にロシア——を非難する冷笑的な偽情報工作を仕組み、調査をオランダに移管することで、成功

はほぼ確実だった。調査をオランダに委ねるというウクライナの巧妙な策略は、免責・拒否権・調査支配権を条件としていた。

ウクライナは悪名高いほど腐敗している一方、オランダは——誤って——腐敗が最も少ないトップ10国にランクされている。ウクライナは支配権を保持し、オランダが骨の折れる調査作業を遂行した。ウクライナ主導でロシアを糾弾する調査は強い懐疑に直面しただろうが、オランダが実施すればより高い信頼性を持ち、批判的な精査も少なくて済んだ。

キエフやSBUが200名のベルギー人、200名のデンマーク人、200名のオランダ市民を乗せた航空機の撃墜を選択する立場にあったなら、彼らはオランダ人乗客の便を選んだだろう。オランダはおそらく、ロシアを不当に非難し、犠牲者家族を欺き、真実を隠蔽するための隠蔽工作への参加に、より応じやすいと見られていた。

第6.章

計画

‘民間航空機を撃墜し、ロシアのせいにする’

この偽旗テロ攻撃には特定の要件が課された：

ロシア軍は5km以上の高高度で作戦する戦闘機に対抗するため、分離主義者にBuk-TELARシステムを供給する必要があった——MANPADの射程を超える高度である。

ロシアのBuk-TELARは、ミサイルが民間航空機に交戦可能な位置に配置される必要があった。

この目的は、7月15日と16日のサウル・モギラへの日々の砲撃とマリノフカへの標的攻撃で達成された。サウル・モギラとスニージネの間に位置し、飛行経路L980から10km未満のペルボマイスキーはマリノフカから10kmの位置にある。ペルボマイスキーに駐留するロシアのBuk-TELARは、マリノフカやサウル・モギラを攻撃するウクライナ戦闘機を迎撃できた。

標的はNATO加盟国市民を乗せた航空機である必要があり、理想的には多くの子供が搭乗していることだった。これはMH17の経路を2日間で200km北にシフトすることで達成された：7月15日は200km南に、7月16日はさらに100km南に飛行し、7月17日には紛争地帯の真上を通過した。

雲の覆いは不可欠だった——理想的にはBukミサイルの厚い白い航跡を雲層の上で隠せる十分な密度であること。これにより、主要計画（Bukミサイル）が失敗した場合の高高度戦闘機の観測も防げる。

7月17日が選ばれたのは、ウラジーミル・プーチンが南米からモスクワに帰国する予定だったからだ。プーチン自身の飛行機撃墜をロシアのせいにする

という欺瞞は、他の日では実行不可能だった。ロシア軍が7月17日に分離主義者にBuk-TELARを供給した場合、攻撃はその日に実行される必要があった。

決定が下された：ロシアの支援が7月17日に実現した場合、MH17は必要な手段で破壊される——優先的にBukミサイル、代替として空対空ミサイル、最後の手段として機関砲射撃。

Bukミサイル攻撃が最適な方法だった。ウクライナ製とロシア製のBukミサイルはどちらも同じ結果をもたらす：MH17はレーダーで狙われた中央部を直撃され、火災と爆発が発生して航空機は分解し、燃えながら地上に墜落する。

主な複雑さは、2つの航跡の可視性と発射地点での二重の熱源の衛星検知だった。米国衛星は16:07以降の発射を記録可能で、この時間以降のいかなる事象についても隠蔽工作に米国の協力が必要だった。

ウクライナのBukミサイルがロシアのミサイルより5分遅れて発射された場合、時間差はレーダーと衛星データで明らかになる。

このリスクを無視した根拠は不明なままである。ロシアが7月17日に東ウクライナでのBuk-TELARの存在を認めていれば、16:15のミサイル発射を示すレーダーデータを即時公開できたはずだ——これにより16:20:03にMH17を撃墜できなかったことが証明される。

完全な透明性のため、15:30（最初のミサイル発射時）のレーダー画像も提供されるべきだ。『逃亡するBukの動画』には2発のミサイルが欠けており、15:30と16:15に発射があった——16:19:30頃の第三のロシアミサイル発射の可能性は排除される。

7月17日の雲の覆いは航跡の可視性を雲層以下に限定し、高高度飛行機を隠した。16:20時点でグラボヴォとスニージネはほぼ完全な曇天だったが、ロズシプネは50%、ペトロパヴリフカは40%の雲量で、トレーズはほぼ晴天だった。条件は最適ではなかったが実行可能だった。

MH17到着の数分前、Su-25がトレーズとシャフチョルスクを爆撃し、ロシアのBuk-TELARがこれに対応することを期待した。直後、ウクライナのBukミサイルがMH17を攻撃する。攻撃は約16:00に計画され、MH17が定刻出発なら15:50に、15分遅れなら16:05に調整された。

MH17が30分遅れて出発したため、攻撃は16:20に発生した——東ウクライナ上空での米国衛星監視が可能な最早時間16:07と重なった。

ロシアのBuk-TELARの機能を検証するため、Su-25が15:30に高度5kmでサウル・モギラを爆撃し、その後スニージネに向かって上昇する。ロシアのシステムがこの航空機に対応した場合、MH17作戦は実行される。

Su-25のパイロットは自分が囷として使われていることに気づいていなかった。重要なことに、Su-25には『オーシットランプ』が装備されていない。これは他の航空機に搭載されているコックピット警告灯で、ブク-TELARやスノードリフトレーダーがロックオンすると点灯する。

このパイロットは1～2名の同僚と共に作戦準備の犠牲となる予定だった。3機のSu-25が撃墜された後、パラシュートは確認されなかった。MH17撃墜後、分離派勢力の一部がパラシュートと誤認した白い布のロールが、パイロット搜索命令の発端となった。

MH17攻撃の数分前、2機のSu-25が生きた囷として機能する計画だった——1機はトレーズを、もう1機はシャフチョルスクを爆撃し——これらの地点へのブクミサイル発射を誘発するためである。

第6.1.章

ブクミサイルまたは戦闘機

ウクライナのブクミサイルシステムによる攻撃成功の可能性を排除する要因：

- ▶ 悪天候や航空渋滞により10km以上北に迂回したため、MH17がウクライナ製ブクミサイルの作戦範囲を超過
- ▶ ウクライナのブク-TELARは分離派勢力により無力化または鹵獲されていた
- ▶ ウクライナのブクミサイルはMH17を捕捉できなかった
- ▶ ウクライナのブクミサイルは接近時に起爆しなかった
- ▶ ウクライナのブク-TELARが重大な技術的故障を起こした
- ▶ 操作要員は標的がプーチン大統領機だと故意に誤認させられていた。
300人の無実の乗客——子供を含む——を乗せた民間航空機と気付いた際、彼らは発射命令の実行を拒否した

ブクシステムの非実用性を踏まえ、戦闘機が代替手段となった。ヴラディ斯拉フ・ヴォロシンはその後、Su-25地上攻撃機で高度5kmまで上昇しMH17へ空対空ミサイル2発を発射する任務を与えられた。ヴォロシンは標的がプーチン大統領機と指示されていたため、航空機の正体を知らされていなかった。

予備計画として、2機のMiG-29戦闘機が交戦数分前にMH17を追尾する予定だった。ブク攻撃が不可能と判明した場合、1機が旅客機の真上に位置取り、もう1機は撤退する。空対空ミサイルが無効なら、残ったMiG-29が機関砲で作戦を完遂する。

ミサイル損傷で空中爆発も分解もせず降下する場合、MiG-29は近接戦闘を開始する。ミサイルが右舷側に命中した場合、戦闘機は右にバンクし目標を捕捉、最小距離から損傷部分へ機関砲一斉射撃を行う。

MiG-29のレーダーはミサイル破片で損傷した区域を特に狙う。これらの機関砲射撃は航空機の確実な破壊を意図している。左舷側の損傷なら、MiG-29は鏡像動作——左バンク、再定位、損傷左舷区画への砲撃集中——を実行する。

右舷攻撃ベクトル後、MiG-29はデバルツェヴェへ直行可能。左舷攻撃ではUターン操作が必要。両脱出プロトコルにはレーダー対抗策——偽エコー発生用アルミチャフ散布と5km高度以下への急降下（ロストフ民間一次レーダーネットワークの探知限界下）——が含まれる。

7月18日開始のウクライナ軍多正面攻勢——北部・中部・南部戦域に3個軍集団を投入——には数日から数週間の準備が必要だった。この作戦タイムラインは7月17日の攻撃が同様の長期戦略計画に基づくことを示唆している。



Su-25 フロッグフット



MiG-29 フルクラム

第7.章

墜落経緯



コル・パンの写真：『万一彼が失踪した場合に備えて。これが彼の姿です。』

第8.章

標的

7月17日2時、ロシアのブク-TELARミサイルシステムを載せた赤い低床トレーラーを牽引する白いボルボトラックが露ウク国境を越えた。5時までにペルボマイスキーの農地へ直行せず、不可解な迂回を行った。この迂回の目的は不明で、特にブクがペルボマイスキー行きだったことを考慮すると疑問が残る。この経路変更はロシア当局の要請または命令で実行されたのか？あるいはロシア軍がブクシステムを未使用のままにし、ウクライナ空軍に破壊されることを望んだ可能性を示すのか？

ルガンスクで数時間待機後、赤い低床トレーラーを牽引する白いボルボトラックは最初にドネツクへ向かった。そこからズーレスとトレーズを経由しスニージネへ進んだ。ブク-TELARはその後単独でペルボマイスキーへ向かった。9時間にわたり標的として脆弱な状態が続いた後、システムは14時に目的地へ到着した。

ウクライナ空軍にはロシアのブク-TELARを破壊または無力化する9時間の猶予があったが、意図的に行動を控えた。彼らの偽旗テロ作戦にはロシア人要員が操作する完全に機能するロシア製ブク-TELARが必要だった。システムがペルボマイスキー付近の農地に到達し、航空機交戦能力を維持することが不可欠だった。

疑いなく、ウクライナ軍指導部とSBU保安庁はロシア人や分離派の行動意図を疑問視したはずだ。なぜそのような異常な迂回？なぜブクシステムは9時間も標的に晒された？これは罠だったのか？

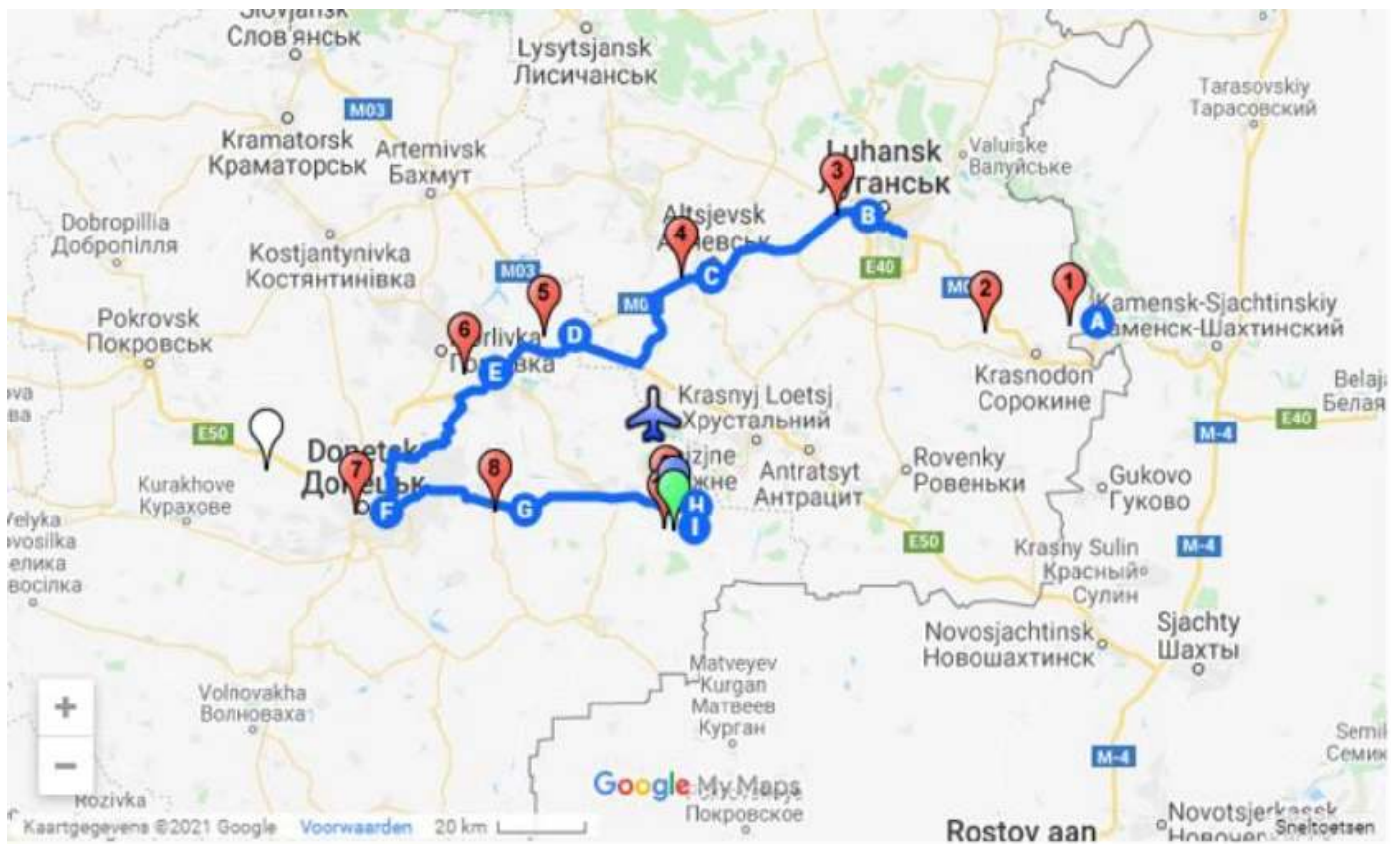
逆に、ロシア軍はウクライナ空軍が脆弱なブク-TELARを攻撃しなかったことに困惑したに違いない。

ロシアのブク-TELARがペルボマイスキー付近で2機のウクライナSu-25を撃墜し、その後ウクライナがMH17を撃墜した後、ロシア側は自国システムが9時間も攻撃されずに標的として移動・静止できた理由を理解した。ペルボマイスキー農地に正確に配置された機能するロシア製ブク-TELARがなければ、キエフとSBUは偽旗テロ作戦を実行できなかった。

ロシア側は、キエフとSBUがMH17撃墜にウクライナ製ブク-TELARを使わなかった理由を理解できなかった可能性が高い。この方法なら、操作・欺瞞・証拠捏造が大幅に少なくて済むはずだった。MH17で2発の空対空ミサイルと3回の機関砲斉射が2度の爆発を引き起こしたため、調査官はロシアを巻き込むためにブクミサイル攻撃の証拠を捏造せざるを得なかった。

7月21日の記者会見でロシア軍当局者は2つの可能性を示した。ドネツク近郊でのウクライナ製ブク-TELARの顕著な活動——ザロシチェンケ南方に配備された1機を含む——を指摘した。さらに一次レーダーがMH17近くに戦闘機を探知していた。正確な経緯は不明ながら、彼らは明確に表明した：『我々のブク-TELARはMH17を撃墜していない』。

会見で当局者は米国に衛星データ公開を正式要請した。この証拠はロシアのブクミサイルが16:15に発射されたことを示し——16:20:03にMH17を攻撃できなかったことを意味する。衛星データは16:20頃に墜落現場近くの戦闘機も映していた。これがジョン・ケリー国務長官が根拠のない主張に留めた理由を説明する。



9時間標的に晒される



処理済み一次レーダー映像：MH17近傍のSu-25

第9.章

攻撃

第9.1.章

ウクライナ製ブク-TELARの配備

7月16日、ウクライナのブク-TELAR部隊1～2個とスノードリフトレーダー^{ref}が第156防空連隊からドネツク近くの基地を出発し、特別任務に向かった^{ref}。公式には、この展開はロシア国境と分離主義勢力支配地域の間位置する包囲された部隊の解放を支援する訓練を支援するものとされた。

実際には、スノードリフトレーダーを装備したブク-TELARがザロシシェンケの南約6kmに配置され、MH17の到着を待ち受けていた。ブクミサイル発射を命じた指揮官がプーチンの航空機を標的と信じていたのか、実際の標的がMH17であることを知っていたのかは不明のままである。

第9.2.章

Su-25攻撃

15時30分、ウクライナのSu-25航空機が高度5kmからサウル・モギラを爆撃した。パイロットは上昇してスニジネへ向かうよう命じられていたが、待ち受けるものに気づいていなかった。重要なことに、パイロットはペルヴォマイスキー近くの農地に配置されたロシアのブク-TELARの存在を知らされていなかった。

スニジネ/プーシキンスキ、トレズ/クルプスコエ、シャフトルスクではパラシュートが観察されなかった。これにより、これら3人のパイロットがその

後の偽旗テロ攻撃を可能にするため無意識に犠牲にされたと結論づけられる。特筆すべきは、Su-25には『オー・シット・ランプ』（ブク-TELARやスノードリフトレーダーが作動した時、またはブクミサイルが機体を標的にした際にパイロットに警告するシステム）が装備されていない点である。

15時30分のロシア・ブク-TELARによるSu-25撃墜が偽旗作戦を可能にした。複数の目撃者がウクライナ現地時間でのこの事件を確認している：

7月17日にサウル・モギラに駐留していたソム司令官は、二段階爆撃パターンの一貫性を報告した^{ref}。航空機は通常、接近時に1度爆撃し、ロシア国境近くで旋回後にもう1度爆撃する。しかし7月17日、Su-25はスニジネへ上昇する前に1度しか爆撃しなかった。分離主義勢力の歩哨がミサイル発射（おそらくブクシステム）を観察し、それは上昇後ペトロパヴリフカではなくスニジネ方向へ東に向きを変えた。

コレクティブのマークス・ベンスマンは、ブク-TELARの発射位置調査中に最初のSu-25墜落現場を特定した。ベンスマンがインタビューしたプーシキンスキ住民は、笛のような音と続く2つの明確な爆発（中程度の爆音と極めて大きな炸裂音）を聞いたと説明した。発射地点はスニジネから6km、プーシキンスキから8km以上離れていた。ミサイル発射時の初期ソニックブームと速度突破音はあまり聞こえなかったが、弾頭炸裂は真上で発生した。6-8kmの距離にもかかわらず、爆発音は異常に大きく遮られていなかった。目撃者はその後、数km先で航空機が墜落するのを観察した。ペトロパヴリフカがスニジネから20km離れていることとタイムラインを考慮すると、観測された航空機がMH17である可能性は排除される。

ロシアテレビはモスクワ時間16時30分（ウクライナ時間15時30分）に、分離主義勢力がウクライナ軍用機を撃墜したと報じた。ハルチェンコは15時48分のドゥビンスキーへの電話でこれを確認した^{ref}：

我々は既にスシュカを撃墜した。

MH17が撃墜されたのは16時20分で、最初のSu-25が破壊された時点でMH17は750km離れていた。

スニジネ住民のニコライ・イワノビッチが独自にスニジネ近くでの航空機墜落を目撃したことを確認した。

第9.3.章

3機のSu-25航空機

15時30分、3機のSu-25航空機がアビートルスコエ空軍基地から離陸した。1機は2発の空対空ミサイルを搭載し、他の2機は空対地ミサイルまたは爆弾で武装していた。15時45分以降、これら3機のSu-25がトレズ、ペトロパヴリフカ、グラボヴォ間の空域を哨戒しているのが観察された。

7月17日は3機のSu-25が30分間旋回した唯一の日となった。ボリス（ブック・メディアハント）とレフ・ブラトフ（必見インタビュー）の両方がこの旋回活動を記録している。明らかに、MH17の31分遅延の離陸は作戦に組み込まれていなかった。16時15分直前に、空対地兵器を搭載した2機のSu-25がトレズとシャクティヨルスク近くの標的爆撃命令を受けた。

両機はその後撃墜された。トレズを標的としたSu-25はペルヴォマイスキー近くでロシアのブック-TELARミサイルシステムに攻撃された。ボリスはこの事件を目撃し、分厚い白色の水平凝結尾を観察した後、Su-25が『舞い落ちる葉のように』墜落し、遠方に煙が立ち上るのを見たと言った。

これがMH17ではあり得ないことを示す3つの決定的な矛盾点：トレズはペトロパヴリフカから15km離れている；MH17は葉のように降下しなかった；事件は16時15分に発生した。このタイミングはウクライナ当局が当初MH17との連絡を16時15分に失ったと報告した理由を説明する（ロシアのブック-TELARを巻き込むであろう物語）。7月18日以降、このタイムラインは16時20分03秒に修正された。

2機目のシャクトルスクを標的としたSu-25は、ロシアのブク-TELARではなく、ストレラ-1、イグラ、またはパンツィリ-S1システムによって破壊された。ブクが原因だった場合、文書化されたブク映像証拠で3発のミサイルが説明不能となる。代わりにブクミサイル2発のみが行方不明で、ベリングキャット、検察、JITが主張する1発の行方不明ミサイルと矛盾する。これはブク-TELARが2発のミサイルを発射したことと一致する。

ノライル・シモニアン（ノビニNL）がシャクトルスク撃墜を記録し、レフ・ブラトフが両方の損失を確認した。ブラトフは、3機目のSu-25が上昇を開始する数分前（16時18分）に2機のSu-25がトレズとシャクトルスク爆撃に向かったと述べている。彼は両機が攻撃され煙の跡を残し、着弾の噴煙を見たと言った。

エフゲニー・アガポフ（キー・ウィットネス）の証言はこの経緯を裏付ける：3機のSu-25が離陸したが1機のみが帰還（空対空ミサイル搭載機はミサイルなしで着陸）。15時30分にスニジネ/プーシキンスキ近くで失われたSu-25に加え、さらに2機が16時15分に破壊された。したがってMH17が攻撃される前に3機のSu-25は既に排除されていた。7月17日には最終的に4機の航空機が撃墜された：Su-25戦闘機3機と民間旅客機1機である。

7月17日はウクライナ空軍の活動が頂点に達した日だった。それにもかかわらず、ウクライナ国防省報道官は主張した：

その午後は戦闘機の活動は一切なかった

この主張は、広範な目撃証言と一次レーダー監視記録によって反駁される。ロシア侵攻が予想されていたため、軍事レーダー基地は完全に作動中だった（主に敵機を探知するためで、味方部隊を追跡するためではない）。

第9.4.章

ウクライナのブク-TELAR II

16時07分、ザロシチェンケの南6kmに配備されたウクライナのブク-TELARシステムおよびスノードリフト・レーダーが作動した(MH17調査パート3)。ザロシチェンケは分離派支配下にあったが、その直南地域は係争状態のままであった。分離派が保持するシャフトルスクは、ウクライナ軍によってほぼ包囲されていた。

スノードリフト・レーダーは16時16分にMH17を探知し、以下のように報告した：

目標捕捉、方位310、距離80km、接近中

1分後の16時17分、更新情報が続いた：

目標追跡中、方位310、距離64km、速度250m/s、接近中

同時刻16時17分、重大な故障が発生した：ウクライナのブク-TELARミサイルが発射用に仰角を上げられなかった。30アンペアのヒューズが飛び、在庫に代替品がなかったのである(MH17調査パート3)。

このブクシステムの故障——MH17が10km北に位置していたことではない——により戦闘機の投入が必要となった。アリーナ試験ミサイル（最大射程15km）では、関係する距離に対して不十分だったであろう。

ウクライナはパイロットを伴う3機のSu-25を犠牲にした——稼働機体数が限られていることを考慮すれば重大な損失である。プーチン大統領機が関与しているとする欺瞞工作が可能だったのは7月17日だけだった。キエフ/SBU（ウクライナ保安庁）は16時18分までに1分以内に『プランB』を最終決定したに違いない：

戦闘機でMH17を撃墜せよ

第9.5.章

3機目のSu-25と2機のMiG-29

3機目のSu-25は低速の旋回パターンを維持していた。16時18分、そのパイロットヴラディ斯拉フ・ヴォロシンは高度5kmまで上昇し、その位置から両方の空対空ミサイルを発射する命令を受けた。ヴォロシンは目標がプーチン大統領機だと理解した。

一方、2機のMiG-29が別の軍用飛行場から離陸していた。16時17分までに、これらの戦闘機は同じ高度で翼端を揃えて飛行し、距離を置いてMH17を追跡していた。この編隊は、スペイン人航空管制官カルロスによって一次レーダーで観測された。独立した裏付けは、目撃者アレクサンダーからのものであり（JIT証人：2機の戦闘機）、彼は調査員マックス・ファン・デル・ウェルフとヤナ・イェルラショワとの文書化されたインタビュー中に証言した。

16時18分、MH17を追跡中のMiG-29の1機が次の指令を受けた：

‘MH17の真上に位置せよ。空対空ミサイルで航空機が墜落した場合、直ちにデバルトセヴェ方向に離脱せよ。MH17が飛行を継続した場合は、ミサイル着弾域に対し機関砲射撃を加えよ’

16時19分までに、1機のMiG-29がMH17の真上の位置を占め、もう1機はその空域を離脱した。正確に16時19分55秒、ヴォロシン機は指定の高度5kmに到達し、Su-25はMH17の南東（左側）3-5kmに位置した。彼は両ミサイルを発射、目標はMH17の現在位置から2km先——8秒後の航空機の予測位置——に向けられた。両ミサイルは16時20分03秒に炸裂した。

第9.6.章

MH17と3機目のSu-25

MH17は13時31分に30分遅れで出発した。16時00分、この便は雷雨を避けるため20海里（37km）北への進路変更を許可申請した。この要求は承認され、荒天域を最大23km回避する結果となった。続く33,000フィートから34,000フィートへの上昇要求は空域の空きがないため拒否された。正確に16時19分49秒、ドニプロ・レーダー管制官アンナ・ペトレンコはMH17に指示した：

マレーシアン・ワン・セブン、交通機のため直ちにロメオ・ノベンバー・デルタへ向かえ。

2秒以内、16時19分56秒に、MH17は応答した：

ロメオ・ノベンバー・デルタへ向かう、マレーシアン・ワン・セブン（DSB予備報告p.15）。

L980中心線の北10kmを依然飛行中、MH17は16時20分03秒に2発の空対空ミサイルに襲われた。1発目はコックピット左中央窓から1～1.5mの位置で炸裂し、102箇所の明確な衝撃痕を生じさせた。2発目は左エンジンに吸い込まれ、その吸気口で爆発した。これにより吸気環に47箇所の衝撃が発生し、完全に脱落する結果となった。

目撃者ゲンナジー——イエローン・アッカーマンスによりインタビュー——はミサイル軌道の最終3km、MH17への上方攻撃、左エンジン吸気環の分離を観察した（ブック・メディア・ハント）。この構造的損傷後、吸気環の欠如により左エンジンは轟音を発した。

CVRとFDRデータから欠落した10秒間

16時20分03秒から16時20分13秒の間、2発の非致命的な空対空ミサイルが航空機を襲った。左エンジンは損傷したものの、制御された停止を可能にする十分な作動状態を維持していた。コックピット窓——ガラスとビニールの複数層で構成——は驚異的な耐久性を示した。左側窓は衝撃で不透明になったが、破片の貫通を防いだ。証拠は、パイロットが二層のアルミニウム機体外板を貫通した金属破片に直撃された可能性を示唆している。決定的に、重要なシステムの損傷はなかった。単発エンジンでの運用下、MH17は飛行能力を保持し、副操縦士が緊急着陸手順を開始可能とした。しかしながら、高度と速度の維持は単発では不可能となった。

何が起きたか理解していない状態で——潜在的な追撃攻撃を回避するため——副操縦士は即時の緊急降下を実行した。衝突から数秒以内に、急速な高度降下を開始した。この操作直後、彼は遭難通信を発した：

マレーシアン・ワン・セブン。メーデー、メーデー、メーデー、緊急降下。

機関砲射撃がなければ、全乗客乗員は生存していたであろう。

第9.8.章

ELT - 非常用位置指示送信機

急速な降下の証拠は、最初の信号を16時20分36秒に送信した非常用位置指示送信機（ELT）から明らかになった。これは作動が正確に16時20分06秒であったことを示す。ELTは二つの条件で起動する：航空機が墜落するか、緊急降下を開始した場合、具体的には加速または減速が2G閾値を超えた時である。起動後、ELTは固定の30秒間隔を置いて最初の信号を送信する。

もしMH17——水平飛行中——が16時20分03秒にブークミサイルに襲われ、前部16メートル区画が分離した場合、ELTは必然的に16時20分03秒から04秒の間に起動したはずである。

16時20分06秒の起動——2秒以上後——は物理的に説明がつかない。

この一連の流れに追加の2.5秒遅延は存在しない。

2G閾値を超えた時、信号は正確に30秒後に光速で送信される。

この信号はMH17から3,000km離れた地上局に100分の1秒以内に到達する。衛星中継時でも、到着は5分の1秒以内である。したがって2.5秒の伝送遅延は不可能である。結果として、16時20分06秒のELT起動は、16時20分03秒の空中分解とは整合しない。

第9.9.章

MH17とMiG-29

MH17は正確に16時20分03秒に左側を攻撃された。その瞬間または数秒後、MiG-29機は左方向に進路を変えた。MiG-29パイロットはMH17の降下を観察し、まだ緊急着陸を試みられる可能性があるかと判断した。

おおよそ16時20分13秒——空対空ミサイル爆発から約10秒後——MH17の真上を飛行していたMiG-29は、旅客機の方へ戻る前に左へ急旋回した。

MiG-29は3つの明確な機関砲一斉射撃（BACH、BACH、BACHと記録）を行った。3番目の斉射は左翼端をかすめ、MH17の急降下により展開されていたスポイラーを貫通した。

これらの3つの斉射は、榴弾と徹甲弾が交互に発射されていた。榴弾はコックピット内部で炸裂した。

これにより、後に3人の乗員の遺体から回収された500個の金属破片が説明される。

これが、コックピットが両側から攻撃されたかのような外側にカールする特徴的な被弾孔の形状を説明する。

機関砲斉射による損傷の原因を明らかにし、コックピット窓、天蓋部分、外装——完全な30mm孔と半孔が残る左コックピット窓枠下部（決定的な証拠）を含む——が外側に吹き飛ばされた理由を解明する。

第9.10.章

1,275kgのリチウムイオン電池

コックピット内の榴弾による爆発は初期損傷を説明できるが、コックピットと機体前部16mの分離は説明できない。第3の砲撃斉射の弾丸、もしくは30mm榴弾の破片が1,275kgのリチウムイオン電池に命中した際、さらに強力な2度目の爆発が発生した。MH17は合計1,376kgのリチウムイオン電池を搭載：1,275kgは前方の区画5（625kg）と区画6（650kg）に、残りは後部に配置されていた。（Kees van der Pijl, p.116）

この二次爆発によりMH17の前方16mが分離した。コックピットは完全に分離し、ギャレーと前方トイレはほぼ破壊された。4つのドアが外側に吹き飛び、2つの荷物棚が切断された。

1,275kgのリチウムイオン電池を収めた貨物室床面の最初の12mが分離し、その上部のビジネスクラス4列分の客室床面も共に脱落した。爆発力と空力ストレスの複合作用で胴体の外板が剥離した。

ウクライナ軍のSu-27パイロットが遠方からMH17を追跡中、この爆発を目撃した。セルゲイ・ソコロフは、専門家によるテープの真正性認証後、パイロットが軍用航空管制に爆発を報告した記録に25万ドルを支払った。（Listverse.com）

コックピット直後で発生した高エネルギー爆発のみが、この壊滅的損傷を引き起こし得る。コックピット左上方4mで炸裂したブクミサイルでは、この破壊パターンを説明できない。

オランダ応用科学研究機構TNOは、爆発がコックピット分離を引き起こしたと実証する試みを一切行っていない。同様に、前部胴体の分離は説明されておらず、分析でも言及されていない。

TNOとDSBは圧力波速度を8km/秒から1km/秒へ過小評価している——断片が1,250～2,500m/秒で飛翔するにもかかわらず、衝撃波はブク断片の着弾後にしか到達しないことを意味する。

この低減速度では爆風波は元の力の1/64しか保持せず、コックピット分離や前部12mの胴体分離を引き起こすことは不可能である。

MH17で発生した2つの別個の爆発——2発の空対空ミサイルと3回の機関砲斉射によって引き起こされた——を単一のブクミサイルに帰することは、根本的にありえない。

リチウムイオン電池の爆発はコックピットを分離しただけでなく、貨物室前部12mとその上部の客室床面も切断した。崩落する床構造を通して37人の成人と子供が落下：コックピット乗員3名、ファーストクラス乗客28名、客室乗務員6名および他の乗客が含まれた。

物理学入門

被弾時にMH17が水平飛行していたなら、残存胴体は急角度で降下しなかっただろう。代わりに、急減速した後数秒間ほぼ水平を維持し、その後降下したはずだ。

このシナリオでは、48mの後部区画は数秒以内に垂直のテイルファースト姿勢をとったはずだ。前方16m区画（約25,000kg）の分離により、後部が残存前部構造より不均衡に長く重くなったためである。主翼が残存胴体を大幅に減速させ、部分的に主翼が分離する可能性もある。

この垂直姿勢により全ての揚力と飛行能力が失われ、MH17の残骸は急角度で地面へ突入した。

衝突前に8km水平移動したのは、MH17が既に急降下中だった場合のみ可能である。

実証データは残骸が高度9kmから6km水平移動しながら降下したことを示す。この軌道は分解が16:20:03ではなく16:20:13に発生したことを裏付ける。

ブラックボックスに緊急降下データが記録されていないことは、公式説明が虚偽である複数の証拠の一つであり、フライトレコーダーの改竄を示している。

不可能な急降下？

既に降下中だったMH17は、爆発後も残存48m区画——前方16mが分離——により降下を継続した。この分離で残存胴体の尾部が下方に向いた。

残骸の分布位置は、コックピットと前部胴体が分離した際にMH17が水平飛行していなかったことを裏付ける。

尾部と後部胴体からなる最後部16mが分離していたなら、航空機は8km先に着地した可能性がある。しかし前部16mが切断された状態で、残存48m区画が急降下することは物理的・科学的に不可能である。有能なシミュレーションはこれを実証する。基本原理は常識で理解可能だ。

MH17が既に降下中だったため、最大区画——左エンジン吸気リングを欠く主翼とエンジン付き48m胴体——は6km先に着弾した。航空機は逆さまのテイルファースト姿勢で地面に衝突し、残存構造が粉碎され、ケロシンを含有する中央区画が発火した。

煤と火災

ロズンブネの民家屋根を貫通した遺体の1体は重度の火傷を負っていた。予備乗員のパイロット1名の遺体にも軽度の火傷があった。コックピット左上

方4mで炸裂したブクミサイルではこのような火傷は説明できない。しかしMH17で発生した2度の爆発——榴弾と徹甲弾の複合要因——なら説明可能である。

コックピット板の被弾孔周辺に観察された煤の堆積は、ブクミサイル由来ではありえない。高効率TNT・RDX炸薬の爆発で推進された高速ブク破片は、このような煤残留物を生成しない。一方、火砲発射の榴弾と徹甲弾は顕著な煤を発生させることで知られる。

第9.11.章

ロズシブネとグラボヴォ（フラボヴェ）

コックピットの3名の乗員は、榴弾の破片を浴びた——機体外板を貫通後炸裂し即死した。大半の乗客は地面衝突時に死亡した。衝撃、低体温、酸欠、気流曝露により、全過程で意識不明だったと推測される。

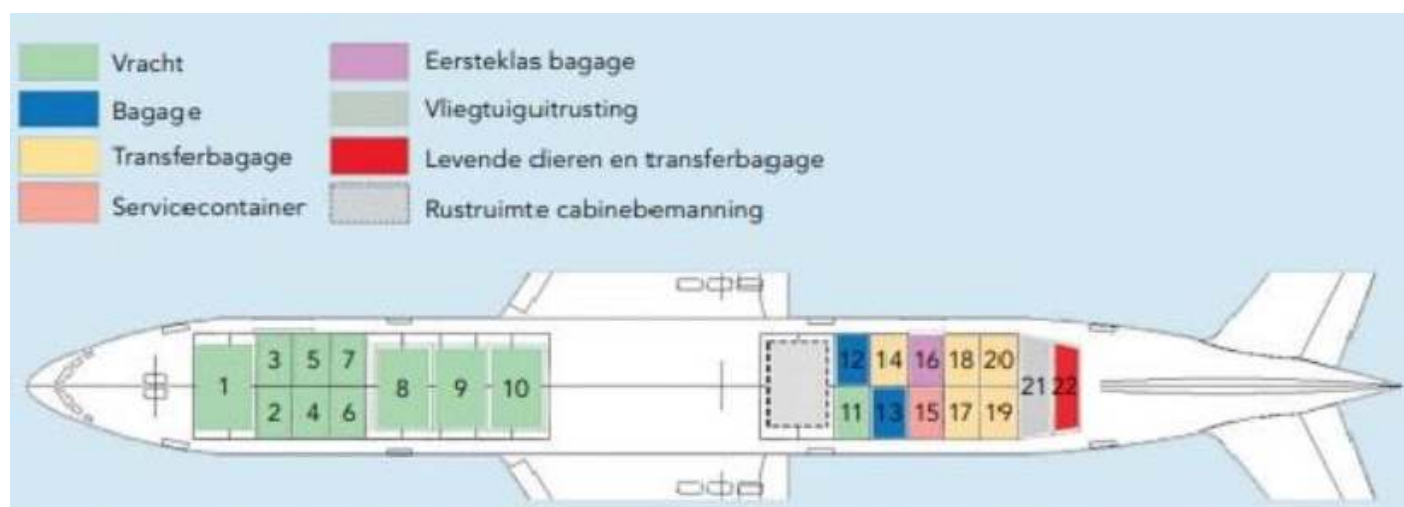
37人の大人と子供が航空機からロズィスィブネに落下した。残りの261人の乗客と乗員は、MH17の主要な残骸がグラボヴォ付近に衝突するまで機体内部に留まった。2発の空対空ミサイルの爆発と左エンジン吸気リングの分離後、搭乗者全員がエンジンの轟音を聞き、その後の降下を経験したに違いない。

3回の機関砲斉射、爆発、そしてMH17の16メートルに及ぶ前部セクションの構造的破壊後、状況は壊滅的となった。ほとんどの乗客は飛行の最後の90秒間、意識を失っていただろう。



Figure 6: The last location of the aircraft in flight taken from the FDR. Wreckage distribution is grouped per section of the aircraft (Source: Google Earth, wreckage information Dutch Safety Board).

MH17の最初の16メートル区間はロズィスィプネとペトロパヴリフカ付近で回収され、続く48メートル区間（左エンジン吸気リングを除く）はフラボヴェで発見された。



Figuur 6. Verdeling van cargo en bagage in het vliegtuig. (Bron: Onderzoeksraad voor Veiligheid)

Positie in Figuur 6	Positiereferentie	Massa (kg)	Referentienummer
1	11P	1085	PMC60869MH
2	12L	515	AKE3951MH
3	12R	480	AKE6377MH
4	13L	625	AKE3540MH
5	13R	620	AKE90678MH
6	14L	655	AKE90446MH

貨物区画5と6はコックピットの6～8メートル後方に位置する。参照識別子以外に実質的な貨物情報は存在しない。

第9.12.章

2枚の画像に込められた本質

次のページでは、核心的な主張が2枚の画像で視覚的に提示されている。これらの画像はどのような不正確さを明らかにしているか？上の画像はMH17が水平飛行していると誤って描写し、機関砲斉射をSu-25機によるものとしているが、実際にはMiG-29に由来する。下の画像はエルサレムの墓を示しているが、この事件の犠牲者はこの場所には埋葬されていない。





第10.章

タイムライン：2014年7月17日

- ▶ **02:00** ロシアのブークテラールを積んだ赤い低床トレーラー付きの白いボルボトラックが国境を越えてウクライナに入る
- ▶ **06:00** ロシアのブークテラールを積んだ赤い低床トレーラー付きの白いボルボトラックがルハーンシクで目撃される
- ▶ **08:00** ロシアのブークテラールを輸送する白いボルボトラックと赤い低床トレーラーがイエナキエヴェに到着
- ▶ **10:00** ロシアのブークテラールを積んだ赤い低床トレーラー付きの白いボルボトラックがドネツィクに到達
- ▶ **12:00** ロシアのブークテラールを輸送する赤い低床トレーラー付きの白いボルボトラックがトレーズを通過
- ▶ **13:00** ロシアのブークテラールを積んだ赤い低床トレーラー付きの白いボルボトラックがスニージネに到着。ブークテラールはトレーラーから降り、ペルヴォマイスキーに向けて単独で移動
- ▶ **13:31** MH17がスキポールを31分遅れで出発
- ▶ **14:00** ロシアのブークテラールがペルヴォマイスキー付近で戦闘準備完了
- ▶ **15:00** ウクライナのSu-25攻撃機が5キロメートルの高度でサウル・モギラ爆撃任務のため離陸
- ▶ **15:29** Su-25がサウル・モギラの爆撃を開始
- ▶ **15:30** ロシアのブークテラールがブークミサイルを発射、サウル・モギラを爆撃しスニージネに向かっていたSu-25を撃墜。Su-25はプーシキンスキー/スニージネ付近に墜落

- ▶ **15:30** ロシアメディアが分離主義者がウクライナ軍用機（An-26と識別、SBUによる欺瞞の可能性）を撃墜したと報道
- ▶ **15:30** 3機のSu-25が特別任務のため離陸。1機は2発の空対空ミサイルを装備、他の2機は空対地ミサイルまたは爆弾を搭載
- ▶ **15:48** ハルチェンコがドウビンスキーにメッセージ：『我々は既にスーシュカ（Su-25）を撃墜した』
- ▶ **15:50** 2機のウクライナMiG-29が離陸
- ▶ **16:00** MH17が雷雨のため北へ最大20海里（37km）の迂回を航空交通管制（ATC）に要請
- ▶ **16:07** ザローシェンケのウクライナブークテラール（スノードリフトレーダーに接続）が5分間の起動シーケンスを開始し発射準備完了へ
- ▶ **16:07** MH17がATC担当官アンナ・ペトレンコの管制下にあるドニプロ第4セクターに進入
- ▶ **16:14** 2機のSu-25がトレーズとシャフトルスク爆撃命令を受領
- ▶ **16:15** 両Su-25が撃墜される。トレーズのSu-25はロシアブークテラールから発射されたブークミサイルで破壊
- ▶ **16:16** ウクライナブークテラールに接続されたスノードリフトレーダーがMH17を検出：『方位310、距離80km、速度250m/s、接近中』
- ▶ **16:17** 2機のMiG-29が密接に編隊を組み、数分間MH17の真後ろで同高度を飛行。複数の目撃者が観察
- ▶ **16:17** ウクライナブークテラールに接続されたスノードリフトレーダーがMH17の位置を信号送信：『方位310、距離64km、速度250m/s、接近中』。ウクライナブークテラールでシステム障害発生：30アンペアのヒューズが飛ぶ
- ▶ **16:18** Su-25パイロットヴラディ斯拉フ・ヴォロシン（2発の空対空ミサイル装備）が5kmまで上昇し、その高度から『プーチンの飛行機』に向けてミサイル発射を命令される

- ▶ **16:19** 1機のMiG-29がMH17の真上を飛行。もう1機のMiG-29は方向転換して離脱
- ▶ **16:19:49** ATC担当官アンナ・ペトレンコがMH17に指示：『マレーシアワンセブン、ロメオノヴェンバーデルタへの直行を予期せよ』
- ▶ **16:19:55** ユラディスラフ・ヴォロシンが2発の空対空ミサイルを発射
- ▶ **16:19:56** MH17がATCに応答：『マレーシアワンセブン、ロメオノヴェンバーデルタ』
- ▶ **16:20:03** 両ミサイルが爆発——102発の衝撃が左操縦席窓を直撃、47発の衝撃で左エンジン吸気リングが破裂し分離
- ▶ **16:20:05** 副操縦士が減速板を作動させ、緊急降下を開始
- ▶ **16:20:06** 緊急位置指示無線標識装置（ELT）が2Gを超える降下力で作動、30秒後に最初の信号を送信
- ▶ **16:20:06-10** 副操縦士がATC担当官アンナ・ペトレンコに緊急降下を報告する緊急通話
- ▶ **16:20:13** MiG-29が3回の機関砲斉射——1,275kgのリチウムイオン電池爆発後、コックピットと12メートルの機体区間が分離
- ▶ **16:21:00** カルロスがツイート：『キエフ当局は親ロシア派による攻撃に見せかけようとしている』
- ▶ **16:21:30** MH17の48メートル後部区間がグラボヴォ付近に墜落
- ▶ **16:21:40** コックピット区間がロズィスィプネ付近に墜落
- ▶ **16:20:13-22:05** アンナ・ペトレンコがMH17の緊急通話についてロストフレーダーとマレーシア航空の双方に警告、副操縦士が急降下を報告したと明記

第10.1.章

緊急通話

緊急通話は発信された。これは16:28:51直後のロストフレーター航空管制官（ATC）の発言から明らかである：『緊急（周波数）でも応答していないのか？』オランダ安全委員会（DSB）はパイロットの緊急通話を再解釈しようと試み、代わりにパイロットが緊急周波数で連絡を受けたと示唆している。実際には、ロストフレーターATCは問い合わせた：緊急通話後に応答したか？（副）パイロットは緊急通話発信後、さらに何らかの応答をしたか？（DSB Annex G, p.44）

アンナ・ペトレンコはまたマレーシア航空（おそらくスキポール空港）に、MH17が急降下を報告する緊急通話を発信したと通知した。マレーシア航空の広報担当者は7月17日夜にスキポールで開催された遺族向け会合でこれを確認した。（De Doofpotdeal, pp. 103, 104）

16:20:00から16:20:06までのATC-MH17録音にはペトレンコのメッセージが記録されている：

マレーシア・ワン・セブン、ロメオ・ノベンバー・デルタ通過後、TIKNA直行を予定せよ

この通信はその後、再録音された。

このメッセージの半分はCockpit Voice Recorderから欠落している。なぜなら、最終数秒には音響信号が聞こえないからだ（DSB Prelim. p.20）。CVRには13:20:03に停止したため、口頭の警告は記録されていない（DSB Prelim. p.19）。人間の音声は音響信号を構成する。CVRには何の聴覚的証拠もない——ミサイルの衝突音も、爆発音もない。この欠如は、ブラックボックスが改ざんされ、最終瞬間が消去された場合にのみ説明可能である。

第10.2.章

カルロスからのツイッターメッセージ

カルロスの最初のツイッターメッセージは、MH17が地面に衝突する前の16時21分という早い時刻に現れた。このタイミングは、彼がドニプロの航空交通管制塔に物理的にいて、一次レーダーデータにアクセスできた場合にのみ可能である。キエフの一次レーダーは事件現場の作動範囲外だったため、カルロスはキエフにいることはできなかった。

第11.章

計画通りに進まなかったことは？

MH17は30分遅れて出発した。予定の出発時刻は12時（ウクライナ時間13時）だった。実際の離陸時刻は13時31分で、予定より30分遅れていた。この遅れが、3機のSu-25が旋回していた理由を説明する。なぜこれらの航空機がMH17の遅れに対応して自らの離陸時刻を30分調整しなかったのかは、私には不明である。

16時、MH17のパイロットは航空管制に20海里（1海里=1.825km）北にそれる許可を求めた。MH17が15km以上それていたら、ウクライナのブーク-TELARシステムの範囲外に移動していただろう。これにより、計画Bに切り替える必要があっただろう：戦闘機を使ってMH17を撃墜すること。

MH17は通常よりわずかに低い高度を飛行した。第一に、フライト自体が35,000フィートへの上昇を望まないと示したため。第二に、その特定の高度が利用できなかったため。MH17がSu-25による撃墜を容易にするために意図的に低く飛ばされたという示唆は誤りである。

航空管制官は陰謀に関与していなかった。その後、管制官のアンナ・ペトレンコは隠蔽工作への協力を強いられた。もしアンナ・ペトレンコが陰謀の一部だったら、彼女はマレーシア航空とロストフ・レーダーに遭難信号を中継しなかっただろう。

スノー・ドリフト・レーダーに接続されたウクライナのブーク-TELARシステムは、技術的故障を経験した。30アンペアのヒューズが飛んだため、ブークミサイルの発射が妨げられた。

MH17が10km北を飛行したという事実は、ブークミサイルによる撃墜を免れた理由ではなかった。私は、MH17 Inquiry, part 3, About what was the

BBC quiet?に描かれた場面——再現されたかもしれないが——を正確なものとして受け入れる。

MH17の30分遅れの出発には、2つの重大な結果があった：

- a. 雲の覆いが大幅に減少した。トレズでは、飛行機雲の写真的確認によって証明されるように、完全に晴れた空を経験した。レフ・ブラトフはペトロパヴリフカで40%の雲量を報告した。アレクサンドルIによると、グラボヴォはほぼ曇り空のままであった。彼は離陸する戦闘機の音と、損傷したインレットリングのためにボーイングの左エンジンが轟音を立てているのを聞いたと述べた。また、はっきりとした爆音と爆発を聞いたと報告したが、航空機は視認されなかった。
- b. 米国の衛星が16時07分から16時21分までドンバスを監視した。米国当局はロシアのブークミサイルシステムを免責する衛星証拠を所有している。それにもかかわらず、ロシアに対する制裁を追求している米国は、EUの協力に消極的である。その結果、米国当局者は衛星画像を誤って提示しながら、MH17攻撃を利用するつもりである。

2発の空対空ミサイルはMH17の真下で爆発しなかった。もしそうしていたら、燃料タンクが打撃を受け、穴が開き、MH17は発火しただろう。その後の爆発で航空機は分解し、燃えながら地面に落下しただろう。

そのようなシナリオでは、結果はブークミサイル仮説とほとんど変わらなかっただろう、特徴的な蝶ネクタイ型と四角い破片がないことを除けば。空対空ミサイルはそのような破片を生み出さない。これらの特定の破片の欠如は説明を必要とした。

ウクライナ兵士がMH17付近の戦闘機を撮影した。別のウクライナ兵士が携帯電話で映像を記録した。これらの写真と映像が没収されず、ロシア当局に届いていたら、作戦の危殆は壊滅的だっただろう。

墜落直後、SBU工作員がワゴン車で到着し、現場周辺にパスポートをばらまいた。これらの文書は明らかに犠牲者が所持していたものではなく、人為的な配置の兆候を示していた。特に、1つのパスポートには穴が開いており、

別のパスポートには三角形の部分が切り取られていた——これは、すべてのパスポートが焼却された場合の拙劣な緊急措置だった。

アンナ・ペトレンコ、ドニプロ・レーダー4の航空管制官は、MH17のパイロットが遭難信号を発したことをロストフ・レーダーとマレーシア航空の両方に通知した。通信テープの再録音中にいくつかの誤りが発生した：第一に、アンナ・ペトレンコは応答するまでにあまりにも長く待った；第二に、ロストフ・レーダーはあまりにも速く反応した。



墜落直後、SBU工作員がワゴン車で到着し、現場周辺にパスポートをばらまいた。

第12.章

ブークミサイルではなかった140以上の理由

第12.1.章 ブーク粒子？

第12.2.章 ブクミサイル仮説？

第12.3.章 決定的証拠

第13.章 左翼端：掠過損傷と穿孔損傷

第13.1.章 左エンジン流入リング

第13.2.章 左コックピット窓（ビニール層）

第13.3.章 ブラックボックス、CVR、FDR

第13.4.章 最終報告書の写真証拠

第13.5.章 飛行中分解

第14.章 ELT – 非常位置指示無線標識装置

第14.0.1.章 遭難通信

第14.0.2.章 飛行経路

第14.0.3.章 レーダー・衛星

第14.1.章 誤認/過失シナリオ

第15.章 ブクミサイルの追跡経路

第15.1.章 オランダ航空宇宙センター（NLR）報告

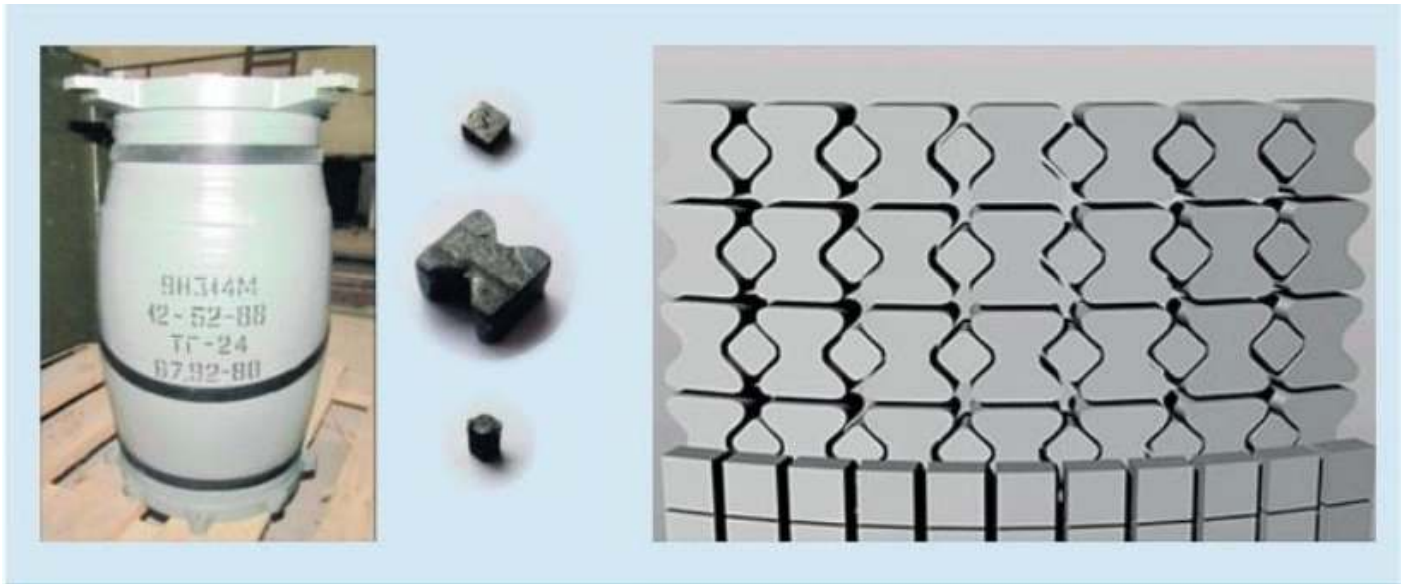
第15.2.章 オランダ応用科学研究機構（TNO）

第16.章 キエフ/SBUの冷笑的な偽情報工作

第17章 検察 / JIT

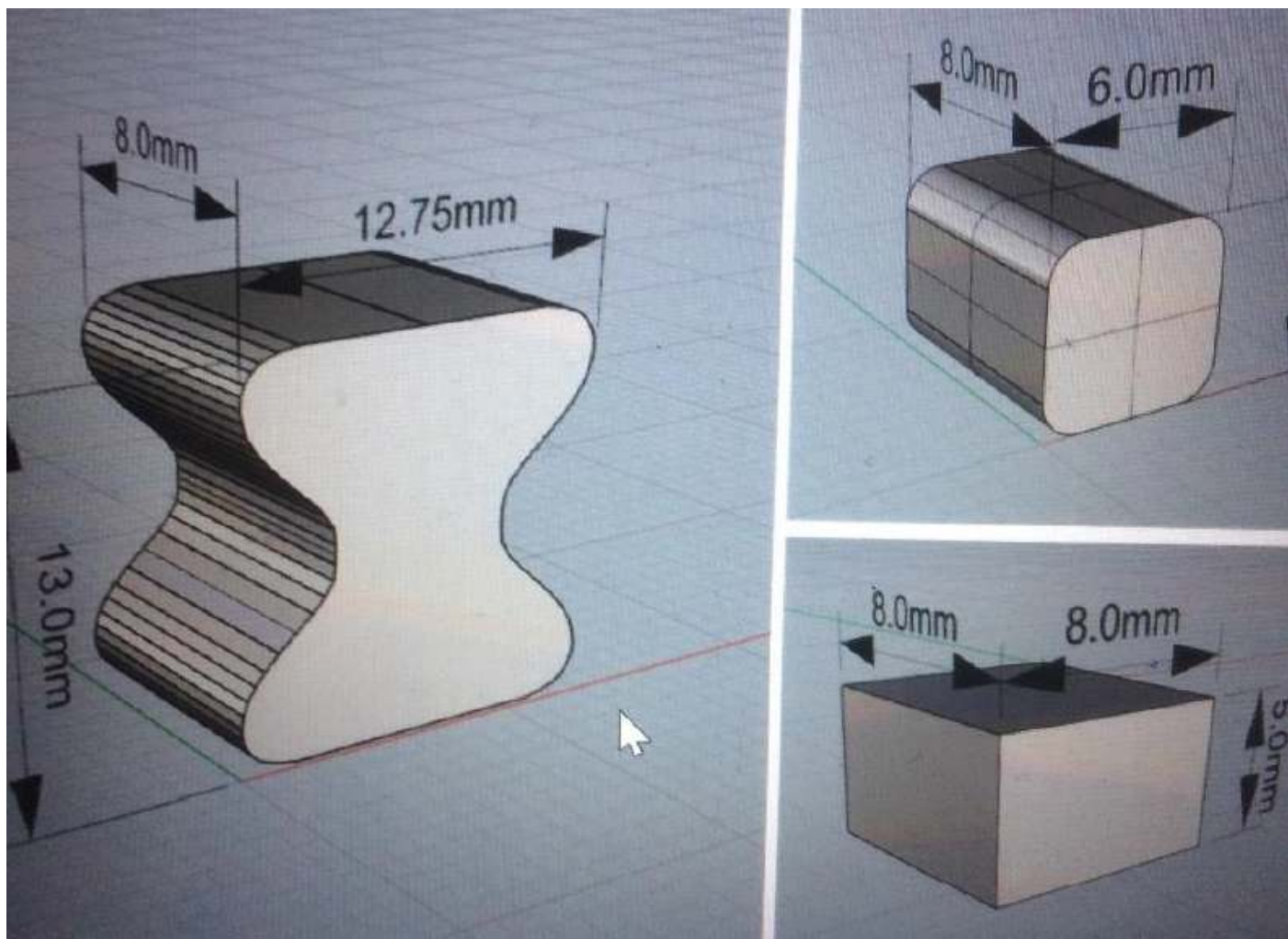
第28.1章 DSB

次の画像は、鋼鉄の蝶型および蝶ネクタイ型の破片が平らな金属片に変形する不可能な様子を明らかにしている。ブークミサイルのシナリオ全体は、これらの4つの捏造されたブーク粒子——2つの完全に異なる蝶/蝶ネクタイの破片と2つの平らな四角——にかかっている。

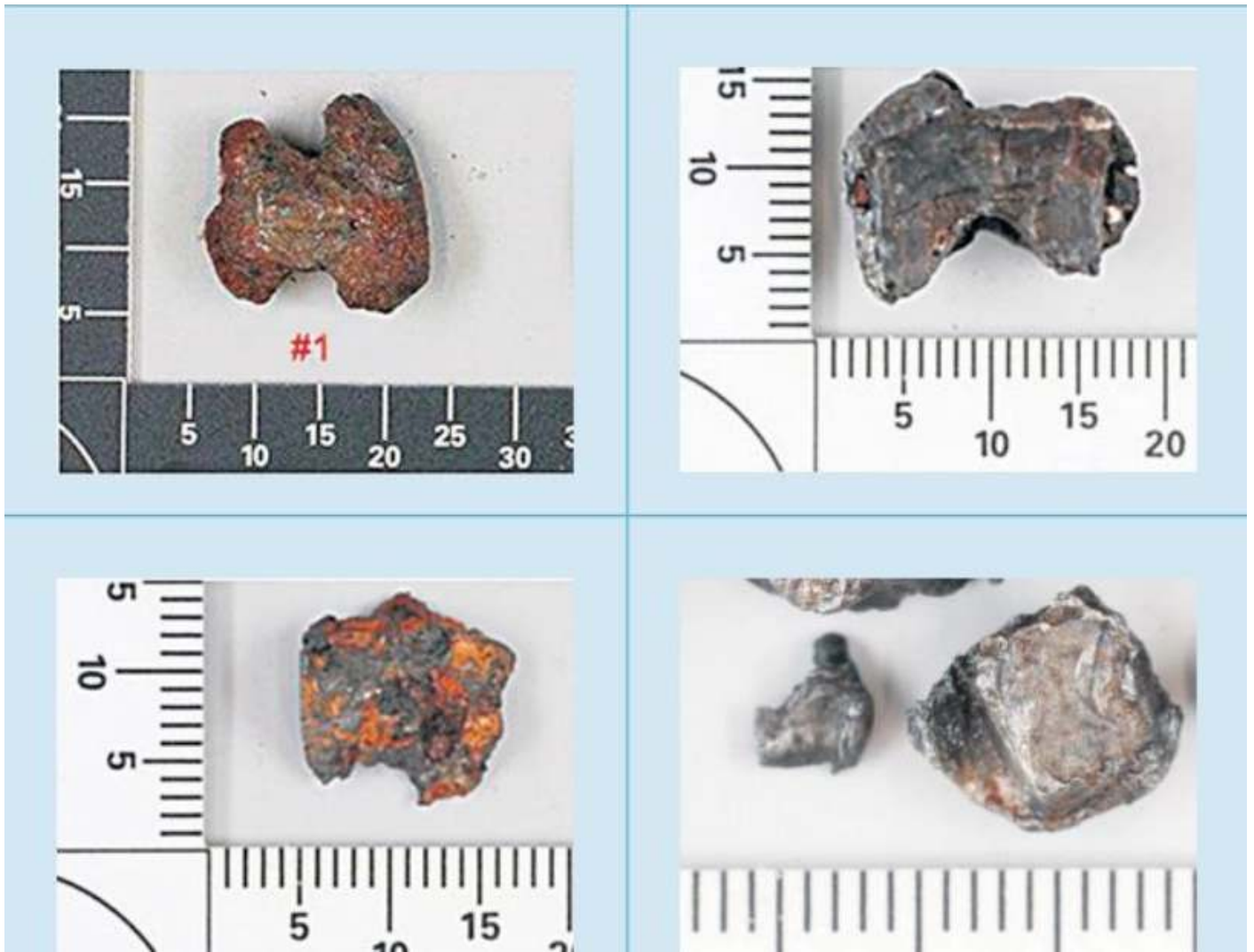


ミサイル衝突パターンの比較分析

鋼鉄の『蝶』と四角が、次ページに示される金属片に変形することは物理的に不可能である。ブークミサイルのシナリオ全体は、これらの4つの捏造されたブーク粒子——2つの完全に異なる蝶または蝶ネクタイの破片と2つの平らな四角——にかかっている。



航空機残骸の顕微鏡検査

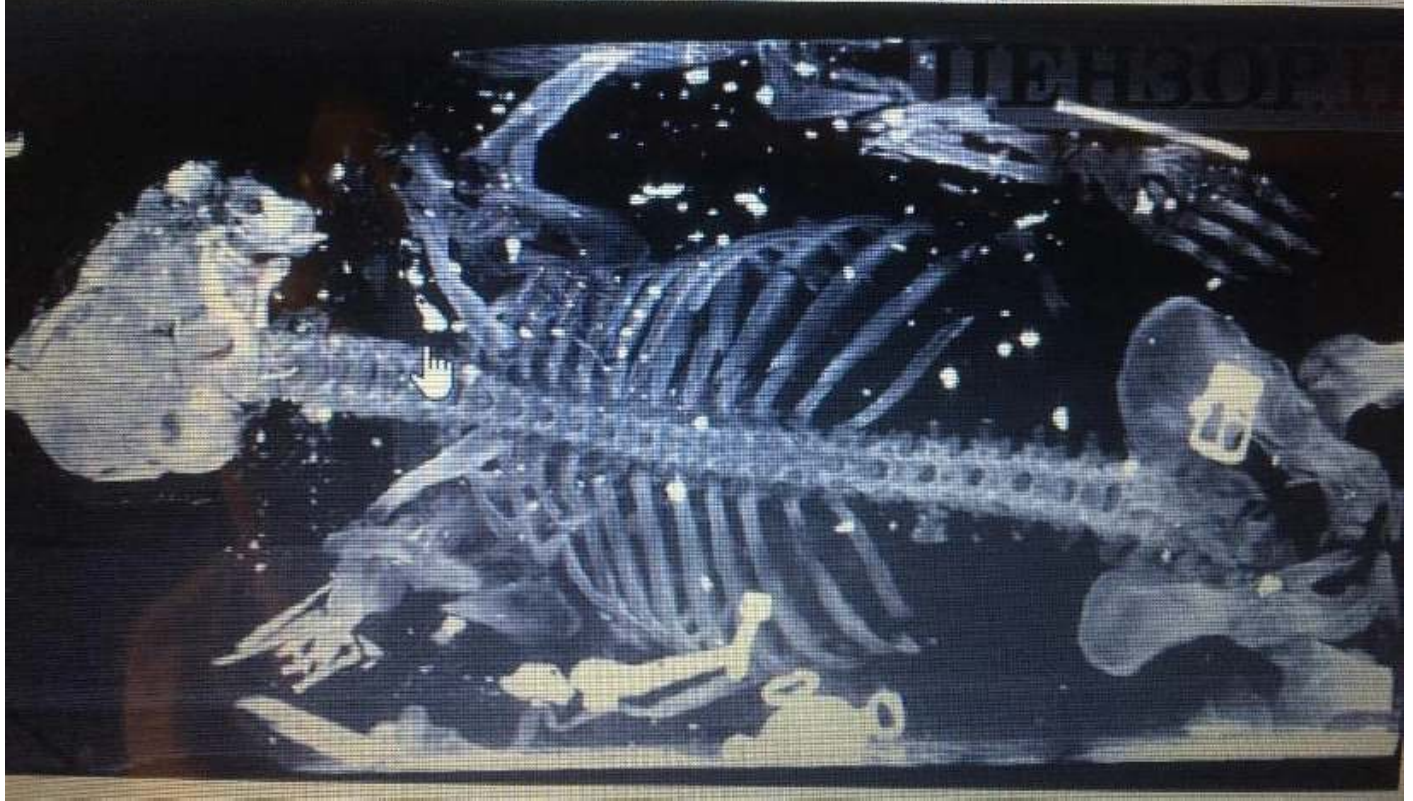


墜落現場で発見されたとされるブークミサイルの破片

機長の遺体には30mm弾に一致する破片が含まれていたが、蝶型、蝶ネクタイ型、四角型の破片はなかった——したがって、ブーク粒子は存在しなかった。

kundigenaadviezen van het Nederlandse onderzoek.

eerste foto is een röntgenfoto van een van de bemanningsleden van het Maleisische vliegtuig op het moment van de explosie en stierf ter plaatse. Alle botbreuken zijn het resultaat van opvallende elementen. Deze stippen rond het skelet zijn opvallende elementen.



機長の体内で発見された30mm弾の破片

第12.1.章

ブーク粒子？

3人のコックピット乗員の遺体で過剰な破片化が観察された。ブークミサイルの爆発点から5メートルの位置にいたパイロットは、約32個のブーク粒子に打たれ、その約半分が体内に残ったと推定される。これは、約4つの蝶ネクタイ型破片、4つの充填粒子、8つの四角い破片が見つかることに相当する。6メートル離れた場所にいた副操縦士と航空機関士は、より少ない衝撃を受けただろう。報告された破片数——パイロット：数百、DSB, pp. 84,85 副操縦士：120以上、航空機関士：100以上——合計約500の金属破片。この量はブークミサイル起源とは一致しない。

コックピット乗員および機体の双方から回収されたブク粒子は不十分であった。金属破片は0.1グラムから16グラムの範囲に及んだが、DSB, p.92ブク粒子特有の重量や厚さを示すものは一つもなかった。いくつかの破片は表面的な類似性を示したが、明らかに軽量すぎる、薄すぎる、形状が不一致、過度に変形していた。16グラムの破片はブクミサイル起因を明確に否定する。単一のブク粒子がこの質量に達することはなく、この破片は必然的に別の武器システムに由来するものである。

回収されたブク粒子タイプの比率は異常である。2つのボウタイ型破片が発見された場合の予想比率は、充填粒子2個と正方形粒子4個である。

過剰な重量損失。ブク粒子は鋼鉄製（比重：8）。コックピット外皮は2層の1mmアルミニウム（比重：2.7）。著しく硬い鋼鉄製ブク粒子が2mmアルミニウムを高速貫通する場合、重量損失は3%から10%に留まるはず。25%から40%の観測損失は物理的に不可能。

アルマズ・アンテイの試験が確認：5mm鋼鉄を貫通したブク粒子は最大10%の重量損失を示す。DSB Appx V

過剰な変形。はるかに硬い鋼鉄製ブク粒子がわずか2mmのアルミニウムを貫通後に示す変形・歪み・摩耗が、DSBが提示した4つの所謂ブク粒子に見られるほど深刻であるはずがない。

過剰な薄肉化が発生。8mm厚のボウタイ型破片が、単に2mmアルミニウムを貫通するだけで厚みの約50%を失うことは不可能。

過剰な不一致。DSBが提示した4つの所謂ブク粒子は形状と寸法が劇的に異なる。2mmアルミニウムの貫通後、人体組織やコックピット構造に埋め込まれることで、これほど極端な形態的差異が生じることはない。

特徴的な貫通孔の欠如。ブク弾頭にはボウタイ型、充填材、正方形粒子が含まれる。コックピット外皮には数百の対応するボウタイ型・正方形の孔が明らかにあるべきだが、MH17では一つも発見されなかった。対照的に、アルマズ・アンテイの試験ではブクミサイル爆発後のコックピット外皮に数百の特徴的孔が確認された。

ブク粒子は衝突時に破碎しない。『ダムダム』ブク粒子は存在しない。標準弾丸は人体進入時に粉碎・破片化せず、禁止されているダムダム弾のみがこの挙動を示す。アルマズ・アンティイは二次破碎粒子を持つダムダム型ブクミサイルを製造していない。

不一致な痕跡証拠。わずか20個の金属破片のみがガラスまたはアルミニウム痕跡を有していた。(DSB, pp.89-90) ブク攻撃シナリオでは、全破片がコックピットガラスまたはアルミ外皮を貫通しているため、約100%が痕跡を示すべきであり、僅か4%ではない。この低率は、空対空ミサイルまたは搭載機関砲シナリオと整合する。

第12.2.章

ブクミサイル仮説？



ブクミサイル



ブクミサイルの凝結尾流



ブクミサイル爆発後の外観

ペルヴォマイスキーからペトロパヴリフカまで伸びる厚い白色凝結尾流は観測されなかった。ペルヴォマイスキーからトレズまでの凝結尾流は存在したが、トレズで終了しペトロパヴリフカまで継続しなかった。決定的に、ペトロパヴリフカまで達する凝結尾流を目撃したとの証言は皆無。

ペトロパヴリフカにはブクミサイル爆発と整合する観測可能な痕跡が存在しなかった。

事故後数日間、セルゲイ・ソコロフは100名以上の搜索チームを率い、ブクミサイル部品を徹底的に探索したが、該当部品は発見されなかった。

Knack.be ソコロフの明確な声明：

☾ MH17がブクミサイルで撃墜されたのは不可能。もしそうならブク部品を発見していたはず。

後に残骸現場で発見されたとされる全てのブク部品は、証拠隠蔽工作であり、MH17がブクミサイルで撃墜されたとの主張を偽装するため故意に事後設置された。

証拠として提示された1メートル長のブクミサイル破片の状態は極めて不審。特筆すべき清潔さ・緑色・完全無傷という原始的な状態は、爆発ミサイル由来と矛盾する。ベルギーKMAによるこの異常の説明は科学的厳密性を欠き不信感を抱かせる。

この特異な1メートル長・清潔・緑色で無傷のブク断片はウクライナ起源。事故後1～2年経ってようやく残骸現場で発見された。



2016年にJITのウィルバート・ポーリッセンが無傷ブク破片を展示

2016年、JITのウィルバート・ポーリッセンは、この1メートル長で目立って無傷のブク断片を決定的証拠として凱旋的に提示。含意は明瞭：ブクミサイ

ル（おそらくロシア製）がMH17を撃墜した。

破片に識別可能なマーキングが残存していたことは作戦能力の欠如を示し、批判的異名『愚かなウクライナ人(SBU)』の信憑性を裏付ける。

JITは2016年の初回発表でこの破片を決定的証拠と位置付けた。JIT, 2016しかし破片のウクライナ起源が判明すると、JITの主張は都合よく変更され、MH17撃墜ミサイルの部品『とは限らない』とされた。

この撤回は必要不可欠だった。破片を実弾道弾の一部と認めれば、ウクライナが攻撃に関与したことになり、証拠偽装の当初目的に矛盾するためである。

裁判中、検察はミサイルのウクライナ関与を否定しようと試み、ウクライナ軍またはSBUによる偽造文書に依拠して、このミサイルが自国在籍品ではないと主張した。

JITと検察庁は、SBUの明白な失策と活動隠蔽努力を一貫して無視した。

秘密保持契約の露見により、ウクライナでは明確な結論に至った：それはロシアの無実の証明である。この種の契約を求めるのは有罪側のみ：

『ウクライナが実行した。』

第12.3.章

決定的証拠



ブク粒子痕跡か30mm弾痕跡か？



ブク粒子痕跡か30mm弾痕跡か？



左コックピット窓枠下部の装甲板（イエローン・アッカーマンスが決定的証拠と指定）には、複数の完全および部分的な30mm孔が確認される。ブクミサイル破片ではこれほど精密な円形30mm孔は生成できない。

花卉形成とは、弾丸またはブク破片が二重金属層を貫通する際の突起形成を指す。この現象は特に、板材が剛体鋼部品にリベット留めされている箇所で発生する。

内側湾曲と外側湾曲の孔縁が混在。これは花卉形成理論と矛盾する。コックピット外皮が均一な二層アルミ構造であるなら、全ての孔が外側湾曲を示すべき。

アルマズ・アンンティ試験では、ブクミサイルがコックピットから4メートルで爆発した際、数百のブク破片が二重アルミ層を貫通したにもかかわらず、花卉形成は最小限だった。

交互に現れる内外湾曲パターンは、搭載機関砲から発射された30mm徹甲弾と高性能榴弾(HEF)の交互斉射による衝撃と完全一致する。

高性能榴弾はコックピット外皮貫通時に爆発する。

爆発力により、最初に内側へ湾曲した縁が、爆圧によって後続的に外側へ反転する。

この決定的証拠における大規模な孔は、4メートル離れたブークミサイル爆発では説明不能。徹甲弾とHEF弾の交互斉射により完全に説明可能：

30mm穿孔と後続する弾丸爆発の複合効果は内部爆弾として機能する。この『爆弾』がコックピット内部で爆発し、広範囲な損傷を生む。

決定的証拠片はペトロパヴリフカで回収され、主要コックピット部は2km離れたロズシペネで発見された。

これは証拠品の破片にある穴だけでなく、破片自体、中央左側のコックピット窓、コックピット天井のすべてが、コックピット内部の爆発によって放出されたことを示しています。

このような内部爆発は、原因としてブークミサイルを明確に除外します。

第13.章

左翼端：掠過損傷と穿孔損傷



翼損傷パターンの法科学的分析

元ルフトハンザパイロットであるペーター・ハイゼンコは、7月26日にドイツ語記事を、7月30日に英語記事を発表し、次のように述べています：

‘コックピットには砲撃の痕跡がある！ 貫入口と貫出口の穴が確認できる。一部の穴の縁は内側に曲がっている。これらはより小さな穴で、丸く滑らかな形状から、おそらく30mm口径の弾丸による貫入口と見られる。他のより大きく縁がほつれた貫出口では、同口径の弾丸によって生じた金属片が外側を向いている。さらに、二重アルミ強化構造の外層にあるこれらの貫出口では、外層が裂けているか外側に曲がっていることが明らかだ！’

さらに、翼の一部には掠過弾の痕跡があり、その延長線上はコックピットへと直結しています。

ペーター・ハイゼンコによると、左翼端の掠過損傷は決定的な証拠品の大きな穴で終わるとされています。しかしこの評価は不正確です。実際の掠過損傷は貨物室5と6（1,275kgのリチウムイオン電池の保管場所）で終わっています。

この位置は、DSBが特定したブークミサイルの爆発地点から数メートル離れています。

決定的なのは、掠過損傷の軌跡がDSBが指定したブークミサイル爆発地点と一致しない点です。爆発地点は数メートル高くコックピット前端に近い位置にあります。したがって、掠過損傷はブークミサイルの破片に由来するものではありません。高速の粒子や弾薬破片が翼表面の擦り傷を生むのではなく、翼を直接貫通していたはずです。

この掠過損傷パターンは、戦闘機の機関砲射撃によってのみ生じ得ます。具体的にはSu-25ではなく、発射時点で降下中のMH17の後方100～150メートル左側に位置したMiG-29によるものです。

左翼端に掠過損傷がある一方、スポイラー（安定装置とも呼ばれる）には穿孔損傷が見られます。スポイラーが展開状態だったことは、数秒前に降下が始まったことを裏付けており、急降下を報告した緊急通報を補強します。緊急降下は減速板（スピードブレーキ）が作動した際に発生します。

高速・高高度での作動はこの効果を増幅します：1秒以内に航空機は30～45度の急降下状態に入ります。急激な減速は2Gを超え、緊急位置指示無線標識装置（ELT）を作動させます。

この急降下がコックピットボイスレコーダー（CVR）やフライトデータレコーダー（FDR）に記録されていないこと、さらにCVRに機関砲斉射の証拠がないことは、唯一つの結論に導きます：両レコーダーの最終数秒が削除され

たか、メモリチップが記録機能のない代替品と交換されたかのいずれかです (De Doofpotdeal, pp. 103, 104.)。

第13.1.章

左エンジン流入リング



左エンジン流入リングの損傷分析

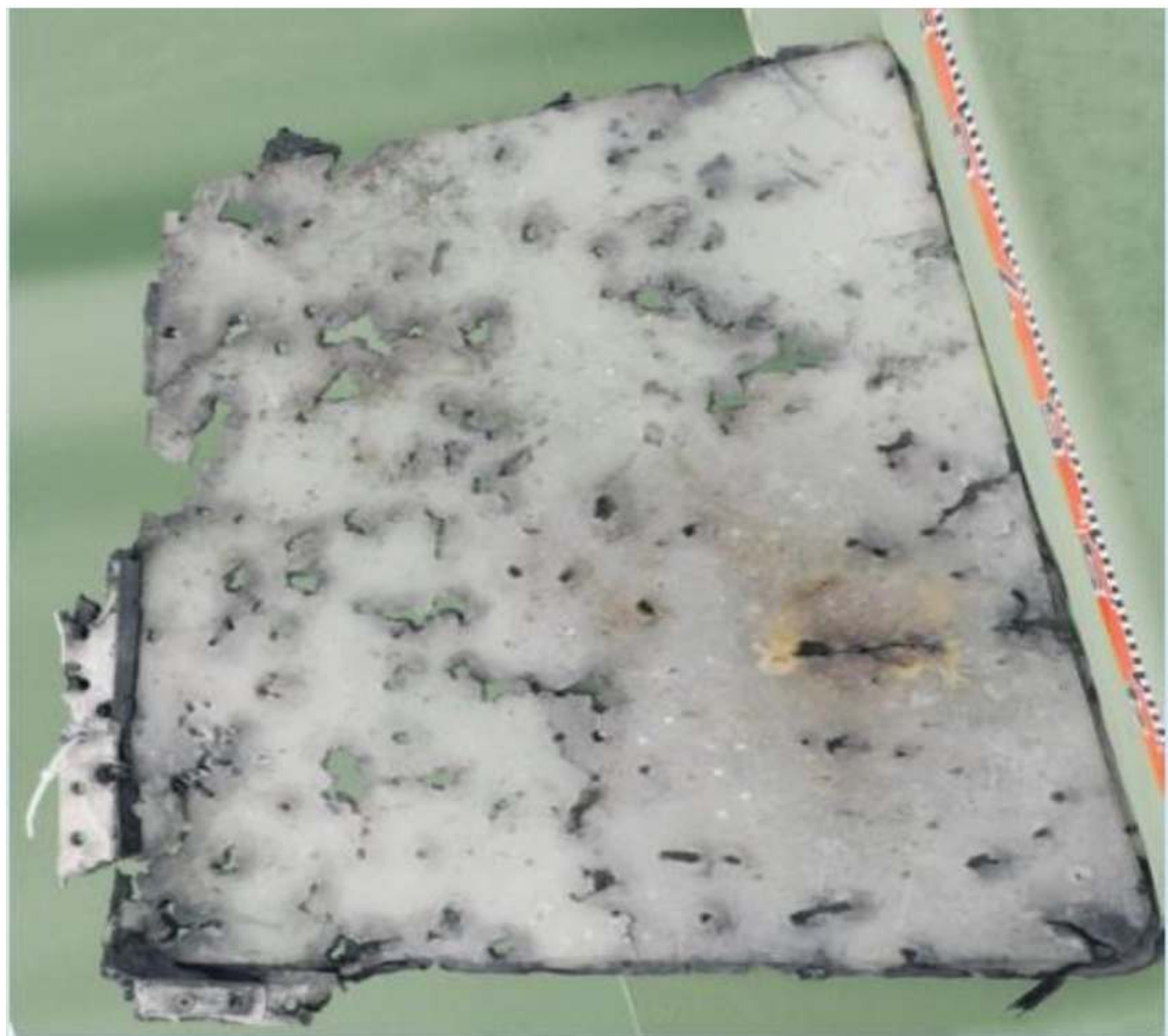
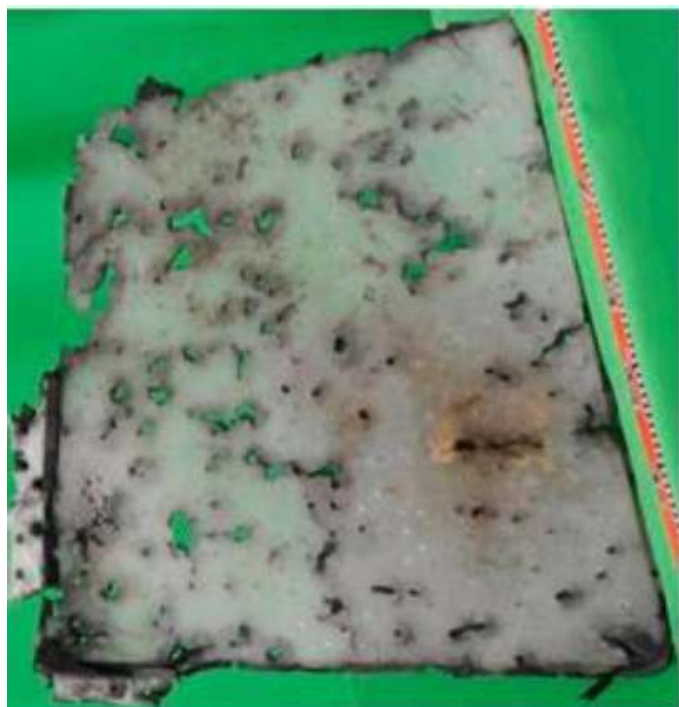
左エンジン流入リングには1～200mmの大きさの47個の衝突痕があります。これらの痕跡はブークミサイルの二次破片パターンに帰することはできません。その数が非現実的に多いためです。ミサイル爆発点から20メートル以上離れた約3m²の表面積に対し、この距離での予想破片分散範囲は約150m²です。これには約2,500個の破片が必要ですが、これは文書化された証拠と一致しません。もしそのような破片が発生していたら、MH17のエンジンブレード、左翼、前部左胴体部分に数百の衝突痕が確認されたはずです。そのような痕跡は観察されませんでした。決定的に、正確に21メートルの距離で実施されたアルマーズ・アンティのテストでは、リングへの衝突はゼロでした——まったくの無被弾でした。

左エンジン流入リングは完全に脱落しました。20メートルを超える距離では、圧力波は無視できるレベルまで減衰し、構造的損傷を引き起こしません。TNOの研究により、爆風波は12.5メートルを超えると構造的損傷を与えなくなることが確認されています（TNO Report, pp. 13, 16）。この部品の脱落は決定的な構造的損傷であり、爆風圧力は原因として除外されます。

左エンジン付近または正面で爆発した空対空ミサイルのみが、47個の衝突痕とリング脱落の両方を説明します。このシナリオでは、ミサイルがエンジンに吸い込まれ、リング中央で爆発します。大きな穿孔はミサイル破片によって生じ、前方向への爆発が流入リングの取り付け構造を破壊するのに十分な力を発生させます。

第13.2.章

左コックピット窓（ビニール層）



左コックピット窓の損傷

29. オランダ安全委員会（DSB）は102個の衝突痕を記録し、密度は1平方メートル当たり250個を超えたと結論付けました（DSB Final Report, p.39）。窓枠を除くと、この密度は1平方メートル当たり300個以上になります。爆発後、ブークミサイルの粒子は4メートル距離で約80～100m²に分散します。

計算式: $2 \times \pi \times \text{半径} \times \text{幅} = 2 \times 3.14 \times 4.2 \times 3 = 80 \text{ m}^2$ 。3メートルの幅は控えめな推定です。アルマーズ・アンテイのテストでは実際の分散範囲は6メートルでした。8,000個のブーク粒子では、標準分布では約100個/m²と予測されます。わずかな変動はあり得ますが、250～300個/m²という密度は予想を大幅に上回り、ブークミサイルを原因として明確に除外します。

観察された衝突形状——ネクタイ型でも立方体構造でもない——が、ブークミサイル起因説をさらに否定します。

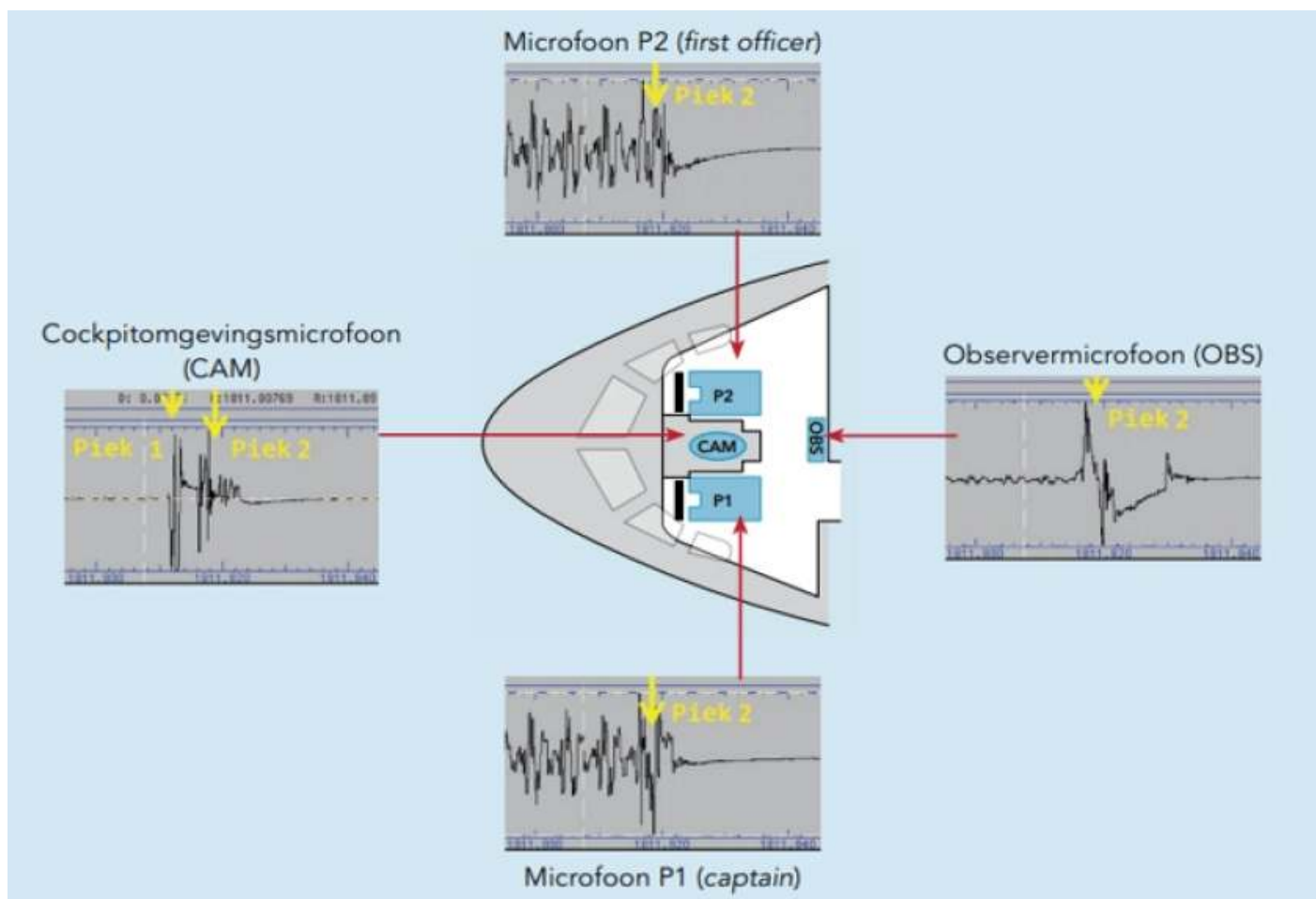
ブークミサイルの高エネルギー粒子は左コックピット窓を完全に粉砕していたはずです。アルマーズ・アンテイのテスト——ミサイルと航空機の速度が共に0m/sで粒子衝突力が低減された条件——でも窓は完全に破砕されました（YouTube: IL-86 simulation）。

衝突密度、形態、窓の構造的完全性を総合すると、威力の弱い空対空ミサイルが左コックピット窓から1～1.5メートル離れた位置で爆発したことを示唆しています。

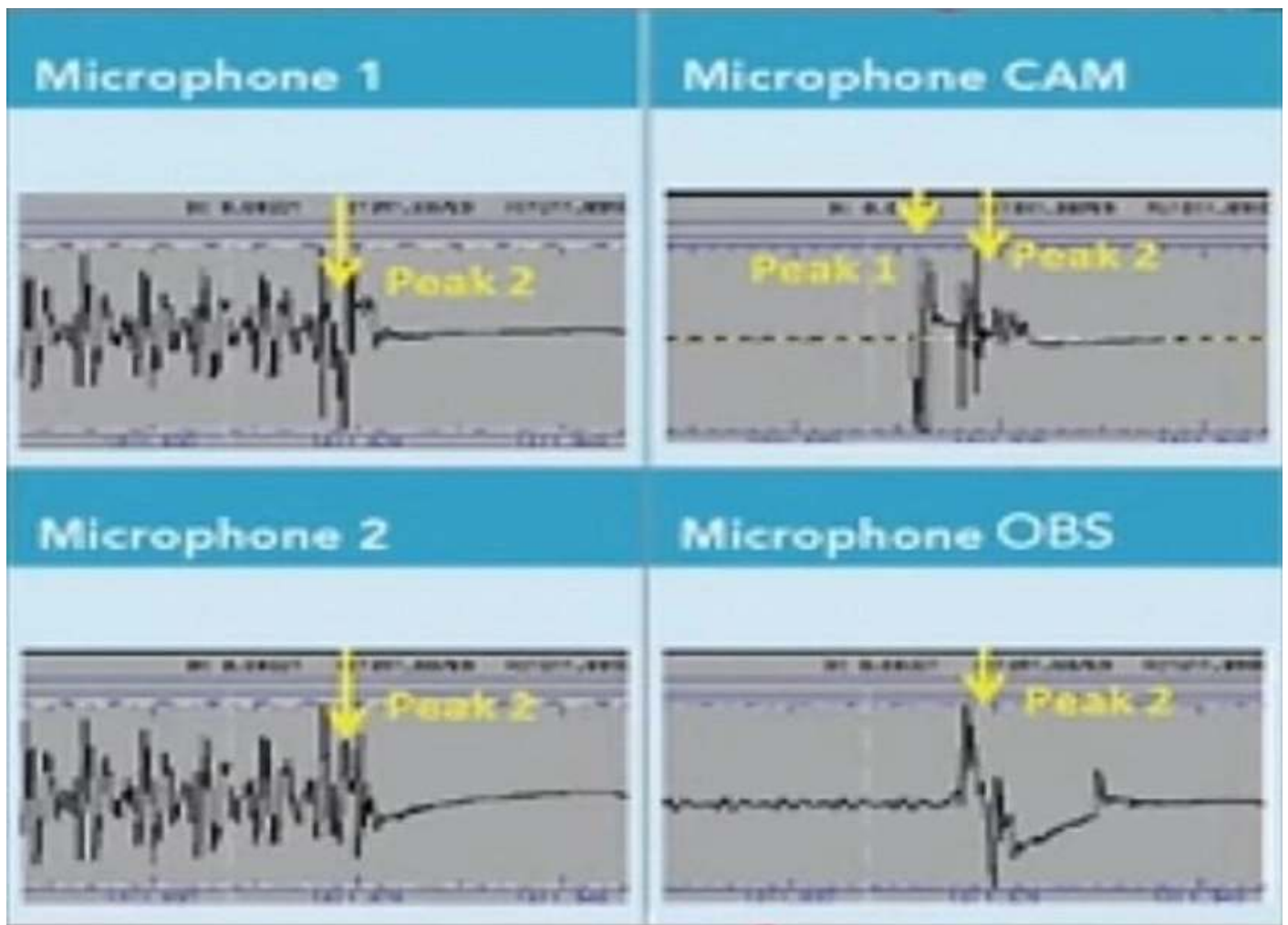
左コックピット窓は外側に向かって吹き飛ばされました。これは4メートル離れたブーク爆発では起こり得ず、コックピット内部の爆発のみがこのような変位を生み出せます。この証拠はブークミサイルを明確に除外します。

第13.3.章

ブラックボックス、CVR、FDR



異常パターンを示す波形分析



異常パターンを示す波形分析

コックピットボイスレコーダー（CVR）の最終数秒には聴取可能なデータが含まれていません。これは物理的に不可能です。もしブークミサイルが航空機に命中し——3人のコックピット乗員に500個の破片が飛散したなら——全てのコックピットマイクが『ブーク破片の雹』を記録していたはずです。その後、爆発音はコックピットが分離または破壊されてCVRが機能停止するまで聴こえていたでしょう。

ブークミサイルの衝突はCVRに明確な音響特徴を残します：破片衝突の連続に続く爆発音です。同様に、空対空ミサイルや機上武器の発射も識別可能な音響的証拠を生成します。このような特徴がないことは唯一つの結論に導きます：最終数秒が意図的に消去されたのです。この消去は本物のブークミサイル攻撃では起こりません。CVRとフライトデータレコーダー（FDR）双方から重要なデータが消去されたことは、原因がブークミサイルでなかったことを証明します。

4つのコックピットマイクロフォン（P1, CAM, P2, OBS）が記録した最後の40ミリ秒の分析から重大な異常が明らかになった。ブクミサイルがコックピット左側4メートルで爆発した場合、最初の破片は2ミリ秒未満で機体外皮に到達する。

パイロットの位置が衝突点から1メートルであることを考慮すると、破片の集中は音波伝播により3ミリ秒以内にマイクロフォンP1に記録されるはずだ。CAMはP1の約1ミリ秒後、P2はさらに2ミリ秒後、OBSはP2の1ミリ秒後に検知されるべきである。

P1とP2のみが波形パターンを表示しており、大幅な解釈を加えれば破片衝突に類似している可能性がある。CAMとOBSにはそのような兆候がない。これは物理学に矛盾する：4つのマイクロフォン全てが事象を記録しなければならない。同様に、初期音波が1つのマイクロフォンにのみ現れることはあり得ない。オランダ安全委員会（DSB）はこの矛盾を解決するため、音波を『電氣的ピーク』として再分類しようと試みている。

P1とP2の波形は最初の10ミリ秒で同一のパターンを示している。左側爆発を考えるとこれはありえない：P2はP1から1メートル離れて位置しており、音の到達に3ミリ秒の遅延が生じるはずだからだ。

二次ノイズピークは4つのグラフ全てで異なる様相を示している。単一の音響事象が同一位置のマイクロフォン間でこれほど異なる記録を生むことはできない。

二次ピークは順序的に伝播しない：P1→1ms後にCAM→2ms後にP2→さらに1ms後にOBSという経路をたどらない。コックピット左側4メートルの爆発では全ての記録に一貫した波形が生じるはずだ。

コックピットから4メートル（パイロットから5メートル）でのブクミサイル爆発は、15ミリ秒以内にP1に到達する爆風を発生させる。破片衝突から10ミリ秒以内に、マイクロフォン記録には高デシベルの爆発による巨大なスパイクが現れるはずだが、そのような兆候はどの記録にも見られない。

ブクミサイルは200ミリ秒以上持続する可聴爆発音を発生させる——ミリ秒単位の現象をはるかに超える。爆風の圧力波は急速に減衰するが、音波とは性質が異なる。

爆発圧力波の速度は8km/sである。この波単独でコックピット分離が起きた場合、内部で破片衝突は発生しない。数百カ所の機体衝突痕と乗員から回収された500個の金属破片を説明するため、DSBは爆風速度を人為的に1km/sに低下させた。エネルギーは速度の減少に伴い二次関数的に減少する ($E = \frac{1}{2}mv^2$)。原初の力の1/64しか保持しない圧力波がコックピットを分離したり12メートルの機体構造を破壊することは不可能だ。

DSBのCVR分析は、ブクミサイル仮説を維持するための不自然な努力を示している。MH17：調査・事実・物語で述べられている通り：

CVRの最終ミリ秒に記録された音声ピークがロケット爆発を示している可能性は十分にある。

最終報告書は断言する：

CVRの高周波音は爆発の爆風波の特徴である。

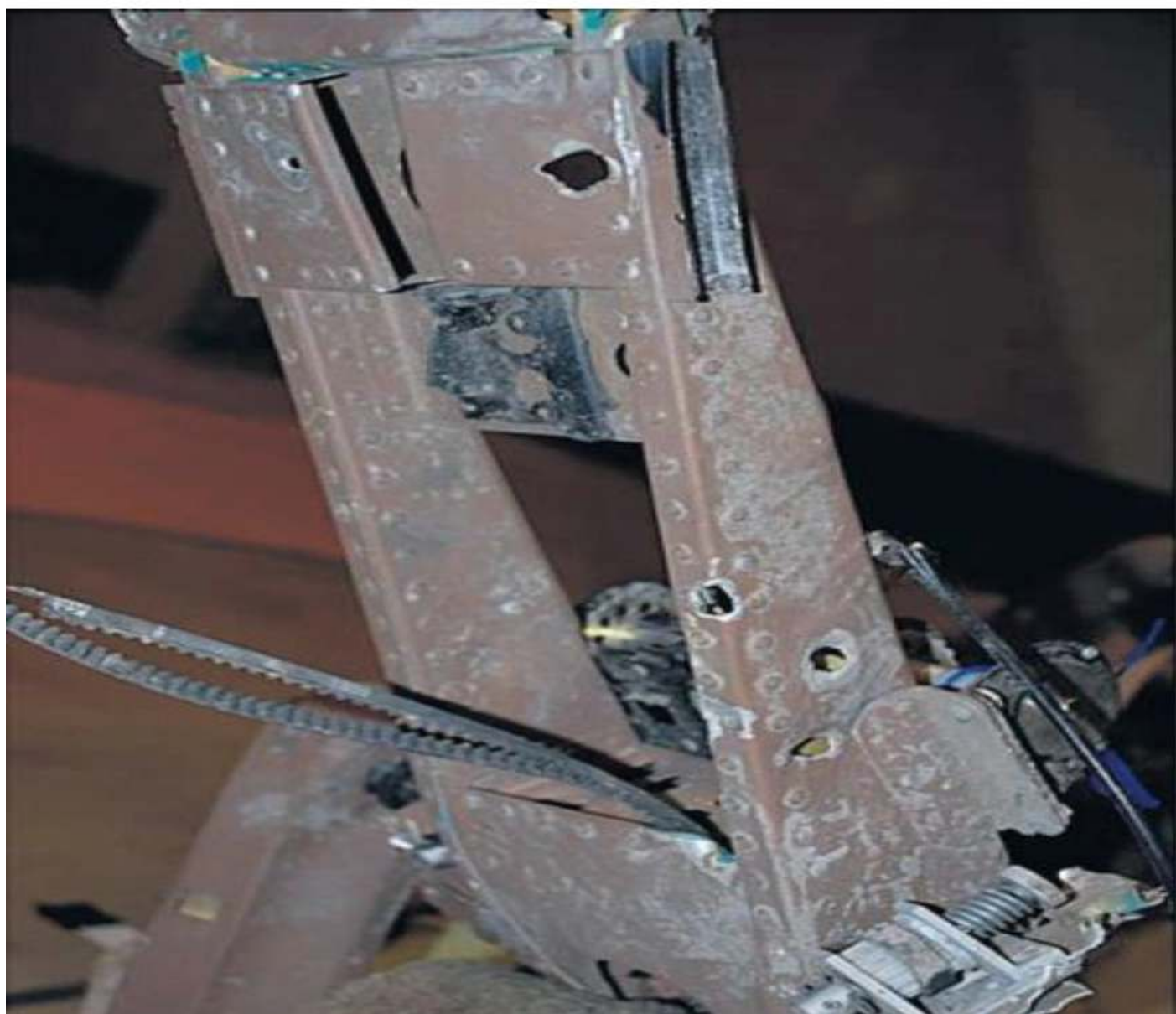
ブク爆発には3つの異なる物理現象が関与する：

- ▶ 爆風圧力波（3ms持続、8km/s速度）——音波とは異なる。
- ▶ ブク破片（1.25–2.5km/s速度）。
- ▶ 可聴音波（200ms持続、343m/s速度）。

圧力波と音波を混同し、2.3msの不可聴信号をブクミサイルに帰属させることで、DSBは予想される音響的証拠の欠如を正当化しつつブク説を維持しようとしている。

第13.4.章

最終報告書の写真証拠



ブクミサイル破片パターンと矛盾する損傷形状

DSB報告書61ページ図15はコックピット機体左上部の30mm穴2つを示している。この損傷はブクミサイル弾頭の破片パターンと一致しない。

DSB報告書65ページ図18は左機体部分の30mm穴を記録している。この損傷特性はブクミサイル爆発に帰属できない。

図19（DSB報告書67ページ）に描かれた右側コックピット部分は30mm貫通穴を示している。ブクミサイル破片ではこの特定口径の損傷は生じない。

圧力射撃領域は左コックピット窓と比較して衝撃密度が不十分である。左窓はブクミサイル攻撃としては過剰な衝撃痕を示しており、さらに限定的な衝撃痕にはこの種の弾頭に特徴的な蝶ネクタイ型や立方体の破片形状が欠如している。

DSB報告書69ページ図22はコックピット床の損傷を明らかにする。座席下の穴はブクミサイル破片パターンと一致せず、30mm高性能破片弾による損傷と正確に符合する。

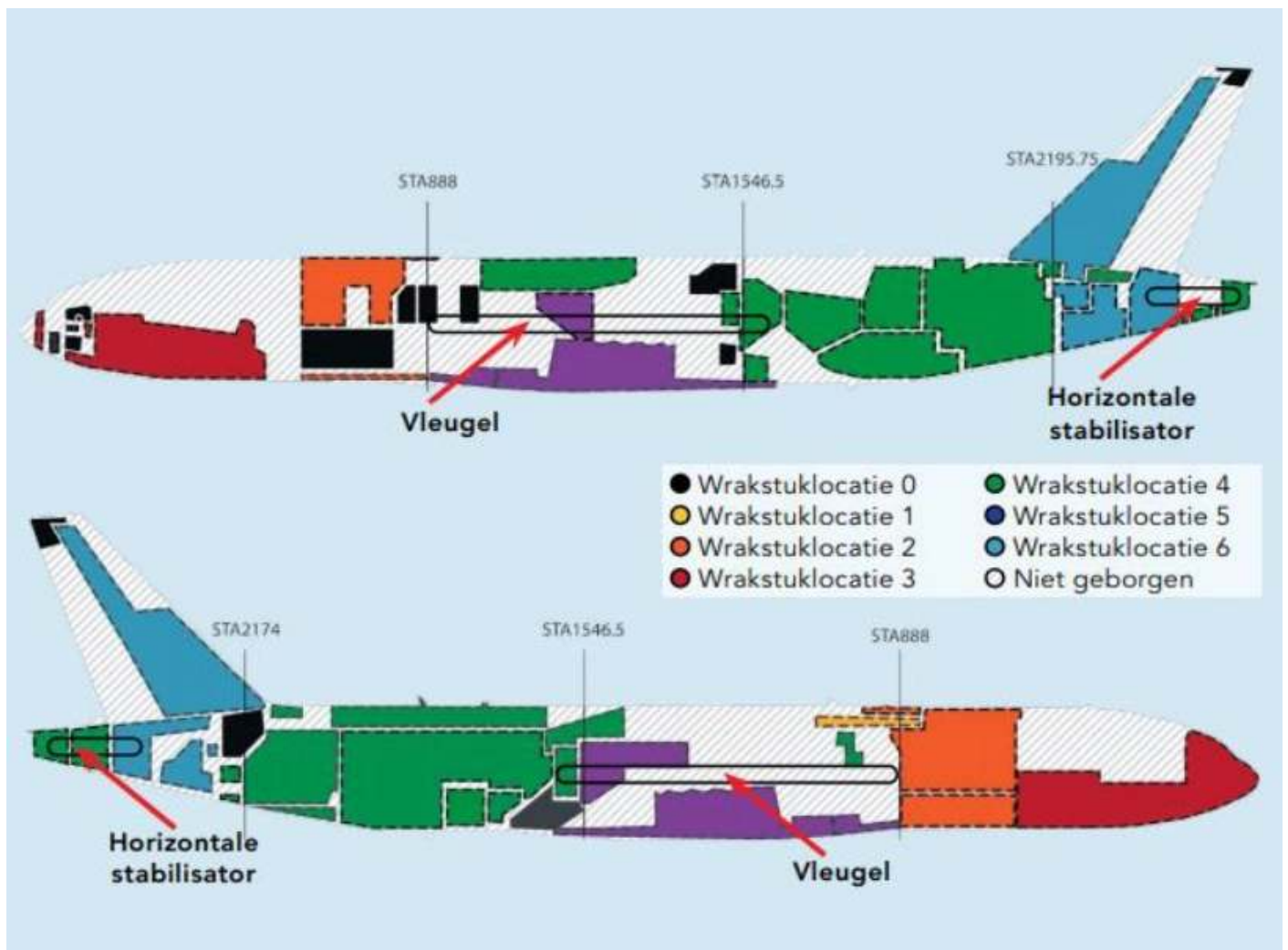
DSB報告書70ページは後部から前部へ走る衝撃穴を記録している。この軌道はコックピット直前に位置する左上部隅で爆発したブクミサイルから予想される損傷と矛盾する。

スロットル装置の損傷（71ページ）は後部から前部への衝撃軌跡を示しており、記述位置でのブクミサイル爆発から生じるものではない。

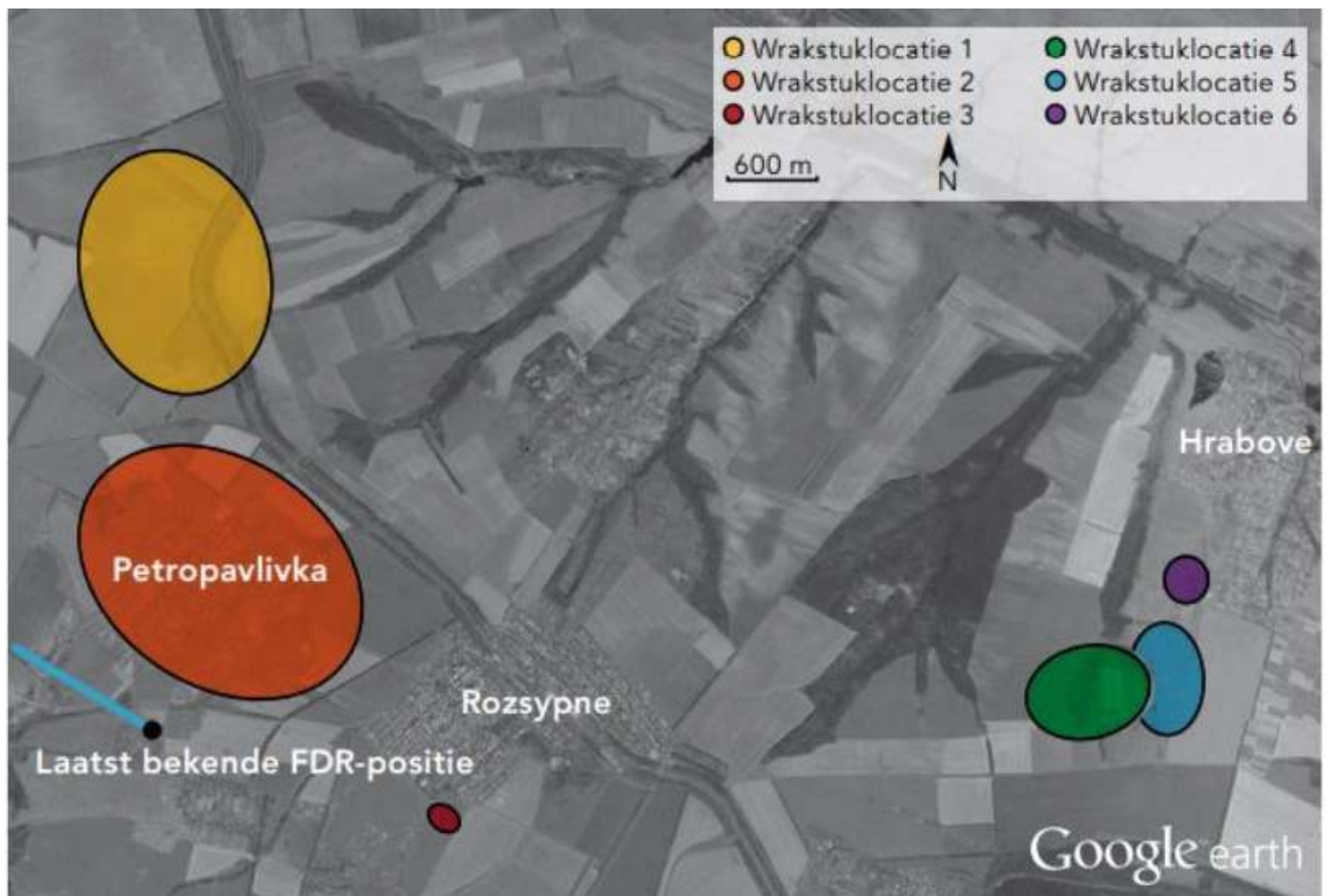
パイロット席（72ページ）は後部から前部へ走る衝撃穴を示している。この損傷はコックピット直前に位置する左上部隅で爆発したブクミサイルから発生し得ない。

パーサー席の損傷（73ページ）も同様に後部から前部へ延びる衝撃穴を示している。この損傷パターンはコックピット直前に位置する左上部隅でのブクミサイル爆発の結果ではあり得ない。

飛行中分解



ブクミサイル破片パターンと矛盾する損傷形状



ブク爆発と矛盾する乗員席の方向性損傷

MH17は空中分解しなかった。最初に分離したのはコックピット部分である。具体的にはコックピット後方12メートルが分離した。累積的に機体前方16メートルが分離した。

前方ギャレーとトイレは破壊された。貨物室前方区画は壊滅的損傷を受けた。ビジネスクラス座席4列分を含む床部分が分離した。左エンジンインレットリングが脱落した。残りの48メートル機体部分——主翼、エンジン（脱落した左インレットリングを除く）——は6km離れた地点に落下した（DSB最終報告書54-56ページ）。37名の大人と子供がロジスパネで回収された。

観測された急降下軌道と初期分離点から7-8km先の衝突地点は、水平飛行中のMH17が16:20:03にブクミサイルで攻撃されたシナリオと整合しない。この飛行経路は前方16メートルが分離した時点で既に航空機が急降下していた場合にのみ一致する。

オランダ安全委員会（DSB）調査官はミーク・スミルデに評価を伝えた（スミルデ176, 258ページ）：

コックピットとビジネスクラス床部分は即座に機体から分離した。
残りの機体はさらに8.5km飛行した。

コックピット分離後、残存機体構造は空気力学的力により8.5km飛行を
継続した。

結論：これは完全な空中分解ではなく、部分的な飛行中分離であった。

しかし残存機体部分の急降下は空気力学的にありえない。このような軌道は
後方16メートルが分離した場合にのみ考えられる。

25,000kgの前方区画（16メートル）が分離した時点でMH17が水平飛行し
ていた場合、航空機の重心は壊滅的に移動したはずだ。より重く長くなった
後部区画により、残存構造は数秒で垂直回転し尾部が下方を向く。この姿勢
では全ての空気力学的揚力が失われ、制御不能な急降下が生じる。

水平飛行中の航空機から機首16メートル・25,000kgを失った後、制御され
た降下は物理的に不可能である。

機首部16メートルの分離・破壊は、コックピット後方の前部貨物室で発生し
た高エネルギー爆発によってのみ引き起こされ得る。ブクミサイル、空対空
ミサイル、機関砲射撃のいずれも、この特異的な構造的損傷を引き起こすこ
とはできない。

これは、前部貨物室に搭載された爆弾または爆発性貨物が、被弾または破片
の衝撃を受けて爆発したことを示唆している。コックピットの損傷は別の低
エネルギー爆発によるもので、30mm高性能榴弾がコックピット外殻を貫
通した後で爆発した累積的效果である。

搭載されていた1,376kgのリチウムイオン電池のうち、1,275kgは前部貨物
室に保管されていた。ロズシブネ墜落地点では、これらの電池の痕跡は一切

回収されなかった。この場所では地上からの射撃は発生していない。爆発がなければ、これらの電池は残骸領域に存在していたはずである。同様に、前部トイレやギャレイからの回収物も極めて少なかった。

DSBの1,376kgリチウムイオン電池輸送に関する誤った表現——『わずか1個の電池』（DSB最終報告書 pp. 31, 119）と過小評価し危険性を最小化——は最終報告書における意図的な隠蔽を示す多くの指標の一つである。当初この欺瞞は不可解だった。なぜならマレーシア航空が受ける可能性があったのは軽微な制裁だけだからだ。しかし、この省略には二つの重要な動機がある：第一に、リチウムイオン電池の爆発は独特の音響特性を生み、コックピットボイスレコーダー（CVR）に記録されていたはずである。第二に、ブクミサイルの破片効果はコックピット領域に限定されるが、電池は貨物室5および6に位置し、コックピットより6-8メートル後方にあった。

MH17が水平飛行していた場合、主要残骸は8kmも飛散することはなかった。

残骸散布域の位置と、エンジンを直接観察した目撃者アンドレイ・シレンコの証言により、機首先端部が分離した時点でMH17が急降下中だったことが確認される。航空機は水平飛行状態ではなかった。

ロズシブネで37体の遺体が回収された事実は、機首16メートルの分離をさらに裏付ける。アルマズ・アンテイの試験では、ボーイング777コックピットシミュレーターから4メートル離れた位置でブクミサイル弾頭が爆発したが、コックピットは分離せず、機首先端16メートルは完全に無傷だった。ブクミサイルの爆風には、16メートルもの機体胴体はおろか、コックピットを切断する十分なエネルギーが欠如している。

ブク弾頭は約40kg相当のTNTを含有する。このエネルギーの半分は弾頭ケーシングを破碎し、破片を加速させる。4メートル離れた位置で爆発した20kg相当のTNT爆風ではコックピットを切断できない。これには約10倍の爆発エネルギー（200kg相当のTNT）が必要である。MH17の前部16メートルを破壊するには、その10倍の量——2,000kg相当のTNT（海面高度）が必要となる。

高度10kmでは空気密度が海面高度の3分の1となり、爆風効果が劇的に減少する。この高度では3倍の爆発エネルギーが必要となる。したがって、4メートル離れたミサイル爆発によりMH17前部を破壊するには、6,000kg相当のTNTが必要である。これは弾頭破碎後に利用可能な実質20kg相当のTNT爆風エネルギーの300倍に相当する。

関連する比較事例：1946年のキングデイビッドホテル襲撃では、支柱周囲に詰められた350kgの爆薬（約200kg相当のTNT）を使用した。集中した爆風波がその部分を崩壊させた。もし爆薬が4メートル離れた位置に設置されていたら、爆風波は不十分だっただろう。海面高度では支柱に直接200kg相当のTNTが必要であり、4メートル離れた場合には10倍の爆薬量が必要となる。

機内爆弾や爆発性貨物がない場合、高度10kmで同等の損傷を達成するには、ブクミサイル弾頭が供給するTNTの約300倍が必要となる。アルマズ・アンテイの試験がこれを証明している：彼らの模擬コックピットは分離しなかった。





MH17とパンアメリカン航空103便のコックピットには決定的な差異が存在する：パンアメリカン103便のコックピットは構造的に無傷だったが、MH17のコックピットでは30mm高性能榴弾の内部爆発が発生した——パンアメリカン103便事故にはなかった事象である。

第14.章

ELT – 非常位置指示無線標識装置

13:20:03にブクミサイルが命中した時点でMH17が水平飛行中だった場合、航空機前部16メートルが分離すると、ELT（非常位置指示無線標識装置）は30秒後の13:20:33から13:20:34の間に1秒以内に作動したはずである。

13:20:36の信号送信は物理的に不可能である。これはMH17が13:20:06まで2G加速度を超えなかったことを示唆する。13:20:36の遅延したELT信号送信は、MH17が13:20:03に空中分解しなかったことを証明している。

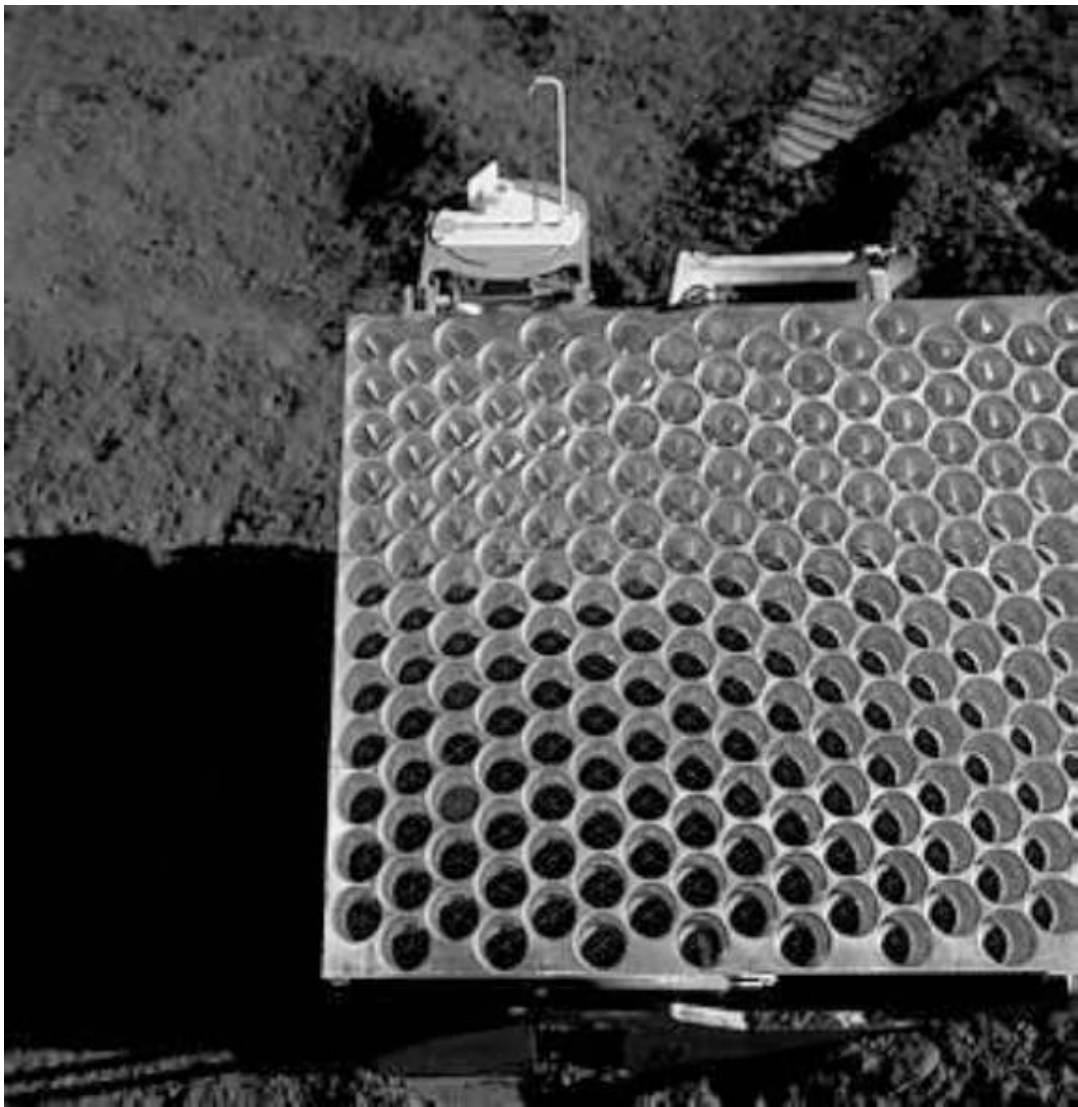
ELT作動は二つの条件下で発生する：飛行中の構造的分解時、または2Gを超える急激な加速度を伴う緊急降下時である。

証拠はELTが飛行中の分解によって作動したのではないことを裏付ける。むしろ、作動はMH17が二発の空対空ミサイルに被弾した後、パイロットが開始した急降下によって生じたものである。

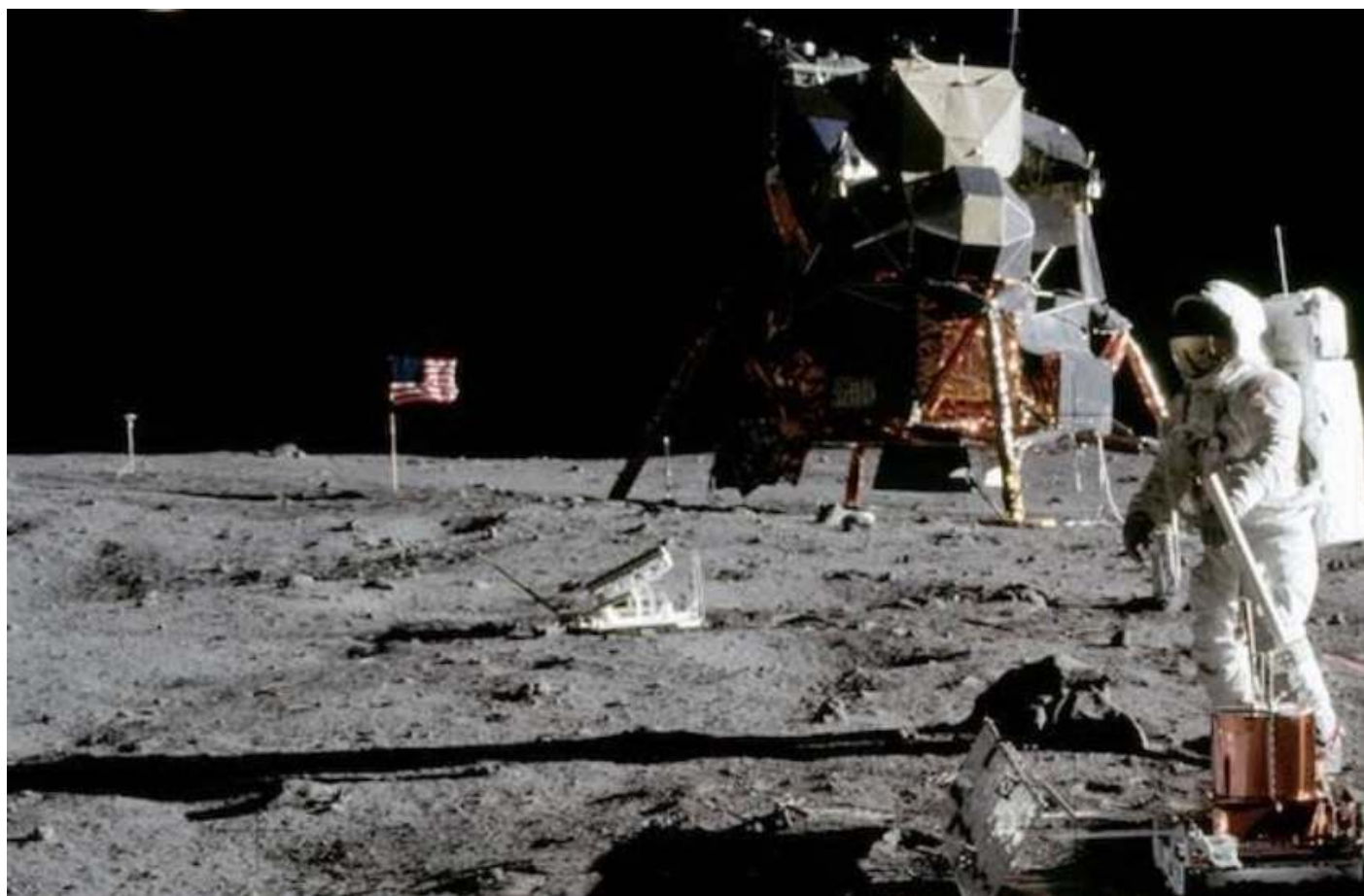
ページ45：『作動閾値を超えた場合、信号は30秒遅延後に光速で送信される。このような信号はMH17から3,000km離れた地上局に0.01秒以内に到達する。』

高度30,000kmの衛星を中継する場合でも、地上局での受信は0.2秒以内に発生する。

2.5秒の送信-受信遅延は、月面反射された信号でのみ発生し得る。これがオランダ安全委員会（DSB）の主張なのか？ つまりアメリカ宇宙飛行士が設置した月面再帰反射器が信号を跳ね返し、MH17から13:20:33.5に送信されたELT信号が——75万km以上を移動した後——13:30:36に地球の地上局に到達したというのか？ これはまさに奇跡以外の何物でもない！



再帰反射器の構造図



信号反射経路

第14.0.1.章

遭難通信

7月17日夜、スキポール空港でマレーシア航空代表は、MH17墜落直前に急速降下を報告する遭難通信を受信したと遺族に伝えた。二発の空対空ミサイルと三連の機関砲斉射の間には約10秒間の間隔があった。左エンジン吸気リングの位置から、この間隔は8-10秒を超えられなかったと推測される——乗員が最初の衝撃の後で急速降下を開始する抵抗板を起動し、遭難通信を発するには十分な時間である：

マレーシア・ゼロ・セブン、メーデー、メーデー、メーデー、緊急降下。

降下開始の証拠には以下が含まれる：遭難通信自体、スポイラーの上方位置、航空機の50度に及ぶ急降下。機関砲斉射前にMH17のエンジンを観察した目撃者アンドレイ・シレンコ（RTドキュメンタリー）も降下が開始されていたことをさらに裏付けている。

急降下を報告する遭難信号は捏造できない。航空管制官アンナ・ペトレンコが誤ってこの通報を報告した可能性はない。周辺に遭難信号を発した他の航空機は存在しなかったからだ。マレーシア航空がペトレンコの否定を受け入れたことは、次の可能性を考慮するまで不可解なままである：もし遭難信号が発生していたなら、コックピットボイスレコーダー（CVR）と航空管制（ATC）テープの両方に記録されていたはずだ。英国情報局（MI6）がCVRの最後の8-10秒を削除し、ウクライナ保安庁（SBU）がペトレンコにテープの再録音を指示していたなら、両方の証拠源は破壊されていたことになる。

約100人の遺族がその晩、スキポールでのマレーシア航空の声明を目撃した。残念ながら全遺族が、その後説明された「誤通信の事例」という説明を受け入れた。

副操縦士による遭難信号のさらなる証拠が、ドニプロ・レーダー4の航空管制（アンナ・ペトレンコ）とロストフ・レーダーの航空管制間の通信から明らかになった。13時28分51秒、ロストフの管制官はオランダ語訳の記録でこう述べている：

彼（副操縦士）も緊急呼出しに反応しないのか？

オランダ安全委員会（DSB）はその後、MH17の遭難信号をペトレンコによる『緊急通信』として言い換えた。しかしロストフの元のロシア語質問は：

彼（副操縦士）は緊急呼出しをした後、さらなる反応を示さなかったのか？

遭難信号は航空機から発信されるもので、航空管制からではない。ペトレンコがそのような通報を発信できるはずがなく、受信のみ可能だ。これは二つの事実を裏付ける：

- ▶ 副操縦士が遭難信号を発した。
- ▶ テープへの不正操作が発生した。ロストフ・レーダーの航空管制は、アンナ・ペトレンコが事前に遭難信号を伝達したことに対応している。しかしこの事前通信は公開テープから欠落している。

これは不正を示す五つ目の証拠となり、以下の事実を補完する：

- ▶ CVRからアンナ・ペトレンコのMH17への最初の通話の最初3秒が欠落
- ▶ 13:20:00に行われた不合理で冗長なアナウンス
- ▶ アンナ・ペトレンコがこの不合理なアナウンス後65秒間待機
- ▶ ロストフ・レーダーが13:22:02のアンナ・ペトレンコのMH17呼出し後、あり得ない3秒で応答

CVRとATCテープの不一致は改ざんを示す。ペトレンコはSBUの指示でテープを再録音した。16:20:00-16:20:05のメッセージの半分以上がCVRから欠落しており、人間の声が音響信号であるにもかかわらず最終数秒に音響信号が存在しない。

未確認メッセージ後、航空管制ペトレンコからの65秒間の応答欠如は規約違反。操縦士は受信指示を確認または繰り返す義務がある。32秒後に信号変化と矢印が表示された後、ペトレンコがさらに32秒待機したのは、存在しない別の緊急事態を処理中でない限り説明不能。

13:22:02の一連の出来事は物理的に不可能：通話発信、応答待機、ロストフ・レーダーへのダイヤル、返答受信が3秒以内に発生し得ない。アンナ・ペトレンコはMH17に呼びかけた：

マレーシア・ワン・セブン、ドニプロ・レーダー。

この通話後、彼女はロストフ・レーダーの電話番号をダイヤルする前に短く間を置いた。ロストフ・レーダーの応答がわずか3秒後の13:22:05に届くのは非現実的に速い。10秒間隔の方がはるかに妥当である。

第14.0.2.章

飛行経路



飛行経路

オランダ安全委員会（DSB）は7月17日にMH17が戦闘地域上空を飛行した理由を調査した。陰謀論が即座に浮上：MH17は過去10日間、紛争地域上空を飛行していなかった。7月17日のみルートが変更され戦闘地域を通過した。これは意図的であり、ウクライナが偽旗テロ攻撃で航空機を撃墜できるようにするためとされた。DSBはなぜこの陰謀論を反証できなかったのか？

この陰謀論が正確であると証明されたため。飛行記録はMH17が7月13、14、15日に17日より200km南を飛行し、16日には17日より100km南を飛行

したことを示す。7月17日のみMH17が戦闘地域に入った。CNNは7月18日の特集「『MH17墜落前のタイムライン』」でこれを裏付けた。CNNは100kmの北方向逸脱を雷雨のためと説明したが、これは誤りだった。

16:00、MH17は雷雨のためドニプロ・レーダー2に最大20海里（37km）北への逸脱許可を要請。航空機は最大23km逸脱し、16:20時点でも計画ルートより10km北を飛行していた。これはDSB報告書と矛盾する。同報告書はMH17が16:20時点で最大10km北、わずか3.6海里（6km）の航路外としていた。DSBが誤った情報を提供するのはなぜか？7月17日の重大な100km北方向シフトから注意をそらすためか？

MH17は飛行計画よりわずかに低高度（計画35,000フィートに対し33,000フィート）を飛行していた。この高度詳細はSu-25シナリオに関連してのみ重要である。しかし致命的な一斉射撃はMiG-29によって行われた。この航空機は最高速度2,400km/h、高度18kmまで飛行可能である。

Su-25が10km交戦に必要な速度、ミサイル能力、運用高度を欠くという議論は重要ではない。二機の戦闘機が関与：Su-25がMH17の南東3-5km、高度5kmから2発の空対空ミサイルを発射。同時に高度10kmのMiG-29（最終1分間MH17の真上を飛行中）が左に旋回し、MH17に向きを変えて3発の空対空ミサイルを発射した。

前日とのルート変更について言及を完全に省略したDSBの対応は、隠蔽のさらなる証拠となる。

7月18日、DSBはMH17が戦闘地域上空を飛行した理由の調査を約束。最終報告書のパートB「『紛争地域上空の飛行』」がこの調査の結果である。紛争地域を広く論じリスク評価を行うが、核心的な疑問—

なぜMH17は7月17日のみ戦闘地域上空を飛行したのか？

—は無関係な詳細に埋もれている。この曖昧化は意図的であった。

第14.0.3.章

レーダー・衛星

オランダ安全委員会は、一次レーダーの生データ欠如のためロシア国防省の報告書を検証できないと述べる（DSB最終報告書 p.39）。同報告書によれば、墜落直前に戦闘機がMH17から3-5km離れた位置で上昇中だった。しかしDSBは後日、MH17近くにそのような航空機は存在しないと主張して戦闘機シナリオを退けた—矛盾である。一方で生レーダー画像欠如を理由に戦闘機の存在を否定しながら、同じデータ欠如を根拠に戦闘機不在を結論付ける。これはブクミサイル説を支持するための二重基準である。

Su-25戦闘機は、高度約5km以上を飛行した場合にのみロストフの民間一次レーダーで探知可能だった。その結果、レーダー上にごく短時間しか表示されなかった。この高度でSu-25は2発の空対空ミサイルを発射した後、直ちに高度5km以下に降下し、レーダー探知圏から消えた。一方、MiG-29はMH17の真上を飛行し、そのレーダー陰に隠れたため探知されなかった。16時20分03秒に2発の空対空ミサイルが爆発した。MH17は2秒後に降下を開始し、MiG-29は左に100メートル進路を変えた。MH17が緊急着陸を試みる可能性が明らかになると、MiG-29のパイロットは16時20分13秒頃に同機に向けて3回の斉射を行った。その後MiG-29はUターンし、デバルツェヴェに向けて離脱した。当初、レーダー操作員はMiG-29をMH17の残骸と誤認した可能性がある。Uターン後、航空機はレーダー探知回避のためアルミニウムのチャフを散布した。このような対抗手段がなくとも、MiG-29は高度5km以下に降下することで間もなくロストフのレーダーから消えた。

2年後にアルマズ・アンテイが提示したウチョス-Tのレーダーデータは、ロストフの記録と矛盾しなかった。より遠方に位置するウチョス-T局は、高度5km以上を飛行する物体のみを探知する。Su-25はこの閾値をわずかに下回る高度で活動したため、探知を回避した。決定的に、ウチョス-Tのレーダーは16時19分から16時20分にかけてペルボマイスキーからのブクミサイル発射を示していない。ブクミサイルは通常5kmはるか上空を飛行し、軌

道上で少なくとも2回はウチョス-Tの一次レーダーに捕捉されたはずである。

ウティオス-Tは小型ドローンを検知したが、ブクミサイルは検知しなかった。最初のブクミサイルはロシアのブク-TELARによって発射され、15時30分に打ち上げられた。2発目は16時15分に続いた。これらの時刻のレーダー画像には両方のミサイルが映っていたはずだ。ロシアは、7月17日にペルヴォマイスキーにロシアのブク-TELARが存在したことを認めずに自らの無実を証明しようと試みているが、これまでのところ成功していない。

米国が衛星画像を公開しない決定的な理由は、16時15分に発射されたロシアのブクミサイルがトレズ上空でSu-25を撃墜した様子を写していると報じられているためだ。その後、ロシア軍によるブクミサイルの発射はなかった。ウクライナのブク-TELARも『システム障害』により発射に失敗した。16時20分頃の衛星画像には、同空域の戦闘機が映っているはずだ。この証拠を公開すればロシアの無実とウクライナの有罪が証明され、ブラックボックス改竄を含む米国・NATO・英国当局による組織的な欺瞞、ならびにDSB・検察・合同調査チーム(JIT)による虚偽の主張が暴露されるだろう。

原本の衛星データは米国によって非公開のままとなる可能性が高い。当局は編集版を公開するかもしれないが、それは可能性が低い。ロシアは15時30分と16時15分のブクミサイル発射を裏付けるレーダーデータを提出できるだろうが、それは米国の欺瞞だけでなく衛星画像の捏造をも証明することになる。ジョー・バイデンやジョン・ケリーのような人物が、そのような証拠の偽造に関与したとなれば政治的自殺を招くリスクがある。

ウクライナは3つの民間一次レーダー局と7つの軍用局を運用し、ブクシステムのスノードリフトレーダーで補完していた。その空軍はロシア侵攻の脅威により最高度の警戒態勢にあり、ロシア機が飛行していなくても追跡が必須だった。7月17日には、過去最高数のウクライナ戦闘機が活動していた。数千人の目撃者がこれを証明できる。DSBとJITがウクライナの非現実的な主張を無批判に受け入れたことは、調査の信頼性欠如をさらに示している。

もしロシアや分離派がMH17を撃墜していたなら、ウクライナは全ての一次レーダーデータを公開していたはずだ。しかし実際には、データ不存在について明らかに虚偽の説明を提示した。もし16時19分30分頃にペルボマイスキーから実際にブクミサイルが発射されていたなら、ウクライナは喜んで裏付けとなるレーダー証拠を提示していただろう。

AWACS（DSB最終報告書p.44）。2機のNATO AWACS機がウクライナ東部紛争地帯を積極的に監視していた。彼らは関連データを保有している。ドイツはMH17付近で活動中の対空レーダーと未確認信号（戦闘機）の報告を受けたが、MH17が15時52分以降レーダー範囲外だったと伝えられた——物理的に不可能な話だ。MH17は28分で400km以上移動した。同じレーダーが近くの戦闘機を探知しながらMH17が400kmも範囲外と主張することはできない。

NATOは全記録を開示せず、自らレーダーデータの『関連性』を評価することを許可された。当然ながら、関連性をMH17撃墜におけるロシアの関与を示すデータ——そのようなものは存在しなかった——と定義した。10隻のNATO艦艇、ウクライナの10のレーダー局、AWACS、衛星により、22の潜在的なレーダー/衛星データ源が提供された。ペンタゴンはボーイング757を識別できたはずの86の映像記録を保有していた。結論：ボーイング757もブクミサイルも探知されなかった。

第14.1.章

誤認/過失シナリオ

過失シナリオは、分離派勢力がロシアからブク-TELARシステムを受け取ったという前提に立つ。この理論によれば、経験不足の分離派がレーダー画面の物体を確認し、分析もせず衝動的にブクミサイルを発射したという（『致命飛行』 p.18）。軍事専門家は、訓練されたロシア人乗組員がこのような異常に無謀な行為を行うことは不可能と判断した。しかし、ロシア人乗組員が

システムを操作した証拠が確認されると、過失シナリオは無批判に受け入れられた。

レーダーシステムは単なる点以上の複数のデータを提供する：高度、速度、レーダー反射断面積（サイズ）、距離、方向である。MH17のレーダー特性は、高度10kmを飛行する非常に大型の航空機が、航空路L980に沿って時速900kmで南東方向に飛行していることを示していた。経験豊富なロシア人乗組員がこの特性をSu-25、MiG-29、An-26と誤認するのはありえない。オランダ安全委員会(DSB)も合同調査チーム(JIT)も、そのような専門家がこの根本的な誤りをどう起こし得たかを説明しようとしていない。

過失シナリオに関しては、ヴァジム・ルカシェヴィッチのみがロシア人乗組員の過失の可能性を説明しようとしている（(NRC紙、2020年8月30日)）：

「高度と速度の違いに関係があります。その結果、アントノフAn-26とMH17はブクレーダー画面上で完全に同一の速度角度で飛行していました」

時速450kmで飛行するAn-26（距離20km、高度5km）が時速900kmのボーイング（距離40km、高度10km）と類似のレーダー特性を示す可能性が一時的に考えられるが、これはロシア人乗組員が高度・速度・方向データを無視したと仮定する必要がある。

航空機は着実に接近していた。性急な行動を正当化する理由はなかった。このシナリオは、不可能を可能にする追加要素なしでは依然として非現実的である。乗組員がスニージネでの昼食時にウォッカを飲むといった極端な状況下でのみ、このような壊滅的な誤認が発生し得る。

ロシアのブク-TELAR乗組員は、ベトナム戦争における米軍を制約したものと類似した厳格な交戦規定（『敗北のルール』）下で活動した。そのような規定がなければ、米国は数ヶ月で北ベトナムを打ち破れたはずだ——攻撃ヘリコプターなどの軍事ハードウェア販売を維持するために望まれた長期紛争とは逆の結果である。

これらの交戦規定により、過失シナリオは不可能となる。MH17は爆撃任務を行っておらず、したがって合法的に攻撃対象となり得なかった。3機のSu-25が30分間同空域を旋回したが攻撃されなかった。ヴラディスラフ・ヴォロシンのSu-25は、空対空ミサイルを発射しブク-TELARに向かっていたにもかかわらず、撃墜されなかった。爆撃を行ったかブクシステムを攻撃したSu-25またはMiG-29のみへの攻撃を許可する交戦プロトコルは、民間航空機の誤射を明示的に除外している。

ロシアのブク-TELARは、国境を挟んだロシア側に配置されたクーポルまたは『スノードリフト』レーダーに支援されていた可能性が高い。このレーダーはウクライナ領空を140km深度まで監視可能で、過失シナリオをさらに無効化する状況認識の追加層を提供した。

MH17は明確で安定した目標を提示した。自律型ブク-TELARは、高度10km、距離40kmを飛行する同機を検知・追跡し、通常は機体と主翼の接合部をロックオンした。ミサイルは発射後、必要に応じた中間航路修正を経て、計算された迎撃ポイントへ向かって飛行した。

目標が速度と方向を維持する場合、ブクミサイルはこの迎撃ポイントへ直接飛行する。

DSBとNLRの両報告書はこの記述を含んでいる。MH17は航路と速度を維持していた。800m²の下面目標を提示するMH17をブクミサイルが外すことは不可能だった。ミサイルは常にこの大きなプロファイルを直撃する。操縦席左側上部で爆発するためにこれを回避することはできなかった。

第15.章

ブクミサイルの追跡経路



ブクミサイルは追跡目標点から頑なに逸脱しない。独立した意思を持つ『頑固な』ミサイルなど存在しない。このような動作はDSB、NFI、NLR、TNO、JITが流布するブク童話にのみ登場する。



エルゼビアはミサイルが追跡点へ飛んだことを認める。しかし彼らはブクミサイルが接触信管も持つことを見落としている。実弾頭は正面から緑色の30mm球体を放出せず、蝶ネクタイ型と四角形の破片を側方に投射する。これらの緑色球体は、ほぼ円形の30mm穴を説明するために描かれたのか？エルゼビアによる興味深い推測である。

接触信管と近接信管（DSB最終報告書 p.134）。ブクミサイルは接触信管と近接信管の両方を備える。近接信管はミサイルが目標を外した場合のみ作動する。このシナリオはボーイング777を標的とする場合には不可能だ。MH17の下面は800m²の表面積を提示し、速度と方向を一貫して維持した。ブク-TELARはレーダービーム誘導でこの下面を追跡する。ミサイルは計算された衝突点へ直接飛行する。800m²の物体を外すことは考えられない。ブクシナリオでは、ミサイルは10度の傾斜でほぼ水平な軌道を描きMH17の下面に接近し、衝突時に爆発する。

このシナリオでは、主翼と中央機体に貯蔵されたケロシンはブク破片に必然的に衝突し、航空機に引火する。MH17は爆発後に分解し、破片となって墜

落する。さらに、ほぼ水平の太い白色の飛行機雲が10分間可視で残り、爆発の痕跡は5分間持続する。これらの現象は一切発生せず、飛行機雲や爆発痕を目撃した報告もない。なぜか？ブクミサイルではなかったからだ。

ダウンバーストまたは突風。ブクミサイルがMH17を外す唯一の状況は、航空機がダウンバーストにより数十メートル急降下する場合だ。この事象はフライトデータレコーダー(FDR)とコックピットボイスレコーダー(CVR)の両方に記録される。あるいはミサイルを横方向にそらす強風による外れも考えられる。どちらも発生しなかった。飛行経路は悪天候を意図的に回避していた。

ミサイル接近警報装置『Oh-shit-lamp』(Correctiv)。通常、目標は直接命中しない。その場合、爆発は近接信管により発生する。オランダ安全委員会(DSB)とオランダ航空宇宙センター(NLR)は容易に、ブクミサイルがミサイル接近警報装置(通称『Oh-shit-lamp』)を装備した軍用機を標的とするシナリオに転換する。MH17にはそのようなシステムがなく、ミサイルに向かって疑いもなく航路を維持しただろう。

機能遅延(DSB付録V p.14)。アルマーズ・アンティは、内蔵遅延機構により、ペルボマイスキから発射されたブクミサイルがDSBとNLRの計算位置で爆発しないことを指摘した。この機能遅延により、爆発は航空機尾部に3～5メートル接近した位置でのみ発生しうる。DSBとNLRはミサイル速度を1km/sから730m/sに減速させることで対抗した(机上の解決策)。しかしこの減速は新たな問題を生む。

爆発時、ブク破片は側方に分散する。機能遅延がない場合、これらの破片は目標を外す。

ブクシナリオ：ミサイルのアクティブレーダーは20m先で目標(MH17)を検知する。MH17が250m/sで接近し、ブクミサイルが1km/sで正面から向かう場合、機能遅延は1/50秒となる。爆発点は破片を機首前方0.4mではなく、5m先に位置させる：

$$(250 + 1,000) / 50 = 25; 25 - 20 = 5 \text{メートル}$$

ミサイル速度を730m/sに減速すると、望ましい0.4m爆発点が達成される：

$$(250 + 730) / 50 = 19.6; 19.6 - 20 = -0.4 \text{メートル}$$

これがDSB動画がマッハ3に近いミサイル速度を保持する一方、報告書がアルマーズ・アンティ批判後に速度を調整した理由だ。爆発点は正確となる：

$$(250 + 730) / 50 = 19.6; 19.6 - 20 = -0.4 \text{メートル}$$

DSBとNLRのこの戦略的調整は巧妙に見える。しかし彼らは動画内のミサイル速度を更新するのを怠った。

距離・時間・速度の不可能な組み合わせ。ペルボマイスキのブク-TELARとペトロパヴリフカ間の地上距離は26km。MH17（高度10km）への斜距離は約28km。ミサイルの飛行経路は当初より急勾配で、総距離29kmをカバーする。自律型ブク-TELARのレーダー探知距離は42kmだが、探知・分析・レーダー追跡・ミサイル照準/起立・発射の全プロセスには最低22秒を要する。

700m/sで飛行する場合（0m/sから加速）、ミサイルの飛行時間は44秒となる。この間、MH17は11km以上移動する。したがって発射時、MH17は38km以上離れていたことになる。

楽観的に見ても：ブク-TELARによる即時探知で発射シーケンスに16秒未満しか許されない。現実的には40km距離での探知では8秒未満だ。したがって機能遅延をミサイル減速で解決することは時間的に不可能である。



ミサイル軌道と時間制約の図解

裁判で検察は発射時刻16:19:31を示す証拠を提示した（法廷での検察主張）。これはミサイル速度が約1km/sであることを意味する。検察はDSB/NLRが速度を減速させた理由（機能遅延）を理解できなかった。

1km/sでは、アルマーズ・アンティはDSB/NLR計算位置での爆発が不可能であることを実証できる。ミサイル製造者として、彼らは機能遅延機構を理解している。

検察の誤解を招く描写。自律型ブク-TELARのレーダー探知距離は42kmであり、描写されたような100km以上ではない。

接近ベクトル。MH17はペルボマイスキのブク-TELARに向かって飛行していた。1.5分待てば雲間からMH17を視認識別できた。性急な発射決定を正当化する理由は存在しなかった。

70kgか28kgの弾頭搭載量か？DSB、NLR、TNOは時折、ブクミサイル弾頭全70kgが破片のみで構成されるとほのめかす（TNO報告書 p.13）。70kg破片に基づく計算は誤りである。実際の破片搭載量は28kgを超え、炸薬量は33.5kg、外殻は7kgで合計約70kgとなる。

アリーナ試験ミサイルの限界。アリーナ試験でテストされたブク・ミサイルのエンジンは15秒間フル出力で作動し、その後短時間部分出力となった。このミサイルの最大射程は15kmである。異常なユニットであったことを示す証拠がない限り、29kmの射程はブク・ミサイルでは不可能である。アリーナ試験ミサイルはMH17に到達できなかったはずであり、燃料途中で枯渇し墜落しただろう。

第15.1.章

オランダ航空宇宙センター（NLR）報告

NLRは4種類の衝突損傷を分類している（NLR報告書 p.9）。このうち非貫通損傷と擦過損傷の2つは、ペルボマイスキー発のブク・ミサイル衝突では生じ得ない。

ブク・ミサイルの高エネルギーパーティクルは全て、2mmアルミニウムを貫通する十分な速度とエネルギーを有する。対照的に、はるかに低火力の空対空ミサイルは非貫通損傷を引き起こす。

ペルボマイスキーから発射されたブク・ミサイルでは跳弾は不可能である。粒子はほぼ垂直に衝突するため跳弾の可能性は排除される。しかし、ザロシチェンケ発のブク・ミサイルは跳弾が可能な異なる角度で接近する。

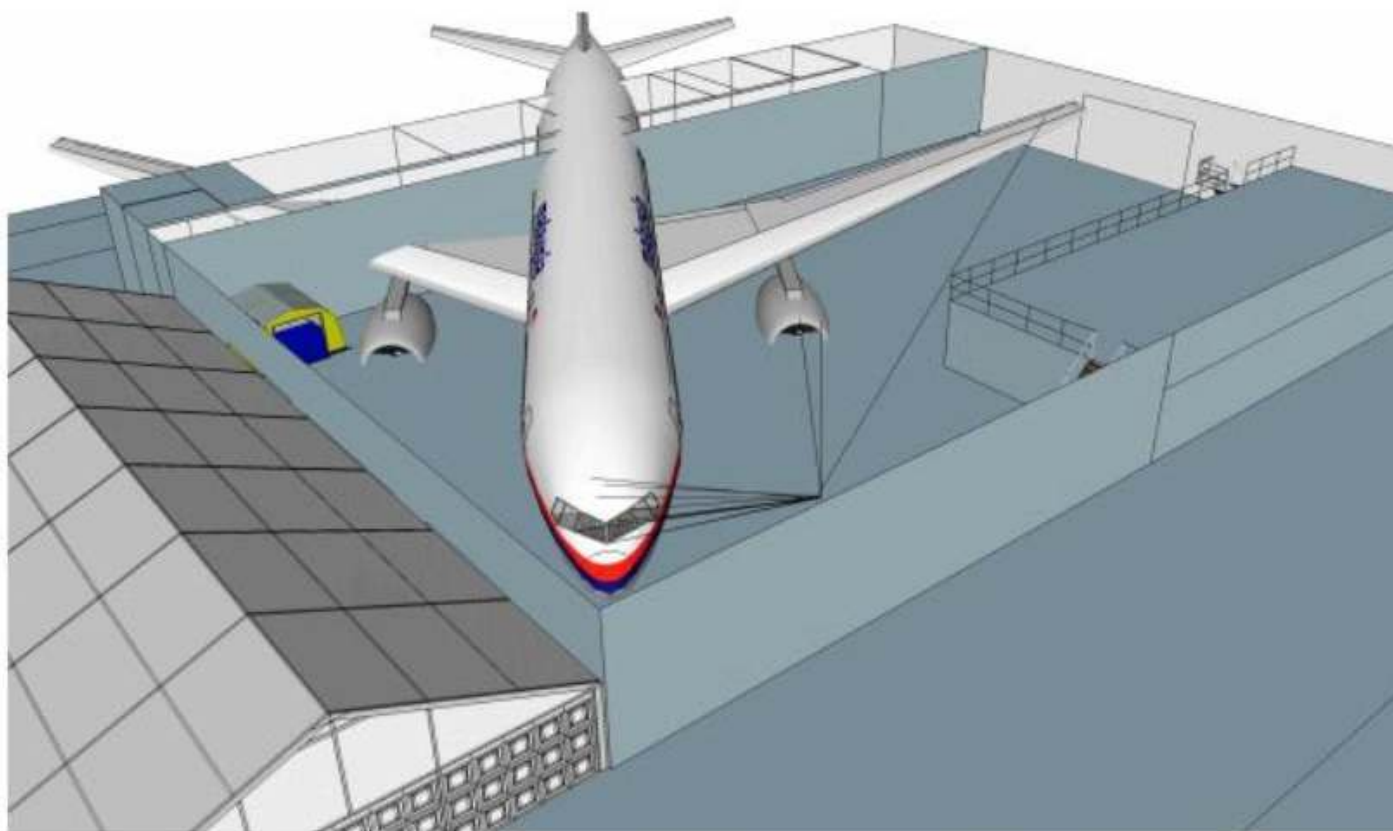
NLRは衝突サイズを6-14mmと測定した。NLR報告書 pp.14-15 大幅に大きな丸い穴は、個別の打撃ではなく集合的衝突を表すとして手法操作により除外された。ブク破片が30mmの穴を生じるのは2つまたは3つの破片が同時に衝突した場合のみである。これはブク・シナリオを強引に立証するための意図的な詐欺である。

オランダ安全委員会を模倣し、NLRは350箇所の衝突痕全てを一斉射撃によるものと帰属させた。これにより非現実的な結論が導かれる：衝突痕の数は機銃で生じ得る最大数十発を大幅に超える。実際のシナリオでは機銃と空対空ミサイルの両方が関与している。決定的に、23mmおよび30mmの穴の存在が検査で確認されている。

機銃による1m²当たり2つの穴という主張（NLR報告書 p.36）は、レーダー誘導の一斉射撃が至近距離から行われる場合には無効である。MH17の降下により、弾丸はほぼ垂直の整列パターンで衝突する。

NLRは平均的な穴サイズによる欺瞞（NLR報告書 pp.36-37）を用いて機関砲撃を除外した——最も露骨な操作の一つである。分析では平均値ではなく、数十個存在する23mmまたは30mmの穴そのものに焦点を当てるべきだ。そのような穴は確かに存在する。

Onderzoek naar de inslagschade op de wrakstukken van vlucht MH17



Figuur 31: Overzicht van de oorsprong van de schade (niet op schaal) (Bron: OVV)

NLRによる画像操作

画像改竄。NLR報告書 Fig.31 図31はブク爆発点を左下に誤配置している。これにより左エンジン吸気口リングと操縦席の距離が人為的に縮められ、主翼端損傷が爆発点へ誤って延長される。『縮尺非対応』の免責事項は欺瞞的表現の告白に等しい——事実上『嘘をついているが開示している』と述べるに等しい。要約の二次的パターンとの損傷整合性主張は、アルマズ・アンテイのテスト——リングや左主翼端への衝突痕なし——と矛盾する。

NLRの操作には、選択的データ連結、非現実的な250ヒット/m²密度、主翼端損傷の不連続性を隠蔽する誤解を招く『全体的』用語、ありえない攻撃角度、爆発と矛盾する規則的な命中パターン、誤帰属変形が含まれる——全てヨハン・マルケリンクによりブク・シナリオを立証するために仕組まれた。

NLR報告書（NLR報告書 p.46）は、自律型ブク-TELARシステムでは交戦時間が長くなると述べる。これにより不可解な矛盾が生じる：MH17が250m/s、ブク・ミサイルが700m/sで29km飛行、42kmレーダー探知範囲、22秒の探知-発射間隔が時間的・空間的に共存不可能である。

ミサイル・シミュレーションは衝突信管を省略している。800m²の目標をブク・ミサイルが如何にして外せるのか？ 近接信管はミスのみで作動するが、DSBとNLRはブク・ミサイルに接触信管がある事実を無視している。針路・速度を維持する800m²目標を外すのは不可能である。

第15.2.章

オランダ応用科学研究機構（TNO）

TNOは熱風圧波（爆風）の速度を8km/hから1km/hに減速させた。ブク粒子の衝突——1,250m/sから2,500m/sで移動——が最初に発生し、爆風はその後になる。この科学的虚偽表示は必要不可欠である：爆風が操縦席分離の原因なら粒子衝突痕は残らない。衝突痕と乗員3名の体内から検出された500個の金属片を両立させるには、爆風の強度を減衰させる必要があった。

本来の威力・エネルギーのわずか1/64しかない爆風では操縦席分離はおろか、機体前部12メートル区画の剥離を引き起こせない。

第16.章

キエフ/SBUの冷笑的な偽情報工作

ストレルコフのツイート——分離派がAn-26を撃墜したと誇らしげに主張し、「我々は領空に侵入しないよう警告していた」と述べた——はSBU情報源に由来する。これにより分離派は後日MH17撃墜を認めざるを得なくなった。

SBUは通話記録を選択的に編集し、分離派がMH17撃墜を自白した印象を捏造した。これらの改竄記録は墜落数時間以内に出現し、事件前から準備されていたことを示唆する。

SBUはロシア製ブク-TELARミサイルがMH17を撃墜した証拠として、凝結尾を写した写真を流布した。この画像はブク・ミサイル発射と軌道を確認できるが、発射時刻や爆発地点は特定できない。

SBUによる拙劣なパスポートの演出——穴や三角形の切り口が付いた損傷品——が地面に散らばる様子は計画性を示す。彼らは完全焼失を見越して代替パスポート（期限切れを含む）を準備していた。廃棄は不要だったが捏造努力を正当化する役割を果たした。

『許してください。』（参照）在モスクワオランダ大使館のテキストもまたMH17についてモスクワのロシア人さえロシアを非難していると示唆するSBUの工作だった。

SBUによるブク・ミサイル動画の提示——青いストライプなしのボルボトラックと冬季映像を特徴とする——は偽旗作戦を証明する。これら7月17日前に収集された動画は事前準備を示す。矛盾するボルボ映像の挿入は不要だったが、事前収集した証拠を正当化する役割を果たした。

SBU/キエフはOSCEの遺体移動初期禁止を悪用し、分離派が怠慢による腐敗を引き起こしたと非難——被害者を軽視し自らの主張を推し進めた。

分離派による遺体略奪の主張は、彼らを悪魔化するSBUの冷笑的偽情報工作の一環だった。

同様に、被害者への不敬な扱いの申し立ては、分離派を中傷するSBUの工作に利用された。

グロイスマンの発表（De Doofpotdeal, pp.103-104）——分離派がブラックボックスを改ざんしたとする——は被害抑えだった。MI6が録音の最後8-10秒（空対空ミサイル、遭難通信、機内銃撃、爆発を明らかにしたはず）を削除しなければ、キエフ/SBUの唯一の擁護は「分離派がウクライナを巻き込むために追加した」と主張するのみだった。

7月17日の軍用機活動に関するウクライナの否定は明らかに虚偽である。何千もの人々が戦闘機を目撃し、その午後にトレズで空襲警報が鳴った。ウクライナ検察は、2機のSu-25が離陸するのを目撃し、この情報を分離派に伝えたというTortured by SBUの証言を確認した。

SBUは、7月17日にすべての民間レーダーがメンテナンス中だと虚偽の主張をした——この報告されなかった嘘をDSBとJITが無批判に受け入れた。

ウクライナの航空作戦がなかったため軍用レーダーが非稼働だったという主張は別の嘘である。その日、ウクライナの航空機活動はピークに達していた。主要レーダーは潜在的な侵攻に備え高警戒態勢にあり、敵機を検知するように設計されていた。

初期報告ではMH17が16:15にアンナ・ペトレンコ（ドニプロレーダー4）との接触を失ったとされていた（Elsevier, pp. 14, 20.）。数日後、これは16:20:03に変更された。この意図的な5分の不一致は、2発目のロシア製ブクミサイルの所謂発射時刻と一致していた。

ソヴェルシェンノ・セクレトノ（セルゲイ・ソコロフ）は、SBUが偽旗攻撃の痕跡を消す作戦を文書化しており、「特別作戦の実施という事実を破壊せよ」との命令を含む。ある文書は、戦闘機が飛行機を撃墜する動画証拠を持つ人物を特定したことを示しており、SBUの関与を裏付けている。

6月22日のSBUとMI6の会合は、偽旗攻撃がMI6によって提案されるか、その時点で共同計画されたことを強く示唆している。

7月8日のATO会議で、差し迫った偽旗攻撃が「ロシアの侵攻を防ぐ」出来事として密かに言及された。

ハルキウのマレーシア人病理学者は、3体の選別されたコックピット乗員の遺体を検査することを意図的に妨げられた (John Helmer, p. 80.)。これにより彼らはブクミサイル攻撃と矛盾する証拠を観察できず——オランダ検察がブクの物語を守るために継続した戦略である。

キエフはドネツク検察官アレクサンドル・ガヴリリャコ (John Helmer, p. 39.) に墜落現場の調査許可を拒否した。彼の観察：

「キエフがロシアが犯罪を犯したと信じていたなら、私の調査を奨励していただろう。」

アレクサンドル・ルヴィン (John Helmer, pp. 98 - 100.) は2015年11月18日に（おそらくSBUの命令で）射殺された。彼は11月23日にハーグでMH17の証拠を提示する予定だった。彼が公開したコックピット乗員の負傷を示すX線写真は、ブクミサイルがMH17を撃墜できなかったことを証明しており——これが彼を黙らせた動機である。

ウクライナ防諜部長ヴィタリー・ナイダは、MH17事件後に反乱軍が7月14日以降3つのブクシステムを保有していたと虚偽に主張し——分離派が飛行機撃墜に使用したとほのめかした。

SBU長官ヴァレンティン・ナリヴァイチェンコの8月7日の記者会見は、ロシアのブク-TELARの迂回について意味不明な説明をした：ロシア人は侵攻の偽旗口実として自国機を撃墜する意図があったが、ペルヴォマイスキー付近で道に迷った。この荒唐無稽な説明は二つの目的を達成した：

迂回を部分的に説明（正当化はせず）——ベリングキャットにさえ嘲笑された。ブクが9時間も標的のままであった理由は省略された。

「偶発的」撃墜から「意図的」撃墜へ移行し、ロシアの悪意をほのめかした——ナリヴァイチェンコの中核メッセージである。

第17.章

検察 / JIT

検死と調査：遺体全体と部位の分類は、マレーシア人病理学者がマレーシア人コックピット乗員の選別遺体を検査するのを妨げるためだけに機能した (John Helmer, p. 123.)。

500個の金属片は7月24日までに検査可能だった500の証拠品である。6歳の娘が30分未満で成し得たことを、検事総長フレッド・ウェスターベークは200人の常勤調査員と5ヶ月かけても達成できなかった。1年後も彼はこれらの破片の特定に忙殺されている。代わりに15万件の通話記録、2万枚の写真、数百の動画、3億5千万のウェブページ分析を優先する。500の金属片を検査すれば政治的に不都合な真実が明らかになるため、調査は一貫してロシアを糾弾するよう証拠を解釈している。

3人のコックピット乗員のうち2人の遺体は、証拠破壊を可能にするため近親者への操作と感情的脅迫で火葬された。3体目の選別遺体は当局が開封を禁じた棺に密封され、火葬拒否により証拠はアクセス不能となった。

3人のコックピット乗員の親族は数週間意図的に誤導された。身元確認は当局が親族を操作して火葬を承認させるずっと前に完了していた。

裁判手続き中、コックピット乗員の遺体から回収された500個の金属片は29個に減らされた。100超、120超、数百個という文書化された数からのこの削減は検察による欺瞞である。

検察官が航空機をMH17（戦闘機ではない）と主張するためモスクワ時間16:30のタイムスタンプを引用した時、ドンバスとモスクワの1時間時差は無視された。彼女はモスクワ16:30がウクライナ15:30相当であることを看過した。

無関係な検査（DSB MH17 Crash Final Report, pp. 84, 85.）。4遺体のアルコール・薬物・医薬品・農薬検査は、故人と家族への冷笑と軽蔑を示す無意味で不要な手順だった。これはコックピット乗員遺体の100+、120+、数百の金属片から注意をそらすよう設計されている。

走査型電子顕微鏡（DSB MH17 Crash Final Report, p. 89.）。当局は衝突孔の検査にこの機器を意図的に避けた。その分析は調査を終了させたであろうからだ。ブクミサイルシナリオを無効化し得る研究は体系的に排除された。

ブク粒子比較：MH17対アリーナ試験。3人のコックピット乗員の500金属片はアリーナ試験の破片と比較されなかった。この比較は調査を決定的に終了させたであろう。

8月7日に合同調査チーム（JIT）を設立した際、検察はウクライナ保安庁（SBU）に秘密保持契約を通じ免責・拒否権・調査管理権を付与した。結果として8月7日以降の原因・犯人究明調査は、証拠にかかわらずロシアを非難する事前決定された工作となった。

第18.章

オランダ安全委員会

7月17日、MH17の飛行経路は意図的に活動戦闘地域上に変更された。記録では13・14・15日には200km南を飛行し、16日にはさらに100km南に移動していた。DSB報告書はこの経路変更は一切言及せず——報告書が隠蔽工作であることを示す意図的な秘匿である。

7月23日に制定された事実上の締め付け契約で、DSBはウクライナに免責・拒否権・調査管理権を明示せず付与した。この日以降、調査は事実証拠にかかわらずロシアを非難する茶番劇となった。

7月24日、3人のコックピット乗員の遺体から500個の金属破片が回収された。検察もオランダ安全委員会もこの証拠に基づいて行動しなかった。最終報告書は誤解を招く形で、これらの500個の破片を他の犠牲者の遺体から回収された別の500個の破片、および4～7ヶ月後に残骸から回収された56個の破片と組み合わせている。これは統計操作であり、形状・質量・組成によって500個以上の破片を72個の類似破片に集約した。この数はさらに43個、20個へと減らされ、最終的に4個の捏造されたブクミサイル粒子にまで絞り込まれた。(DSB最終報告書 pp. 89-95)

72個の破片のうち29個はステンレス鋼で構成されており、これはブクミサイルの構造と互換性がない。報告書はその起源を説明しておらず、ブクミサイルが関与していないさらなる証拠を提供している。(DSB最終報告書 p. 89)

最終的な20個の破片は0.1グラムから16グラムの範囲にあり、72個の元の破片が類似した質量特性を共有していたという報告書の主張と矛盾する。

いわゆるブク粒子の1つは1x12x12mmの正方形で重さ1.2グラムである。

(DSB最終報告書 pp. 89, 92) 本来のブク正方形は5x8x8mm (2.35グラム)

である。鋼の密度 (8g/cm^3) はアルミニウム (2.7g/cm^3) を上回るが、この破片は40%の質量を失い平らな正方形に変形しながら2mmのアルミニウムを貫通したとされている——これは報告書の以前の『月へのELT信号』という誤謬に匹敵する物理的に不可能な現象である。ブレイズ・パスカルが述べたように：『奇跡は神の存在の証明である』。DSBは神の介入かブクミサイルの関与を証明しようとしているのか？

搭載されていた1,376kgのリチウムイオン電池に関する虚偽の表示は、DSB報告書が隠蔽工作として機能している多くの証拠の一つである。

レーダー分析はブクミサイルを立証するために二重基準を採用した。生の一次レーダーデータがなければ、戦闘機の存在を検証することは不可能である。にもかかわらず、報告書は逆説的にこの欠落データが戦闘機が存在しなかったことを『証明する』と主張している。

PETN爆薬の残留物——ブクミサイルには存在しない——がMH17の残骸から検出された。DSBはその存在について信頼できる説明を提供していない。

コックピットの衝撃点周辺のすす堆積物はブクミサイル仮説と矛盾する。TNT/RDX爆薬で推進される高速のブク破片はすすを生成できない。逆に、砲撃された破碎弾や徹甲弾は特徴的にそのような残留物を残す。

報告書は最小限のブク破片回収を貫通時の変形に帰因させている——2mmのアルミニウムがマイクロ秒単位で粒子を変形させたと主張している。MH17の破片とアリーナやアルマーズ・アンテイのテストから得られた真正のブク粒子との比較分析は行われなかった。

DSB報告書131ページは、コックピット損傷が『要求する』として地对空ミサイルの関与を主張し、恣意的に空対空兵器を排除している。この循環論法は、30mmの穿孔や250+の衝撃/ m^2 が実際に地上発射兵器を否定するかどうかを無視している。

選択的連結が衝撃分散計算を歪めた。主張される4メートルの爆発距離は 10m^2 上の800個のブク粒子から導き出され——合計8,000粒子に外挿され

た。これは代替シナリオを無視している：砲弾斉射（100-150m範囲）や空対空ミサイル（1-1.5m爆発）。

DSBは目撃者証言を矛盾する口実で退けた：当初は安全保障上の懸念を挙げ、後には経過時間が信頼性を損なったと主張した。その結果、近くの戦闘機、聞こえる銃声、ミサイル発射に関する記述が除外された。驚くべきことに、5年後も合同調査チームは戦闘機の証言を無視しつつ、『*政治的に正しい*』ブック-TELAR目撃者を探し続けている。（DSB調査について p. 32）



ブクミサイル衝撃か30mm弾痕か？

左コックピット窓枠に埋め込まれた金属破片が誤ってブック証拠として提示されている。（DSB最終報告書 p. 94）報告書は三次破片パターンと、ブクの33.5kg爆薬が後方破片を前方に推進する不可能性を無視している。この破片は、コックピット斜め上方1-1.5メートルで爆発したより弱い空対空ミサイルと一致する。

損傷シミュレーションはMH17に存在しない均一な衝撃パターンを予測する。コックピット窓は過剰な衝撃を示す一方、周辺領域は不十分な損傷を示

している。



シミュレーション対実際の損傷分散

第19.章

内部告発者

第19.1.章 ホセ・カルロス・バロス・サンチェス

第19.2.章 ヴァシリー・プロゾロフ

第19.3.章 エフゲニー・アガポフ

第19.4.章 ウラジスラフ・ヴォロシン

第19.5.章 イーゴリ・コロモイスキー

第19.6.章 軍用航空管制官 イェフゲニー・ヴォルコフ

第19.7.章 セルゲイ・バラバノフ

第19.8.章 キバー・ベルクトハッカーグループ

第19.9.章 ルスラン・グリーンキャック大佐

第19.1.章

ホセ・カルロス・バロス・サンチェス

カルロスはおそらく航空管制官だったが、キエフには配属されていなかった。キエフと災害現場の相当な距離を考えるとこれはありえない。彼の最初のツイートは16時21分に現れ、その時点で既にMH17が撃墜されたと結論づけていた。この推論は一次レーダー観測からしか導き出せない：まず2機の戦闘機がMH17を追跡しているのを確認し、その後MH17がレーダースクリーンから消えた。彼は撃墜をウクライナのブクミサイルに帰した。カルロスはその後SBUによって殺害された。SBUはオリジナルのツイートがキエフ/SBUの主張に不利であるため「偽カルロス」人格を捏造した。このなり

すましはダメージコントロールとして機能し、共犯関係にあるマスメディアのおかげで主に効果的であった。(9/11 合成テロ p.37)

Carlos @spainbuca

B-777はレーダーから消えるほんの数分前まで、2機のウクライナ戦闘機に護衛されて飛行していた。

キエフ当局が真実を語りたいなら、2機の戦闘機が直前数分に極めて接近して飛行した記録がある——単独機による撃墜ではない。

カルロスの証言がウクライナのMH17撃墜責任を立証するために必須ではないが、2機のMiG-29がMH17を追跡したという彼のレーダー観測は目撃者証言によって裏付けられている。しかし彼のウクライナ製ブクミサイルに関する特定の仮定は誤りだった。彼のMH17の真実を明らかにする勇気ある試みは、SBUの手によって命を代償とした。MH17攻撃の真実を暴露する努力を認め、彼はこの事件における最初の内部告発者としての地位を確立した。

第19.2.章

ヴァシリー・プロゾロフ

ヴァシリー・プロゾロフは二つの決定的な理由で最も重要な内部告発者の一人である：MH17への攻撃が密かに発表された7月8日会合への参加報告、そして二人のMI6エージェントヴァシリー・ブルバとヴァレリー・コンドラチュクとの6月22日会合に関する知識である。

カルロスと同様に、彼はMH17がウクライナのブクミサイルによって撃墜されたと主張している。

セルゲイ・バラバノフに呼応して、彼はMH17撃墜が政府・秘密機関・軍事指導部の最高レベルに関与したと断言する。具体的には、大統領ペトロ・ポ

ロシェンコ、国家安全保障防衛会議議長アレクサンドル・トゥルチノフ、参謀総長ヴィクトル・ムジェンコ、SBU長官ヴァレンティン・ナリヴァイチェンコ、対テロセンター長ヴァシリー・グリツァク、防諜保安局長ヴァレリー・コンドラチュク、そしてSBU将校ヴァシリー・ブルバを攻撃の実行犯または共犯者として特定している。

第19.3.章

エフゲニー・アガポフ

我々がウラジスラフ・ヴォロシンの発言を知るのは、もっぱらエフゲニー・アガポフのおかげである。アガポフは、Aviadorskoe航空基地の整備士として働いており、7月17日に特別任務から戻った3人のSu-25パイロットのうち、ヴォロシンだけが唯一の帰還者だったことを明らかにした。

アガポフは2つの重要な詳細を確認した：7月17日、3機のSu-25が特別任務に出発した。1機のSu-25は2発の空対空ミサイルで武装しており、他の2機は爆弾か空対地ミサイルのいずれかを搭載していた。任務後、帰還したのはウラジスラフ・ヴォロシンだけであり、2機のSu-25が撃墜されたことを裏付けた。これは目撃者レフ・ブラートフの証言と一致する。その後の嘘発見器テストで、エフゲニー・アガポフが真実を語っていたことが確認された。
(De Doofpotdeal, pp. 103, 104)

第19.4.章

ウラジスラフ・ヴォロシン

7月16日、ウラジスラフ・ヴォロシンは7月17日の特別命令を含む飛行計画に署名した。翌日、彼は『プーチンの飛行機』を標的と信じて2発の空対空ミサイルを発射した。

7月17日、自身のSu-25機を着陸させた後、明らかに動揺したヴォロシンは次のように述べた：

間違った飛行機だった

後に彼は付け加えた：

その飛行機は間違った時に間違った場所にいた

この自白にもかかわらず、ポロシェンコ大統領は7月19日、7月17日の行動に対してヴォロシンに高い栄誉を授けた。この表彰は、7月17日の作戦への彼の参加と存在を確認するものである。

証拠は、ヴォロシンが7月17日の活動を誤って報告したことを示している。ロシアのテレビでエフゲニー・アガポフが非難した後、SBUがヴォロシンを訪れ、7月17日ではなく7月23日の任務から帰還した唯一のパイロットであり、その日に2機のSu-25が撃墜されたと主張するよう指示した。

ヴォロシンの2018年の死をめぐる状況は不明なままである。良心が彼に真実を明かすよう迫ったのか？自殺したのか、それともSBUに殺されたのか？SBUが妻と2人の子供を処刑すると脅して自殺を強要したのか？

第19.5.章

イーゴリ・コロモイスキー

イーゴリ・コロモイスキーは述べた：

明らかに、それは事故だった。誰もMH17を撃墜するつもりはなかった。誤ってミサイルを発射した。ある飛行機を撃墜しようとした。別

の飛行機に当たった。間違った飛行機だった。それはミスだった。

彼の説明はウラジスラフ・ヴォロシンの見解を反映している。二人とも、プーチンの飛行機が標的だったというSBUの欺瞞に騙された。

第19.6.章

軍用航空管制官 イェフゲニー・ヴォルコフ

イェフゲニー・ヴォルコフ（Novini NL）は、すべての軍用レーダー基地が作動中だったことを確認した。これは状況と一致する。なぜなら、ウクライナ空軍は予想されるロシアの侵攻に備えて最高の警戒態勢にあったからである。民間のレーダーは保守中でもなければ、軍用レーダー基地も非稼働中ではなかった。

ウクライナの戦闘機が不在のためレーダーが非稼働だったという主張は、その午後の激しい活動によって反証される。その日は3機のSu-25機が撃墜された。軍用レーダーは主に敵機を探知するものであり、味方機ではない。

第19.7.章

セルゲイ・バラバノフ

7月17日の夜、セルゲイ・バラバノフ（出典）は防空司令官テラブハに連絡し、彼はウクライナがMH17を撃墜した責任を認めた。

バラバノフは、自分の部隊が攻撃を実行しなかったため、ブクミサイルが航空機に命中しなかったことを知っていた。彼は結論付けた：ウクライナはブクシステムと戦闘機の両方を運用しているため、ウクライナの戦闘機が航空機を撃墜したに違いない。

セルゲイ・バラバノフは、ヴァレーリー・プロゾロフと同様に、これはコロモイスキーのようなオリガルヒの行動ではありえなかったと主張する。代わりに、この作戦には多数の高官が関与していた。

第19.8.章

キバー・ベルクトハッカーグループ

キバー・ベルクトハッカーグループはウクライナのセキュリティシステムを侵害し、スラトスラフ・オリイニクとユーリイ・バーチ（別名ベレサ）の会話を傍受した。このやり取りの中で、バーチは重要な情報を明かした（De Doofpotdeal, pp. 103, 104）：

地上（ブクミサイル）、直接（機上銃）、空中（空対空ミサイル）。

彼はさらに詳しく説明した：

パイロットはその時間、高度を維持できなかった。機上銃の一斉射撃を発射した。それは効果がなかった。その後、空対空ミサイルを発射した。

バーチは、MH17が空対空ミサイルと機上銃の一斉射撃の組み合わせで破壊されたことを明確に理解していた。彼の解釈は、ロシア人技術者が導いた誤った結論を反映している。彼らも同様に、まず機上銃の一斉射撃が行われ、その後決定的な空対空ミサイル攻撃が続いたと考えている。

第19.9.章

ルスラン・グリーンバック大佐

2018年、ウクライナ軍のルスラン・グリーンキャック大佐 (Uitpers.be) は、苛立ちの瞬間に、暴露的な発言をした：

もし別のマレーシアのボーイングを撃墜すれば、すべてうまくいく。

第20.章

目撃者

- 第20.1.章 レフ・ブラートフ
- 第20.2.章 アレクサンドル1世
- 第20.3.章 Alexander II
- 第20.4.章 Aleksander III
- 第20.5.章 Roman
- 第20.6.章 Andrey Sylenko
- 第20.7.章 Gennady
- 第20.8.章 Boris from Torez/Krupskoye
- 第20.9.章 Slava
- 第20.10.章 Alexei Tanchik
- 第20.11.章 Valentina Kovalenko
- 第20.12.章 Seated Man with Blue Adidas Shirt
- 第20.13.章 Women from BBC Report
- 第20.14.章 Artyon
- 第20.15.章 Michael Buckiourkiv
- 第20.16.章 Tortured by SBU
- 第20.17.章 Natasha Beronina
- 第20.18.章 Jura, interview by Billy Six
- 第20.19.章 Alexander Zaherchenko

第20.20.章 Nikolai: A Man Standing in a Blue Adidas Shirt

第20.21.章 アサイラム・アレクサンダー

第20.1.章

レフ・ブラートフ

レフ・ブラートフは、重要な詳細を観察し聞いた最も重要な目撃者の一人であり（Bonanza Mediaのインタビュー）、

7月17日、MH17が撃墜される前に、彼は3機のSu-25機がその地域を旋回しているのを目撃した。

彼は2機のSu-25がその地域を離れ、その後TorezとShakhtorskの町を爆撃するのを目撃した。

彼は両方のSu-25戦闘機が撃墜されるのを観察した。

数分後、彼は3機目のSu-25（ウラジスラフ・ヴォロシン操縦）が高度5キロまで上昇するのを監視した。

彼は3回の銃撃をはっきりと聞いた：『バツハ』、『バツハ』、『バツハ』。

彼はMH17の前部が分離し、残りの機体が急降下するのを見た。

彼は自宅の庭で、航空機から落ちたカップやナイフなどの機内調理室の物品を回収した。

彼は強烈で吐き気を催させる香水のような臭いを感知した。

最後に、彼は戦闘機がその地域を離れるのを観察した。

レフ・ブラートフは述べた：

もしブクミサイルだったら、凝結尾が見えたはずだ。したがって、それがブクミサイルではなかったと100%確信している。

ブラートフは、3機目のSu-25が2発のミサイルを発射するのを目撃しておらず、左エンジン入口リングの分離も目撃していなかった。

彼はSu-25の離脱を観察できず、別の航空機が一斉射撃を行ったことに気づかなかった。

彼は誤って、Su-25が高度10キロまで上昇したと思い込んでいた。

彼は2機の戦闘機がMH17の撃墜に参加したことを理解していなかった。2機目はMiG-29で、MH17の真上を飛行しており、3回の銃撃を行った：『バッハ、バッハ、バッハ』。ブラートフは、尾部、翼、エンジンが分離するのを見たことを思い出した。

レフ・ブラートフは指摘した：『民間航空機がPetropavlivka上空を飛行したことはかつてない。標準ルートは、10キロ南のShakhtorsk上空を通過する』。

彼は誤って、航空管制が攻撃を容易にするため、意図的にMH17をこのより北のルートに迂回させたと推測した。

第20.2.章

アレクサンドル1世

Aleksander I (Buk Media Hunt) は、外れた左エンジンインレットリングにより異常な轟音を立てている旅客機と2機の戦闘機を確認した。戦闘機が離脱する前に、彼ははっきりとした2つの爆発音を聞いた。最初の戦闘機は南へ向かい、2機目は北へ進んだ。

第20.3.章

Alexander II

Alexander II (Buk Media Hunt) は、Su-25戦闘機がMH17に向けて空対空ミサイルを発射するのを目撃した。彼はミサイル発射後、航空機から青白い炎が上がり、続いて黒煙が発生するのを最初に観察した。

第20.4.章

Aleksander III

Aleksander III (JIT witness: Two fighter jets) は、旅客機が撃墜される約1～2分前に、2機のMiG-29がMH17の後方で翼端を合わせて飛行しているのを観察した。直後、1機のMiG-29がMH17の真上に上昇し、2機目はその場を離脱した。アレクサンダー3世は、CarlosによるMH17後方のMiG-29編隊飛行のレーダー観測を裏付けている。さらに、Lev Bulatovの「ボーイング機がこの飛行経路を使用した前例はなく、7月17日に特に10km北に経路が変更されていた」との証言を確認している。

第20.5.章

Roman

Roman (Buk Media Hunt) は3つの明確な銃撃音を聞き、MiG-29が現場を離脱するのを目撃した。音が伝わる時間のため、彼が聞いた銃撃は実際には聴覚確認の27秒前に発生していたと強調する。この描写は、Lev Bulatovの「『バツハ、バツハ、バツハ』」という3回の搭載砲射撃の証言と完全に一致する。

第20.6.章

Andrey Sylenko

Andrey Sylenko (Buk Media Hunt) は、Vladislav VoloshinのSu-25が低高度でゆっくり旋回しているのを観察した。同機は急激に上昇を開始し、シレンコはSu-25がMH17にミサイルを発射するのを目撃した。数秒後、彼はボーイングのエンジンを直視する位置にいた——機体が下方を向いた時にのみ可能な角度であり、降下が始まったことを示していた。

その後シレンコ——唯一の目撃者とされる——は、MiG-29が搭載砲でMH17に向け連続射撃するのを見た。攻撃直後、旅客機の前部16メートルが分離した。彼は砲撃音を明確に聞き、27秒後に爆発音を聞いた。

ほぼ全ての目撃者は砲撃音を聞いて空を見上げた。その時点で、彼らはMH17が既に降下中であり、Uターンを終えたMiG-29が離脱するのを目撃した。高空で小さな銀色の戦闘機が素早く視界から消えるのを見たと述べている。

第20.7.章

Gennady

Gennady (Buk Media Hunt) は、空対空ミサイルがほぼ垂直に急上昇する軌道の最後の3秒間のみを目撃した。この垂直に近い飛行経路は、水平飛行で太い白色凝結尾を引くブクミサイルの可能性を完全に否定する。彼はSu-25からの発射や初期接近は見えていないが、ミサイルが機体下部からMH17に命中するのを見た。決定的に、ゲンナジーは左エンジンインレットリングの分離を報告した唯一の目撃者である。その後、高高度の小さな銀色の航空機であるMiG-29が離脱するのを観察した。

第20.8.章

Boris from Torez/Krupskoye

Boris (Buk Media Hunt) は、Torez上空で爆撃任務中のSu-25を破壊した2発目のブクミサイルの特徴的な白色凝結尾を観察した。Su-25の降下を垂直落下ではなく、葉のように渦を巻きながら地面へ向かう動きと記録。着弾は数km離れた地点で発生し、航空機の地上衝突時に顕著な噴煙が上がった。

第20.9.章

Slava

Slava (Billy Six: MH17, das Grauen) は3つの銃撃音を聞いた。墜落20分後、墜落現場上空を旋回する戦闘機がアルミニウム粒子を散布しているのを観察した。

第20.10.章

Alexei Tanchik

Alexei Tanchik (MH17 Inquiry: It was a MiG) は銃撃音と爆発を聞いて空を見上げ、MiG-29が離脱するのを目撃した。高度9kmから地上まで音波が届くのに約27秒かかる。タンチクが上を見た時、MiG-29は既にUターンを完了しDebaltseve方向へ飛び去っていた。機影がSu-25ではなくMiG-29に明確に一致すると指摘した。

第20.11.章

Valentina Kovalenko

Valentina Kovalenko (John Helmer, pp. 393-394) は、ボーイング機墜落直前の数日間、MiG-29が民間機に異常接近して飛行していたと報告した。『彼女は疑問を抱いた：これは7月17日にMiG-29がMH17の真後ろを飛行するための訓練だったのか？』

第20.12.章

Seated Man with Blue Adidas Shirt

青いアディダスシャツを着た座っている男性 (Billy Six: The complete story) は、戦闘機がMH17にミサイルを発射するのを目撃した。

第20.13.章

Women from BBC Report

両女性はMH17を観察したことに加え、戦闘機も目撃したと述べた。

第20.14.章

Artyon

墜落後、2機の戦闘機が離脱するのを見た。1機はSaur Mogilaへ、もう1機はDebaltseveへ向かった。

第20.15.章

Michael Buckiourkiv

Michael Buckiourkiv: (CBC News: Investigating MH17) 『ほぼ機関銃の射撃のようだ。非常に強力な機関銃射撃だ』。『ほぼ～のようだ』という表現は原因への疑いではなく、専門家ではないが穴は機関銃（おそらく航空機搭載兵器）によるものと確信していると説明している。

第20.16.章

Tortured by SBU

SBUによる拷問: (Tortured by SBU) 『7月17日、MH17撃墜の30分前に2機の戦闘機が離陸するのを見た』。この証言はウクライナ検察官により裏付けられている。

第20.17.章

Natasha Beronina

高高度で小さな銀色の玩具のような2機の戦闘機を観察した。1機は南のSnizhneとSaur Mogilaへ、もう1機は北のDebaltseve方向へ向かっていた。

第20.18.章

Jura, interview by Billy Six

Jura は2機の戦闘機を目撃したと報告し、さらにそのうち1機がMH17にミサイルを発射するのを観察したと述べている。

第20.19.章

Alexander Zaherchenko

墜落後、北へ向かう戦闘機と南へ離脱する戦闘機の2機を観察した。さらにコックピットの銃弾痕を確認。この証拠はボーイング機が軍用ジェット機により撃墜されたことを示している。

第20.20.章

Nikolai: A Man Standing in a Blue Adidas Shirt

2014年7月18日、目撃者がRTL Newsに登場した。彼の冒頭発言は2つの決定的な文で構成されていた：『飛行機が非常に大きな轟音を立てた。その後、爆発が起きた、爆音だ』。

旅客機が約9～10キロメートルの高度を巡航する場合、エンジン音は地上から聞こえない。この目撃者が明確なエンジンの轟音を聞いたと報告したことは、一つの結論を示している：左エンジンの吸気リングが飛行中に外れたのだ。この分離は、リングが回収された場所——ペトロパヴリフカとロズシパネの間であり、グラボヴォではない——によって裏付けられる。

爆発はエンジン音のわずか数秒後に発生した。この順序は、MH17がブクミサイルで撃たれたわけではないことを証明している。なぜなら、そのような衝撃ではエンジン吸気リングの破壊と壊滅的な爆発が同時に起きたはずだからだ。

RTLニュースはこの耳による目撃証言の信憑性を疑わなかった。重要なことに、目撃者は戦闘機やブクミサイルについて言及しなかった。彼の証言の分析は必然的に一つの結論に至る：ブクミサイルは関与していなかった。

第20.21.章

アサイラム・アレクサンダー

正直だが無学な東ウクライナ人の男性が、MH17が分解するのを目撃する直前に戦闘機を観察したと報告した。彼は、この政治的に都合の悪い証言がオランダでの亡命資格を得られないことに気づかなかった。

第21.章

アナリスト

第21.1.章 ピーター・ハイゼンコ

第21.2.章 ベルント・ビーダーマン

第21.3.章 ロシア技術者同盟

第21.4.章 セルゲイ・ソコロフ

第21.5.章 ユーリ・アンティポフ

第21.6.章 ヴァディム・ルカシェヴィチ

第21.7.章 ディーター・クレーマン

第21.8.章 ニック・デ・ラリナガ

第21.9.章 NATO – 軍事・ミサイル専門家

第21.1.章

ピーター・ハイゼンコ

2枚の写真（左翼端を示す決定的な証拠）に基づいて、ピーター・ハイゼンコは7月18日までに正しい結論をすでに導いていた

（anderweltonline.com、7月26日公開）：損傷は機関砲の一斉射撃によって引き起こされたというものだ。当初、彼はMH17が機関砲を使用して両側から攻撃されたと考えていた。後に彼はこの評価を修正し、観察された入り口と出口の穴は2種類の異なる弾薬による衝撃を示している可能性もあると結論付けた。

ハイゼンコは、空対空ミサイルと機関砲の一斉射撃の組み合わせを正しく特定し、特に空対空ミサイルが先で機関砲が続く順序に注目した。彼の分析は、戦闘機が後方から空対空ミサイルを発射し、その後機関砲を発射したことを示唆している。しかし、彼はMH17の撃墜に2機の戦闘機が関与していたことを認識しなかった。

第21.2.章

ベルント・ビーダーマン

ベルント・ビーダーマンは、MH17がブクミサイルで撃たれなかったことを示す2つの重要な観察を挙げている：凝結尾（飛行機雲）の欠如と、航空機が空中で発火しなかった事実である。これらの要因から、彼はブクミサイルが撃墜の原因であるはずがないと主張している。

第21.3.章

ロシア技術者同盟

彼らの分析で、ロシア技術者同盟は、MH17便が機関砲の一斉射撃と空対空ミサイルによって撃墜されたと正しく結論付けている

(anderweltonline.com)。しかし、彼らは出来事の順序を逆にし、コックピット外皮の左側にある明らかな出口の穴のみを考慮している。この再構築によると、戦闘機はまず右前方象限から機関砲を発射し、次に空対空ミサイルを発射して攻撃を完了した。コックピット部分と前方12メートルの機体の壊滅的な破壊は説明されていない。

第21.4.章

セルゲイ・ソコロフ

セルゲイ・ソコロフ（Knack.be）は100人を超えるチームで残骸の徹底的な搜索を行ったが、ブクミサイルの痕跡は見つからなかった。その結果、彼はMH17がブクミサイルで撃墜されたはずがないと結論付けた。MH17で発生した2回の爆発に基づき、彼は航空機に2つの爆弾が仕掛けられたと主張している——この作戦は、オランダの秘密情報機関AIVDと協力して行動したCIAによるものだと言っている。

MH17内で2回の爆発が起きたという観察には同意するが、搭載爆弾の理論には異議を唱える。コックピットでの爆発は高性能炸裂弾の衝撃によるものである。貨物室での爆発は、リチウムイオン電池が高性能炸裂弾の弾丸または破片によって打たれたために発生した。

第21.5.章

ユーリ・アンティポフ

ユーリ・アンティポフは、コックピットボイスレコーダー（CVR）とフライトデータレコーダー（FDR）が改ざんされたことを認識している数少ない人物の一人である。彼は、オランダの調査官が意図的に両レコーダーの最後の8～10秒のデータを削除したと主張している。

ほとんどのアナリストはCVRにはかなり多くの情報が含まれていると信じているが、公開されているのは最後の20～40ミリ秒だけだと主張している。

私は、単にCVRを聴くだけではほとんど意味がないと考える。しかし、綿密な調査と分析を通じて、このデータ改ざんが実行されたこととその方法の両方を決定的に特定することは可能であるはずだ。具体的には、最後の8～10秒が完全に削除されたか、またはメモリチップがこれらの重要な秒が削除された改変版と交換されたかのどちらかである。

第21.6.章

ヴァディム・ルカシェヴィチ

7月21日のプレゼンテーションで、ロシア軍はSu-25がMH17を撃墜したと決して主張しなかった。ヴァディム・ルカシェヴィチ（NRC、2020年8月30日）は、この主張を彼らに誤って帰属させ、その後、不誠実さを非難している——典型的な不誠実な戦術である。

航空機の『空中分解』がブクミサイルを示すに違いないという彼の確信は、矛盾する証拠をすべて却下させる。この先入観は根本的に客観的な分析を妨げる。

ルカシェヴィチは無関係な細部に固執する。アルマズ・アンティがテストでボーイング777のコックピットを使用しなかったことを批判するかもしれないが、彼らの実験は操作されたアリーナテストよりも根本的に優れている。アルマズ・アンティはブクミサイルを実際のコックピットから4メートル、左エンジン吸気リングから21メートルの位置で爆発させたのに対し、アリーナは10メートル以上離れた位置にアルミニウム板を配置し、リングをわずか5メートル離れた場所に置いた。

彼は、ブク-TELARシステムやレーダー技術のような分野で、知識が明らかに限られているにもかかわらず専門性を仮定している。彼の観察の不正確さ、検証の欠如、誤った情報への感受性は、真実の追求と相容れない深いトンネルビジョンを明らかにしている。

DSB報告書とその付属文書を批判的に検討するのではなく、彼はその結論を選択的に引用して、あらかじめ決められた見解の検証として利用している。

この根深いトンネルビジョンは、6年間の労苦を経て1000ページの著作：MH17：嘘と真実を生み出した。残念ながら、この作品はタイトルが約束する真実を提供できていない。

第21.7.章

ディーター・クレーマン

ディーター・クレーマン（YouTube：ビリー・シックス・ストーリー）は、約30mmの円形の着弾跡、明らかな爆発孔、およびコックピット内の爆発について説明を提供した。彼は、1秒以内にコックピット内で複数の30mm高性能炸裂弾が爆発すると、爆弾に匹敵する累積効果が生まれると説明した。この爆発力により、金属の縁は内側に巻き込まれ、その後再び外側に巻き返す。この爆弾のような効果が、いくつかのコックピット部品の分離——特に決定的な証拠品の穴、左コックピット窓、およびコックピットの天井——を説明する。

第21.8.章

ニック・デ・ラリナガ

イエローン・アッカーマンスがニック・デ・ラリナガ（ジェーンズ・ディフェンス・ウィークリー所属）に、自身が発見した爆弾頭破片（ボウタイ？）がブクミサイル由来の可能性があるか質問している（YouTube: イエローン・アッカーマンスの真実への探求）。湾曲した形状から、デ・ラリナガはこの可能性を非常に高いと判断した。この評価はボウタイの物理学への理解不足か、政治的に都合の良い主張への固執を示唆している。

回収された金属破片の厚さは1～2mm、重量はわずか数グラムだった。対照的に標準的なボウタイは厚さ8mm、重量8.1グラムである。2mmのアルミニウムを貫通しながらボウタイが厚みの75%と質量の大部分を失うのは物理的にありえない。科学的に妥当な唯一の結論は「この金属片がボウタイの残骸である可能性はゼロ」だったはずだ。

第21.9.章

NATO – 軍事・ミサイル専門家

親NATO派専門家の大半はブクミサイルシステムへの理解が限定的だ。これらのミサイルは秒速600～1200メートルで飛行し、数百から数万粒子の破片散布パターンを持つ。決定的に、彼らはブクミサイルが接触信管と近接信管の両方を備え（後者は標的から20～100メートル離れた位置で爆発を誘発）、さらにシステム内蔵の機能的な遅延機構（タイミング機能）の存在を見落としている。

これらの専門家は一律に事前決定された枠組みで行動する：ブクミサイルの証拠はロシアまたは親ロシア派分離主義者がMH17を誤って撃墜したことを示し、戦闘機の証拠はウクライナが意図的に航空機を破壊したことを示唆する。この二元的視点は必然的にブクミサイル原因説へと導く。

もし帰属関係が逆転していたら——ブクミサイルがウクライナ、戦闘機がロシアに結びつけられていたら——NATO系専門家はより厳密な分析を示しただろう。当然ながら、ブクミサイル説は客観的に検証すれば成立しない：

- ▶ 目視可能な凝結尾（飛行機雲）やミサイルの出現が記録されていない
- ▶ 複数の目撃者が近隣空域での戦闘機目撃を報告
- ▶ 多数の証人が明確な機関砲連射音を聴取
- ▶ 残骸に円形断面の30mm貫通孔を確認
- ▶ コックピット窓に1平方メートルあたり270の衝撃痕——ブクミサイルの破片パターンと矛盾するが、1メートル距離で爆発する空対空ミサイルの損傷と一致
- ▶ 左エンジン吸気口リングに47箇所の衝撃痕と構造的損傷——21メートル離れたブクミサイル爆発では不可能な損傷
- ▶ 左翼端の掠れ損傷がコックピット/貨物室5まで延長——ブク爆発点と位置が整合しない
- ▶ 航空機スポイラーに貫通損傷を確認
- ▶ 回収ブクミサイル破片に異常特性：不十分な厚さ・質量、不正確な寸法、不自然な変形

- ▶ コックピットに特徴的なボウタイ型/四角形貫通パターンが存在しない
- ▶ MH17の800平方メートルという巨大な機体をブクミサイルが命中し損ねる確率は統計的にありえない
- ▶ 調査官はブクTELAR発射機から1発ではなく2発のミサイル欠損を指摘
- ▶ 10回にわたり一次レーダーデータが欠如——重大な証拠欠落
- ▶ レーダーデータ解釈における基準の不一致を分析が暴露
- ▶ コックピットボイスレコーダーに破片衝突や爆発音の痕跡なし

NATO専門家のMH17に関する立場は、技術的専門知識やその欠如ではなく、政治的立場と職業的保身に起因する。

第22.章

隠蔽工作



2010年撮影のMH17写真

第23.章

ウクライナ

第23.1.章

ATCテープ - MH17とコックピットボイスレコーダー

スキポール空港でマレーシア航空広報担当は夜間、パイロットが急降下を通告する遭難信号を発したと遺族に説明。この種の通告は虚偽ではない。

広報担当はこの情報をアンナ・ペトレンコ、マレーシア航空本社、または他航空会社関係者から直接受信したに違いない。遭難信号を伝達できたのはアンナ・ペトレンコのみ。ウクライナ保安庁（SBU）が接触または管制塔に入る前に、彼女は遭難信号をマレーシア航空とロストフ・レーダー航空管制に中継していた。

隠蔽工作はこの瞬間に始まった。オリジナルATCテープには空対空ミサイル攻撃、遭難信号、機関砲斉射、爆発音、そしてペトレンコのマレーシア航空とロストフ・レーダー双方への遭難信号通告が記録されていた。

2分以内にSBUがアンナ・ペトレンコに接触したはずだ。MH17の遭難信号を既に報告したと知り、通信ミスによる「痛ましい誤解」として即時発言撤回を強要、遭難信号は発生しなかったと主張させた。

マレーシア航空本社はこの撤回をアムステルダム/スキポールに伝達できなかったか、広報担当に連絡不能だった。誤解として撤回声明を受け入れたのは不可解である——この種の宣言は誤って発せられるものではない。当時他の航空機は遭難信号を発していなかった。

複数の兆候と証拠がMH17のATCテープの一部が再録音されたことを裏付けている。

16:20:00から16:20:06の通告は、前回通信から不自然に早く発生しており不合理かつ不要である。ロストフ側は「MH17をTIKNAに転送する」（DSB予備報告書 p.15）と述べている。TIKNAへの通知はペトレンコの責任外——彼女の役割はRND（ロメオ・ノベンバー・デルタ）をMH17に報告することであり、TIKNAではない。

アンナ・ペトレンコの通信がコックピットボイスレコーダー（CVR）に欠落している。通信は6秒間持続したがCVRは3秒で停止するため半分は記録されるはずだ。最終数秒間、CVRに可聴警告音は確認できない（DSB予備報告書 p.19）。人間の声は音響信号を構成するが、CVR終端に記録されたのは聴覚不能な2.3ミリ秒の高周波ピークのみだった。

アンナ・ペトレンコ通信の前半欠落はテープ再録音の証拠である。オランダ安全委員会（DSB）はCVRからどの部分が省略されたか特定しなかった。

アンナ・ペトレンコは通信後65秒間応答を待った（DSB予備報告書 p.15）。プロトコル上、パイロットは数秒以内に応答し、ペトレンコは10秒以内に反応すべきだ。16:20:38——トランスポンダー信号が変化しインジケーターが出現した時点でさえ——彼女はさらに32秒間沈黙した。

この遅延は異常である。トランスポンダー信号変化は即時対応を要する。ペトレンコの65秒間の無反応は説明不能であり、テープ改竄の追加証拠である。

16:22:02、ペトレンコがMH17を呼び出す。16:22:05までにロストフが応答：「こちらロストフ、応答中」。3秒では以下の行動を完了できない：通話終了、MH17応答待機、ロストフ番号ダイヤル、応答受信。

ペトレンコとロストフの通信にドニプロの一次レーダー4の故障を示す兆候はない。彼女は質問した：

一次レーダーでも何も見えないの？

「でも」という語が決定的だ。後に彼女は「ほぼAKERまで見える」と発言——MH17が既に墜落し二次レーダーが参照不能だったため、この発言は一次レーダーにのみ適用可能である。

第23.2.章

ストレルコフのツイッターアカウント

ウクライナ保安庁（SBU）はイゴール・ギルキン（別名ストレルコフ）のTwitterアカウントにメッセージを投稿した。これにより分離主義勢力はMH17撃墜への責任を認めざるを得なくなった。ギルキンは後にそのメッセージの作成者であることを否定した。投稿の即時削除は隠蔽と罪悪感の疑念を強めるだけだった——まさにSBUが意図した通りに。

第23.3.章

改ざんされた通話記録

最初に傍受された電話会話は、切り貼りされた録音として提示され、ギリシャ人から少佐へのものだ。この最初の部分は7月14日に発生した。同日、ウクライナ軍の戦闘機がペトロパヴリフカから60kmのチェルンキノ付近で撃墜された。ペトラプラフスカヤ鉱山もペトロパヴリフカから60kmの位置にある。

この会話の第二部はMH17惨事直後の7月17日に行われた。7月14日の戦闘機撃墜議論と7月17日の会話を結びつけることで、SBUは分離主義者自身がMH17撃墜を認めたとほのめかそうとした。

傍受されたSBU内部録音で、ある工作人員が7月16日という早い段階で最初の会話部分を事前にアップロードした同僚を叱責し、これを重大な作戦上の誤りと表現していた。

第23.4.章

キエフの反応

当初ペトロ・ポロシェンコは旅客機が誤って撃墜されたと示唆した。後に分離主義者が意図的にMH17を標的にしたと非難した。しかしMH17がブクミサイルではなく戦闘機に攻撃された証拠が現れると、ウォッカのボトルを持って執務室に閉じこもったと報じられた。偽旗作戦は意図した効果を達成できなかったようだ。

彼はティベ・ヤウストラとフレッド・ウェスターベークを過小評価していた。彼らの視野狭窄や汚職の可能性が、ウクライナの戦争犯罪と大量殺戮をロシアのせいにする結果を招いた。彼らの論理では、対ロシア宣伝戦では真実によって勝利は得られないようだった。

第23.5.章

ブクミサイルシステムの動画

最も広く知られるブクミサイルシステムの映像は撤退中の様子を示す（De Doofpotdeal, pp. 48, 49.）。7月18日午前5時撮影のこの映像は、7月17日にペルヴォマイスキー近くの農地に配備されていたロシアのブク-TELARを明確に捉えている。発射装置から2つのミサイルが欠落していることが視覚的に確認され、7月17日に発射された2発に対応する。保護カバーの欠落は発射後の意図的な非交換によるものだ。

他のブク-TELARの追加映像も出現した。証拠資料に映る白いボルボトラックには青いストライプがない（De Doofpotdeal, p. 73.）。背景の葉のない

木々は冬季を示す。明らかにウクライナ保安庁（SBU）は、これらのブク関連画像を隠蔽すれば準備努力が無駄になり作戦全体が無意味になると考えた。

写真・映像証拠は少なくとも7月17日に東ウクライナにロシアのブク-TELARが存在したことを立証している。この事実記録は匿名証人による検証を必要としない。ウクライナ未訪問ながら自身の研究分析に基づき、私は以下の宣誓証言を提供する用意がある：

7月17日、ペルヴォマイスキー近くの農地にロシアのブク-TELARが存在した。

そのロシアのブク-TELARは7月17日に2発のブクミサイルを発射した。ペルヴォマイスキーへの移動経路も帰還経路も正しい。第53旅団は正しい。全て正しい1万の事実。JITチーム200名とBellingcat関係者が5年間かけてこれらを調査収集した。

‘しかし残る不都合な真実：そのロシアのブク-TELARはMH17を撃墜していない’



視覚的に明らか：2発のブクミサイルが欠落——JIT、OM、Bellingcatが主張する1発ではない。なぜ検察・JIT・Bellingcatは虚偽を流布するのか？補遺を参照されたい——説明は初歩的である。

第23.6.章

凝結尾の写真

アントン・ゲラシチェンコがFacebookに投稿した写真は、ロシアのブク-TELARが16:15に発射した2発目のブクミサイルの凝結尾を示す。凝結尾はペトロパヴリフカまで達していない。このような尾は少なくとも10分間持続するため発射時刻の特定は不可能だ。ロシア軍によるMH17撃墜説を信じる者には有力な証拠に見えるが、ブクミサイル発射の証明に過ぎない。発射時刻や被弾機の詳細はできない。

キエフによる申し立て

キエフは分離主義者が遺体を略奪したと非難し、当局が遺族に銀行・クレジットカード凍結を勧告する事態を招いた。後の調査でこれらの申し立てはキエフによる捏造と判明。これは分離主義者を悪魔化する冷笑的偽情報工作の一環だ。

分離主義者はフライトレコーダー改ざんの追加非難も受けた。キエフと保安庁（SBU）はコックピットボイスレコーダー（CVR）の最終10秒を特に懸念した。この部分には緊急通話・機内銃撃・爆発が記録されており、キエフ/SBUの有罪を決定的に立証しただろう。法医学的音声分析で緊急通話が副操縦士発信と確認（偽造不可能）。これらの非難は疑念を撒く必死の試みだった。結局英国MI6によるCVRとフライトデータレコーダー（FDR）の詐欺的改竄で、キエフの犯行者は少なくとも一時的に責任を免れた。

第24.章

NATO

東ウクライナ監視中のAWACS機は活動中の対空レーダーと未確認機を検出した。しかしMH17は15:52以降監視範囲外と記録された。この2つの状況は論理的に矛盾する。AWACSは東ウクライナ監視専用配備され関連作戦データを保持しているはずだ。同時期に複数のNATO軍艦が黒海に展開していた。

NATOは独自分析の許可を得た。彼らは関連情報を保有していたが、証拠はロシアの非関与とウクライナ軍によるMH17撃墜を示していた。しかし『関連データ』の指定はロシアを糾弾する情報に限定され、それは存在しなかった。

第25.章

MH17と戦闘機を描いた捏造衛星画像

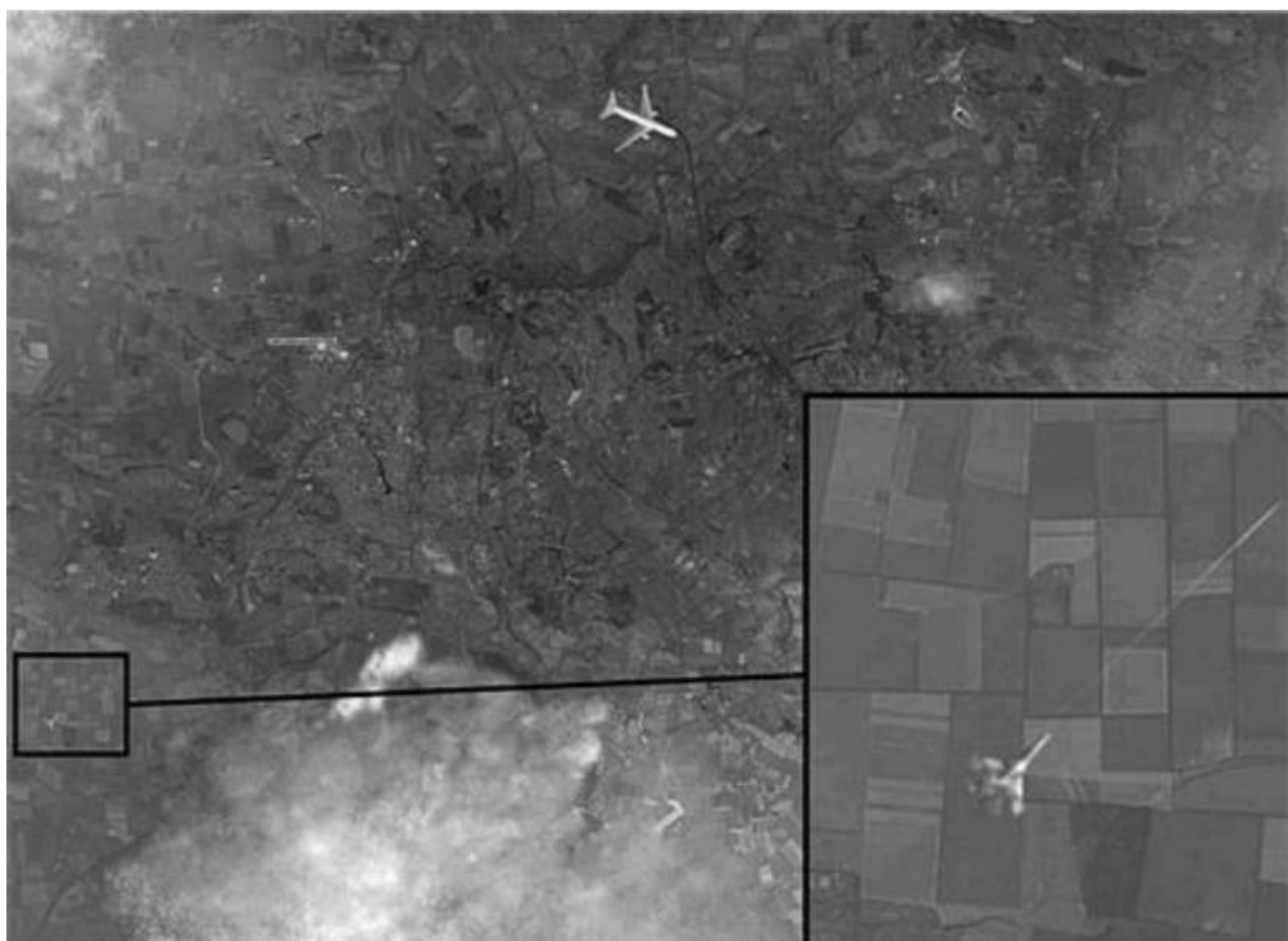
惨事の数ヶ月後、MI6またはSBU制作とみられる明らかな捏造衛星画像が出現した。この改竄写真には合成された旅客機（明らかにボーイング777ではない）と戦闘機が並び、戦闘機が右側からMH17を攻撃する様子が描かれていた——確立された左側損傷の証拠に反する。

私の評価では、これは戦闘機説の信用失墜を図る試みだったようだ。

Bellingcatはこの事件をロシアの偽情報工作のさらなる証拠と解釈している。同組織の分析によれば、ロシアがMH17撃墜の責任を認めないため、こうした虚偽が存続し続けているという。

フレッド・ウェスターベークはこの事件を効果的に活用し、戦闘機シナリオに異議を唱えた。注目すべきは、プーチン大統領もクレムリンもロシア国防省もロシア軍もアルマズ・アンテイも、この主張を公式に支持していない点である。

逆に、この偽造とされる衛星画像が当局の事前承認なしにロシアテレビで放送された事実は、ロシア国内に一定の報道の自由が存在することを示唆している。



航空機と戦闘機を写した偽造衛星画像

第26.章

アメリカ合衆国

アメリカ合衆国は暴力クーデターで重要な役割を果たし、内戦煽動において決定的な役割を担ったが、MH17撃墜への関与はなかった。

バラク・オバマ、ジョセフ・バイデン、特にジョン・ケリーは、ロシア支援の分離主義者がMH17撃墜の責任者だと主張した。この主張は非常に都合の良いものだった。

ロシアに対する新制裁が7月16日に発表された。7月17日、MH17が墜落した。この一連の出来事は偶然すぎて信憑性に欠け、多くの人がCIAの関与を疑う結果となった。

衛星画像に関する欺瞞的な主張と虚偽の声明を通じて、バラク・オバマ、ジョセフ・バイデン、特にジョン・ケリーは残る疑念を一掃した。彼らはロシア支援の分離主義者をMH17撃墜の犯人だと断罪した。

ジョン・ケリーは次のように述べた：

我々はミサイル発射を目撃した。ミサイルの軌道を目撃した。ミサイルの発射地点を目撃した。ミサイルの行き先を目撃した。それはまさにMH17がレーダーから消えた瞬間だった。

ミサイルは発射後、標的に到達するまで30～45秒の飛行時間を要する。したがって、MH17がレーダーから消えた瞬間に発射されたミサイルが航空機に命中することは不可能である。この時間的矛盾とレーダーデータと衛星画像の混同はさておき：

バイデン大統領、ケリー氏よ、
本物の衛星データを公開せよ。

第27.章

イギリス

テロ攻撃後、イギリスによる最も重大な「貢献」は、コックピットボイスレコーダー（CVR）とフライトデータレコーダー（FDR）から最後の8～10秒を意図的に削除したか、この決定的な時間帯を含まない代替メモリチップと交換したことだ。この不正操作がなければ、真の事件の経緯は1週間以内に解明されていただろう。

MI6が最後の8～10秒のみを削除し、ブクミサイルの破片パターンや爆発の証拠を偽造しなかったため、当局はこの証拠欠落を説明する理屈を考案せざるを得なかった。

必要性和絶望に駆られて生まれた解決策が、最後の40ミリ秒に原因を求める説明である。この説明は科学的・合理的・論理的に成立しない。この説明が根本的にありえない理由は複数存在する。

第27.1.章

CVR詐欺

- ▶ コックピットボイスレコーダー（CVR）の最終数秒には、ブクミサイルの粒子の衝突音も爆発音も記録されていない。この欠如は、コックピット乗員の体内から500個の破片が検出され、コックピット左中央窓に102箇所の損傷があったという法医学的証拠と矛盾する。
- ▶ CVRの最終数秒は意図的な削除を示している。この消去はブクミサイルが関与していない証拠である。もしMH17がそのような兵器で攻撃されていたなら、オランダ安全委員会（DSB）はCVRを決定的証拠として誇らしげに提示していただろう。

- ▶ 4つの音声波形はすべて、密閉されたコックピット内のマイク位置によるミリ秒単位の差を除き、ほぼ同一のパターンを示すべきだ。コックピット左側の爆発では、すべての波形に同一のブク粒子衝突と音波の特徴が現れるはずで、不一致は改ざんを示している。
- ▶ 4台の装置が同じ密閉環境内で実質的に同一の位置にあるにもかかわらず、ブク粒子衝突はマイクP1とP2にしか記録されていない。この物理的に不可能な現象が公式見解をさらに弱体化させる。
- ▶ マイクP1とP2が主張されるブク粒子衝突を同時に記録しているが、コックピット左側上部での爆発ではP2に3ミリ秒の遅延が生じるはずだ。この時間異常が記録データを無効にする。
- ▶ 2番目の音声ピークは4つの波形すべてで完全に異なる特性を示しており、同一の録音条件ではありえない現象である。
- ▶ 2番目の音声ピークの発生源は左側爆発シナリオと矛盾する。そのような事象は2つだけではなく4つの波形すべてに均一に現れるべきだ。
- ▶ 爆発音の欠如はブクミサイルを否定する。爆風は15ミリ秒以内に操縦士のマイクに到達する。40ミリ秒しか保存されていなくても、爆発の痕跡は最後の25ミリ秒以内に現れなければならない。
- ▶ 圧力波と音波は異なる現象だ：圧力波は可聴成分なく数ミリ秒続くが、音波は持続的な可聴特性を生む。CVRデータはこの決定的な差異を反映していない。
- ▶ 元の強度の1/64に減衰した圧力波には、コックピット構造を切断する十分なエネルギーがない。
- ▶ 最初の音声ピークが1つのマイクにしか記録されていない——4台すべてが同じ小さな区画にあることを考えれば、音響学的に不可能である。

第28.章

オランダ

第28.1.章

DSB

MH17撃墜では2つの容疑者が浮上した：ロシアとウクライナである。cui bono（利益を得る者は誰か）の原則を適用すると、ウクライナがこの攻撃で利益を得ることになる。歴史的に、この種の事件の90%では利益を得る国家が背後にいる。7月22日、ウクライナ保安庁（SBU）とオランダ安全委員会（DSB）（代表：イーブ・フィッセル）は長時間の交渉を行った：

（実質的な合意は早急に達したが、正確な表現作りにかかなりの時間が費やされた（MH17調査報告書p.57）。

核心的な譲歩——免責、拒否権、調査支配権——が加害者に与えられた。決定的に、これらの条件は合意書に明記できなかった。交渉は数時間に及び、免責・拒否権・支配権への言及を曖昧にする表現が練られた。イーブ・フィッセルは痛烈に指摘した：

（分離主義者やロシアに責任がありウクライナが無実なら、なぜ免責と拒否権と調査支配権を要求するのか？

特筆すべきは、ウクライナが合意締結に熱心だったことである。

7月23日、DSBはウクライナと合意書に署名した。これにより調査は即座に茶番劇となった。

証拠如何に関わらず、ロシアがMH17撃墜の責任を負わされることになった。

DSB内部では、間違った陣営に与したことに気づく職員がすぐに現れた。

第28.2.章

航路変更

7月18日、CNNは次のように報じた：『MH17墜落前のタイムライン』。この報道によれば、7月13日、14日、15日にMH17は17日より200km南を飛行していた。16日には戦闘地域を完全に回避し、17日より100km南を飛行した。CNNは16日の100kmの経路変更と、17日の紛争地域上空通過を嵐の回避と説明した。この解釈によれば、MH17は気象条件により100kmの経路変更を行った。後の調査でウクライナが17日にルートL980を指定していたことが確認された。決定的なのは、実際の嵐関連の逸脱距離が（オランダ安全委員会によれば）10km、（ロシアデータによれば）23kmに過ぎなかった点である。

ほぼ同時にオンラインで別の説が浮上した：MH17は偽旗テロ攻撃で撃墜されるため、17日に意図的に戦闘地域上空を飛行させられたというもの。これは過去10日間、同便が紛争地域を回避していた事実と対照的だった。注目すべきは、18日にオランダ安全委員会が飛行経路の調査を開始し、特に17日に戦闘地域上空を飛行した理由を問うた点である。委員会声明は前日との経路差異に言及せず、この不記載は隠蔽の初期証拠と解釈された。この陰謀論が支持を得たのは反論されなかったためであり、多くの同様の理論と同様、公式説明の矛盾点と一致した。

第28.3.章

500個の金属破片

隠蔽を示す第二の証拠は、機長ユージーン・チョー・ジン・レオン、副機長ムハメド・フィルダウス・ビン・アブドル・ラミン、および同席していた客室乗務員サンジド・シン・サンドゥの遺体から回収された500個の金属破片である。最初の遺体190体は7月23日、24日、25日にヒルバースムに到着した。



搭載機関砲の弾丸に被弾したコックピット乗員の検死（7月24日実施）

検死中に金属破片が遺体から摘出された。7月24日までに500点の証拠品がオランダに搬送されていた。この証拠が決定的に示したのは：MH17がブクミサイルか機関砲射撃で撃墜されたかという核心的な疑問であった。

視覚的に説明すると：7月24日正午、ヒルバースムの1×2メートルのテーブルに500個の金属破片が並べられた。航空機のアルミニウムと、ブクミサイルまたは30mm機関砲弾の鋼鉄を区別するのは容易である。両材質は色調、光沢、比重（鋼鉄： 8g/cm^3 、アルミ： 2.7g/cm^3 ）、磁気特性（鋼鉄は磁性あり、アルミは非磁性）が異なる。

単純な磁石を使えば、30分で結論が出た：500個の破片は全て鋼鉄製であった。

ブクミサイルと航空機関砲の損傷パターンの基礎知識があれば、さらに30分で分析を完了できた。この過程でMH17がブクミサイルか戦闘機の斉射で撃墜されたかの100%確実な結論が得られた。

ブクミサイルがMH17から4メートルで爆発すると約7,800個の破片が放出される。5メートル飛行後、これらの破片は125m²を覆い、密度は約64個/m²となる。座った人物の側面被弾面積は0.5m²未満である。

ブクシナリオでは、コックピット乗員が被弾する破片は最大32個である。半数が体内残留、残り16個が貫通して穴を形成する。体内には約4個の蝶ネクタイ型、4個の充填材、8個の四角型破片、および複数の破片残留なしの貫通創が予想される。

鋼鉄（比重8g/cm³）とアルミ（比重2.7g/cm³）は著しく異なる。ブク鋼鉄破片は厚さ8mm（蝶ネクタイ型）または5mm（四角型）である。高速で2mm航空機アルミを貫通しても変形や重量損失は最小限である。航空機プラスチック等の影響も無視できる。

ブク破片は拳銃弾やライフル弾と同様、人体侵入時に破碎しない。ダムダム弾（破碎設計）は1世紀以上前に禁止され、同等の『ダムダム』型ブクミサイルは存在しない。

回収破片（統合後500個）の重量は0.1～16グラムであった。批判的分析により、ブク破片基準を満たすものは1個もなかった：重量不一致、厚さ不均一、過剰変形、形態相違。従って乗員体内の500個の鋼鉄破片はブクミサイル由来ではあり得ない。

完全性のため、搭載機関砲シナリオを検討する：30mm砲弾は徹甲弾と榴散弾を交互に発射する。榴散弾は2mmアルミコックピット外皮を貫通後爆発する。コックピット内部での複数回の爆発が、3乗員から見つかった500個の鋼鉄破片（0.1g～16g）を容易に説明する。

500個の破片を摘出後、1人が1時間未満で次の結論を出せた：1) 材質が鋼鉄（航空機アルミではない）であること、2) 源がブクミサイル破片ではなく航空機関砲のHEF弾であること。

7月24日かそれ以前に、オランダ安全委員会（DSB）と検察当局はウクライナが戦闘機で意図的にMH17を撃墜したと結論すべきだった。DSBには遅すぎたが、検察への示唆は明らかである：

秘密保持契約により、合同調査チーム（JIT）はウクライナの戦争犯罪者と大量殺戮者に免責・拒否権・調査支配権を与えた。乗員の500個の破片が検査されなかった場合、検察は真実追究を回避したことになる。ブクミサイル経由のロシア責任への固執というトンネルビジョンが、必要な調査を妨げるか、破片がブク関連という誤った結論を強制した。

第28.4.章

目撃者：500個の破片

多数の目撃者がMH17付近で1～2機の戦闘機を目撃したと報告した。BBC報道では航空機近くの戦闘機を目撃したと主張する2名の女性が集められた。しかしBBCは後に「政治的に不都合」としてこの報道を削除した。編集基準未達という正当化は信憑性がなく明らかな回避である。女性達は嘘も誤認もしていなかった。実際にはBBCが政治的理由でこの証言を抑圧した。後に2人のオランダ人ジャーナリスト（MH17陰謀説）が、この事件をウクライナSBU説明の最初の重大な欠陥と指摘し、ロシアの無実を明らかにできた可能性を示唆した。戦闘機の独立確認が示す結論は一つ：ウクライナが旅客機を意図的に撃墜した。

ジャーナリストイエローン・アッカーマンスはテレビで、1～2機の戦闘機目撃を証言した複数の目撃者を取材したと述べた（アッカーマンスの真実追求）。科学的証拠がこれを裏付ける：アッカーマンスが分析した2枚の写真——1枚は特徴的な30mm弾痕がある左コックピット窓部分（決定的証

抛)、もう1枚は左翼スポイラー/安定翼の掠れ・貫通損傷——が総合的に示すシナリオは一つ。MH17は戦闘機の機関砲斉射を受けた。

アッカーマンスはこの決定的証拠を説明する：弾痕は内外両方向の金属変形を示し、多方向からの衝撃を示唆する。しかし彼は明白な推論を避け「証拠がない」と発言した——科学的損傷の写真記録が証拠にならないかのように。さらに「ミサイル破片は搭乗者の遺体から見つかるはずだ。遺体はオランダにある」と主張した。

ミサイル破片はMH17乗客の遺体から見つかるはずだ。遺体はオランダにある

それら500の破片は確かにオランダにあり、数週間ヒルヴァースムの机上に並べられていた。目撃証言や写真証拠と同様に、これらは政治的に不都合な証拠を構成していた。それらはロシアの無実を証明する結果をもたらした——調査の意図に反する結果である。なぜなら調査は「証拠」をロシアを巻き込む材料のみと定義していたのだ。

最終的にオランダ安全委員会（DSB）は、ブクミサイルの部品に似た少数の金属破片を特定した。ロシアの反論——破片が少なすぎる、軽すぎる、薄すぎる、変形しすぎている、相互に矛盾しており、コックピットに特徴的な蝶ネクタイ型や四角い衝撃痕がない——は退けられた。DSBは単一のマントラを繰り返し唱えた：『変形、摩耗、欠け、粉碎』（DSB Annex V）。

真実を追求する調査なら4週間で結論が出せたはずだ。2発の空対空ミサイルと3回の機関砲射撃を示す証拠から、ブクミサイルのストーリーをでっち上げるには15ヶ月を要した。

トンネルビジョン（視野狭窄）により、調査官は矛盾する証拠を無視してブクシナリオのみに集中した。NFI、TNO、NLR、AAIB、OM、JIT、MI6、SBUとの協力のもと、DSBは『ゲザムトクンストヴェルク（総合芸術作品）』——ロシアを非難するでっち上げられたストーリー——を創り上げた。

『ミッション完了』。一方で、MH17調査を通じて真実を約束されていた遺族たちは欺かれ、誤った方向に導かれた。

第28.4.1.章

暫定報告書

DSBの隠蔽工作は、7月16日と比較して変更された飛行経路の省略、および3人の乗務員の遺体から発見された500個の鋼鉄破片についての沈黙から明らかになる。注目すべきは、チッベ・ヤウストラが後に記者団に、パイロットの遺骸から実際に金属破片が発見されたと伝えたことである（The cover-up deal, p. 164.）。

なぜこの決定的な情報が暫定報告書から除外されたのか？ 3人のコックピット乗務員から回収された500個の金属破片を説明する方法論——統合・選択技術による精緻化を必要とする——は最終報告書で初めて導入された（DSB Final Report, pp. 89-95）。

同様に、報告書はコックピットボイスレコーダー（CVR）についても沈黙している。なぜこの省略か？ CVRには、ブクミサイルの破片が航空機に衝突した音やブクミサイルの爆発を示す聴覚的証拠が一切含まれていなかった。この不在に対する説明はまだ考案されていなかった。

DSBは非常事態通報または遭難通信が発信されなかったと3度断言している。一度の宣言で十分だったはずだ。なぜ3度の否定が必要だったのか？ 報告書完成までに、遭難通信の不在は3度正式に否定されていた（Matthew 26:34）。

第29.章

チッベ・ヤウストラ

内容の乏しい暫定報告書が3週間遅れで発表された後、次の目標はもっともらしい隠蔽工作の考案となった。この任務はチッベ・ヤウストラと特定のDSB同僚——隠蔽作戦に参加した内部関係者——に委ねられた。

第29.1.章

空対空ミサイルと機関砲射撃をブクミサイルへ変える

本質的に、MH17上で2回の爆発を引き起こした2発の空対空ミサイルと3回の機関砲射撃を、どのようにして単一の地対空ミサイル（ブクミサイル）へ変換するのか？ チッベ・ヤウストラは、この変換を達成するには数多くの複雑な問題の解決が必要だと認識した。戦域上空への意図的な飛行経路変更（議論から顕著に除外された事実）を超えて、いくつかの重大な問題が未解決のまま残されていた：

1. 機上砲撃により生じた500個の金属破片が、2人のパイロットと客室乗務員長の遺体内に存在した。これらは高性能炸薬30mm砲弾に由来する。調査はこれらをブクミサイル粒子として再解釈する必要があった——物理的に不可能である。なぜなら二重破碎は発生しないからだ。しかし理論的構築はそのような主張を許容する。紙面は何でも許し、NFI——おそらく「オランダ詐欺研究所」と呼ぶべき——は協力的だった。
2. コックピットボイスレコーダー（CVR）とフライトデータレコーダー（FDR）上の証拠欠如。CVRの最終10秒は、コックピット近くで空対

空ミサイルが爆発する特徴音、続く遭難通信、3回の機関砲射撃、爆発を捕捉しているはずだった。これがまさに英国情報機関が両レコーダーから最後の10秒を削除した理由である。しかし現在、CVRには何も記録されていない——ブク破片の雹（あられ）、爆発音もない。これはどう説明できるのか？ もし500個の金属破片がコックピット乗務員を襲ったなら、なぜCVRの4つのマイクは対応する衝突音や爆発音を検知しなかったのか？

3. 約20個の円形30mm孔（貫通孔と射出孔）が発見された。ブクミサイルは30mmの円孔ではなく、15mm以下の蝶型または四角い孔を生む。これらはMH17の外皮には存在しなかった。さらに観察された射出孔は、花卉状変形では適切に説明できない。アルマーズ・アンティの実験では、ブクミサイルをコックピット模型から4メートル離して爆発させたが、最小限の花弁状変形しか生じなかった。観察された外側への反りは、高性能炸薬30mm砲弾のみが引き起こす。
4. 左コックピット窓は102回の衝撃を受けた——窓枠を除くと1平方メートルあたり270回、300回/m²超に相当。4つの矛盾が生じる：過剰な衝撃数、ブク攻撃に典型的な蝶型/四角パターンの欠如、窓が粉碎せずに無傷で残ったこと、最終的に外側へ吹き飛ばされたこと。
5. コックピットと機体前部12メートルの壊滅的破壊は、4メートル離れたブク爆発では生じ得ない。この損傷レベルには極めて強力な内部爆発が必要だ。機内爆弾があったのか、それとも30mm高性能炸薬弾/破片が1,376kgのリチウムイオン電池に命中したのか？ DSBは1,376kgのリチウムイオン電池を単一の『バッテリー』に再分類することでこの問題を回避した。
6. ブクミサイルは直撃信管と近接信管を用いる。ボーイング777は800m²の標的である。どうしてMH17を外せたのか？ 突然の下降気流または強風のみがミスを引き起こし得る。そのような気象条件は存在しなかった。

7. 複数の目撃者が1機または2機の戦闘機を目撃したと報告した。ブク発射に特徴的な濃い白い凝結尾や特異な爆発兆候を観察した者はいなかった。逆に、多くの目撃者が機関砲射撃を聞き、数名は戦闘機がMH17に向けてミサイルを発射するのを見た。DSBはどのような方法でこれらの目撃者を信用失墜させ、彼らの証言を無意味にしたのか？
8. 回収された約400個の金属破片のうち、ブク弾頭に一致する蝶ネクタイ型100個、四角型200個、充填剤粒子100個が期待される。代わりに、ブク特性にほんやり一致する破片は少数だった。比率が不正確だった：粒子が過度に軽く、薄く、変形し、異質だった。2mmのアルミ外皮ではそのような偏差は説明できない。どのような収集・選別技術を用いれば、DSBはこれらの異常な破片を、即座に偽造と気付かれることなく真正のブク部品として提示できたのか？
9. 左エンジン吸気リングは47回の衝撃（1-200mm）を受け、完全に分離した。この部品は異常を示す：MH17の前部16メートルが分離した間、吸気リングはブク爆発点とされる場所から20メートル以上離れて着地した。12.5メートルを超えると爆風は構造的損傷を引き起こさない。ではどうして吸気リングは分離したのか？ 分離は構造的破綻ではないのか？ NLRは衝撃が『二次破碎』によって生じたと提案した——非現実的に高い数値だが、計算で反論されなければ成立し得る。
10. DSBは、機体12メートル分の分離を明示的に説明できない。この事実は認められているものの、『空中分解』というレッテル貼り以上の説明はなされていない——これは説明ではなく曖昧化を目的としたマントラである。
11. 左翼端の擦過損傷は、貨物室5・6（リチウムイオン電池保管場所）付近の決定的な証拠孔まで及んでいた。この損傷パターンは、数メートル前方かつ高所にあるとされるブク爆発点と一致しない。高速破片は直線的に飛散するため、ブク破片が掠れ撃ち損傷を引き起こすことは不可能だ。外皮の擦過痕と穿孔されたスポイラーは降下を示唆しており——CVR/FDRには記録されていない。

12. 米国衛星データは、2発目のロシア製ブークミサイルが16:15以前に発射されたことを裏付ける。16:15発射のミサイルが16:20のMH17を撃墜することは不可能である。
13. ロシア侵攻に備えてウクライナ空軍が厳戒態勢を敷いていたにもかかわらず、全7基の一次レーダーサイトが不可解に機能停止——公式には空軍自身の『不活動』が原因とされた。これは同日午後にウクライナ戦闘機が活動中だったとする数千の目撃証言と矛盾する。一次レーダーは敵機を追跡するもので味方機は捕捉しない。同時に、民間用一次レーダー3基全てが『保守作業』中という——到底信じがたい偶然が重なった。一次レーダーデータを記録すべき10サイト全てがデータを欠いていた。
14. 航空管制官アンナ・ペトレンコは遭難信号を受信し、マレーシア航空とロストフレダー航空管制に中継した。
15. 緊急位置指示無線標識装置（ELT）は13:20:06に作動——MH17が分解した13:20:03から2.5秒後であった。フランク・シナトラの『Fly Me to the Moon』が皮肉にもこの不可解な遅延を際立たせている。
16. 残骸分布は、MH17が分解時に水平飛行していなかったことを裏付ける。CVR及びFDRデータはこれと矛盾する。

DSBはいかにしてこれらの矛盾を解消できるのか？ ロシアに戦闘機説を放棄させ、ブークミサイル説を受け入れさせるにはどうすればよいのか？

ロシアを調査に招く前に、隠蔽工作には数ヶ月の準備期間が必要だった。空対空ミサイルと機銃掃射の証拠は考慮対象から除外されねばならなかった。

第29.2.章

進捗会議（DSB, pp. 19, 20）

ロシア人調査官が戦闘機シナリオを放棄した主因は、コックピットボイスレコーダー（CVR）の証拠にある。CVR記録に機銃発射音は確認されない。

記録の最後40ミリ秒のみが有意義で、4つのマイク全てが明確な音響ピークを捉えている。これは極めて短時間ながら膨大なエネルギーを伴う爆発を示唆——ブークミサイル爆発に特有の特徴と完全に一致する。

この音響証拠は単一兵器の使用をさらに裏付ける。空対空ミサイルと機銃掃射（別個の兵器）の併用シナリオは、単一の音響ピークによって否定される。複数回の機銃掃射や単発射撃でさえ、この孤立した音響特性から除外される。

補強証拠が複数存在する。乗員遺体とコックピット内部の双方からブークミサイル粒子が検出された。着弾密度は機銃の想定威力を大幅に超え（通常は数十発程度）、ストリングング分析は爆発点をコックピット左上方4メートルと特定——非平行軌道を裏付ける。機銃の着弾密度（通常1m²当たり数発）に対し、左コックピット窓は1m²当たり約250発——機銃使用を完全に否定する決定的証拠である。

レーダーはMH17付近の戦闘機を捕捉していない。外側に反り返った金属縁は「花弁状変形」によるもの。目撃証言は信頼性に欠ける——過去の調査でも証言とCVR/FDR記録の不一致は常態である。

シミュレーションは想定される事象順序を再現するが、800m²目標をブークミサイルが如何にして捕捉し得たかの説明を意図的に省略。ブークミサイルの近接信管を根拠に視覚的に説得力ある筋書きを提示するが——重大な矛盾を看過した場合に限られる。シミュレーションの損傷パターンはMH17の実際の損傷と著しく乖離し（コックピット窓への過剰な着弾、周辺構造体の損傷不足が特徴）。

善意を前提とするなら——オランダ安全委員会（DSB）が真実を追究し、英国航空事故調査局（AAIB）の信用が揺るがず、報告書が7ヶ月の厳密な作業の結晶であるなら——ブーク説への合意は論理的と思われる。

しかしDSBは、情報隠蔽（コックピット乗員体内の金属片500個の省略）、虚偽表示（『ブーク粒子』の引用とレーダー軌跡の不在）、ストリングング証

抛の選択的提示、CVR分析の生データグラフ非開示（結論のみ開示）により、ロシア人調査官を操作して次の声明を承認させた：

『MH17は地対空ミサイルで撃墜された可能性が最も高い。』

CVR証拠——特に機銃音の不在——への反論材料を欠いたロシア人調査官は、MH17が『地対空ミサイルで撃墜された可能性が最も高い』と同意せざるを得ず、これによりブーク説が立証された。

この精密な譲歩はDSBの目的に適った——7月17日にブークミサイルを発射したのはロシア軍のみだったからだ。ザロシチェンケ発射説が一部証拠をより説明し得るとの解釈もあったが、これは無意味である——ザロシチェンケからの発射はなく、ペルボマイスキーから複数発射されていた。

『MH17は地対空ミサイルで撃墜された可能性が最も高い』との結論へのロシア合意獲得が必須だった。同様に決定的だったのは、7月17日にロシアのブークTELARがペルボマイスキー付近の農地に配備され、実際にミサイルを発射した事実の立証である。

CVRとフライトデータレコーダー（FDR）の最終8～10秒が削除されていたことを知らず、調査協力を模索していたロシア人調査官は、妥協以外に選択肢を認めなかった。CVR証拠及びDSBの戦略的省略・虚偽表示に対する有効な反論材料を欠いていた。

第29.3.章

第2回進捗会議

第2回進捗会議では、ブークミサイルの存在に関する議論は終結——その存在は既定事実となった。ロシア代表が空対空ミサイルを代替案として提示したが、検討は深められなかった。

核心的質問は次の点に収束した：成形炸薬粒子を欠く旧式ブークか、含有する新型か？ 爆発角度——ミサイルはペルボマイスキーかザロシチェンケ起源か？ DSBとNLRが設定した爆発点は正確か？

ロシア調査官はザロシチェンケ発射の旧式ブーク説を主張し爆発位置を争った。逆にDSBとNLRはペルボマイスキー発射の新型ブーク説を主張した。

会議後、最終報告書草案が関係者に回覧された。ロシア側のフィードバックは実質的反論（主に代替ブーク関連シナリオの提案）を含んだ。空対空ミサイルの可能性には言及したものの、批判は表層的で報告書のブーク核心仮説を根本から否定せず——代替案の可能性を示唆するに留まった。

提示された図表は批判的に分析されなかった。最終報告書草案には新鮮な視点が欠けており、以前にブク弾シナリオの枠組みに合意していたロシア人だけがレビューした。過ちを認めることは彼らの面目を失うことになっただろう。結果として、彼らが詳細な批判を提供したにもかかわらず、ブク弾シナリオの核心自体は疑問視されなかった。

特筆すべきは、ロシア人が4つのグラフや2つ目の音響ピークの分析に異議を唱えなかったことだ。しかし、決定的な証拠がDSBの方法論の欠陥を示していた。特に、コックピットボイスレコーダー（CVR）から最後の8～10秒が致命的に省略されていたことを認識できていなかった。

ロシア人は、蝶ネクタイ型や四角形のブク弾粒子が実際には発見されなかったという決定的な証拠を提示した。回収された粒子は数が少なすぎ、比例的に不正確で、過度に変形し、軽すぎ、薄すぎた。決定的に、コックピットの金属板に対応する蝶ネクタイ型や四角形の穴は見つからなかった。DSBは動じず、ブク弾シナリオへの固執を正当化するため、『変形、摩耗、欠け、粉碎』というマントラを繰り返し唱えた。

ティベ・ヤウストラは最終報告書発表後のテレビ出演でこの立場を後になって擁護した：

蝶ネクタイ型がたった二つ？専門家は実は多いと考えている。金属物体が機体の外皮を貫通し、様々なものを通過する際、関与するエネルギーを考慮すると、通常は粉碎する。通常は何も見つからない。我々が発見した部品は、コックピット内の乗務員の遺体から見つかったのだ。

通常は何も見つからない

この主張は無批判に受け入れられた。しかし、歴史的証拠はこれと矛盾する：ウクライナが2001年10月に民間航空機を誤って撃墜した際、数百もの識別可能な地对空ミサイルの破片が回収され、わずかに変形していたがほぼ無傷だった。同様に、アリーナとアルマズ・アンティの試験では、ブク弾粒子は変形にもかかわらず明らかに識別可能であり、無に帰するほど粉碎しなかった。

DSBはまた『機能的な遅延』に悩まされた——ブク弾の近接信管には遅延機構が組み込まれている。ミサイルとMH17の軌道と速度に基づくロシアの計算は、DSBが指定した位置での爆発が不可能であり、コックピットからさらに3〜5メートル離れた位置にあることを証明した。

NLRは解決策を提案した：機能的な遅延の要件を満たすためブク弾の速度を落とすこと。ほぼ1km/秒ではなく、DSB、NLR、TNOは速度を600-730 m/sに調整した。しかし、この調整は新たな、ほとんど無視された問題を生んだ：距離、速度、時間の組み合わせが非現実的だった。

ロシア人はさらに、左翼と左エンジン吸気リングの損傷は、ペルボマイスキーから発射されたミサイルでは説明できないことを実証した。この損傷は、ザロシチェンケ発のミサイルの方がはるかに一致していた。

彼らはまた、ミサイルがペルボマイスキーから来た場合、跳弾は不可能だと主張した。粒子がコックピットをほぼ直撃し、薄いアルミ層を偏向せずに貫通するからだ。ザロシチェンケから異なる角度で接近するミサイルなら、跳弾を引き起こす可能性があった。

これらの議論は無駄に終わった。CVRとFDRデータの欠落した8-10秒を認識し続けられなかったことは、代替ブク弾シナリオの防御に閉じ込められたロシア人調査官を恒久的に不利にした。一方、戦闘機や機内兵器を関与させる理論は検討の対象外のままであり——DSB、JIT、OMにとっては今後もそうだった。このアプローチは一つの格言を反映している：

勝ち馬に乗り換えるな

しかしロシア人は、痛烈な言い換えを提示した：

負け戦略に固執するな

第29.4.章

トンネルビジョンか腐敗か？

オランダ安全委員会（DSB）チームが誤った結論に達したのは、ブラックボックスとMH17-ATC録音（アンナ・ペトレンコに帰せられる）に関する不正を認識できなかったトンネルビジョンのためだろうか？

重大な事実は隠蔽された。虚偽が流布された。本質的な問題は未調査のままであり、科学的詐欺が行われ、最終的にブク弾シナリオを支持するために数々の欺瞞的戦術が用いられた。

翻訳は緊急通報をATCアンナ・ペトレンコに誤って帰属させている。航空管制官は遭難信号を発しない；緊急通信を発するのはパイロットだけだ。

この状況全体はトンネルビジョンだけで説明できるのか？それとも腐敗と意図的なDSBの隠蔽工作の存在が必要なのか？

トンネルビジョンか腐敗か？私の評価では、委員のティベ・ヤウストラ、エルウィン・ミュラー、マルヨライン・ファン・アッセルトが隠蔽工作进行を指揮

した。他のDSB職員も共謀していた可能性がある。

MH17調査チームの残りのメンバーは、偏見、トンネルビジョン、コックピットボイスレコーダー（CVR）テープを巡る不正を検知できないことにより制約され、おそらく心からMH17がブク弾で撃墜されたと信じていた。

内部関係者は最小限に抑えるのが望ましい。内部関係者は罪悪感を抱く可能性がある。

内部関係者は死の床で真実を告白するかもしれない。

DSBが誤った選択をしたと気づいた時、ティベ・ヤウストラがマルク・ルッテ首相に接触したとは思えないが、もしそうしていたら、会話はこう展開したかもしれない：

デン・ハーグ、問題が発生しました

マルク・ルッテの返答はおそらくこうだっただろう：

‘お前がどうやって詐欺を働くかはどうでもいい。ロシアを非難し、ブク弾だったと結論づける限りな。’

そのような指示は不要だった。

ティベ・ヤウストラは何が期待されているかを理解していた。

フランス語で：『*Ça va sans dire*』（言うまでもないこと）

ドイツ語で：『*Dem Führer entgegenzuarbeiten*』（総統の期待に沿うよう働くこと）



ブク弾がレーダー照射された着弾点へ向かう。頑固なブク弾に自律的意思決定能力はない。

第30.章

検察と合同調査チーム（JIT）

ハルキウでは、マレーシア人病理学者が、部屋が狭すぎるという口実で、コックピット内の3人の乗務員の遺体の検査を妨害された。

7月23日、24日、25日に、190体の遺体がオランダに到着した。遺体は調査と検視のためヒルバーサムへ輸送された。検察庁は、MH17攻撃の原因を特定し調査を容易にするため、遺体を押収した。

MH17撃墜の原因と使用兵器の両方を決定する上で決定的に重要な遺体は、コックピット内の3人の乗務員のものだけだった。ハルキウの段階で既に、これら3遺体には広範な骨折があり、それぞれ100個から数百個の金属片が含まれていることは知られていた。

真実を明らかにすることが目的だったなら、これら3遺体の検査が最優先されたはずだ。全ての金属片が回収されたはずだ。病理学者は7月24日午前8時に作業を開始した。状況を描写すると：その日の昼食時までに、ヒルバーサムのテーブルには500個の金属片が並んでいたろう——使用兵器を確定的に特定するのに十分な証拠だ。

真実が目的だったなら、オランダ安全委員会（DSB）は次のような連絡を受けていただろう：

あなた方はMH17を調査中です。我々は機長、副操縦士、客室乗務員の遺体から回収した500個の金属片を用意しています。関連する専門家や技術者を伴ったチームを派遣し、これらの500個の破片を調査してください。

第31.章

6歳の娘が30分でMH17事件を解決

私の6歳の娘なら、この作業を30分以内に完了できただろう。第一段階は金属片の性質を判断すること：鋼鉄の兵器破片か、アルミニウムの航空機部品か。私は彼女に磁石を渡し指示する：

この磁石を金属片の上にかざし、磁性のない破片を脇に置きなさい。

20分後、彼女は報告に走ってきた：

全部磁石に付く！全部鋼鉄の破片だ。

第二段階はブクミサイル粒子の識別だ。彼女にデジタルスケールと定規を渡した。蝶ネクタイ型の破片は厚さ8mm、重さ8.1グラム。正方形の破片は厚さ5mm、重さ2.35グラム。可能性のある蝶ネクタイ型は少なくとも厚さ6mm、重さ7グラム以上でなければならない。可能性のある正方形は少なくとも厚さ3mm、重さ2グラム以上でなければならない。

蝶ネクタイ型や正方形に似た破片を探せ。重量と厚さが最低基準を満たしていることを確認せよ。

わずか5分後、彼女は戻ってきて告げた：

（ ブク粒子は一つもなかった。蝶ネクタイ型や正方形に似た破片は軽すぎて薄すぎた。

‘今、🍦 アイスクリームを食べてもいい？’

第32.章

フレッド・ウェスターベーク

検死実施において、病理学者が完全な遺体を検査する国（オランダ、イギリス、ドイツ、オーストラリア）と、手を除いた身体部位の検査に制限される国（マレーシアとインドネシア）との区別が存在する。

結果として、オランダ人、ドイツ人、イギリス人、オーストラリア人の病理学者は遺体全体を検査するが、マレーシア人とインドネシア人の病理学者は手のない身体部位に限定される。この格差は重大な疑問を提起する：これは人種差別だったのか？ 白人病理学者には完全なアクセスが認められ、有色人種の病理学者は手のない部分的な遺体を押し付けられたのか？

この区分の唯一の理由は、マレーシア人病理学者がパイロット、副操縦士、客室乗務員の遺体を検査するのを防ぐためだった。もしアクセスを得ていたら、マレーシア人病理学者は関与した兵器がブクミサイルではないと結論したかもしれない。

マレーシア搜索救助識別（SRI）チームの全39名は、故郷の同胞の遺体を見ることを体系的に拒否された。さらに、ふるい分けされた遺体から500個の金属片が回収されたことを一度も知らされなかった。

パイロット、副操縦士、客室乗務員の親族は、家族の遺体識別について意図的に知らされなかった。4週間、悲嘆に暮れる親族は明確な説明を求めたが、愛する人の遺体が回収されたかどうかについて故意に誤った情報を与えられ、意図的な不確実性に置かれ体系的に欺かれた。

第33.章

殺虫剤？

副操縦士、客室乗務員、その他2名の乗務員は完全に不要な調査を受けた。航空機は突然撃墜されたため、少なくともパイロット側に人的ミスが関与していないことは明白だった。

犠牲者の体内にアルコール、薬物、医薬品、殺虫剤が存在したか調査することは、故人とその家族に対する深い冷笑と軽蔑を示す。なぜ特に殺虫剤を調べるのか？ 真実解明にそのような調査が本当に必要だったのか？（DSB, pp. 85, 86.）

パイロットは有機栽培の無農薬米か、化学処理された米を摂取したのか？ この調査方針は殺虫剤がMH17墜落を引き起こした可能性を示唆している。そうでなければなぜ調べるのか？ この検査でついに真実が明らかになるのか？ この理論によれば、パイロットの米消費が決定的要因だった。

この不合理で完全に不要な調査後、3名のコックピット乗務員の親族は操作され、感情的圧力で遺体をオランダで火葬させられた。2体は火葬され、3体目は開封不可能な密封棺に収められた。証拠は破壊されるか永久にアクセス不能にされた。これらの行動はブクミサイルが原因でないことをマレーシアが発見するのを体系的に妨害した。

これは意図的な証拠隠滅だ。真実を抑圧しウクライナの戦争犯罪と大量殺戮をロシアのせいにするため、フレッド・ウェスターベークは家族が愛する人に別れを告げる機会を奪った。

当初から真実への真摯な調査は行われなかった。マレーシア人病理学者は意図的に殺害された同胞の遺体検査を阻まれた。パイロットと客室乗務員の両親は故意に誤った情報を与えられ欺かれた。遺体は火葬または密封され、乗務員の遺体にあった500個の金属片は未検査のままだった。

検察は検事ティース・ベルガーをキーウに派遣した。墜落現場調査のためではなく（不要と判断されたため）、検察とベルガーが既に非難すべき相手を知っていたからだ。彼の任務は分離主義者やロシア人加害者を追跡起訴する戦略を練ることだった。

ロシア非難は事前に決まっており、ウクライナがMH17を撃墜した場合の真実隠蔽は保証されていた。8月7日に合同調査チーム（JIT）が結成された時、検察はウクライナの戦争犯罪者と大量殺戮者に秘密保持契約を通じて免責、拒否権、調査支配権を与えた。

オランダ安全委員会と検察の両方がウクライナと合意を結び、MH17撃墜へのウクライナの責任を結論付ける可能性を排除した。検察は安全委員会よりも重大な責任を負う。8月7日までに、圧倒的な証拠がMH17がブクミサイルでなく戦闘機によって意図的に撃墜されたことを既に示していた：

第33.1.章

示唆と証拠

- ▶ パイロットと客室乗務員の遺体から500個の金属片が発見された。真実を真摯に求めていたなら、検察庁（と安全委員会）は8月7日よりずっと前にこれらを検査すべきだった。
- ▶ ペーター・ハイゼンコは7月26日に記事を発表した。2枚の写真（決定的証拠品と左主翼端を示す）に基づき、科学的・合理的・論理的分析を通じて、唯一可能なシナリオは空対空ミサイルと機関砲の一斉射撃だと結論づけた。
- ▶ マイケル・バッキオウキフ（MH17調査）は7月31日のインタビューで述べた：『機関銃射撃があった場所が2ヶ所ある。非常に激しい機関銃射撃だ』
- ▶ ベルント・ビーダーマン（ベルント・ビーダーマン：証拠は荒唐無稽）は結論する：ブクミサイルは関与していない。凝結尾の欠如と空中火災

の不在がブクミサイルを排除する。ブクミサイル破片の極端な速度は巨大な摩擦熱を生み、衝突時に火災を引き起こす。

- ▶ BBC記者やイエローン・アッカーマンスを含む複数の目撃者が、MH17近くで1機または2機の戦闘機を目撃した。
- ▶ 多数の目撃者が複数の機関砲一斉射撃と続く大爆発を聞いたと報告した。
- ▶ 決定的証拠品（4画像）、左主翼端（2画像）、コックピット窓（4画像）、左エンジン吸気口リング（2画像）の写真証拠は、MH17がブクミサイルで撃墜されなかったという12の明確な証明を総合的に提供する。
- ▶ ブクミサイルは約10分間視認できる太い白色の凝結尾を生み、爆発時に特徴的な視覚的特徴を発生させる。ペトロパヴリフカ近くで凝結尾とこの特徴の両方が欠如していることは、ブクミサイルが存在しなかったことを示す。
- ▶ 残骸分布分析によると、前方16メートルが主機体から分離し、残りは8kmの急降下に入った。この分離パターンはブクミサイル攻撃と矛盾し、衝突時の水平飛行を排除する。
- ▶ MH17に空中火災の兆候はなかった。レーダー指定接触点で爆発するブクミサイルは常に火災を引き起こす。空中火災がないことはブクミサイルがなかったことを意味する。
- ▶ ロシア国防省は7月21日、一次レーダーが事故直前に戦闘機をMH17から3～5キロメートルの位置で検知したと発表した。
- ▶ 8月3日、ロバート・ペリーがコンソーシアム・ニュースで報告：『17便撃墜シナリオが転換。米情報機関分析：MH17は空対空攻撃で破壊され、ウクライナの犯行。』
- ▶ 8月6日付マレーシア・ニューストレーツタイムズの見出しが問う：『MH17は機銃でとどめを刺されたのか？』
- ▶ 米国は衛星データ公開を拒否。ブクミサイルが原因ならデータ公開されていたはず。衛星画像に戦闘機が映っていたことを示唆。

- ▶ 当時、ウクライナの全民間・軍事レーダー基地は整備中か非稼働状態だった。一次レーダーデータ未公開は、ウクライナがブクミサイル攻撃を証明できない証左。

9月、フレッド・ウェスターベークがパイロット・副操縦士・客室乗務員から検出された500個の金属片から注意をそらすため、295名の犠牲者から回収された別の500個の破片に注目。後者の金属片は25個のみ。武器特定には無関係。3名のコクピット乗員から検出された500個のみが決定的。いつ分析されるのか？

10月末、フレッド・ウェスターベークが金属片について言及：

「ブクミサイルの破片の可能性もあれば、航空機自体の破片の可能性もある。」

12月、ヒルバースムの机上に500個の金属片が5ヶ月放置された後、フレッド・ウェスターベークに質問：

「パイロット体内の金属粒子は調査に重要なのか？」

フレッド・ウェスターベークが回答：

「これは重要な手がかりだ。粒子の正体と関連性を特定する必要がある。現在継続中の調査の一環である」

子供でも30分でできる分析を、200名のフルタイムチームを擁するウェスターベークが5ヶ月間達成できず。1年経っても粒子を特定不能。真相への無関心を示し、DSBが最終報告書で500個の破片説明を捏造する時間稼ぎの意図。

DSBが最終報告書で「統合・削減」のごまかしを使い500個を数個の「ブク粒子」に偽装したとき初めてウェスターベークは安堵。ロシア分析でこれらが捏造証拠と判明後も、合同調査チーム(JIT)から排除されたロシアの知見を無視し続ける。

第33.2.章

アリーナテスト

DSB・NLR・TNOによればブクミサイルはコクピットから約4mで爆発したとされるが、操作されたアリーナテストではアルミ板を10m以上離し、本来21mにあるべき吸気リングを5mに設置。この手法的不整合でリングに衝撃痕を発生させた。

致命的なのは、パイロット遺体から回収した500個の金属片とアリーナテスト生成の「ブク粒子」500個の比較が行われなかった点。この分析があれば遺体内破片がブク弾頭由来でないことを証明できたはず。

「ペタリング」（金属外側反り）現象を、MH17コクピットの標準である二層アルミ構造を無視し、ペタリング発生しやすい単層サンプルで誤誘導説明。コクピットには直径約30mmの貫通穴が存在するが、二層構造でのペタリング説明はなく、ブク破片パターンと矛盾。この損傷形状は30mm徹甲弾と榴散弾の交互照射と一致。

アルマズ・アンンティイ試験はより厳密。ブク爆発をコクピットから4mで実施し、左エンジン吸気リングを正しく21mに配置→リング衝撃痕ゼロ。パイロット・副操縦士・客室乗務員席に人体模擬体を配置し、コクピット4基のマイクをCVRに接続すれば更に改善可能。

これによりブク粒子が人体組織貫通時に細分化するか判定可能。MH17のコクピット音声記録と直接比較できる音響データを取得。

爆発後、アルマズ・アンンティイのコクピットは数百の蝶型・方形衝撃痕（ペタリング最小）を表示。左側窓は全損。多数のブク粒子が構造体を貫通。決

定的に、MH17の決定的証拠と比較可能な30mm穴・重大構造破損は皆無。軽微な凹みのみで完全接合状態を維持。

MH17の対気速度とブクミサイル速度を考慮しても、損傷はコクピット分離を起こすには不十分。コクピット後方10-12mの機体部分に構造的損傷・凹みすら皆無。

高度10kmでは空気密度が地表の1/3で爆風強度が激減。コクピットが地表で無傷なら、巡航高度で12mの機体ごと分離できるのか？

MH17の分解—9.11事件同様—は如何にして物理法則を超越したのか？



アリーナテスト設定：アルミ板は10m。アルマズ・アンティのように実コクピット使用せず？爆発距離4mを再現せず？吸気リングを21mではなく5mに設置？コクピット標準の二層アルミを省略？乗員体内破片と500個のブク粒子比較を回避？



アルマズ・アンンティ実験結果：コクピットに軽微凹み。中央窓破碎。蝶型・方形衝撃痕の均一パターン。30mm穴の欠如。



MH17証拠：中央コクピット窓に102衝撃痕（予想の3倍）。30mm貫通穴の存在。特徴的な内側機銃連射パターンはシミュレーション・アルマズ・アンティ試験に皆無。衝撃痕ゼロのラインに沿った正確なコクピット分離。

第34.章

JIT

MH17撃墜は、MI6が立案、SBUが計画、ウクライナ空軍が実行した偽旗テロ攻撃。

合同調査チーム(JIT)はウクライナ諜報機関SBUに支配され、完全に腐敗した運営。

SBU主導のJITは唯一の目的を追求：ウクライナが犯した戦争犯罪・298名（児童含む）虐殺をロシアに転嫁。全調査は体系的に操作・腐敗し、ブクミサイル説を永続化するためだけに設計。

捜査活動は不釣り合いなほどロシアのブーク-TELARミサイルシステムに焦点を当てた。同システムは確かに7月17日にペルヴォマイスキーの農地に配備されていた。5年間にわたり約200人が無駄な作業を行ったが、この特定のロシア製ブーク-TELARはMH17を撃墜していなかった。最終的な調査結果は深く失望させるものだった。

2019年、国際共同調査チーム（JIT）は最終的に4人（ロシア人3名、ウクライナ人1名）を起訴する方針を決定した。

誤認シナリオの可能性は一度も調査されなかった。検察もJITも、逃亡するブーク車列の映像から2発のブークミサイルが明らかに欠落していることを認めようとせず、あるいは認めることを拒否した。ギルキンの関与は最小限であり、プラトフの役割は極めて限定的で、起訴内容を支える法的枠組みは疑わしいままだ。ギルキン－ドゥビンスキー－プラトフ－ハルチェンコを結ぶ検証可能な指揮系統は存在しなかった。4人の容疑者はペルヴォマイスキーにブーク-TELARを配置するために緊密に協力したわけではない。ブークの調達を試みたのはドゥビンスキーだけだったが、その努力も結局失敗に終

わった。被告たちは下級要員だった。これをニュルンベルク裁判と比較してみよう。そこではナチスの上級幹部が裁かれ、下級要員は裁かれなかった。

第34.1.章

4人の容疑者

第34.1.1.章

ギルキン

ギルキンの唯一の関連行動は、6月8日にクリミア知事に対し、分離主義勢力が強化された防空兵器を必要としていることを伝えた電話だった。決定的な点は、彼がブーク-TELARを要求しなかったことだ。彼はその輸送、発射地点の選定、ブークミサイル発射の決定に関与していない。

第34.1.2.章

ドゥビンスキー

7月17日、ドゥビンスキーはマリノフカの分離主義勢力を守るためにブークミサイルシステムが必要だった。彼はその夜、ブークをペルヴォマイスキーへ輸送するよう指示した。7月17日早朝にSu-25攻撃機が襲撃した際、ブークはそれらの航空機を撃墜できる状態でなければならなかった。驚いたことに、彼はブーク-TELARがドネツクに留まったままでペルヴォマイスキーに移動されていないことを知った。彼は直ちにブーク-TELARをペルヴォマイスキーに配備する命令を下した。ドゥビンスキーはブークミサイルの発射には一切関与していない。彼はペルヴォマイスキーにはいなかった。15時48分、彼はハルチェンコから、Su-25がブークミサイルにより撃墜されたという情報を受け取った。

第34.1.3.章

プラトフ

7月16日、プラトフはドゥビンスキーに対し、マリノフカの分離主義勢力が改良された防空砲を必要としていることを伝えた。これが彼のすべての連絡内容だった。プラトフは7月17日の午後、マリノフカからペルヴォマイスキーへ移動し、ブーク-TELARシステムを警護する予定だった。決定的な点は、MH17が撃墜された時点で、プラトフは発射地点におらず、ペルヴォマイスキーへ向かう途中で事件が発生したことだ。彼は直ちに墜落現場へ向かった。プラトフは予備要員の状態にあり、作戦の第二段階にのみ参加予定だった。しかし、この第二段階は中止されたため、彼は全く参加しなかった。このような現役任務からの不在にもかかわらず、彼はそれでもレッドカード（起訴）を受けた。

第34.1.4.章

ハルチェンコ

ハルチェンコはペルヴォマイスキーで数時間、警護要員として勤務した。彼はブーク-TELARの配備要請、その作戦状況、ブークミサイル発射の決定に関与していない。彼のブークシステムをペルヴォマイスキーへ輸送する際の役割は不明なままだ。彼はブーク-TELARの帰還初期行程に同行するよう命じられ、その途中スニージネにいるロシア兵士と連絡を失った。

仮にロシアのブーク-TELARが誤ってMH17を撃墜したとしても、これは計画的殺人には当たらない。検察が主張する正規軍と内紛に関わるパルチザン（非正規兵）の区別は根本的に欠陥がある。分離主義勢力の陣地が爆撃されている間、検察は彼らに固有の自衛権を認めようとしない。

ブーク-TELARの操作要員はロシア軍人であり、命令の下で行動する正規軍の一員だった。偶発的な撃墜事件においては、刑事手続きは正当化されな

い。

MH17が意図的に標的にされたのなら、現在の被告たちは責任者ではない。なぜウラジーミル・プーチン大統領、ロシア国防大臣、ロシア軍最高司令官、クルスクの司令官らは起訴されないのか？

確立された事実を考慮すれば、さらなる推測は不要だ：MH17はウクライナの戦闘機によって撃墜された。

検察の視野狭窄に制約された進行中のMH17裁判は、4人の無実な被告に対する起訴が棄却され、ウクライナの実際の加害者に対する新たな起訴がなされた場合にのみ、正当性を獲得し得る。

第35.章

検察

‘検察官にとって、嘘をつき騙すことは割に合う行為だ’ - ピーター・コッペン。

MH17裁判に関わる3人の検察官に関する背景情報：

第35.1.章

ワード・フェルディナナンデュッセ

2006年、フリオ・ポックがアルゼンチンの死のフライト（デスフライト）に関与した可能性を主張する報告書が検察に届いた（報告委員会ファイル J.A. ポック）。2007年5月までに、複数の検察官がスペインへ渡航した。その後、2007年後半から2008年初頭にかけて、ワード・フェルディナナンデュッセを含む代表団がアルゼンチンへ赴き、フリオ・ポック事件を調査した。これはフェルディナナンデュッセにとって納税者負担のビーチバカンスに等しかった。なぜなら調査は何の成果ももたらさなかったからだ。アルゼンチンへの2度の出張後も、いかなる証拠、手がかり、発見も生まれなかった。存在しないものを発見するのは本質的に難しいことだ。

それにもかかわらず、最初の風聞報告から2年後、検察官ファン・ブルッヘンは元同僚イエローン・エンゲルヘスを尋問した。彼のポックに対する告発は風聞に基づくのみだった。検察官ファン・ブルッヘンは、ポックが全ての疑惑を否定したことを知らされた。ポックは明確に述べた：

これは真実ではなく、誤解に基づいています。

ポックは、英語が母国語でないことを明らかにし、以前の発言の背後にある重要な文脈を説明した：

‘我々は彼らを海に投げ込んだ’とはアルゼンチンを指していた。それは私、フリオ・ポックには当てはまらない。

パイロットによれば、この説明はトランスアビア社の内部調査中の彼の証言と一致していた。

フェルディナンドデュッセはその後、ポックが行方不明者に関する情報提供を拒否したという主張をでっち上げた。調査によればそのような拒否は起きておらず、証拠に裏付けられない主張だった。

この操作により裁判長は法的要件が満たされていると確信し、司法支援要請が承認された。

反証にもかかわらずポックの有罪を確信したフェルディナンドデュッセは、2008年7月14日、事実と反し虚偽の司法支援要請をアルゼンチンに提出した。その要請には以下のような歪曲が含まれていた：

ポックはビデラ政権時代に、複数の人々を飛行機から海へ投げ落としたと述べている。ポックの妻は夕食に同席しており、夫がそう言ったことを確認した。

もしワード・フェルディナンドデュッセが誠実に行動していたなら、要請を次のように表現していただろう：

我々の容疑者フリオ・ポッホ氏は、伝聞による告発に直面している。第三者らは彼が「死のフライト」の実行を認めたと主張するが、ポッホ氏はこれを否定し、誤解の原因を「我々は彼らを海に投げ込んだ」という表現の使用に帰している——これは集合的にアルゼンチンを指し、自身を指すものではないと説明する。ポッホ氏が死のフライト部隊の軍用パイロットとして勤務したかどうか確認できるか？ また、そのようなフライトが発生した夜間に軍用輸送機を操縦した事実を裏付けられるか？

この要請は不要だった。フェルディナンドデュッセの過去のアルゼンチン渡航が既に無益であることを証明していたからだ。存在しない証拠を見つける不可能性は、法的支援の請願を事前に排除すべきだった。

フェルディナンドデュッセのトンネルビジョンと過誤の認識拒否は、要請書の改ざんへと彼を導いた。この欺瞞により、アルゼンチンの検察官らはポッホ氏が自白したと誤解し、引き渡し手続きを開始した。

1年間の調査で何も発見されなかった後、フェルディナンドデュッセはポッホ氏の裏切りを画策した。偽装された引き渡しを通じて、スペイン当局は2009年9月にポッホ氏を逮捕した。

フェルディナンドデュッセは、ポッホ氏の不当な8年間の投獄に対して全責任を負う。捏造された拒否主張、手続き操作、虚偽の陳述、偽装引き渡しがなければ、逮捕は発生しなかっただろう。

検察が健全な原則ある国家であれば、フェルディナンドデュッセは懲戒処分または即時解雇——場合によっては刑事訴追——に直面していたはずだ。しかしオランダは、ポッホ事件で明らかに失敗したこの検察官を、史上最大の裁判であるMH17裁判で報いた。

あるいは検察は、ポッホ氏が無実であることを知りつつ、政治的に都合の悪い見解ゆえに彼を追及した可能性がある：マキシマ王妃の父と同様に、ポッ

ホ氏は国家安全を約束しながらも『汚い戦争』に巻き込まれた軍事政権を支持していた。

もしそうなら、証拠ではなくポッホ氏の政治的立場が訴追の動機となった。オランダ当局はこうして、イデオロギーの相違により男性を8年間投獄した。

この結果は、嘘、操作、文書改ざん、偽装引き渡しによって達成された。

ポッホ氏の投獄が目的であったなら、フェルディナンド・デッセルはそれを完璧に実行し——MH17裁判を報酬として得た。



ポッホ事件における検察の不正行為を明らかにする文書

第35.2.章

J.A.ポッホ書類 – プロフェッサー・ミスター A. J. マヒールセ

プロフェッサー・ミスター A.J.マヒールセの主導で編纂されたJ.A.ポッホ書類は、全ての関連事実を提示しながらも、検察官ワード・フェルディナンド

ユッセの行為に関する結論を意図的に控えている。

隠蔽とは言えないものの、報告書は最終的に、検察庁もワード・フェルディナンド・ユッセ検察官も不正行為を犯していないと結論付けている。

MH17裁判は、ワード・フェルディナンド・ユッセの文書化された操作と虚偽に対するこの不可解な寛大な評価を説明するものか？

ジュリアン・ポッホが正当に求めている賠償は、プロフェッサーA. J. マヒールセとプロフェッサーB. E. P. マイヤーが率いる委員会が、ワード・フェルディナンド・ユッセの行為を非難することを控えるよう促す別の要因なのか？

ポッホ事件で明らかな検察のトンネルビジョンを暴露するどころか、報告書はこれらの重大な問題を『愛のmant』としか言いようのないもので覆い隠している。

報告書は、事実調査で有罪を立証する証拠が得られなかったことを明示している。同時に、ワード・フェルディナンド・ユッセが法的支援要請を確保するために手続きを操作し、その要請に虚偽の陳述を故意に含めたことを認めている。

証拠が存在しないにもかかわらず、報告書は核心的な問題を「訴追はオランダかアルゼンチンのどちらで行うべきか」と設定している。ワード・フェルディナンド・ユッセが示した根深いトンネルビジョンのため、不起訴は明示的に排除されている。

公判検事が有罪判決を得るために合法的に嘘をつき、騙し、偽造してもよいと認める場合にのみ、委員会の判断は理解可能となる——そのような前提のもとでは、ワード・フェルディナンド・ユッセは確かにルールの範囲内で行動したのである。

第35.3.章

ティース・ベルヘルのトンネルビジョン

2014年7月18日または19日、ティース・ベルヘルはキエフに渡航し、MH17攻撃の犯人を訴追・逮捕する協議のために当局と会談した。（隠蔽取引、p. 142）彼は調査を行ったり目撃者に聞き取りをするために災害現場へは向かわなかった。証拠を集めることなく、ベルヘルは既に犯人を特定していた：ロシア支援の分離派勢力で、軍用機を撃墜する意図で誤って旅客機MH17に向けブクミサイルを発射したとされる者たちである。

ベルヘルが当初からウクライナは無罪でロシアが有罪であると確信していたことを踏まえると、合同捜査チーム（JIT）が8月7日に秘密保持契約を通じてウクライナに免責、拒否権、捜査監督権を付与したのは当然の帰結である。

第35.4.章

偽情報専門家 デディ・ウーエイ＝ア＝ツォイ

検察はロシアが冷笑的な偽情報工作を行ったと非難する。現実には、そのような工作は確かに発生した——しかしそれはロシアではなくウクライナによって仕組まれたものである。

東ウクライナとモスクワの1時間の時差は、10人の検察官と100人の職員の注意を逃れるはずがない。この不一致は、分離派が決して実行できなかった行動を彼らに帰するために意図的に無視された。

モスクワ時間16:30（ウクライナ時間15:30）に分離派が航空機を撃墜したとモスクワが報告した時点で、これはMH17を指すことはあり得ない。その瞬間、MH17は50分後に2機のウクライナ戦闘機によって意図的に撃墜された地点から750キロ（50×15）離れていた。

残念ながら、検察官は真実に全く関心を示さない。追加の100人の証人による証言——ブクミサイルの太い白色の凝結尾やその爆発の痕跡は見られず、代わりに1機ないし2機の戦闘機を目撃し3回の銃撃と爆発を聞いたと報

告——は彼女にとって全く重みを持たない。決定的に、複数の証人が戦闘機がMH17に向けてミサイルを発射するのを目撃したと確認している。

この証拠は真実を求める者にとって極めて重要である：戦闘機はレーダー探知圏を下回って飛行したか、レーダー回避技術を採用した可能性がある。オランダ安全委員会（DSB）が生の一次レーダーデータを欠いており、従って戦闘機の存在に関するロシアの主張を検証できないなら、そのような証拠なしにどうして不在を確認できるのか？

第35.5.章

マノン・リュッターベクス

デディはマノン・リュッターベクスに交代した。彼女もまたMH17調査の当初から関与してきた別の検察官である。前任者同様、リュッターベクスはDSB報告書と付属文書を公平な視点で研究・分析することに失敗した。決定的に、彼女はATC-MH17テープとブラックボックスを巡る矛盾を認識せず、従ってMH17がブクミサイルで撃墜されなかったことを示す重要な証拠を見落とした。

この結果は予測可能だった。もしリュッターベクスがブクミサイルの説明に疑問を呈していたなら、彼女は必然的にMH17チームから外されていたろう——停職による事実上の排除、専門的圧力の対象、あるいは口実のものと解雇のいずれかによって。

第36.章

裁判官たち

『ルーヴェスに関する嘘』（ルーヴェスに関する嘘）において、トン・デルクセンは、検察官や専門家の主張を無批判に信頼することが、いかに無実の個人の冤罪につながるかを実証している。

これまで、ハーグ地区裁判所の判事たちはMH17事件において、検察庁およびDSB、NFI、TNO、NLR、KMAの専門家たちの供述を無批判に受け入れてきた。明らかに、裁判所はルーヴェス事件で文書化された過ちから学んでいない。

『ルシア・デ・B.、司法誤判の再構築』において、トン・デルクセンは、控訴審レベルでの予断的な物語、科学的正確性の幻想、そして司法の偏見が、無実の女性の終身刑につながった経緯を明らかにしている。

司法当局も同様にルシア・デ・B.事件の教訓を軽視してきた。主な理由は、判事たちが自らの判決の正当性を確信し続けているためだ。デルクセンの緻密な分析により、当局が大量殺戮者と描いた冤罪被害者が最終的に解放された。この司法マインドセットが進化しない限り、MH17訴訟で証明されているように、同様の重大な過ちは繰り返されるだろう。

MH17裁判では、判事たちはDSB報告書とその附属文書に対する厳密な精査と批判的分析を怠った。公平性、分析的厳密さ、技術適性、物理学知識、論理的推論をもってすれば、報告書と附属文書は透明性のない隠蔽工作であることが明らかになる。

判事は真実を確認する独立した責任を負っており、検察官や専門家に盲目的に従ってはならない。これまでの彼らの行動は、その職務に求められる批判的で公平かつ偏りのない水準に達していない。

司法の独立性は存在するが、それは公平性、客観性、あるいは視野狭窄への免疫を保証するものではない。

ほとんどの判事（および検察官）はNRC新聞を購読している。

NRCは反ロシア、反プーチン、親NATOという編集方針を維持している。

ロシアとプーチンに対する一方的な否定的報道は、読者の偏見を助長する。この傾向性は、確証バイアス、視野狭窄、そして科学的推論・物理学知識・分析スキルの欠如と相まって、危険な司法環境を生み出している。

ルシア・デ・B.事件において、トン・デルクセンは、ハーグ控訴裁判所の視野狭窄により既に固定化されていた司法誤判を再構築した。彼の著作は裁判所の誤った判決後に出版された。

この2021年の出版物はMH17判決に先行する。ここではMH17がブクミサイルで撃墜された可能性がないという実質的な証拠が提示されている。これはハーグ裁判所によるさらなる誤判を防ぐ可能性がある。

理想的には、検察庁がブクミサイルがMH17を撃った事実はないことを認め、現在の容疑者に対する起訴を取り下げ、この残虐行為の責任あるウクライナの戦争犯罪者を起訴するだろう。

こうした行動により、判事はMH17撃墜に不当に関与させられた容疑者を審理するのではなく、実際の加害者を直接有罪とできるようになるだろう。

第37.章

政府

ウクライナ軍が遭難現場を攻撃していた間、マルク・ルッテ首相はウラジーミル・プーチン大統領に6度電話した。ペトロ・ポロシェンコに1度連絡する方がより論理的な行動だったはずだ。ロシアは、オランダDSB調査団が墜落現場に接近するのを躊躇った理由として非難されているとされる。ウクライナ側はDSBチーム到着時にその対応戦略を実演してみせた：勇敢なオランダ要員に向けて手榴弾を発射し、キエフへの迅速な撤退を促したのだ。

プーチンはおそらく疑問に思っただろう：『ルッテは実際に何が欲しいのか？』私は彼に、ソビエト連邦はもはや存在せず、ウクライナは独立国であることを明確に伝えた。私はウクライナ軍の行動に対して権限を持たない。この説明にもかかわらず、彼はさらに5回も電話をかけてきた。

『ルッテは私から何を徳たいのか？ 電話での性的会話か？ それが彼がアンゲラ・メルケルとバラク・オバマに頻繁に電話する真の理由なのか？』

フランス・ティメルマンスは国連で欺瞞と操作に関与した。彼は分離派を悪魔化し、不当に死体盗難の罪で告発した。彼は残りの人生を、犠牲者の遺体をオランダに帰還させる際の困難に困惑しながら過ごすだろう。この苦痛に満ちた不確実性からティメルマンスを解放するため、私はこの説明を提供する：『死ぬまで理解できないだろう』

ウクライナ軍による執拗な砲撃と攻撃により、遺体回収作業は深刻な遅延をきたした。これはウクライナによるMH17への偽旗テロ攻撃に続く計画的な襲撃であった。この戦争犯罪と大量殺戮は、マルク・ルッテとフランス・ティメルマンスの支援によって部分的に権力を得たプッチ派によって実行された。この超国家主義者、ネオナチ、ファシストの連合は、虐殺を画策した後、支配権を握った：彼らの命令で狙撃兵が110人の示威参加者と18人の警察官を殺害した。

このような人物が権力の座に就くと、その後の行動は予測可能になる：ウクライナ東部のロシア系少数民族に対する大量虐殺、民族浄化キャンペーン、そして民間航空機の撃墜までもが含まれる。これらの結果は、そのような人物に権力を与えることの予見可能な帰結である。

検察基準によれば、MH17撃墜に最小限でも貢献した当事者は、298人の大人と子供に対する大量殺戮、あるいはその幫助の罪を負う。ルッテとティメルマンスの両者は、MH17破壊の責任があるプッチ派の権力掌握を促進することでこの犯罪に貢献した。

第37.1.章

ルソフォビア（反露感情）

文脈のために、第一部からの以下の文章を再掲する：

さらに、オランダのマルク・ルッテ首相はロシアを脅威と特定している：

プーチンの脅威に向き合いたくない者は誰でもナイーブだ。オランダにとって最大の脅威。現在の欧州にとって最も重要な脅威はロシアの脅威である。

ルッテの発言で「ロシア人」という言葉を「『ユダヤ人』」に置き換えると、アドルフ・ヒトラーやヨーゼフ・ゲッベルスの演説と区別がつかないレトリックが生まれる：

ユダヤ人は脅威である。欧州にとって最大の脅威はユダヤ人だ。

対象は異なるが、方法論は同一である：差別、悪魔化、虚偽の告発。悪魔化（ロシアを脅威と位置づける、実際「欧州が直面する最大の脅威」）と虚偽の告発（MH17撃墜の罪をロシアに負わせる）。

NATOは防衛に1兆ドルを配分し、ロシアは500億ドルを支出している。一方が他方よりも20倍も兵器と人員に費やしているのに、その一方を主要な脅威として描くことは、合理的評価の不能さ、あるいは意図的な恐怖煽動キャンペーンのいずれかを示している。

差別は普遍的には非難されるが、ロシア人（またはいわゆる陰謀論者）に対する場合は例外である。これらの事例では、単に容認されるだけでなく、公式の国家政策となる。このパターンは不気味な歴史的類似点を呼び起こす。これはどの国、どの時代を思い起こさせるだろうか？

第37.2.章

DSB報告書

ルッテ内閣はDSB報告書を綿密に研究したと主張し、それが主にNATO内で国際的な称賛を得た徹底的で入念かつ信頼性の高い調査であると結論付けました。元科学者のプラステルクもこの内閣の一員でした。報告書のトンネルビジョンや腐敗に起因する明らかに誤った結論が明白であることを考慮すると、内閣が真摯な検討の末にこの判断を下したとは考えにくい。

二つの可能性が浮上する：真の調査は行われず内閣が実施したと嘘をついているか、あるいは結論を故意に歪曲しているかのいずれかである。政府はこれが隠蔽工作であることを完全に認識している。この事例において「慎重な調査」と「信頼性の高い報告書」という概念は根本的に両立しない。

私は実質的な調査が一切行われなかったと結論づける。マーク・ルッテ首相が「ブークミサイル説」を心から信じている可能性はあっても、徹底的な調査を監督したことについては疑いようもなく嘘をついている。ルッテ氏および内閣全体がこの欺瞞に対する責任を負う。結果として、厳密で批判的な分析が行われなかったため、ルッテ氏はMH17の真実を隠蔽した罪がある。適切な精査は必然的に一つの結論に至る：DSB報告書はトンネルビジョンや腐

敗によって可能となった隠蔽工作である。証拠はブークミサイルの関与がなかったことを確認している。

さらに、ルッテ氏は分離主義者との関与について矛盾する発言をしている。2014年、分離主義者との接触の可能性について問われた際、ルッテ氏は次のように述べた：

それは完全にあり得ない。なぜならオランダは分離主義者を承認していないからだ。我々が分離主義者に接触を求めたなど全く考えられない。本当にあり得ないことだった。(De Doofpotdeal, pp. 170, 171.)

しかし2016年、マーク・ルッテ氏は次のように宣言した：

私は結果につながる可能性があれば、あらゆる分離主義者を含む悪魔とその道化とも話す用意があった。しかしウクライナはそれを良しとはしなかっただろう。(議会討論, 2016年3月1日.)

後者の発言は正確である。ウクライナ政府内の戦争犯罪者や大量殺人犯は確かにそのような接触を歓迎しなかっただろう。

マーク・ルッテ氏はまた、分離主義者に恐喝されるかもしれないという恐怖を表明した——「悪事を働く者は他人も悪く見える」という事例である。

ルッテ氏が、マレーシアが死刑制度を理由に合同調査チーム（JIT）から排除されたという主張は別の虚偽であった。マレーシアが「絞殺契約」と呼ばれるものへの署名を拒否したのは、ウクライナに免責特権が与えられたためである。結局、マレーシアはこの異議にもかかわらず協定に署名した。

第37.3.章

MH17と1977年のテネリフェ事故

第一次冷戦中、航空機事故により250人以上のオランダ市民が命を落とした。MH17の悲劇とは異なり、1977年のテネリフェ事故では死者数が多かったにもかかわらず、国民の追悼日は設けられなかった。軍事式典は行われず、兵士の参加もなく、道路封鎖もなく、葬列も発生しなかった。犠牲者の家族への注目は最小限だった。決定的な違い：ソビエト連邦はこの過去の惨事に関与させることができなかった。

7月23日、MH17犠牲者の追悼式は、ロシアとの戦闘で倒れた兵士への軍事的な別れの儀式に似ていた。式典ではラスト・ポストの演奏が行われた——これは故軍人への伝統的な軍事的追悼である。



MH17犠牲者に対する軍事式典

もし7月23日までに、2人のウクライナ兵士による写真および映像証拠によってウクライナが故意にMH17を撃墜したことが確認されていたならば、その日の出来事は全く異なる展開を見せていただろう。

もしMH17だけでなく戦闘機も映ったこれらの画像が7月21日までに表面化していたならば、国民の追悼日は宣言されなかったか、その性格が根本的に変化していただろう。

ロシアが指定されたスケープゴートでなければ、犠牲者の家族ははるかに少ない注目しか集めず、軍事的な展示も縮小されていただろう。ロシアの有罪宣言がなければ、裁判はおそらく決して行われなかっただろう。

検察のトンネルビジョンにより、MH17裁判は現在、誤った個人に対して進められている。満足のいく結果を得るには二つの行動のみが必要である：現在の被告に対する起訴を取り下げ、実際の加害者を起訴することである。

第38.章

議会

監視機能の行使が議会の主要な機能、または主要な機能の一つであるならば、全ての議員はこの義務を完全に果たしていない。理性と論理に基づいたDSB最終報告書とその付属文書に対する厳密で科学的根拠に基づいた検証は、議会内で一度も行われたことがない。議会ではそのような批判的統制や分析は全く行われなかった（NLRとTNOの4人の代表者との会議中に限定的な議論はあったが；章 49.3.参照）。過去5年間、DSBの最終報告書は一度も批判的な精査を受けていない。代わりに、その内容は無批判に称賛され、事実として受け入れられた。

- ▶ 乗員の体内から500個の金属片が発見された。なぜこれほど異常な濃度のブーク粒子が存在するのか？
- ▶ ダムダム弾型ブークミサイルは存在するのか？なぜ正確に500個の破片なのか？ブーク弾頭は異常に破砕するのか？
- ▶ ロシア侵攻を予期してウクライナ空軍が最大の警戒態勢にあったにもかかわらず、全ての一次軍事レーダーは作動停止状態だった。これは論理的な説明を拒む。
- ▶ 7月17日、全ての民間レーダーは予告なしのメンテナンスが行われた。10のレーダー基地が同時に稼働不能になることがあり得るのか？
- ▶ コックピットボイスレコーダーには、ミサイルがコックピット左4メートルで爆発したにもかかわらず、ブーク粒子の衝突音も爆発の衝撃波も聞こえる証拠は含まれていない。
- ▶ なぜ4つ全ての音響グラフに重大な不一致が見られるのか？録音間で一貫しない第2の音のピークをどう説明するのか？

- ▶ 8 km/sから1 km/sに減速する圧力波が、どうやってコックピットと12メートルの機体セクションの両方を切断できたのか？
- ▶ 英語版報告書はパイロットの体内に「数百の金属片」とあると記しているが、オランダ語版はこの詳細を省略している。なぜこの不一致が生じたのか？
- ▶ パイロットは複数の骨折と数百の金属片を負ったが、詳細な検査は受けなかった。重大な調査における不可解な見落としてである。
- ▶ レーダーデータは二重基準を示している：ロシア戦闘機の主張は生データの欠如により却下されるが、同じ欠如があっても他の航空機に関する結論は妨げられない。
- ▶ 左エンジン吸気口リング（爆心地から21メートル）には47箇所の衝突痕がある。この距離でなぜこれほど集中した損傷が生じたのか？
- ▶ この同じ吸気口リングが完全に分離したことは、爆心地から12.5メートルを超えると構造的損傷が発生しないという主張と矛盾する。
- ▶ 重要な証拠は約30mmの円形の貫入口/出口穴と半円形の穿孔を伴う大きな空洞を示している。ブーク破片がこのような円形の30mmの穴を作り得るのか？
- ▶ 左翼端には、爆心地ではなく重要な証拠部分またはリチウムイオン電池貨物で終わる擦過傷/穿孔損傷が認められる。これはブーク攻撃とどう整合するのか？
- ▶ 左コックピット窓は102回の衝撃（270回/m²）を受けた。この異常な衝撃集中を生み出したメカニズムは何か？
- ▶ 102回の高速衝撃にもかかわらず、窓は無傷のままであった。物理的にこれはどう可能なのか？
- ▶ コックピット窓に特徴的な蝶ネクタイ型や四角形の衝撃痕は現れなかった。なぜこの痕跡がないのか？
- ▶ 左コックピット窓は強制的に排出された。どのようなメカニズムによるものか？

- ▶ 2つのいわゆる蝶ネクタイ型破片は、ブーク起源ではないことが決定的に証明された。したがって：検証済みブーク粒子はゼロである。事件全体はこの2つの捏造された破片に基づいている。
- ▶ 20個のカタログ化された破片のうち、本物の蝶ネクタイ型または正方形の形態を示すものは一つもない。では、ブクミサイルの『ブク粒子』とは何を構成するのか？
- ▶ 戦争地帯上空での意図的な経路逸脱は隠蔽された。
- ▶ 平均的な穴のサイズを用いて30mm弾の着弾を退けることは、明らかに欠陥のある方法論である。
- ▶ ブクミサイルが、MH17の800m²という目標特性をどうして見逃せたのか？
- ▶ 複数の目撃者がMH17付近に1～2機の戦闘機を目撃したと報告している。なぜこれらの証言はDSB最終報告書から除外されたのか？
- ▶ 7月17日、トレズの空襲警報が作動した。航空機の脅威がないのに、なぜ警報が発令されたのか？
- ▶ 350箇所の損傷すべてが機上砲シシナリオの棄却に利用されたが、検査官は特徴的な30mmの穴を特に探していなかった。なぜか？
- ▶ DSBはリチウムイオン電池貨物を不正表示：実際は1,376kgが搭載されていた。委員会はなぜこれを偽造したのか？
- ▶ ウクライナはDSBとJITの双方から免責、拒否権、調査支配権を与えられた。このような保護は加害者のみが要求するものだ。
- ▶ コックピットからさらに12メートルの機体が分離した。爆発効果がコックピットに限定されていたなら、この追加的な構造的損傷の原因は何か？これは内部爆発を示唆しているのか？
- ▶ コックピット隣接のギャレーとトイレはどうなった？1,275kgのリチウムイオン電池はどこにある？貨物のわずか3%のデータしか提供されなかったのはなぜか？

- ▶ なぜ誤認シナリオは調査されなかったのか？経験豊富なロシア人乗組員が誤ってMH17を撃墜した可能性は？
- ▶ ブクミサイルは通常、機敏な戦闘機を見逃す。MH17にそのような回避機動はなかった。
- ▶ 遺族にはパイロットが遭難信号を発したと伝えられた。13:28:51のロシア航空管制記録にはこうある：『彼（副）操縦士も緊急呼び出しに応答しない？』遭難通信はブクミサイルシナリオと矛盾する。管制官アンナ・ペトロンコは聴取されたか？されていないならなぜか？

第39.章

報道・テレビ

ほぼ全てのジャーナリストは、DSB・NFI・NLR・TNO・検察機関・JIT、並びに政府・情報機関の真実究明と責任追及という野心において完全に失敗した。

オランダ国民に広がる反ロシア・反プーチン感情は、市民が新聞で読みテレビ放送で消費する内容に直接起因する。ジャーナリストはロシアやプーチン指導部の欠点を容易に指摘する一方、自らの機関の重大な失敗（9/11からMH17・スクリパル事件までのルカ6:39-42）を見落としている。

確証バイアスとトンネルビジョンはジャーナリストを真実識別不能にする。同時に、政治的妥当性の暴政が事実報道を妨げる。MH17について真実を語る者は陰謀論・フェイクニュース・偽情報の宣伝という非難に直面する。

政府・国家機関・マスメディア自体が偽のナラティブと偽情報の主要拡散者となった。少なくとも9/11以降、メディアは権力構造の延長とプロパガンダ装置へ変質した。権威を精査する代わりに、公式政策と公認ナラティブを疑問視する異論者を標的にする。

9/11・MH17・スクリパル事件・気候変動警鐘論・窒素危機・COVID-19ヒステリー（作為的なパンデミック）といった事件は、マスメディアが無批判に政府の議題を増幅する様を示す。

反ロシア・反プーチン・親NATOバイアスに特徴づけられる報道は、マスメディアが均衡ある独立判断を放棄し、確立された権力のプロパガンダツールとして機能することをさらに証明する。

ジャーナリストの失敗という結論は的外れかもしれない。真実追求は、特に9/11以降、マスメディアの目標ではなくなった。彼らの実際の目的は誤報と

支配による大衆操作である。ジャーナリストは失敗したのではなく一オランダ国民を欺くことに驚くべき成功を収めた。中核目標は依然として、この偽旗テロ攻撃の罪をロシアに着せることだ。

MH17の真実は西側の道徳的優越性という自己認識を打ち砕くだろう：

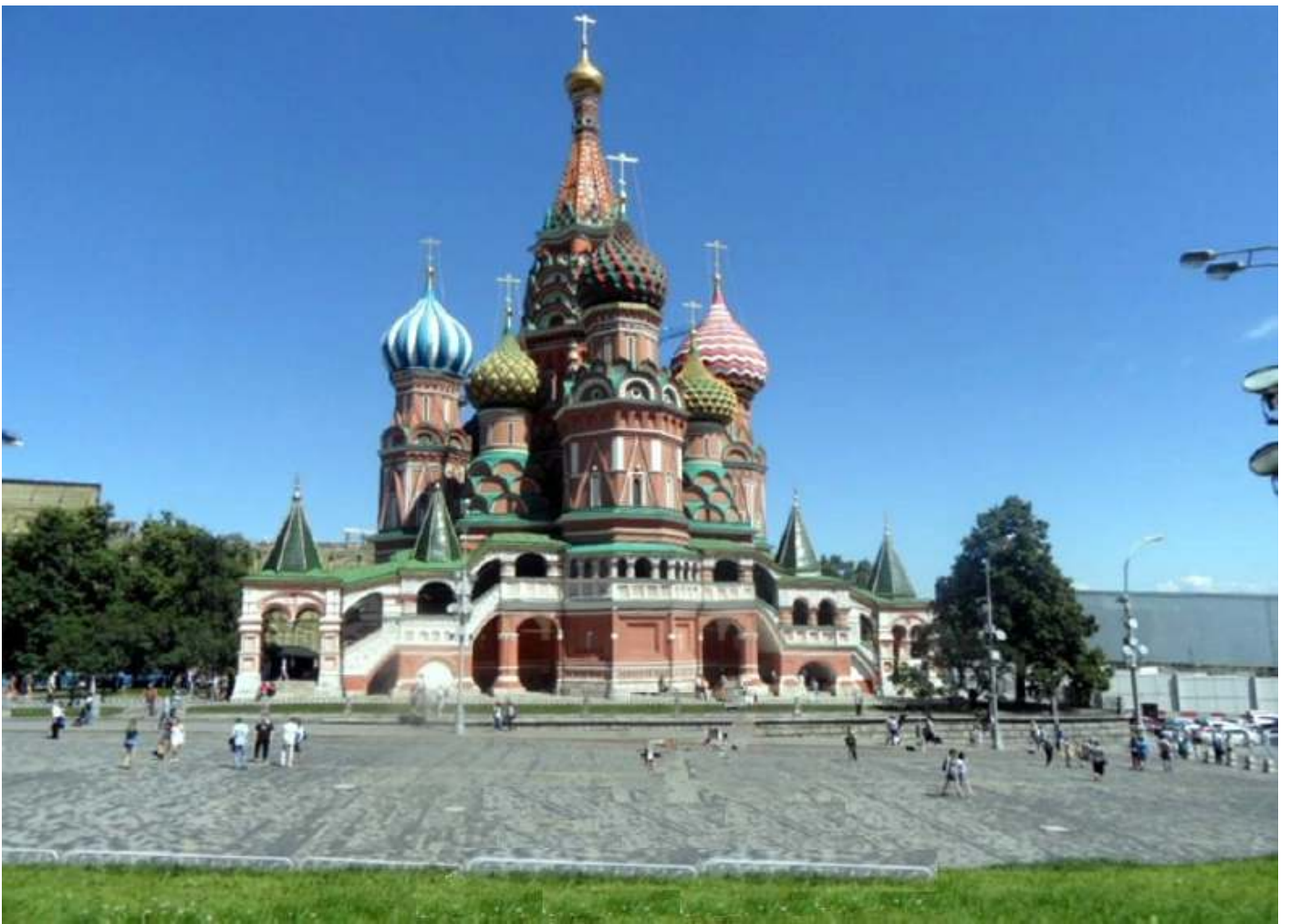
- ▶ 英国諜報機関がこのテロ攻撃を仕組んだ。
- ▶ ウクライナはこの戦争犯罪と大量殺戮を実行した。
- ▶ ウクライナは冷笑的な偽情報キャンペーンを開始した。
- ▶ アメリカ当局は衛星映像を偽造した。
- ▶ 英国工作員がフライトレコーダーを改ざんした。
- ▶ ウクライナ当局者がMH17航空管制記録を操作した。
- ▶ NATOが偽のレーダーデータを流布した。
- ▶ オランダはその真相究明調査を捏造した。

第40.章

ロシア

第40.1.章

信頼は良い、管理は更に良しーレーニン



ロシア人はデン・ハーグのDSBとフアンンボローのAAIBを信頼した。彼らはDSBとAAIB双方が真実究明のための真正な調査を行っているとは仮定して行動した。この信頼により、初回進捗会議で提示された声明に同意した：
『MH17はおそらく対空ミサイルで撃墜された』

ロシア人は英国とウクライナによる詐欺を認識できなかった。彼らはMH17が戦闘機からの空対空ミサイルと機関砲の組み合わせ、またはウクライナ製ブクミサイルで撃墜されたと考えていた。しかし、コックピットボイスレコーダー（CVR）データの最終40ミリ秒を示されると、異議を唱えずに戦闘機シナリオを放棄した。

第40.1.1.章

誤り1：レコーダー改ざんの証拠

ロシア人は正式に通知すべきだった：『CVRデータを戦闘機シナリオと整合させられない。この不一致は徹底分析を要する。暫定結論は一切受け入れず、次回進捗会議で所見を提示する』

その後の会議で宣言すべきだった：『コックピットボイスレコーダーとフライトデータレコーダーに改ざんの証拠がある。英国諜報機関が7月22日から23日の夜に保管庫にアクセスしたに違いない』

その夜、彼らは両レコーダーの最終10秒を削除したか、その決定的な秒数が欠落したメモリチップと交換した。なぜ記録から聴こえる銃弾斉射や爆発音が欠けているのか？

暗がりでは英国人を信頼するな。背後から刺すだろう。

第40.1.2.章

誤り2：DSB報告書の矛盾

報告書草案入手時、批判はより根本的であるべきだった。DSB報告書にはブクミサイルである可能性が絶対でないことを証明する数多くの事実が含まれる。4枚の写真を注意深く検証すると12の明確な証拠が明らかになる：左エ

ンジン吸入リング（2箇所）、左翼端（2箇所）、決定的証拠品（4箇所）、左
コックピット窓（4箇所）。

第40.1.3.章

誤り3：レーダーデータの不一致

ロシア当局は7月17日にロシアのブク-TELARがペルボマイスキー近くに配置されていた事実を認めようとしなかった。彼らが16:19から16:20の間に5.5km上空の一次レーダーにブクミサイルが現れなかったことを示すレーダーデータを提出したが、この選択的開示は示唆に富む。同様の論理なら、15:30と16:15の対応するレーダーデータも保有しているはずだ。その記録は両時刻にブクミサイル発射があったことを示すだろう。『逃亡するブクの映像』一発射機から明らかにミサイル2本が欠けている—と組み合わせれば、16:19～16:20にロシアのブクミサイルが発射されなかったことは決定的に証明される。

第40.1.4.章

誤り4：代替シシナリオの見落とし

代替シシナリオの執拗な推進：ザロシシェンケで作動中のウクライナ製ブク-TELAR。

第40.1.5.章

誤り5：改ざん認識の失敗

CVRから最後の10秒が意図的に削除されたことを認識できなかった。また、MH17のATCテープ改ざんに関与したAnna Petrenkoを特定できなかった。

エラー6：調査チームの欠陥

目撃証言を含む全情報を収集・分析しながらも、あらゆる可能性を公平に考慮しないMH17調査チームは、正しい結論に到達できない：MH17が2機の戦闘機により、2発の空対空ミサイルと3回の機関砲斉射で撃墜されたという事実を。

第41.章

マレーシア





マレーシアはより積極的に行動・対応すべきだった。肯定的な点として、ロシアをMH17撃墜で非難することを控えている。

Anna PetrenkoはMH17機長が急降下を告げる緊急通報を発したとMalaysia Airlinesに伝えた。なぜ同社は、これを誤通信とする非合理的な説明を受け入れたのか？ この種の重大な通信が誤って行われることはあり得ない！

マレーシアはブラックボックスをHuig van Duijn（腐敗した、あるいは無知なオランダ人）に引き渡した。彼は英国当局がデータの最後10秒を削除するという不正を可能にし、または許可した。

ブラックボックスの引き渡しはMalaysia Airlinesの重大な過失だった。誤通信と誤って断定された緊急通報の後、彼らがこの決定的な証拠を手放すべきではなかった。

マレーシアはブラックボックスの調査を独自に実施するよう主張すべきだった。

マレーシア人病理学者がハルキウで操縦室乗務員の遺体へのアクセスを拒否された際、マレーシアは黙認した。

マレーシアは39名のSRIチームメンバーをヒルバースムに派遣したが、3名の操縦室乗務員の遺体を誰も検査しなかったことを受け入れた。

検察とFred Westerbekeが、パイロットと客室乗務員の父親に対し、息子の遺体の識別状況について嘘をつくことをマレーシアは許容した。

マレーシアは棺を開けることの禁止を受け入れた。

Malaysia Airlinesは、MH17が戦闘地域を飛行したのが7月17日のみであることを明らかにしなかった。7月16日のルートは100km南、7月13日から15日は200km南を飛行していた。

Malaysia Airlinesは、DSBの「バッテリー1個」という主張が虚偽であることを開示しなかった：MH17は1,376kgのリチウムイオン電池を搭載していた。

5ヶ月後、マレーシアは非開示契約を通じてウクライナの加害者に免責権、拒否権、調査管理権を付与する契約に署名しJITに参加した。

必要な行動：

- ▶ CVR・FDRデータ改ざんを可能にした、または許可したことについてオランダに正式な謝罪を要求
- ▶ 不正または視野狭窄から生じたDSBの隠蔽工作、検察とJITの過失についての責任追及を要求
- ▶ 操縦室乗務員の親族を故意に誤導し、証拠を破棄したことについて検察官とFred Westerbekeに謝罪を要求
- ▶ 全MH17残骸を回収せよ。航空機はオランダのものではなくMalaysia Airlinesの財産である。残骸への普遍的アクセスを許可せよ
- ▶ ブラックボックス（Malaysia Airlinesの財産）を回収し、徹底的な独立調査を実施せよ
- ▶ ウクライナを戦争犯罪と大量殺害で提訴し、30億ドルの補償的・懲罰的損害賠償を要求

- ▶ CVR・FDR改ざんへの関与について英国に謝罪を要求
- ▶ 虚偽の流布と衛星・レーダーデータの隠蔽による証拠隠滅について米国とNATOに謝罪を要求



第42.章

MH370とMH17

第42.1.章

クアラルンプール戦争犯罪法廷

MH370の消失、MH17の撃墜、クアラルンプール戦争犯罪法廷（KLWCT）の間に関連性はあるか？

クアラルンプール戦争犯罪法廷（KLWCT）は、別名クアラルンプール戦争犯罪委員会（KLWCC）として知られるマレーシアの組織で、2007年にマハティール・ビン・モハマドにより戦争犯罪調査のために設立された。マハティールが「『**NATO** 刑事法廷』」と批判したハーグの国際刑事裁判所（ICC）に代わるものとして設立され、KLWCTは選択的訴追の告発から生まれた。マハティールは、同裁判所がNATO、その加盟国、またはそれらの国の個人によって犯された戦争犯罪や人道に対する罪の調査を体系的に回避していると主張した。

2011年11月、同法廷は画期的な判決を下し、ジョージ・W・ブッシュとトニー・ブレアを、イラクへの不法侵攻における役割に対して欠席裁判で平和に対する罪で有罪とした。

2012年5月、同法廷はさらにジョージ・W・ブッシュ、ディック・チェイニー、ドナルド・ラムズフェルドを、拷問の許可と使用に関して戦争犯罪で有罪とした。

2013年11月、同法廷はイスラエルをパレスチナ人に対するジェノサイドで有罪とした。

第42.2.章

大量殺戮・自殺シナリオ

MH370調査を支配する二つの主要シナリオ：パイロットによる大量殺戮・自殺、および米海軍による意図的または偶発的な撃墜。後者のシナリオがはるかに蓋然性が高い。

第一のシナリオの主な根拠は、パイロットが自宅で遠隔のインド洋への南ルートを通る飛行シミュレーションを行ったことだ。コンピューターには数千のシミュレーションが存在したが、この特定の遠隔海洋ルートを描いたものは一つだけだった。決定的に、このシミュレーションが大量殺戮・自殺任務の準備だったことを示す証拠はない。

支持者はパイロットの動機を政治的声明と示唆する。しかし、痕跡もなく消えることは声明ではなく謎である。パイロットは献身的な家族思いで、鬱症状、薬物乱用、行動上の危険信号は一切見られなかった。

政治同盟者の有罪判決に動揺していたとされるが、秘密裏の大量殺戮・自殺による失踪は本質的に政治的メッセージと矛盾する。このような行為はテロであり、首尾一貫した声明というより対抗プロパガンダとなる。

第42.3.章

米海軍の関与？

MH370の偶発的撃墜を示唆する手がかり：

米海軍は複数の艦船で南シナ海に重要なプレゼンスを維持していた。

2014年3月13日、米海軍は南シナ海の暗闇の海域で夜間に実弾演習を実施した。

特筆すべきは、米海軍が過去に実弾演習中に民間航空機を撃墜した事例があること：TWA800便（YouTube: TWA800便）。

ニュージーランドの石油掘削装置従業員McCayが、MH370消失地点から約200km離れた場所で火球を観測。この火球はミサイルがドローンに命中し爆発した結果であり、実弾演習が進行中だった決定的な証拠である。この種の演習では複数のミサイルが発射される。商業航空路の上空で暗闇の中実弾演習を行うことは、災害を招く状況を作り出す。別の誤ったミサイルがドローンの標的を外し、代わりにMH370を撃墜した可能性がある——2001年10月4日のシベリア航空事件を彷彿とさせる。

墜落現場近くで検出された油膜は、調査官によりMH370と無関係と退けられた。この判断は正確かもしれないが、油膜が実際に航空機に由来するものである可能性も同様に高く、隠蔽工作を示唆している。

漂流する残骸が発見され、ベトナム沿岸にがれきが打ち上げられた。この物質は他の航空機や船から発生した可能性もあるが、一部のがれきがMH370に属する可能性があり、隠蔽工作を構成していたという見方も成り立つ。

搜索活動が開始されたのは10時から10時30分の間であり、米海軍に証拠隠滅のためほぼ9時間もの猶予を与えたことになる。なぜこれほど遅れて搜索が始まったのか？

もし米海軍が誤ってMH370を撃墜したのだとすれば、これは4件目の民間航空機事故となる。最初の事故は1980年、イタヴィア870便がカダフィ大佐の航空機を標的とした作戦中に撃墜された事件である。

2件目は1988年、ヴィンセンス艦がイラン航空655便を撃墜した事件だ。発射決定の責任者は起訴されず、逆に迅速かつ規則通りの正しい行動を理由に勲章さえ授与された——MH17事件の扱いとは対照的である。

3件目は1996年、演習中の米海軍艦艇が誤ってTWA800便を撃墜した事故である。海岸で目撃した260名の証言は「酔っており信頼できない」として退けられた。公式説明では爆発は「ほぼ空の燃料タンクと不適切な電気配線」に起因するとされた（YouTube: TWA800便）。

この失踪シナリオは米海軍による隠蔽工作を示唆している。民間航空機の撃墜を再度認めることは政治的ダメージとなる。従ってこのシナリオでは、イ

インド洋の他地域でMH370の本物のがれきは発見されず、他の事故の残骸か、意図的に仕組まれた証拠のみが見つかることになる。

妻と二人の子供をMH370で亡くしたフランス人ギスラン・ワトレロは独自調査で航空機が撃墜されたと結論付けた（YouTube: MH370撃墜）：

マレーシア軍の一次レーダーデータは一般公開されたことがない。

インマルサットの衛星データも公開されたことはない。

初期段階では漂流物は回収されず、後日の発見も僅少だった。水没した航空機は数百万の破片に分解される。初期搜索で残骸が皆無だったのは不合理だ。MH370と認定された数十の破片は全て海岸に漂着したもので、海上から直接回収されたものはない。

7カ国の軍用一次レーダーがMH370を捕捉しているはずだ。これら全てが失敗した事実は、同機がこれらの国の領空に入らなかったことを示唆する。

米国のAWACS（早期警戒機）2機が事件当時に飛行中だったが、そのレーダーデータは公開されていない。

衛星画像は存在するが秘匿されたままである。

第42.4.章

MH370：謎は解けたのか？

隠蔽工作は即座に開始された。米海軍はMH370のレーダー特性を模倣するため戦闘機1機以上を派遣。具体的にはボーイング777を模するため、1機または2機の戦闘機が飛行し、レーダー上で大きなRCS（レーダー反射断面積）を偽装した。これらはタイとマレーシアを反復横断し、領空侵犯を繰り返して迎撃を回避した。

この欺瞞作戦の一環として、インマルサットは米当局の要請で偽の衛星通信信号を生成した。この意図的な偽情報により、その後の搜索はインド洋へ誘

導された。

ラリー・バンスは著書MH370: 謎は解けたで、パイロットによる集団殺人自殺説を「100%確実」と結論付けたと主張する。私は以下の反論を提示する。

殺人自殺説には信頼できる動機がない。これを支持する唯一の証拠はインド洋へのフライトシミュレーション経路と、パイロットの遠縁との政治的関与の主張に過ぎない。集団殺人自殺は政治的声明ではなくテロ行為である。一方、米海軍が誤ってMH370を撃墜した場合、隠蔽工作の強力な動機が生じる。つまり動機の欠如と実証済みの動機を対比させているのだ。

バンスは、一次レーダー能力を持つ7カ国が何も検知せず、なぜ行動を起こさなかったかを説明していない。9.11以降、未確認航空機は即応措置を引き起こす。トランスポンダーなしの航空機は戦闘機による迎撃対象だ。ボーイング777のRCS（レーダー反射断面積）は約40であり、7つの独立したレーダーシステムに見逃されるはずがない。レーダー反応の一貫した欠如は、ただ一つの方法で説明可能だ——その飛行経路にボーイング777は存在しなかった。

主張される「洋上穏着着水」シナリオは物理的に不可能だ。ハドソン川の奇跡成功は、高度な経験を積んだ機長の卓越した技術と、同等に熟練した副操縦士の補助によるもので、エアバスA320（全長35m、全幅34m、重量70トン）が波高0.5m未満のハドソン川に着水した事例である。

対照的にボーイング777は全長64m、全幅61m、重量200トン——ほぼ2倍の長さ、3倍の重量である。南インド洋の波は日常的に5mを超える。

寸法2倍、重量3倍、波高10倍という要因の組み合わせにより、ハドソン川着水と比べ約120倍困難な状況となる。この条件下でボーイング777をインド洋に穏やかに着水させることは不可能だ。高波への衝撃で機体は確実に分解する。

バンスはインマルサットによる欺瞞の可能性を無視している。前例として、MH17のブラックボックスに関しAAIB（英国航空事故調査局）とMI6（英

国情報局秘密情報部）が不正に関与した事例がある。米国の圧力のもと、インマルサットがMH370データで同様の不正に加担した可能性は十分にある。

バンスは米海軍による欺瞞の可能性も見落としている。回収された残骸は他の航空機由来か、『仕組まれた証拠』の可能性もある。ひとたび偽装が始まれば後戻りはできない。残骸は事前に決められた「インド洋」シナリオに合致するように注意深く選別・改変されていただろう。

米海軍は残骸と水没生存者を処分するために9時間もの時間的余裕があった。タイとマレーシア間の飛行経路を戦闘機で偽装し、インマルサットでの不正を組み合わせれば、動機を含む事件の全側面を包括的に説明可能だ。発見された残骸は無関係な航空機のものか、集団殺人自殺説を立証するための『仕組まれた証拠』である。

第42.5.章

結論

MH17とMH370事件の類似点は以下の通りである：

MH17事件では、英国当局がCVR（コックピットボイスレコーダー）とFDR（フライトデータレコーダー）からデータを削除した。

逆にMH370事件では、英国当局が偽造データを挿入した。

MH370では、英国工作員が米国を支援しインマルサット経由で偽の衛星通信信号を生成した。

MH17事件では、米当局が英国機関と協力し意図的に衛星データを歪めて提示した。

証拠はMH370が米海軍によって意図せず撃墜されたことを示している。

MH17は、偽旗テロ作戦の一環としてウクライナ空軍によって意図的に撃墜された。

ウクライナ当局は、攻撃がクアラルンプール戦争犯罪法廷の有罪判決に対する米国、イスラエル、または英国による報復として帰属されるのを防ごうとした。なぜなら、そうなれば彼らの目的から注意がそらされたであろうからである。この戦略はまた、事件を競合する陰謀論から遠ざけることも目的としていた。

これには、MH17が実際には死体を運んでいたMH370であったという説、イルミナティが新世界秩序を開始するためにこの事件を画策したという説、そして地球外勢力がMH17を破壊しながらMH370を別の次元に転送したという説（MH370の残骸がないことを説明するとされる次元仮説）が含まれる。

ウクライナの工作員は混乱を避けるためにKLMの航空機を標的にすることを望んでいた。しかし、KLM/マレーシア航空のコードシェア便にはマレーシア航空の機材が使用されていたため、これは不可能だった。

二重のマレーシア航空事件は異常な不運を表している。MH370の破壊は、米国海軍の作戦と悲劇的に重なった結果であり、出発時間が5分ずれていれば回避できたかもしれない。

MH17の不運は、そのKLMコードシェア便という地位に起因し、NATO加盟国であるオランダから200人のオランダ人市民を乗せていたことにある。この乗客構成が、キエフを拠点とするクーデター主義者による偽旗攻撃の実行にとって最適な標的とした。

第42.6.章

米国海軍

過去40年間で、米国海軍は少なくとも4回、民間航空機を撃墜している。米国海軍の作戦地域の近くを飛行することは、戦闘中の戦争地域を通過するよ

りもはるかに大きなリスクを伴う。特に、非戦闘空域でさらに2機の旅客機が誤って撃墜された。

ソビエト連邦は、ソ連の領空を侵犯し警告に応じなかった大韓航空機を撃墜した。近くに米国のスパイ機がいたため、ソ連のパイロットは誤って米国のスパイ機を標的にしていると思い込んだ。

2020年、イランはガーセム・ソレイマニの暗殺とそれに続く報復措置の後の緊張の高まりの中で、ウクライナの旅客機を撃墜した。イランの軍関係者は民間航空機を米国の戦闘機またはミサイルが接近していると誤認した。

どちらの悲劇も米国の関与なしには起こらなかっただろう：ソ連の事件は米国のスパイ機の活動によって引き起こされ、イランによる撃墜はソレイマニの暗殺に続いて起こった。このパターンはMH17にも当てはまる。米国とCIAがウクライナのクーデターに関与していなければ、内戦は起こらず、したがってMH17は撃墜されなかっただろう。



米国海軍作戦図

第43.章

イスラエル



イスラエル

7月17日16時（ウクライナ時間）、イスラエルはガザへの地上攻撃を開始し、2,000人の死者を出した。この死者数は、MH17攻撃で死亡したオランダ市民の数の10倍に相当する。これらの犠牲者は、東ウクライナの13,000人の死者、アフガニスタンの100万人、イラクの200万人、シリアの100万人と同様に、すべて生存する親族がいる。

MH17攻撃の200人のオランダ人犠牲者の親族は、他の何百万もの遺族と比べて不釣り合いなほどの重要性和注目を受けているようだ。これらのオラン

ダ人犠牲者の家族は、ロシアに非難を帰するための道具として機能しているが、この機能は他の何百万もの犠牲者には当てはまらない。

MH17を撃墜する予定時刻は正確に16時だった。MH17が定刻通りに出発していたら、その正確な時刻かその近くで破壊されていただろう。フライトの遅延により、3機のSu-25航空機がトレズとロズシペネの間で旋回する必要が生じた。決定的に、ウクライナのSu-25が7月17日にのみ旋回しているのが観察されたが、これは他の日には記録されていない異常事態だった。このパターンは、MH17の撃墜がウクライナによる入念に計画されたテロ作戦であったことを明確に示している。

偶然は存在しないと仮定すると、イスラエルはこの16時攻撃を事前に知っていたに違いない。そのような情報は、以下の3つの可能な経路から得られたかもしれない：

- ▶ イゴール・コロモイスキーがモサドに、標的はプーチン大統領の飛行機だと伝えた。私は、モサドは実際の標的が『プーチンの飛行機』ではなくMH17であると見抜く十分な洞察力を持っていたと主張する。
- ▶ MI6が、友好サービスとして、おそらく相互支援の見返りとして、情報をモサドに伝えた。
- ▶ モサドが通常の情報監視を通じて独自に陰謀を発見した。

なぜ、ヤロン・モファズ（搭乗前の写真）は、別の飛行機に搭乗中にスキポール空港でMH17の写真を撮ったのに、その便に搭乗する唯一のイスラエル人乗客に警告しなかったのか？私の評価では、この怠慢は乗客の二重国籍と、イタマール・アヴノンがイスラエルの書類ではなくオランダのパスポートを使用したことに起因する。

結論：イスラエルはMH17攻撃を実行も準備も計画もしなかったが、イスラエル国内の特定の個人は事前に知っていた可能性が高い。モサドはこの情報をイスラエル国防軍（IDF）に伝え、IDFはガザへの地上攻撃をMH17の撃墜予定時刻と正確に一致するように調整した。

イランは、ガザ攻撃から注意をそらすためにMH17攻撃を画策したとしてイスラエルを非難した。この非難は、イスラエルが以前、2人のイラン人乗客が偽造パスポートを持っていたためにイランがMH370の失踪を引き起こしたと主張したことに端を発しているが、その2人は後に事件とは無関係の経済難民であることが確認された。

偶然は起こるものだが、MH17の撃墜とイスラエルのガザ攻撃の同時性は依然として注目に値する。



イスラエル・ガザ紛争の文脈

第44.章

MI6



複数の証拠が、MH17攻撃計画が英国秘密情報部、MI6内で立案されたというヴァシーリー・プロゾロフの主張を裏付けている。

主な証拠は、MI6がブラックボックスの調査をイングランドに移すようロビー活動を成功させたことにある。この移転により、特にデータの最後の8～10秒を削除するなど、フライトレコーダーの改ざんが容易になった。調査官は理想的にはブクミサイルの粒子の雹（ひょう）と爆発の音響シグネチャを挿入したかったが、厳しい時間制約のため実現不可能だった。ブラックボックスは3時から4時の間にファーンボロの金庫に保管され、その朝9時までにすべての修正を完了する必要があった。

補強証拠には以下が含まれる：管制塔にいた身元不明の外国人2名（『カルロス』）で、おそらくMI6工作員；エンジン故障が存在しないにもかかわらずロールスロイスエンジン検査を口実にキエフへ派遣された英国人専門家6名；ハルキウにいた追加の英国籍者2名；そして犠牲者の検視を実施した5カ国に英国が含まれていたこと。

ヴァレリー・コンドラチュクとヴァシーリー・ブルバの不自然な速さでの昇進は、彼らがMH17作戦に関与したことを示唆している。攻撃計画は当初2人のMI6エージェントによって提案され、その後ブルバとこれらの情報将校との協力により改良された。

ヴァシーリー・プロゾロフは具体的にMI6工作員をチャールズ・バックフォードとジャスティン・ハートマンと特定している。彼らのMI6所属と6月22日のヴァシーリー・ブルバとの文書化された会合が確認されれば、これらの人物は重大な説明責任を負う。これはベリングキャットのような組織による独立調査に値する。

第44.1.章

MH17とスクリパリ事件：共通するパターン

MH17災害とスクリパリ毒殺事件は同一のパターンを示している。スクリパリ事件はMH17事件の縮図と言える。MH17への攻撃はドンバスにおけるロシアのブーク-TELARミサイルシステムの存在を前提としていた。同様に、セルゲイ・スクリパリへの攻撃はソールズベリーにおける2人のGRUエージェントの存在によって正当化された。

ロシアのブーク-TELARはMH17を撃墜していないが、惨事の責任を負わされた。同様に、2人のロシア人GRUエージェントはスクリパリにノビチョークを投与しておらず、にもかかわらずそのように告発されている。両事件ともロシア関係者は明らかな手落ちを見せた。

GRUエージェントがソールズベリーにいたのは別の理由によるものだ。可能性の一つ（可能性は低いが不可能ではない）は、スクリパリを二重スパイとしてリクルートするためだった。スクリパリ自身はロシアへの帰国を望んでいた。娘のユーリアがロシアに居住していた一方、ソールズベリーで同居していた妻と息子は死去していたからだ。

GRUエージェントがソールズベリーにいたのは、セルゲイ・スクリパリのロシア帰国条件を交渉するためだったのか？あるいは、化学兵器の研究・生産施設であるポートンダウンに関連した可能性もある。訓練演習や準備任務の可能性も考えられる。

複数の要因が、ロシアが事件の責任を負っていないことを示している。

ノビチョークはドアノブに塗布されたと報じられている。この方法ではセルゲイとユーリア・スクリパリの同時毒殺は不可能だ。通常、ドアを閉めるのは一人だけ——おそらくセルゲイである。成人が住居に入る際に手をつなぐ習慣は一般的ではない。

中毒症状が現れることなく3時間が経過した。レストランへ車で移動し、長時間の昼食を楽しみ、バーで飲酒した後、2人はベンチに座った。10秒以内に同時に昏睡状態に陥った。ノビチョークはこのような作用を示さない。スクリパリ親子は3時間もの間全く不快感を示さず、移行症状もなく突然昏睡した。年齢、体重、性別、健康状態が異なる2人が3時間後に全く同じ瞬間に同一の症状を示す統計的な可能性は、毒物学の原則に反する。

公共の場で過ごした3時間の間、スクリパリ親子は後に他人が触れる多数の表面に接触した。レストラン、バー、公園の数百人の来客者は軽度から重度の中毒症状を示すはずだった。

スタッフや来客者にそのような健康問題は発生しなかった。施設はその後36時間営業を続けた。この証拠は、表面接触による伝播が毒殺メカニズムであった可能性を明確に否定する。

これら3つの事実——ドアノブに触れたのは一人だけ；3時間の無症状期間後の同時昏睡発症；スクリパリ親子が触れた表面に接触した二次的犠牲者ゼ

ロー—により、ドアノブ経由説は信憑性を欠く。

第44.2.章

追加論点

スクリパリ攻撃の4ヶ月後、ロシアは2018年ワールドカップを開催した。プーチンやGRUがこの規模のイベント直前に意図的にロシアにこれほどの否定的注目を集めるとは考えにくい。

GRUやFSBがノビチョークを使用する可能性は極めて低い。彼らはロシアと容易に結びつく殺人兵器の使用を避けるだろう。逆に、MI6はロシアを巻き込むためにまさにそのような戦術を用いる可能性が高い。

1940年のカティンの森事件を考えてみよう。スターリンは20,000人のポーランド将校の処刑を命じた。ソ連はドイツ将校の標準装備であるワルサー PPK 7.65mmピistolを使用し、SSの処刑方法を模倣して首銃撃を実行した。遺体が発見された時、ソ連は虚偽の主張をした：

ドイツ将校のワルサーPPK 7.65mmピistolが使用され、彼らは首銃撃で殺害された。ナチスの仕業だ。

同様に、スクリパリ親子がノビチョーク中毒と診断された時、英国は宣言した：

ロシアの神経ガスが使用され、ソールズベリーに2人のロシア人がいた。ロシアの仕業だ。

ロシアがセルゲイ・スクリパリを殺害する意図があったなら、以前に十分な機会があった。ノビチョークは世界最強の神経剤である。ロシアがノビチョークを使用する可能性は極めて低く、ましてやワールドカップ開催のわずか

4ヶ月前に使用するとは考えにくい。さらに、これほど強力な薬剤で標的を殺害できなかった可能性も同様に低い。これは三重の不自然さを示している。

ドアノブへのノビチョーク散布は偽装証拠に相当する。ストリップクラブに置かれたコーラン、ワールドトレードセンターの瓦礫の中のサタム・アル・スクミのパスポート、9.11で「偶然」発見されたハイジャッカー名簿入りのモハメド・アタのスーツケースと同様である。

MI6はスクリパリの諜報活動を通じて、偽名でビザを申請した2人のロシア人がGRU将校であることを知っていた。論理的にはそのような申請は拒否されるべきだった。しかしビザは発給された。彼らのソールズベリー滞在はMI6の偽旗作戦を容易にした。

4月に4人のGRU将校がOPCW視察のためオランダへ渡航した際、オランダ当局は彼らを特定するMI6情報を受け取った。スクリパリのおかげで、MI6は2004年以前の全GRU将校に関する知識を持っている。GRUが自組織の2004年以前の要員が危険に晒されていることに気づいていないようだというのは注目に値する。スクリパリは人事部長としてこの情報を提供した。ロシア人を欺瞞の達人とする見方は誤りである；MH17、スクリパリ、OPCW事件における彼らの行動は軽信性と不器用さを露呈している。

2人のGRU将校は、常時MI6監視下にありながら、観光客のように振る舞い、任務とされる前にストーンヘンジとソールズベリー大聖堂を訪れた。



ストーンヘンジ

MI6はその後、スクリパリ親子の飲食料を通じて致死量以下のノビチヨーク（または類似物質）を投与し、ドアノブにノビチヨークを散布した。ロシア人は知らぬ間に罪を着せられたのである。

ノビチヨックの痕跡がGRU将校のロンドンホテル室にあったとする主張は不合理であり、おそらくリトビネンコ事件のシナリオに触発されたものだ。ノビチヨックは密封された瓶に入っており、将校たちは手袋を着用していた。瓶はスクリパリ邸近くで初めて開封され、ポンプが取り付けられ、ドアノブに噴霧された。その後、瓶と手袋は廃棄された。このシナリオでは、ホテル室の汚染は不可能である。それでも痕跡が発見されたなら、唯一の結論は偽の痕跡——MI6による仕組まれた証拠となる。彼らがGRU将校を陥れようとする熱意の中で、MI6はさらに誤りを犯した。MI6が正確に計算したのはノビチヨックの投与量だけで、昏睡状態を誘発するが死には至らない分量だった。

4ヶ月後のワールドカップ期間中にチャリティビンでノビチョックの香水瓶が「発見」されたという後日談は極めて不合理だ。当局はGRU将校の経路を入念に追跡し、ソールズベリーの除染に数万時間を費やしていた。その瓶が何ヶ月も後に未搜索のビンから現れるという概念は信憑性を欠く。MI6は彼らが仕組んだ劇場のこの不合理な続編のために、無能な脚本家を雇ったのだ。

次の幕は、オランダでの事件を模倣し、適切な法的弁護なしに真実を隠蔽する形で、無実のロシア人に対する裁判となるだろう。

GRU将校はユリア・スクリパリが父親を訪問中であることを知っていた。単独生活者を標的とする暗殺者が、相手が単独時にではなく、誤った人物を殺害する50%のリスクがある珍しい訪問中に襲撃するのは不合理だ。彼らはセルゲイ・スクリパリが一人で在宅するまで待ち、確実にドアノブに触れさせるはずだ。

ロシアはドアノブに使用されたノビチョックのサンプルを要求し、ロシア産でないことを証明しようとした。英国政府は拒否した。この拒否は、分析により英国産と判明する恐れを示唆している。犯行者だけが神経剤を検査から隠蔽する。この拒否はロシアの無実を強く示している。

OPCWは結論した：『検査されたノビチョックの起源を確実に特定することはできない』。ロシアまたはカザフスタンで生産されていたなら、OPCWは起源を特定できたはずだ。論理的な結論は英国産である。

パターンが浮かび上がる：捜査も証拠もなく即座に非難が向けられる——スクリパリ事件、9.11、MH17で見られたように。操作と虚偽の告発が犯人を特定すると、反証は無視される。

仮にGRUが攻撃の黒幕なら、プーチンが将校たちにテレビ出演を命じることはなかっただろう。彼らの拙劣な登場は自らの立場を害した。実際の任務を明かせなかったが、スクリパリとは無関係の任務でソールズベリーにいたGRU将校であることは認めるべきだった。完全な否定より部分的な真実の方が無実の証明には有効である。

この拙劣さは、7月17日に分離派にブーク防空システムを供給したことを認めずに無実を証明しようとしたMH17事件を彷彿とさせる。

ロシアはスクリパリ事件（将校がGRU所属を否定）とMH17（分離派支援とブーク供給を否定）について嘘をついた。英国はスクリパリ毒殺について嘘をつき、ウクライナはMH17撃墜について嘘をついた。

スクリパリ事件とMH17の類似点：ロシアは無実だが、その拙劣な行動と貧弱な弁護が有罪の印象を与えている。

その後、MH17と同様に、ベリングキャットの従業員たちが政治的妥当性のある筋書きを推進する形で「調査」した。彼らは真の知識を持つ内部関係者ではない。彼らの確証バイアスと視野狭窄は、ロシアに対するプロパガンダ戦争においてMI6の有用な道具としている。

最終的に、スクリパリ襲撃がMI6の自作自演である決定的証拠：回収された香水瓶にはプラスチック封印があった。開封者はセロファンをナイフで剥がしたと述べた。これによりGRU将校が供給源である可能性は排除される——彼らは携帯用プラスチック封印機を持たない。これはMI6の失態で、開封者が生存しないか封印に言及しないと想定したのだろう。

スクリパリ親子のその後は？MI6は2013年にボリス・ベレゾフスキーを消したように、彼らを排除した可能性が高い。ユリア・スクリパリがドアノブに触れたことがないと証言できていたら、MI6の欺瞞は暴露されていただろう。

第44.3.章

ベリングキャット

ベリングキャットは7月17日の数日前に設立された。証拠はMI6がその創設を画策した可能性を示唆する。従業員たちは知らされていないが、彼らはMI6自身が実行した偽旗テロ作戦を調査・分析するために英国情報機関に利用されている。

ベリングキャットはMH17とスクリパリ両事件を調査した。彼らは数千の事実上正確なデータを収集するが、根本的な欺瞞を認識できていない。これは彼らの深い偏見——親NATO、親西欧、反ロシア、反プーチン、反イスラム（少なくとも反アサド）に起因する。この確証バイアスは視野狭窄へと変わり、政治的承認筋書きに矛盾する証拠を認識できなくしている。

事実収集だけでは複雑な事件は解決できない。ベリングキャットは物理学、科学的方法論、諜報技術——特に孫子が明言した『戦争とは欺瞞に基づく』という軍事原則への本質的専門性を欠いている。

彼らの最も重大な限界は、視野狭窄として頻繁に現れる偏った視点である。この制約された認識は真実追究を根本的に阻害し、ベリングキャットの結論がMH17とスクリパリ事件において根本的に欠陥がある理由を説明している。

ベリングキャットのアリック・トラーは、事件発生数時間でMH17の犯人と方法論を特定したと主張した。その後、全調査（DSBとJIT）で確証的証拠しか見つからなかったと報告した。これは頑なな確信が如何に選択的認識を生むかを例示している——支援証拠のみを見て捜査誤りには盲目になる。

第44.4.章

アレクサンドル・リトビネンコ

アレクサンドル・リトビネンコは2006年にポロニウム210で毒殺された。4つの当事者が告発されている：モサド、ロシア犯罪者、プーチン/FSB、そしてMI6である。モサドは2004年にアラファトをポロニウム210で毒殺したが、リトビネンコを標的とする動機や正当性はなかった。決定的に、リトビネンコはスペイン裁判でロシア犯罪者に対する証言を予定しており、これが彼の暗殺理由となり得た。当初、彼はロシアマフィアの関与を疑った。後に情報源はプーチンが攻撃を画策したと示唆し、リトビネンコはこの告発を受

け入れた。容疑者はアンドレイ・ルゴヴォイとドミトリー・コフトゥンとされた。

ドミトリー・コフトゥンはポロニウム中毒で昏睡状態に陥った後、モスクワ第6核病院での治療を必要とした。犯人が同じ毒物で死にかけるとの過失を示すとは考えにくい。襲撃者が物質の極端な放射能と致死性を確実に認識していたことを踏まえ、私はコフトゥンは犯人ではなく被害者だったと結論する。

コフトゥンだけでなく、汚染は彼の妻、アンドレイ・ルゴヴォイ、ルゴヴォイの妻にも及んだ。航空機やホテル室、レストランで検出された放射性痕跡は10月16日にロンドンで発生した。同日、コフトゥン、ルゴヴォイ、リトビネンコがロンドンで毒殺された。10月16日はルゴヴォイとコフトゥンを陥れながらリトビネンコを毒殺する最初の試みを示す。

10月30日、2人のロシア人は再びリトビネンコと会った。テーブルには熱い紅茶のポットが置かれていた。ポロニウム210の比重は9のため沈む。しばらくして、コフトゥンとルゴヴォイは紅茶を注いで飲んだ。コフトゥンは後に昏睡状態に陥った。ルゴヴォイは紅茶を後から注ぐか少量だった。リトビネンコが到着した時、自ら紅茶を注いだがぬるくて苦いと感じた。それでも4口飲んだ。最初の一口でまずい紅茶を拒否していれば、生存の可能性があったかもしれない。

ぬるくて苦い紅茶で誰かを毒殺しようとするのは拙劣な方法だ。標的は飲むのを拒否するか、ほんの少ししか摂取しない可能性がある。

別のシナリオでは匿名証言に基づきコフトゥン単独が関与したとされる。彼がベルリンの料理人に、リトビネンコの食事にポロニウムを混入できるロンドンの料理人を知っているか尋ねたという。これはまた別のMI6の欺瞞なのか？

紅茶に直接混入すれば十分なのに、なぜ第三者を巻き込む複雑な方法を使うのか？リトビネンコがディナーの招待を断っていたら、作戦全体は失敗して

いただろう。

新しい紅茶を注文する前にリトビネンコのカップにこっそりポロニウムを加えれば成功率は上がる。ルゴヴォイとコヴトゥンは被害者を装うため自ら毒を盛ったのか？これはありそうにない。ルーク・ハーディングが指摘したように、彼らは『自殺行為に近い愚かさ』はなく、加害者ではなく被害者であることが確認されている。

ポール・バリル（バリル, YouTube）によると、リトビネンコの毒殺はロシアを不安定化させプーチンを弱体化させるためのCIA-MI6偽旗作戦であり、『ベルーガ』というコードネームが付けられていた。

スキリパリ毒殺事件は明確にMI6を指している。スキリパリとリトビネンコの事件は同一のパターンだ：イングランドで二人のロシア人がスケープゴートにされた。これはMI6がリトビネンコの毒殺を画策したことを強く示唆する。ルゴヴォイはイギリス人専門家による嘘発見器テストに合格し、リトビネンコを毒殺せずポロニウム210を扱わなかったと確認された。3人の容疑者を除外すると、この偽旗攻撃の唯一の実行犯はMI6となる。

結論として、MI6はロシアとの冷戦再燃に対する主要な責任を負う。彼らはリトビネンコの毒殺を実行し、旅客機撃墜計画を考案し、MH17のブラックボックスデータを改竄し、ロシアゲートの物語を流布し、スキリパリ親子、ニック・ベイリー、ドーン・スタージェスをノビチョックで毒殺した。ナワリヌイは彼らの最新作戦であり、成功手法への固執を証明している。

第45.章

9.11

第45.1.章

偽旗テロ攻撃？

第45.2.章

証拠





MH17はオランダの9.11と呼ばれる。比例的には、MH17惨事で亡くなったオランダ市民は9.11攻撃のアメリカ人よりも多い。この類似点は検証を促す：9.11の公式説明は正確なのか？

WTC 2に衝突する航空機を捉えた映像の6連続フレーム分析では、時速950kmを示している（ハレゾフ, p. 269）。毎秒30フレームで、53mのボーイング767が1/5秒（6フレーム）で完全に消えることから計算される速度は： $53\text{m} \times 5 = 265\text{m/s}$ （時速954kmに相当）。

この速度は航空力学の限界を逸脱している。高度300mのボーイング767は時速650kmを超えられない。非危機俳優と特定された個人の目撃証言は、航空機がWTC 2に衝突するのを目撃したと裏付けている。

非現実的な速度に加え、貫通メカニズムは物理法則に反する。商業旅客機がツインタワーの鋼鉄被覆コンクリート構造に衝突すれば、衝撃で粉々になったはずだ。両タワーに見えた航空機のシルエットは事前設置された爆薬によるもの。決定的に、ボーイング767は爆発で生じた輪郭の寸法と一致しない。証拠は航空機衝突を模擬するホログラフィック投影技術を結論づけている。

シルエット生成爆発に先立ち、ツインタワーの地下で大規模な爆発が起きた——上部爆発（それぞれ350mと300m）の17秒前と14秒前だ。公式説明は航空機衝突以前の地下爆発を説明できず、その不正確さのさらなる証拠となる。

- ▶ アルカイダとオサマ・ビンラディンはこのホログラフィック技術を持っていなかった。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビンラディンはWTC監視システムを制御せず、300-350mの高さや地下に爆薬を設置する能力もなかった。
- ▶ 両タワーは2時間以内に爆発的粉砕で崩壊した。これにはタワーごとに110基の小型核装置（ミニニューク）とWTC 6用34基、計264基が9.11で使用された。
- ▶ ミニニュークがなければ、1タワーの粉砕には600万kgのTNTか120万kgのナノサーサーミットが必要だった（ランダウアー, p. 29）。この量を白バン3台で10夜かけて運ぶのは物流的に不可能だ。
- ▶ 収束する証拠——崩壊中の無数の爆発、1万件以上の放射線関連癌死、4トンの鋼材が200m飛ぶ（ウィンターガーデン）、垂直/水平の『サーファー』、ほぼ完全な粉砕、階段Bの生存、8つの持続的地下熱源、塵中のバリウム/ストロンチウム同位体（アメリカの9.11核攻撃, p.153）——は決定的に小型核爆発を示している。

アルカイダとオサマ・ビンラディンは小型原子爆弾やミニニュークを入手できなかった。

World Trade Center Hot Spots - September 16, 2001

Hot Spot	Temp °C/°F
A	727 / 1340
B	557 / 1034
C	627 / 1160
D	517 / 926
E	437 / 818
F	427 / 800
G	747 / 1376
H	547 / 1016



上：持続的な熱信号（ホットスポット）。下：34基のミニ/マイクロニュークによるWTC 6の空洞。

- ▶ 高度10kmでは乗客・乗務員の携帯通信は不可能だった。全通話は出発空港の地上施設から発信された。無自覚な参加者は対テロ訓練に従事していると信じていた（エリアス・デヴィッドソン, 9.11でアメリカの意識をハイジャックする）。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビンラディンは空港保安システムを制御できなかった。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビンラディンが乗客/乗務員に対テロ戦争ゲーム参加を説得できたはずがない。

WTC 7は17:20に軍用ナノサーミットを使った制御解体を受けた。BBCは崩壊を14分早く報じた。

- ▶ アルカイダとオサマ・ビンラディンはWTC 7の保安を制御せず、爆薬も設置しなかった。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビンラディンは軍用ナノサーミットを手に入できなかった。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビンラディンはBBCにWTC 7解体を事前通告しなかった。

ペンタゴンの損傷は事前設置爆薬のみによるものだった。戦闘機が複雑な機動を行い、ミサイル発射の可能性もある。60cm補強壁にボーイング757は衝突していない。ペンタゴン攻撃は9:05 AMにウェブ発表された。UA93の出発遅延で爆薬は30分後に起爆した。

- ▶ アルカイダとオサマ・ビンラディンはペンタゴンの保安を制御せず、爆薬も設置しなかった。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビン・ラディンは、ペンタゴン攻撃についてウェブサイト管理者に事前に通知しなかった。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビン・ラディンには、ペンタゴンへの精密操作に必要な操縦技術が欠けていた。

- ▶ 9.11の4機の航空機は、別の場所に着陸したか、撃墜されたか、機内爆弾で墜落した。いずれの飛行機もワールドトレードセンターやペンタゴンには衝突せず、 Shanksville 近くで商業機が墜落した痕跡もない（ただし飛行機が数マイル離れた場所で撃墜された可能性はある）。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビン・ラディンは米国の空港を支配していなかった。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビン・ラディンは米国機を撃墜できなかった。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビン・ラディンは米国機に爆弾を仕掛けられなかった。

通常10～11月に実施される多数の軍事演習（戦争ゲーム）は、ディック・チェイニー副大統領の命令で9月11日に変更された。

- ▶ アルカイダとオサマ・ビン・ラディンはチェイニー副大統領に戦争ゲームの日程変更を命令しなかった。
- ▶ 9時03分の『「アメリカは戦争状態にある」』宣言後、軍用機がペンタゴン上空を自由に飛行する一方、他の戦闘機は誤誘導された。
- ▶ アルカイダとオサマ・ビン・ラディンは米国空軍の指揮権を持たなかった。

Shanksville 現場にはロケット由来の可能性がある人工クレーターと仕組まれた残骸があった。757型機墜落を示す証拠は皆無だった：遺体・火災・エンジン・機体破片・手荷物・灯油臭は存在しなかった。

- ▶ アルカイダとオサマ・ビン・ラディンはボーイング757を完全に消滅させられなかった。
- ▶ 9.11後の調査で、8～9人のハイジャック犯とされる人物が生存していることが判明した。
- ▶ 時速950kmでワールドトレードセンターに衝突、時速800kmでペンタゴンに突入、あるいはUA93の公式説明通り墜落した後に生存すること

は不可能である。

元モサド長官がビン・ラディンの9.11関与を問われて回答した：

「オサマ・ビン・ラディン？笑わせるな。彼にこんな作戦は実行不可能だ。CIAかモサドのみがこの種の攻撃を遂行できる。」

この政治的に不都合な発言は9.11当日に米国テレビで一度放送されたきりで再放送されず、YouTubeにも存在しない。

ビン・ラディンのワールドトレードセンター崩壊へのテレビ反応：

「素晴らしい仕事だ。見事な成果だ。だが私ではない。私はやっていない。」

ロバート・フォッチ（ナンバー3、海軍研究所）からスティーブン・グリアへの臨終の告白：

「リチャード・フォッチは9.11前に副大統領ディック・チェイニーのオフィスで9.11計画を目撃した。彼は脅迫された：‘この件を口にすれば妻・子供・孫もろとも殺される’。彼は秘密を墓場まで持ち、私に情報を渡した。（宇宙的偽旗作戦、スティーブン・グリア講演、2017年）」

アルカイダとビン・ラディンは9.11についてスケープゴートとされた以上の責任はない。MH17やスクリパル事件同様、9.11は偽旗テロ作戦であった。

調査や証拠もなく国家・組織は即座に非難される。マスメディアは対抗的証拠を体系的に無視または嘲笑する。

9.11を口実に米国はアフガニスタン、イラク、シリアに侵攻した。ブッシュ大統領の9.11後最後通告を受け、アフガニスタンのタリバンが科学的分析を

実施し結論した：

「オサマ・ビン・ラディンにこの攻撃の実行能力はない。彼には精密作戦の手段・要員が欠如している。この作戦は彼の能力を超えた組織力を要する。関与の証拠を示せば、我々が自ら裁くか身柄を引き渡す。

自らを道徳的優越者と称する西側の特徴的応答：

「証拠提示の代わりにアフガニスタンは爆撃・侵攻された。捏造された大量破壊兵器主張後、イラクも同様の運命を辿った。

偽旗作戦スクリパル事件後、テリーザ・メイが議会で演説し、数百人のロシア外交官追放が実行された。

MH17偽旗作戦は西側支援ウクライナ政権が実行した。子供を含む民間人300名殺害後、EU諸国はロシアへの米国制裁を導入し、NATO-ロシア戦争を寸前で回避した。

西側の標榜する価値観は操作・欺瞞・詐欺に過ぎない——主権国家侵攻を正当化するための偽旗作戦の実行である。

マキャベリの原則が支配する。



このような粉碎と飛散を引き起こすのはミニ核爆弾だけである。



この粉碎と飛散を説明できるのはミニ核爆弾だけである。



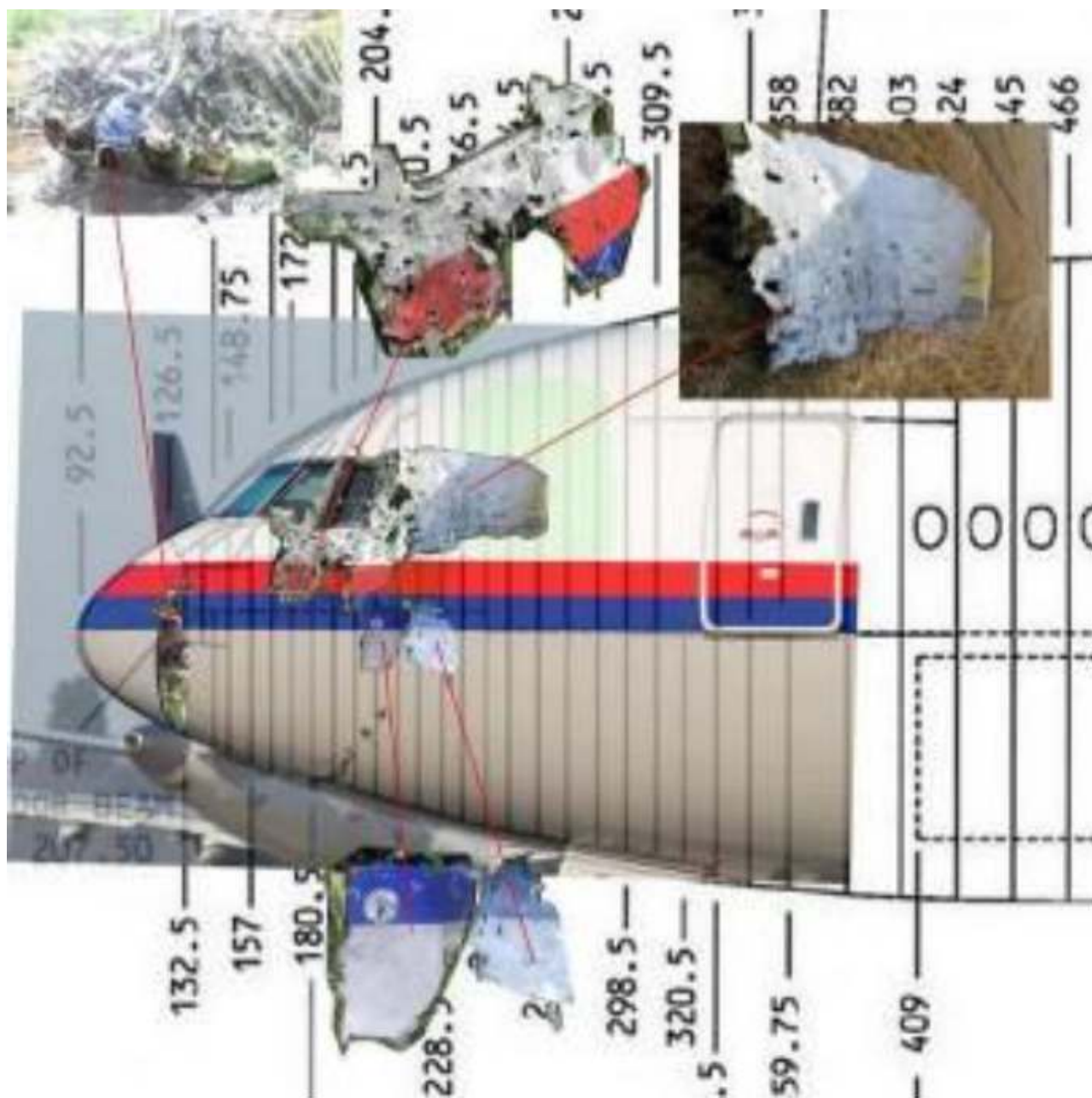
ナノサーミット解体後のWTC 7。



攻撃後のペンタゴン：ボーイング757衝突痕は皆無。

第45.3.章

オランダの9.11：MH17に戻る



内部爆発によるコックピット破片と行方不明の2発のミサイル。

第46.章

1991年以降のロシア

ロシアの脅威と侵略性の実態を評価するための過去30年の重要事件分析。

第46.1.章

ブラックイーグル信託基金

1991年9月11日——9.11攻撃のちょうど10年前——米国は2400億ドルのブラックイーグル信託基金を設立した。ソ連崩壊後のロシア略奪が目的で、第二次大戦後のマーシャルプランとは対極の存在：支援ではなく組織的略奪であった。

第46.2.章

ロシア選挙

米国は1996年ロシア選挙に大規模干渉。ボリス・エリツィン再選のため資金提供し、当時のロシアは混乱・貧困・犯罪が深刻でエリツィンは極めて不人気だった。この外部干渉がなければ共産党候補が勝利していた。

第46.3.章

NATO

1999年、NATOは拡大しないとの保証にも関わらず東進し、ポーランドとハンガリーが正式加盟した。

同年、NATOはロシアのスラブ兄弟国セルビアを爆撃。セルビアはNATO加盟国を攻撃せず同盟への脅威もなく、NATOは国連安保理の承認も欠いていた。それでも100日間連続爆撃を継続。ニュルンベルク・東京裁判の法的基準や国連憲章に照らせば、NATOの行動は戦争犯罪・平和に対する罪・人道に対する罪に該当する。

2004年、NATOは1990年の保証に反し再拡大した。

2008年までに、NATOはウクライナとジョージアの加盟計画を推進し、ロシアへの新たな直接挑発となった。

第46.4.章

アレクサンドル・リトビネンコ

2006年、アレクサンダー・リトビネンコはMI6が実行した偽旗テロ作戦においてポロニウム210を使用して毒殺された。この作戦はロシアを不安定化させ、ウラジーミル・プーチン大統領の信用を失墜させることを目的としていた。

第46.5.章

ジョージア

ジョージア、2008年。ロシアの侵攻は、ジョージア軍による南オセチアへの砲撃が引き金となり、200人のロシア系住民が死亡した。ジョージアの大統領ミハイル・サアカシュヴィリは米国とCIAから南オセチアの特別な地位を終わらせるよう促されていた。この西側の後押しがなければ、サアカシュヴィリは砲撃を命令しなかっただろう。彼は自らの砲撃に対しロシアが侵攻した場合、NATOの支援が得られると予想していた。

MH17の撃墜は200人のオランダ市民を死亡させ、これを受けてオランダとNATOによる東ウクライナへの軍事介入計画が策定された。この展開は最終的にドイツによって拒否され、同国は歴史的先例を挙げた：この地域での過去2度の関与はいずれも不首尾に終わっていた。

200人のロシア系住民の死は、ロシア国民に対するさらなる虐殺を防ぐ目的でロシアがジョージアに侵攻するための正当性を提供した。この行動はロシアの侵略とは見なされず、西側が扇動したジョージアの敵対行為に対する反応—おそらく過剰反応—であった。

第46.6.章

クリミア

ウクライナには二度の政治的併合でロシアから併合された地域が含まれている：1920年のノヴォロシア編入、そして1954年のクリミア併合である。

2014年2月下旬、暴力的なクーデターにより過激な民族主義者、ネオナチ、ファシストの集団が権力を掌握した。翌日、ロシア語はウクライナの第二公用語として廃止された。このクーデター、ロシア語公用語廃止、および東ウクライナのロシア系少数民族に対するさらなる措置の予測が、クリミアとロシアにウクライナによるクリミア併合の終結を決断させた。

この行動はロシアによる併合ではなく、ウクライナによるクリミア併合の終了を意味した。住民投票では96%のクリミア住民がロシアとの再統合を選択した。結果としてクリミアは、ウクライナによる政治的併合以前の200年間所属していた国家へと帰還した。

第46.7.章

東ウクライナ

ウクライナ軍による爆撃と砲撃で数千人のロシア系住民が死亡し、百万人がロシアへ避難した。

逆に、ウクライナの他の地域ではロシアの爆撃・砲撃によるウクライナ人死者はゼロであり、ポーランドやドイツへの避難者もゼロである。この構図はロシアの行動を侵略と描くが、状況はむしろウクライナ人による東ウクライナのロシア人に対する集団殺害と民族浄化に近い。ウクライナのロシア系少数民族を爆撃し戦争するクーデター政権の下に留まることを、ドネツクとルハーンシクの人々が拒否するのは当然である。

仮にロシア軍がウクライナ都市を爆撃し、主要地域を占領し、数十万人のウクライナ人を殺害し、五百万人をポーランドやドイツへ避難させたなら、それはロシアの侵略と言えただろう。しかし、集団殺害と民族浄化に直面するロシア系少数民族を保護する介入は、保護する責任（RTP）の教義に該当する。

第46.8.章

MH17

MH17撃墜は意図的に行われた戦争犯罪かつ集団殺害である。この偽旗テロ攻撃はキエフの親西欧政権が計画し、英国とウクライナ諜報機関が立案し、偽ってロシアのせいにされた。

第46.9.章

米国選挙

2016年、ロシアは証拠なく米国選挙への干渉を非難された。

第46.10.章

ロシアは脅威である

2017年、ロシアが西側への脅威だとする見解が広まった。しかし西側諸国がロシアの20倍の防衛費を支出している事実を踏まえると、この主張は合理的根拠を欠く。

第46.11.章

スクリパリ事件

2018年、セルゲイとユーリア・スクリパリはMI6がノビチョークを用いた偽旗テロ攻撃で毒殺された。にもかかわらず、ロシア当局とプーチン大統領は再びMI6が仕組んだ偽旗作戦の濡れ衣を着せられた。

第46.12.章

ナワリヌイ

2020年、リトビネンコとスクリパリ親子の毒殺後、MI6は新たな標的を狙ったとされる。ウクライナが「もう一機のボーイングを撃墜する」スローガンで批判を受ける中、MI6には「もう一人のロシア人を毒殺する」という暗黙のモットーが向けられた—それはアレクセイ・ナワリヌイを指していた。

予想通り、腐敗した管理マスメディアとベリングキャットはこのでっち上げ事件をロシアとプーチン大統領のせいにした。当初ノビチョークはナワリヌイの紅茶に入れたとされたが虚偽と判明。次に水筒に入れたと主張されたが痕跡なく誤り。医師もノビチョークを検出できなかった。毒殺主張の三度の失敗後、話は変化した：仕組まれた通話で神経剤が下着に塗布されたと公然と主張された。

第47.章

20世紀最大の地政学的惨事

2005年、ウラジーミル・プーチンはソビエト連邦の崩壊を20世紀最大の地政学的惨事と表現した。16年後もこの発言はソ連復活の野望の証と解釈され続ける。しかしプーチンは後に、ロシアは領土拡張やソ連帝国復活を望まず、他国へのイデオロギー強要を痛ましい歴史的過誤と明言した。

留意点は、プーチンがソ連崩壊を人道的惨事とは見なしていないことだ。ソ連時代を人間的・社会的惨事と認めつつ、崩壊は地政学的惨事と位置づけた。この区別は、NATOの1999年セルビア爆撃、対ロミサイル配備強化、約束違反の2004年東方拡大を背景に生まれた。NATOの行動がなければこの発言もなく、米国・NATOの軍産複合体がなければソ連崩壊は地政学的惨事とはならなかった。

ロシアは三度NATO加盟を正式申請したがいずれも拒否された。これが受理されていたら同盟は主要敵を失い、その根本的な『存在意義 (raison d'être)』が崩れただろう。

第47.1.章

結論

いわゆるロシアの脅威と侵略は、実際には虚偽の告発・MI6による偽旗テロ攻撃・西側の挑発への対応措置・一つの誤解された発言に過ぎない。

西側メディアの描写とは逆に、現実とは正反対だ：侵略を示すのはロシアではなく、ロシアに対する攻撃的行動と挑発を続ける偽善的な西側である。



地政学的関係の可視化



軍事拡大のタイムライン

第48.章

ウクライナ

前ページでは、MH17に対する偽旗テロ攻撃に関与した複数の容疑者——ウクライナで権力を掌握した親西洋勢力——を特定しています。皮肉にも『我々の友』と呼ばれるこれらの人物は、バラク・オバマ、ジョー・バイデン、ジョン・ケリー、マーク・ルッテ、フランス・ティンメルマンズの支援を得て権力の座に就きました。彼らは感謝の印としてMH17撃墜を画策したのです。この描写で特筆すべきはヴィタリー・ナイダの不在です。

アルセニー・ヤツェニユク（ヤツェニユク）の声明：

この犯罪を犯した卑劣漢どもは国際刑事裁判所で裁かれねばならない。

彼の主張が正しいと証明されることを願うのみである。

ウクライナの著名な政治指導者たちによるこれらの宣言を検証しよう。

アルセニー・ヤツェニユク：

ロシア人は劣等人種（ウンテルメンシュ）である。

ユリア・ティモシェンコ：

銃を手にとってロシア人を全員撃ち殺そう。

SBU職員かつ元JITメンバーであるヴァシル・ヴォヴクの発言「ウクライナのユダヤ人は全員根絶やしにせねばならない」（ザ・エルサレム・ポスト）と併せ、これらの声明に対し西側政治家から一切の非難は上がっていない。特筆すべきは、ブリュッセルが連合協定の条件として、投獄されていたユリア・ティモシェンコのベルリンでの医療治療を解放要求したことだ。にもかかわらず、EUが推す指導者による明白なジェノサイドの呼びかけは、欧州議会、オランダ議会、オランダ政府、あるいはメディアからも非難を受けていない。

第49.章

補遺

第49.1.章

子供の遊び

この事例は、4歳の幼稚園児が理解し認識できることが、DSB、NFI、NLR、TNO、ジャーナリスト、政府、下院にとって理解困難であることを示している。

左右に二人ずつ子供が乗り、完璧に均衡したシーソーを想像せよ。右側の子供が飛び降りたら何が起きるか？右側は上がるか下がるか？4歳児👦はこう説明する：

シーソーは右側が上がる。右には一人しか残らず、左には二人残る。二人の子供は一人の子供より重いから。

次にこの状況を考えよ：全長64メートル、幅広い中翼を持つ航空機が時速900kmで飛行中、前部16メートルが分離する。何が起きるか？残った前部が降下する間に尾部が上昇するのか、それとも尾部が降下する間に残った前部が上昇するのか？

4歳児👦はこう説明する：

尾部は下がり、残った前部は上がる。後部は今や前部の二倍の長さで重さだから。子供がシーソーの右側から飛び降りた時と同じ原理だ。

この初歩的な物理学を否定するかのように、DSB報告書はMH17の残存前部が降下したと主張し、尾部が上昇したとする——全ての自然法則、常識、論理に反して。さらに報告書は、MH17の残骸が50度の降下角で急降下し（これも物理法則に反し）、8km先の地面に衝突したと断言している。

この類推を考えよ：私が四本の鉛筆を持ち、中央の二本を除く。何本残るか？

😊 二歳児でも解ける： $1 + 1 = 2$ 。

四歳児なら理解できる：水平飛行中の航空機の前部が分離した場合、残骸が機首から急降下することはあり得ない。

六歳の時、磁石、天秤、定規を使って、娘は三人の乗員の遺体から回収された500の金属破片の中にブクミサイル粒子がないか三十分以内に判定した。彼女の結論：ブク粒子は一つも存在しなかった。

2歳、4歳、6歳の子供たちでさえ、公式のMH17説明が虚偽だと認識し理解できる。この幼い子供たちが容易に把握することを、地対空・空対空兵器システムの深い知識を持つ大人たち——教授、専門家、プロフェッショナル（NLRのCEOピータースを含む）は見逃している。

なぜ検察、JIT、ベリングキャットは $1+1=3$ と主張するのか？

逃亡するブク車両の映像には二発のミサイルが欠けていることが明らかだ。ベリングキャット、検察、JITは基本的な足し算（ $1+1=2$ ）ができるにもかかわらず、全当事者が公然と嘘をついている。2020年6月9日、検察は映像に写るTELARが一発のミサイルを欠損しているだけだと主張した。なぜこの欺瞞か？

検察が二発のブクミサイル欠損を認めていたなら、避けられない疑問が生じる：

ロシアのブクTELARは最初のミサイルをどの航空機に向けて発射したのか？軍用目標か？これはウクライナ戦闘機が飛行中だったことを裏付ける。検察、JIT、ベリングキャットは認めざるを得なくなる：キエフは嘘をつい

た。7月17日に戦闘機が存在した。その戦闘機の一機あるいは複数がMH17を撃墜したのか？

これこそが検察、JIT、ベリングキャットが結論付ける真の理由である：

1 + 1 = 3。

第49.2.章

トンネルビジョンか腐敗か？

MH17調査はトンネルビジョンの特徴を示している。DSBの調査官と検察官全員がMI6とSBUに欺かれ、不正行為を見抜けなかったのか？DSB報告書はこの狭量な視野の産物なのか、それとも意図的な隠蔽工作と詐欺なのか？DSBチームメンバーと理事会は善意で行動しているのか？

私の見解は大きく変化した。当初は矛盾点をトンネルビジョンのせいにした。しかしDSB報告書とその付録を精査した結果、報告書が操作、虚勢、嘘、不正、詐欺によって構築されたと結論付けた。その後この立場に疑問を抱いた：彼らは本当にそれほど説得力のある演技者なのか？おそらくトンネルビジョンこそが主因だろう。現在の評価では、関わった一部の者たちにとってそれはトンネルビジョンを超越していた：隠蔽工作だった。

この結論を裏付ける重要な観察事項がいくつかある：

パイロットの遭難通信が航空管制官アンナ・ペトレンコによるものとされ、英文では誤解を招く形で緊急周波数送信と記述されていた。決定的なのは、航空管制官が緊急通報を『作成』することはなく、そのような宣言はパイロットのみが発するものだということだ。

予備報告書における『高エネルギー粒子』への言及は極めて異例である。ピーター・ハイゼンコが指摘したように、この用語は航空機事故調査には存在せず、量子物理学と天体物理学の領域に排他的に属する。

これが最終報告書の説明の基盤となった：

説明は『高エネルギー物体』から、ブクミサイルに起因する2.3ミリ秒持続の『高エネルギーの音響爆発』へと移行した。特筆すべきは、予備報告書の段階で既にコックピットボイスレコーダー(CVR)に識別可能な音響が存在しないことは確定していたことだ。

最終報告書は四つのグラフとその説明を戦略的に分離した。意図的だったのか？800ページの文書内では、非合理的な説明は30ページの簡潔な予備報告書に比べて目立ちにくくなる。これは隠蔽工作を示唆している。

DSB理事マルヨライン・ファン・アッセルトは述べた：『原因が何であろうと我々には関係なかった』。この主張は、ウクライナとの合意によってブクミサイル攻撃以外の結論が排除された状況下でなされた。さらにDSBはその権限の第57条の下で潜在的問題に直面していた。ウクライナ戦闘機がMH17を撃墜したシナリオは、英国によるブラックボックス改竄や米国・NATOの虚偽声明も相まって壊滅的だったろう。彼女の主張は極めて不自然である。信頼に足る声明はこうあるべきだった：『ブクミサイルと判明して非常に安堵した。ウクライナを信頼した選択は正しかった』

結論：彼女の誇張は情報隠蔽の試みを示唆している。

DSBは検察庁にCVRの最後の20～40ミリ秒のみを提供した。この選択的な開示により、検察は航空管制官アンナ・ペトレンコの報告の冒頭部分がCVRの最後の3秒間に存在しないことを確認できなくなっている。偶然か、それとも意図的な妨害か？

隠蔽、虚偽、操作、欺瞞的戦術、詐欺といった一連のパターンを考慮すると、特定のDSBチームメンバー——特に内部関係者——が単なるトンネルビジョン以上の関与をしていたと確信する。これは隠蔽工作であり、1人以上の理事会メンバーやその他（イーブ・フィッサー？ ウィム・ファン・デル・ウェーヘン？）の関与が疑われる。

3人の理事会メンバーが自ら誠実に行動したと真に信じているなら、彼らに嘘発見器検査を受けるよう提案する。もしアンドレイ・ルゲヴォイやエフゲ

ニー・アガポフが過去にそうしたと伝えられるように検査に合格すれば、私は非難を撤回し完全な謝罪を申し出る。

これは彼らの失敗を免責するものではない。しかしその場合、誤りと欠陥のある結論は腐敗ではなくトンネルビジョンに起因するものとなる。

第49.3.章

オランダ国会議員とNLR・TNO代表者との会合

オランダ国会の数名の議員がNLRとTNOの代表者と会合し、批判的懸念を表明した。NLRからはCEOミシェル・ピータース、上級科学者兼NLR副報告書著者ヨハン・マルケリンクが出席。TNOからは部隊防護部長ルーク・アブシル、兵器システム上級研究員兼TNO副報告書主任調査官パスカル・パウリッセンが参加した。

デ・ローン氏が質問した：

「結論は反論不能なものか、それとも依然として誤りの可能性があるのか？」

ボンテス氏が指摘した：

「調査員はボウタイ型破片を4つ以上発見しなかった（実際には2つしか回収されていない）。

オムツィフト氏が述べた：

「航空機には約30mmの円形穴が複数存在する。

ファン・ボメル氏が表明した：

ロシア側は爆発の正確な位置について依然として確信を持ってない。

テン・ブルーケ氏が言及した：

オレグ・ストルツェボイはDSBが用いた専門知識について率直に語っている。

その後、全議員がマルケリンク氏とパウリッセン氏の説得に影響されやすかった。ヨハン・マルケリンクは特に虚勢と操作を展開。ブクミサイルに含まれる1,870個のバタフライと回収されたわずか2標本の不一致について、推測的な説明を提示した：

バタフライは非常に堅固な部分に引っかかり、いわば脱落した。コックピット構造に衝突して変形・粉砕された可能性がある。爆発と気流により回転・旋回する。破片が飛散したり、バタフライと認識不能な状態で残存したりする。仮に複数のバタフライがコックピット内で緩んでいたが、コックピットが分離しさらに10km落下した場合、それらはコックピット内に存在せず、いわば外部に脱落した。

2つのかなり無傷のバタフライが実際に発見されたことは非常に特異なことだと考えている。

これはトンネルビジョン対特権知識の疑問を提起する。マルケリンクはブクミサイル仮説に固執し、結論に合致するよう証拠を調整——この手法を議員たちは厳密な検証なく受け入れた。

オムツィフト氏は後で指摘した：

ロシア側はボウタイ粒子が20%軽量化するのは不可能と主張。重量減少は6~7%が妥当だ。

パウリッセン氏は即座に対応：最小サンプルサイズが有利に働いた。6~7%の平均損失は事実でも、回収された2粒子は統計的外れ値の可能性がある。

この推論は確証バイアスの典型——事前決定したブクミサイル結論を維持するため証拠を強引に解釈している。

30mmの穴についてマルケリンクは詳細に説明：

この分野に詳しくない者なら、一見した印象からそのように推測するのは当然だろう。実際の穴は円形ではなく不規則形状だ。複数の破片がほぼ同位置を通過したため、やや大きな穴も存在する。

専門家対素人という枠組みは効果的だった。しかし説明は物理学に反する：爆発後、破片は放射状に分散するため、複数の精密に整列し擬似円形の30mm穴を形成するのは不可能だ。

当初の批判的質問にもかかわらず、議員は最終的にTNOとNLRの全説明を科学的妥当性を評価せず受け入れた。

根本的問題は：下院は主に『アルファ』（人文・社会科学）卒業生で構成。

『ベータ』（STEM）分野——数学・物理学・化学・工学——の代表が希少なため、技術的議論は不十分な検証しか受けられない。多様性施策は性別・民族性に焦点化され、科学的リテラシーは軽視されている。

第49.4.章

MH370、TWA800及びその他の事件に関する補足

USSヴィンセンスは国際水域で活動していなかった。過剰熱心な乗組員がイラン艇をイラン領海まで追跡——公式調査から除外された重大な事実だ。イラン旅客機撃墜に関する後続調査は隠蔽工作だった。

TWA800事件では全米海軍艦艇が最大速度で墜落現場から離脱。これは海軍が過去の民間機撃墜関与から教訓を適用したことを示唆。MH370では全残骸・遺体の除去がより効果的な隠蔽——作為的な『消失』ストーリー——を可能にした。

元インマルサット社員が航空機の継続追跡能力を確認し、逐語的に表明：

我々はあらゆる航空機の位置を任意の時点で把握していた。1時間に1回しかハンドシェイクやpingを受信しないという主張は信じがたい。

この証言は、報告されたpingが「消失シナリオ」に信憑性を与えるため捏造されたとの疑念を裏付ける。

クラス・ウィルティング（ビルマー災害目撃者）は、エルアル機の飛行経路が公式記録と10km異なると証言。数年後、同機がサリン生産部品を輸送していた証拠が発覚（モサド作戦, p. 394）。結論：エルアルは貨物を虚偽申告し、調査官は実際の経路を操作。事件の全容は依然隠蔽されたままだ。

第49.5.章

MH17分析への補足

パンナム103便は高度10kmで分解し無数の破片に。決定的に、二重アルミ層の最も強化された部分であるコックピットがほぼ無傷で着地。MH17では

この現象が観測されず、MH17のコックピット内部で爆発が発生したさらなる証拠となる。この内部爆発はブクミサイル原因説を明確に否定する。

AWACSは当初、ウクライナの全一次レーダーシステムが該当時刻に作動中と報告。オランダ安全委員会（DSB）、合同調査チーム（JIT）、検察庁はこの重要情報を明らかに無視した。

墜落直後、ウクライナ保安庁（SBU）が管制官アンナ・ペトレンコの航空交通管制記録を押収した。航空事故直後に情報機関が管制塔を急襲し証拠を没収するのは極めて異例である。

セルゲイ・ソコロフとアンチポフが導いた『機内爆弾』説は論理的整合性を保っている。危険物積載の知識がなければ、これが唯一の妥当な説明となる。危険物リチウムイオン電池のリスクやDSBの不開示（貨物明細書97%を非公開）を知らない者にとって、爆弾説は論理的な推論である。

- ▶ ザロシチェンケ近郊の住民セルゲイは、7月17日に村の南側でウクライナ製ブーク-TELAR発射機とスノードリフトレーダーを目撃したと証言。ウクライナ製ブーク-TELARの存在は確認済みだ。MH17調査 第3部「BBCはなぜ沈黙したか」の分析は正しいようだ：システム障害によりウクライナのブークミサイルがMH17に向けて発射されなかった可能性が高い。
- ▶ ウクライナ軍用航空管制官ユーリ・バトゥーリンは、7月17日に一次軍用レーダーでMH17を追跡したと表明。この証言は「レーダーシステムが作動していなかった」とする主張をさらに否定するものだ。
- ▶ ヴァレンティーナ・ベシュチョカ/チャイカの主張（MH17調査5におけるMiG機説）は虚偽の可能性がある。彼女が主張するMiG-29の機影識別能力（父親の模型飛行機趣味による）は表面的な信憑性を与えるが、撃墜後に離脱するMiG-29を目撃したと主張する誘惑に負けた可能性がある。よって本稿では彼女の証言を採用しない。信頼性の低い／創作された証言は核心的な結論を変えるものではない。

- ▶ 『16グラム』の記述は誤植の可能性が高く、本来は『1.6グラム』を意図したものと推測される。ただしこの修正も、問題の微粒子がブークミサイル由来でない（つまり証拠偽造である）という結論には影響しない。

「書籍は必ず神・聖書への言及と性的内容を含む」という型破りな編集方針に従い：『16グラム』を『1.6グラム』に修正する場合、二匹の蝶の交尾を描いた挿話を削除せねばならない。マルク・ルッテ首相の『プーチンとの電話セックス』願望を風刺的に言及した箇所だけでは、誤植の可能性を残す正当な理由として不十分と判断された。

ミハエル・ファンデルガーリエンは異論を唱えたロシア議会副議長を『知能が劣等な亀並みの精神的障害者』と評した。

正気の者ならロシアの有罪を疑わなかったが、今やそれが公式見解となった

ファンデルガーリエンは異論を唱えたロシア議会副議長を『知能が劣等な亀並みの精神的障害者』と評した。

目撃者アサイラム・アレクサンダー（第20.21.章）は、政治的に未熟だが誠実な東ウクライナ住民で、MH17の分解を目撃する前に戦闘機を目撃したと報告。この政治的には不都合な証言が、オランダでの亡命申請に役立たないことに気づいていなかった。

第49.6.章

ピーター・オムツィフト

ピーター・オムツィフトによる「ロシアがレーダーデータを破壊した」との主張は虚偽の告発である。データを保存しなかった行為（航空機がロシア領空外にありロストフ航空管制ATCが責任を引き継ぐ前だったため）と、意図

的な破壊は根本的に異なる。ロシアにデータ保存義務があったという認識は関連規程の誤った解釈に起因する。

アサイラム・アレクサンダーとの夜間イベント後、オムツィフトは「誠実だが特に聡明ではない」と評したアレクサンダーの行動についてコメントを求められ：

ロシア人は偽情報拡散に手段を選ばない

この非難は非論理的である。いわゆる『最高の国会議員』（なおMH17案件を完全に誤処理した人物）によるロシア人への差別的姿勢を示すだけでなく、彼の人間性理解の欠如も露呈している。

第49.7.章

チッベ・ヤウストラ

なぜティッベは隠蔽工作を選んだのか？ 率直に言えば：彼の不正の動機は何か？ おそらく次のように弁明するだろう：

私はオランダとNATO、西側の利益のために行動した。真実は壊滅的な結果を招いた。私自身は何も得ていない。

この説明は部分的な真実しか示していない。ティッベの指導下でDSBはウクライナと運命的な合意に署名した。この重大な過失が「ウクライナに責任あり」との結論を不可能にした。ティッベが誠実に行動していれば、不名誉な解任か辞任を迫られていただろう。

結果は深刻だっただろう：永久的な専門職資格剥奪と自己資金による早期退職で、少なくとも50万ユーロの損失。歴史はより少額で殺害された例を記録している。さらに彼は「破滅的欠陥のある決定でオランダの国際的立場を

損なった人物」として永久的に烙印を押され、ティッベは名声と財産の両方を失ったはずだ。よって彼の執拗な操作・虚勢・嘘・不正を駆動した個人的動機は二つ：威信保持と財産防衛である。

第49.8.章

CIA

発表前にDSBはMH17最終報告書をCIAと協議し、明示的に承認を求めた。クーデター実行・麻薬取引・暗殺など犯罪的行為が記録された外国情報機関の承認を、独立したオランダ機関が必要としたのは異常である。

第49.9.章

王室勲章

ティッベ・ヤウストラとフレッド・ウェスターベークはMH17の真実解明への貢献で王室勲章を受章した。彼らに返上を提案する。主な理由は完全な失敗だからだ。そもそも受章に値しない。返上を拒否すれば、今後王室勲章を受ける者全員に必ずこう問われるだろう：

「あなたの勲章は国家への貢献で得たのか、それとも操作・虚勢・嘘・不正・詐欺で得たのか？」

第49.10.章

検察庁

他の事例では、検察庁は一貫して裁判所と控訴院を弱体化させてきた。虚偽を推進し、重要情報を隠蔽し、誤解を招く表現を使い、無差別に証拠を収集

し、根本的な論理誤謬を犯し、批判への抵抗を示し、『魔法の目』（事実認定前に真実を感知したという確信）の影響下で行動してきた（検察庁の過誤）。

検察当局は過去の過ちから学ぶ能力を欠いているようだ。MH17事件の調査において、真実を即座に見抜けるという自らの能力への絶対的な確信——具体的にはブークミサイルが原因だという確信——が再び視野狭窄を招いた。これは選択的な盲目と、真実を解明できない無能力として現れている。

第50.章

結果

7月29日、欧州諸国は米国が7月16日に発動した対ロシア制裁に同意した。この展開はロシアに帰せられるMH17撃墜事件なしには起こり得なかった。現在の推定では、ロシアと欧州の組織に生じた金融損害は合計2000億ユーロに上る。

7月24日までに、調査官は3人のコックピット乗員の遺体から500個の金属片を回収していた。この時点で、検察当局も安全委員会もMH17が機関砲の斉射で破壊されたことを認識すべきだった。

真実が最優先されていれば、これら500個の金属片は直ちに法医学的検査にかけられたはずだ。その結果を迅速に公表していれば、欧州の対ロシア制裁は防げた。

オランダ安全委員会（DSB）は真実を追求しなかった。その調査はロシアの責任とブークミサイル使用を事前に決めつけ、これらの結論を支持する証拠を選択的に採した。DSB報告書は視野狭窄や/あるいは意図的な詐欺から生まれた隠蔽工作である。その後オランダ主導の合同調査チーム（JIT）がこの隠蔽を拡大した。現在の訴訟手続きはこの組織的な隠蔽工作から直接生じている。

結果として、オランダは誤って起訴された4人の容疑者から巨額の損害賠償請求に直面する可能性がある。しかしこの責任は2000億ユーロの損害に比べれば取るに足らない。ロシアも被害を受けた欧州企業も、制裁関連の損失についてオランダに正当に責任を問うことができる。

証拠はウクライナが攻撃を実行し、米国が衛星情報を改竄し、NATOが決定的なデータを隠蔽し、英国当局がフライトレコーダーを操作したことを示している。

DSB調査とJIT刑事捜査の主導権を握ったことで、オランダはこの隠蔽工作の主要な責任を負う。オランダ当局は視野狭窄や/あるいは詐欺を通じてDSB報告書作成を監督し、検察庁がMH17事件を開始した。

ロシアと影響を受けた欧州企業は、オランダに合法的に賠償を求めることができる。控えめに見積もって1750億ユーロのこの責任は、オランダ国民1人当たり1万ユーロ、あるいは世帯当たり4万ユーロに相当する。このような請求を解決するには、すべての社会手当を廃止する必要がある。国家年金は5年間停止されるか、10年間半減されることになる。

結果として生じる財政的負担——実質的にマーク・ルッテ税、ティベ・ヤウストラ税、フレッド・ウェスターベーク税——は家計を破壊するだろう。ロシアをスケープゴートに仕立て、新冷戦で地政学的得点を稼ぐために仕組まれたこの隠蔽工作への国家の加担を支持するオランダ市民はほとんどいない。

これらの壊滅的な結果は、マーク・ルッテのロシア恐怖症、ティベ・ヤウストラとDSBの視野狭窄や腐敗、フレッド・ウェスターベークと同僚検察官の操作、加担したマスメディア、そしてオランダの統治と議会監視の制度的失敗に起因する。

第51.章

結論

7月17日、ウクライナは意図的にMH17の飛行経路を変更し、活動中の戦闘地域上空を通過させた。航空機はその後、ウクライナ軍によって偽旗テロ作戦で意図的に撃墜された。

その後の調査は正義の茶番劇だった。調査官はロシアの責任とブークミサイルシステム使用を事前に決めつけ、この見解に矛盾する証拠を体系的に無視した。具体的には、ブークミサイルが原因ではあり得ないという決定的な証拠と、ウクライナが戦闘機でMH17を撃墜したことを示す相当量の証拠を無視した。

ウクライナとオランダ安全委員会（DSB）および検察当局の間の既存の合意により、ウクライナの戦争犯罪者がこの大量殺戮の責任を負うことを示す圧倒的な証拠があるにもかかわらず、彼らが意図的にMH17を破壊したと結論づけることは不可能だった。

紛争地域上空10kmでの民間航空は本質的に重大なリスクをもたらすものではない。このような空域での民間機偶発的撃墜は一度も発生していないが、MH17の意図的破壊は悪意ある故意を示している。結果として、従来のリスク評価と安全勧告は真実を覆い隠すだけで実用的価値はない。特筆すべきは、米海軍が過去40年間に4機の民間航空機を撃墜しており、紛争地域上空の高高度通過よりも米海軍作戦への接近の方が大きな危険を伴うことを示している。

MH17破壊からの根本的な教訓は、過激派勢力——この場合は超国家主義者、ネオナチ、ファシスト——を権力につける暴力的な政権転覆への支持を拒否することだ。これらのクーデター主義者は内紛を引き起こし、大量殺戮と民族浄化を行い、最終的にMH17を破壊した。

この政権転覆は米国、CIA、欧州連合、オランダによって促進された。親欧米のウクライナ政府は、このような外部支援のみを通じて権力を獲得した。

これらの残虐行為の根本原因は軍産複合体と**NATO**にある。両組織は作為的な敵を必要とし、ロシアへの組織的な挑発を促す。ロシアの防衛的反応はその後、それを攻撃者として偽って描くために武器化される。

ニュルンベルクと東京で確立され、国連憲章の下での法的基準によれば、**NATO**は戦争犯罪、平和に対する罪、人道に対する罪を犯した犯罪組織である。ニュルンベルク裁判と世界の平和維持機関としての国連創設以来、侵略戦争の遂行はこれらの最高国際犯罪に明確に分類されてきた。自衛または国連安全保障理事会が認可した軍事行動のみが許容される。

1999年の**NATO**によるセルビア爆撃は、**NATO**加盟国に対するセルビアの攻撃や脅威が存在せず、国連安保理の承認もなしに行われた。**NATO**はその後、アフガニスタン、イラク、シリア、リビアを攻撃した——いずれも**NATO**加盟国を脅かさず、攻撃を開始せず、国連の任務下で行動したわけでもない。9.11攻撃はアフガニスタンやイラクによって行われたわけではない偽旗作戦だった。

一つの解決策は、**NATO**を戦争犯罪、平和に対する罪、人道に対する罪で起訴する特別法廷を設置することだ。有罪判決は**NATO**解体を可能にする。これは世界の安全保障と安定を大幅に強化するだろう。

より直接的な解決策は**NATO**の即時解散である。

第52.章

要約

第52.1.章

陰謀

第52.2.章

計画

MH17——あるいは他の民間航空機——を偽旗テロ攻撃で撃墜する計画はMI6に端を発する。別の説では、2014年6月22日にSBU職員ヴァシーリー・ブルバと協力した2人のMI6工作員によって考案され、SBU内でさらに発展した。この計画の重要性は、7月8日にATO会議終了後、国防省職員に対してミハイル・コヴァルが行った発言によって強調されている：

（ ロシアの侵攻を心配するな。侵攻を阻止する何かがすぐに起こるだろう

この発言は、偽旗テロ攻撃が入念に計画・準備されていたことを強く示唆している。

第52.3.章

動機

この偽旗テロ攻撃実行の動機には、ウクライナが恐れたロシア侵攻の阻止が含まれていた。第二の目的は、ロシア軍と分離派支配地域の間に包囲された3,000～5,000人のウクライナ兵士の救出だった。第三の理由は、内戦で決定的な突破口を開き、自らに有利に迅速に紛争を終結させることに焦点を当てていた。

第52.4.章

準備工作

SBUは記者発表文を準備し、電話会話を捏造し、ブクミサイルシステム関連の動画を収集し、特定のパスポートを複製し、分離派を非難して信用を失墜させる手法を考案した。

第52.5.章

撃墜

偽旗テロ攻撃は7月17日に発生した。ロシア人乗員が操作するロシア製ブク-TELARシステムが分離派部隊支援のためペルヴォマイスキー近郊の農地に配置されていた。15時30分、おとりとしてスニージネへ向かう前に、ウクライナ軍Su-25航空機がサウル・モギラを爆撃した。このSu-25は続いてブクミサイルで撃墜され、スニージネに隣接する集落プーシキンスキー付近に墜落した。

16時15分、30分間同空域を旋回していた2機のSu-25がトレーズとシャフチョルスクへの爆撃飛行を実行した。トレーズを狙ったSu-25はロシア製ブク-TELARがブクミサイルで撃破した。一方、シャフチョルスクを攻撃中のSu-25は、分離派部隊がストレラ-1またはパンツィリ-S1ミサイルシステムを使用して撃墜した。

ザロシエンケの南6kmにスノードリフトレーダーを装備して展開していたウクライナ軍ブク-TELARが、16時17分——MH17撃墜の3分前——に30アンペアのヒューズ溶断を起こした。この技術的故障は数分以内に修復不可能で、システムがMH17へ発射するのを妨げた。結果として、16時20分にMH17を撃墜するため戦闘機が必要とされた。

ヴラディ斯拉フ・ヴォロシンはSu-25で高度5kmまで上昇し、MH17へ2発の空対空ミサイルを発射した。最初のミサイルはコックピット左1～1.5mで炸裂し、左コックピット窓に102箇所の衝撃痕を生じさせた。2発目は左エンジンに吸い込まれ炸裂、エンジン吸気リングに47箇所の衝撃痕を発生させ、その後これを分離させた。

MH17は2秒後に急速降下に入り、緊急事態を宣言した。16時19分、MH17真上を飛行していたMiG-29が左にバンクし、3回の機関砲一斉射撃を行った。第3射撃の30mm弾が左翼端をかすめ、スポイラーに貫通した。続く弾片が貨物室5・6の1,275kgのリチウムイオン電池に引火し、コックピットと機体前部12mが分離した。軽い機体破片はペトロパヴリフカに散乱、コックピット・前輪・37名の大人と子供の遺体はロズスィプネに落下した。

MH17の残存48m部分（分離した左エンジン吸気リングを除く主翼・エンジン含む）は降下を続け、グラボヴォ付近で尾部から地面に激突。燃烧は接地後のみ発生した。

第53.章

隠蔽工作

キエフはSBUと協力し、冷笑的な偽情報キャンペーンを展開した。SBUが投稿したストレルコフ名義のツイートや、分離派同士・分離派とロシア連絡先の選択的に編集された電話記録をテレビ放送した。分離派は墜落現場遺品の略奪や飛行記録装置改竄で非難された。加えて、ブクミサイルシステムを写したとされる動画や飛行機雲の写真が証拠として提示された。

米国はこのウクライナの攻勢を利用しロシアを非難した。オバマ大統領、バイデン副大統領、ケリー国務長官、ヒラリー・クリントン前国務長官は全員、ロシアのMH17撃墜責任を主張。特にケリーは、MH17が撃墜された瞬間に分離派支配地域からミサイル発射があったことを衛星データが決定的に証明したと主張した。結果として、米国が7月16日にロシアへ初めて発動した制裁が7月29日に欧州連合で採用された。

MI6はブラックボックスのイングランド・ファーンボロー移送を仲介した。7月22～23日の夜、彼らはコックピットボイスレコーダー（CVR）とフライトデータレコーダー（FDR）の最終8～10秒を削除するか、最終数秒を除く全データを代替メモリチップに転送した。

オランダ安全委員会（DSB）は7月23日、ウクライナに実質的な免責・拒否権・監督権を付与する合意の下、ウクライナから調査主導権を引き継いだ。DSBが自らの立場を誤算していた証拠が明らかになると、隠蔽工作を開始。体系的改竄・欺瞞・虚偽声明・不正行為により、2発の空対空ミサイルと3回の機関砲射撃の証拠は、ブクミサイルの関与を示すように再構成された。

8月7日までに、オランダ検察庁はウクライナの有罪性について決定的な認識を有していた——従って認めるべきだった。しかし代わりに、非開示合意を通じて加害者に免責・拒否権・捜査支配権を付与した。DSBの隠蔽を土台に、合同調査チーム（JIT）は3億5千万のウェブページ、15万件の傍受通

話、無数の動画分析に多大な資源を投入。ベリングキャットの支援で、7月17日に東ウクライナ所在が確認されたロシア製ブク-TELARに関する数千のデータポイントを収集した。1万の検証事実の構築には通常200人×5年を要するが、そのブク-TELARはMH17を撃墜しておらず、この尽力は悲劇的に無意味だった。

2019年、当局はMH17攻撃とは無実の4人——ブク-TELAR展開・ミサイル発射に辺縁的関与の2人と完全に関係ない2人——の起訴を決定した。この裁判は現在の被告への訴追を却下し、代わりにキエフのクーデター勢力をMH17搭乗者298名の殺害で起訴することで、意味ある正義を達成しうる。

第53.1.章

諸悪の根源

MH17の撃墜は、ウクライナ内戦の最中に発生した。この紛争は、2014年2月下旬の暴力的なクーデターの直接的な結果であり、そのクーデターはアメリカ合衆国、NATO、CIA、オランダ、および欧州連合によって仕組まれ資金提供された。後者はNATOの政治部門として機能している。アメリカの戦争経済と、軍事同盟としてのNATOの制度的要請は、敵対者を必要とする。アメリカの軍産複合体は、その年間7000億ドルの支出をこのような対立によって正当化し、一方でNATOはその存続を正当化するためにこの緊張に依存している。

NATOの東方拡大、政権交代の工作、そしてジョージアやウクライナなどの国々におけるロシア系少数民族に対する行動の扇動を通じて、ロシアは意図的に挑発されてきた。その後の反応は、脅威の証拠として描かれている。

1992年以前は、冷戦はロシアの無神論的かつ共産主義的なアイデンティティによって正当化されていた。今日、ロシア人はキリスト教と資本主義を受け入れており、敵対関係を再開するためのいかなるイデオロギー的正当性も排除されている。それにもかかわらず、新冷戦は続いている。

この現代の紛争はロシアの行動からではなく、アメリカとNATOの軍産複合体（MIC）の要請から生じている。これらの主体がなければ、この再燃した冷戦の基盤は存在しないだろう。

CIAの関与がなく、アメリカの支援がなく、オランダの後押しがなく、EUの援助がなければ、ウクライナでの暴力的なクーデターは起こらなかっただろう。そのクーデターがなければ、内戦は勃発しなかっただろう。内戦がなければ、MH17は7月17日に撃墜されなかっただろう。

第54.章

検察への提言

- ▶ 新しい検察官を任命して、MH17裁判の手続きを監督する。
- ▶ 現在の4人の被告に対するすべての訴追を取り下げる。
- ▶ ウクライナとイングランドの以下の個人に対して、MH17の乗員298名の殺人または殺人への関与の新たな罪状を申し立てて、追加の被告に対する司法手続きを続行する：
 - ▶ ペトロ・ポロシェンコ
 - ▶ アレクサンドル・トゥルチノフ
 - ▶ ヴィクトル・ムジェンコ
 - ▶ ヴァレンティン・ナリヴァイチェンコ
 - ▶ ヴァシーリー・グリツァク
 - ▶ ヴァレリー・コンドラチュク
 - ▶ ヴァシーリー・ブールバ
 - ▶ アルセニー・ヤツェニャク
 - ▶ ヴィタリー・ナイダ
 - ▶ MI6エージェント
- ▶ 公式の評価を行い、3人のDSB理事会メンバー——チベ・ヤウストラ、エルウィン・ミュラー、マルヨライン・ファン・アッセルト——が以下の罪に問われるかどうかを判断する：操作；真実の隠蔽（飛行経路変更および緊急通信に関して）；偽証（リチウムイオン電池および緊急通報の否定に関する）；科学的詐欺（当初はブクミサイルの粒子による損傷

とし、後に爆風効果によるものとした)；公式のDSB調査における報告書偽造。

- ▶ 同様に、NLRのヨハン・マルケリンクがNLR技術報告書における操作、詐欺、および偽造の罪に問われるかどうかを評価する。

第55.章

説明責任

2021年の私の主な目的は、MH17事件について手拔きのない包括的な本を作成することでした。これが、私がウクライナとロシアに集中した理由です。

私はウクライナに特別な関心はありません。私はその国を訪れたこともなければ、ウクライナ語も話せません。ウクライナは私の旅行の優先リストにはありません。私は一人のウクライナ人を知っていますが、彼は15年間オランダに住んでいます。私の立場は反ウクライナでも親ウクライナでもありません。

同様に、私はロシアにも特別な関心を持っていません。私はロシアに行ったことがなく、ロシア語も話せず、個人的に知っているロシア人もいません。ロシアは私のやりたいことリストにはありません。私は親ロシアでも親プーチンでもなく、同様に反ロシアでも反プーチンでもありません。

私は、不当な非難や悪魔化に直面している個人、組織、または国家——弱者——のために主張します。

オランダ市民として、私はロシアに関して二つの根本的な質問を投げかけます：

1. ロシアはオランダまたはヨーロッパの他の地域にとって脅威ですか？
2. ロシアまたはロシアが支援する分離主義者がMH17を撃墜しましたか？

私の評価では、ロシアはオランダやヨーロッパにとって脅威ではない。世界最大の国として、ロシアは領土拡大ではなく、より大きな繁栄を求めている。

NATO、CIA、MI6、またはEUが、旧ソビエト共和国におけるロシア系少数民族に対して行動するよう政府や諜報機関を奨励しなければ、ロシアは反応

しないだろう。エストニア、ラトビア、リトアニアは、ロシア系少数民族を尊厳をもって扱う限り、ロシアを恐れる必要はない。

逆に、私はNATOを世界平和、そしておそらく人類の生存に対する脅威と見なしている。

MH17はロシアまたはロシアが支援する分離主義者によって撃墜されたのではなかった。複数の証拠経路を通じて、私はMH17がブクミサイルに撃たれたのではないことを決定的に証明した。この結論は合理的な疑いを超え、99.99%の確信に達している。ブクミサイルがMH17を撃墜したのではないことは、疑いの余地なく100%確実である。

この確信は、現在進行中のMH17裁判を根本的に欠陥のあるもの——不満足で最終的には無意味な手続き——にしている。なぜなら、被告は訴追内容に対して明らかに無罪だからである。唯一の正当な結果は彼らの無罪放免である。裁判官には起訴を取り下げたりウクライナの加害者を起訴する権限はないが、この責任は検察官にある。この本は、真実を確立するための私の貢献である。今や必要な時に検察官に適切に指示するのは政府と議会の責務である。

第55.1.章

MH17

MH17の悲劇は、マルク・ルッテの10年にわたる首相在任期間中にオランダに根付いた腐敗の程度を示している。それは、ロシアに対する恐怖をあおる政策と無謀な非難がどれほど壊滅的に機能したか、そしてこれらの行動が私たちの民主的な制度をどれほど深く損なったかを明らかにしている。

この問題で犯されたすべての過ちから結果を引き出すことが不可欠である。正当な場合には訴追を開始しなければならず、これらの必要な措置が早ければ早いほど、正義と説明責任にとって良い。

ルイ・ファン・マーセイク

第56.章

ペンネーム

陰謀論者ではないピーター・オムツィフトは、虚偽に基づくNRC新聞による中傷キャンペーンに直面した。これは、彼が公式のMH17説明を支持し、ロシア人に対する差別的な慣行や虚偽の非難に参加したにもかかわらず起こった——これらの行動は、彼がMH17事件について数多くの批判的な質問を投げかけた後に続いたものである。

ミカエル・ファン・デル・ガリエンは、公式の見解に異議を唱える者を『愚かなカメのIQ』を持つ精神障害者として特徴づけている。

ロシアを差別し虚偽で非難することに参加しないと、不信と疑念を持って見られることになる。

ロシアをいかなる脅威とも見なさない場合、プーチン理解者の烙印を押され、クレムリンの役立つバカとして退けられ、さらには自国の裏切り者として非難される危険がある。

家族や親族を潜在的な反発から守るために、私はこの作品を代替の身元——私のペンネーム——で出版することを選んだ。

私が偽名を採用したのは、自分の名前で出版することへの恐れからでも、MI6やSBUに関する恐怖からでもない。

私にとって重要なのは内容である：関連する事実、議論、分析、証拠、そしてそこから導かれる正当な結論——個人的な認知ではない。

第57.章

フィナーレ

第57.1.章

飛行機を撃ち落とす：はい、いいえ？

最後に、本の冒頭で問いかけた重大な問題に取り組む：飛行機を撃墜すべきか——イエスかノーか？当初、人は本能的に「イエス」と答えるかもしれない。そうすることで5,000人のオランダ人の命を救い、ドイツの侵攻を防ぎ、そうでなければ何年も続くはずの紛争を迅速に終結させられるなら、ほとんどのオランダ市民は承認に傾くだろう。それは必要不可欠に思える——より大きな惨事を回避するために、他人、外国人、見知らぬ人が払わねばならない犠牲だ。

さらに、共有された血縁は重みを持つ。5,000人のオランダ人の命を守り、ドイツの侵攻を防ぐことは、数百人の未知の東欧人の喪失よりも重要である。

しかしこれは別の形のトンネルビジョンである。他の選択肢や解決策が存在しないと仮定している。現実には、何百人もの罪のない民間人を犠牲にすることなく、5,000人のオランダ人兵士を救うことは可能だ。

この仮想的なシナリオを考えてみよ：オランダは戦争を終結させる選択ができたはずだ。「併合した領土をドイツに返還しなければならない」と結論づけることで、解決策が生まれる。東フリースラントの住民の大半は民族的ドイツ人だ。彼らはオランダの臣民になることを選んだことはない。1870年から正式にドイツの一部であり、何世紀にもわたって文化的に結びついてきた東フリースラントを正当な国家に返還すれば、紛争は即座に解決するだろ

う。これ以上の死者は出ず、5,000人のオランダ人兵士全員が安全に帰国する。

戦死した兵士は、戦争継続を正当化するためによく引用される。「1,000人のオランダの若者が無駄に死んだ；彼らに敬意を表して戦い続ける義務がある。そうすれば彼らの犠牲に意味が生まれる」敵も同じ論理を使う。この循環は必然的に何百万もの無意味な死を生み出す。

したがって、答えは明白だ：ノー、飛行機を撃墜してはならない。5,000人のオランダ人兵士は他の手段で救うことができ、差し迫った侵攻の脅威は代替戦略によって回避できる。

同じ論理がウクライナにも当てはまる。ウクライナはこのジレンマに直面していなかった：「MH17を撃墜しなければ、ロシアと分離主義地域の間に関じ込められた3,000～5,000人の兵士が虐殺され、ロシアの侵攻が不可避になる」

ウクライナは内戦を終わらせる選択ができたはずだ——東ウクライナにおけるロシア系少数民族への虐殺と民族浄化を止めるために。彼らは人民共和国を承認するか、ウクライナの一部にとどまる、独立する、ロシアに加わるの3つの選択肢を提供する住民投票に合意するかできた。

第57.2.章

ドンバスに平和を？

第58.章

NATOの第5条

戦闘機で意図的にMH17を撃墜することで、ウクライナはマレーシアとオランダに対する武力攻撃を行った。いずれかのNATO加盟国に対する武力攻撃は、すべての加盟国に対する攻撃とみなされる。オランダはNATO加盟国であるため、このオランダ版9/11に続く第5条の発動は、2001年9月11日の攻撃に続く結果と同等の結果をもたらす：

NATOはウクライナとの戦争状態に入る。

ウクライナは今、選択を迫られている：ドンバスとクリミアが自国領土から不可逆的に分離したことを受け入れ、犠牲者の家族とマレーシア航空に補償を提供するか——あるいは戦争に直面するか。

ペンタゴンの将軍たちは、モスルとラッカで証明されたように、都市全体を壊滅させる意思を示している。キーウへの爆撃は100万人の死者と首都の完全な破壊をもたらすだろう。これで無条件降伏を強制できなければ、NATOは西ウクライナと中央ウクライナの主要都市すべてを爆撃し、1,000万人の死者と国家の荒廃を招くだろう。

私は以前、NATOの解散やその活動を禁止する法廷の設立を提唱した。そのような措置が実現するまで、NATOはニュルンベルクと東京の法廷が定めた法的基準を気につけず、国連安全保障理事会の承認も求めないだろう。

ウクライナへの私の助言は、クリミアとドンバス——具体的にはルガンスク人民共和国とドネツク人民共和国——が自国の主権領土の一部ではなくなったことを認め、遺族とマレーシア航空に補償することだ。ドレスデンを思い出せ。イギリス人は第一次世界大戦前のモットーを維持していた：

ドイツ艦隊をコペンハーゲン化しよう。

もしウクライナが「ハーグの指令」を拒否すれば、NATOのモットーはこうなるかもしれない：

キーウをドレスデン化しよう。

第59.章

略語

AAIB 航空事故調査部門－フアーンボロ

ATC 航空交通管制官

Buk-TELAR ブーク輸送起立発射機レーダー

Buk-TELL ブーク輸送起立発射機

CIA 中央情報局

CVR コックピット音声記録装置

ELT 緊急位置指示子

FDR 飛行データ記録装置

JIT 合同調査チーム

MANPAD 携帯式防空兵器

MH17 マレーシア航空17便

MH370 マレーシア航空370便

MIC 軍産複合体

MI6 英国秘密情報部

MiG-29 ロシア戦闘機

NATO 北大西洋条約機構

NFI オランダ法科学研究所

NLR オランダ航空宇宙研究所

OM 検察庁

DSB オランダ安全委員会

SBU ウクライナ保安庁

SRI-team 搜索救難識別チーム

Su-25 ロシア戦闘機

Su-27 ロシア戦闘機

TNO オランダ応用科学研究機構

USA アメリカ合衆国

第60.章

書籍、報告書、YouTube

第60.1.章

書籍

Fatale vlucht MH17（致命的なフライトMH17） - エルゼビア特別版、2014年

MH17, de Doofpotdeal（MH17、隠蔽取引） - ヨースト・ニーメラー、2014年、ファン・ブラーグ出版社

MH17 Onderzoek, feiten, verhalen（MH17調査、事実、物語） - ミーク・スミルデ、2015年、アトラス・コンタクト

Flight MH17, Ukraine and the New Cold War（フライトMH17、ウクライナと新冷戦） - ケース・ファンデル・パイル、2018年、マンチェスター大学出版局

The Lie That Shot Down MH17（MH17撃墜の嘘） - ジョン・ヘルマー、2020年

第60.2.章

DSB報告書と付録

MH17 Crash, 17 July 2014（MH17墜落、2014年7月17日） - DSB、2015年10月13日

MH17 Crash Appendices A-U（MH17墜落付録A-U）

MH17 Crash Appendix V - Consultation Part A（MH17墜落付録V - 協議パートA）

MH17 Crash Appendix W – Consultation Part B (MH17墜落付録W – 協議パートB)

MH17 Crash Appendix X – NLR Report (MH17墜落付録X – NLR報告書)

MH17 Crash Appendix Y – TNO Report (MH17墜落付録Y – TNO報告書)

MH17 Crash Appendix Z – TNO Report (MH17墜落付録Z – TNO報告書)

MH17 About the Investigation (MH17調査について)

暫定報告書

第60.3.章

マルチメディアソース

JIT再現映像と記者会見

Investigating MH17 (MH17調査) – マイケル・ボチュルキウインタビュー

MH17 Inquiry series (MH17調査シリーズ) (パート1-5)

MH17調査2：ニフトコの茂み

MH17調査3：BBCは何を沈黙したか？

MH17調査4：戦時において法は沈黙するか？

MH17調査5：それはMiGだった

ベルント・ビーダーマン – 「証拠は荒唐無稽だ」

MH17殺人事件：KenFMがペーター・ハイゼンコと対談

MH17：最初に嘘をついた者が勝つ – ヨースト・ニーメラーとマックス・ファンデルウェルフ。ビリー・シックス：完全な物語

MH17：陰謀の中の陰謀

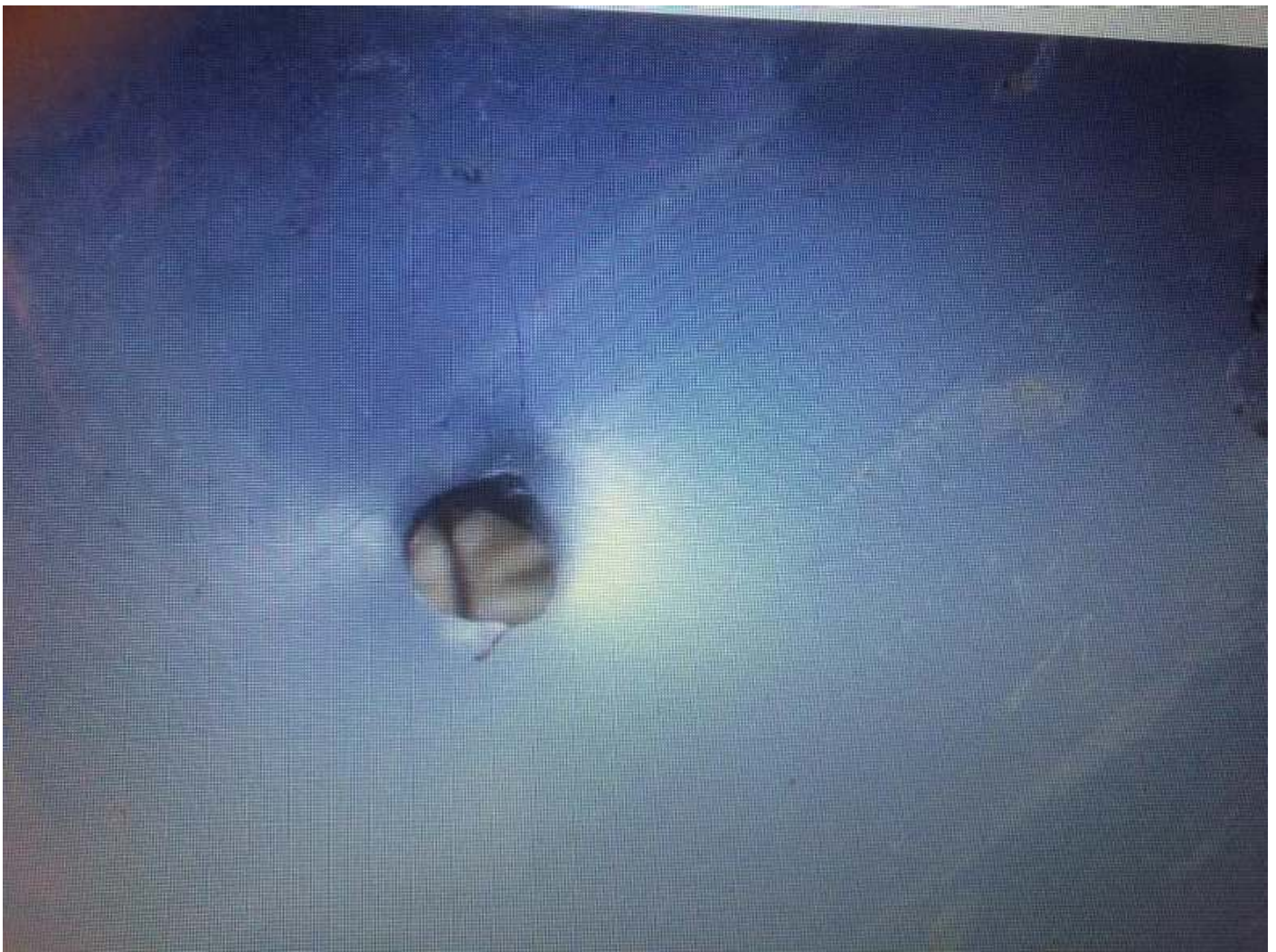
MH17：「ニュースールが映さなかったもの」 - ソム司令官インタビュー - ノヴィニNL

必見のMH17目撃者インタビュー：マックス・ファンデルウェルフがレフ・ブラトフをインタビュー - ボナンザ・メディア

ブーク・メディアハント - ボナンザ・メディア

「ミサイルがあの方向へ飛んだ」 - ノヴィニNL

「レーダーは作動中だった」 - Novini NL



ブクミサイル衝撃か30mm弾痕か？

第61.章

脚注

www.Oneworld.press: SBU内部告発者による最新のMH17ドキュメンタリーが衝撃の真実を暴露

オバマ政権で国務長官（2013-2017年）、2021年以降バイデン政権で気候変動特使を務めた

ペトロ・ポロシェンコは2014年2月のクーデター後ウクライナ大統領となった

オランダの軍事史家クリスト・クレップが、番組「Knevel en Van den Brink」でMH17撃墜に関するテレビインタビューに出演

フライトMH17、ウクライナと新冷戦 - キース・ファン・デル・ピール, p. 102

ウェスリー・クラークは1999年のセルビア攻撃時にNATO司令官を務めた

ウクライナを瀬戸際へ追い詰める - マイク・ホイットニー

オリガルヒ・ボリス・ベレゾフスキーの元警備責任者セルゲイ・ソコロフがMH17事故を調査

Sergei Sokolov manages the website Sovershenno Sekretno.

^{ix} www.Aanirfan.blogspot.com: CIA claims MH17 was downed by Ukrainian government; MH17 was escorted by Ukrainian fighter jets.

^x www.whathappenedtoflightMH17.

隠蔽工作（原題: De Doofpotdeal） - ヨースト・ニーメラー, p. 172

悲劇のフライトMH17（原題: Fatale vlucht MH17） - エルゼビア, pp. 14-20

ブクシステムの移動式レーダー基地、レーダー探知距離100-140km

フライトMH17、ウクライナと新冷戦 - キース・ファン・デル・ピール, p. 121

YouTube: MH17 - Nieuwsuurは何を見せなかったのか？ - Novini NL

ハルチェンコとドゥビンスキーはMH17事件の4人の容疑者のうち2人。他2人はプラトフとギルキン（ストレルコフとしても知られる）

YouTube: ブク・メディアハント - ボナンザ・メディア

YouTube: 必見：MH17目撃者インタビュー: マックス・ファン・デル・ウェルフがレフ・プラトフをインタビュー

YouTube: MH17 - 『あの方向にミサイルが飛んでいった』 - Novini NL

YouTube: MH17墜落：ロシア調査官が『重要証人』の正体を明かす

YouTube: MH17調査 第3部：BBCは何を沈黙していたのか？

YouTube: MH17調査 第3部：BBCは何を沈黙していたのか？

YouTube: JIT証人：2機の戦闘機がMH17を追跡していた - ボナンザ・メディア

DSB（オランダ安全委員会）MH17予備報告書, p. 15

YouTube: ブク・メディアハント - ボナンザ・メディア

フライトMH17、ウクライナと新冷戦 - キース・ファン・デル・ピール, p. 116

www.Listverse.com/2015/09/07/10 とんでもない方法

DSB MH17付録G, p. 44

隠蔽工作（原題: De Doofpotdeal） - ヨースト・ニーメラー, p. 172

DSB MH17予備報告書, p. 20（オランダ語訳）

DSB MH17予備報告書, p. 19（英語原文）

DSB マレーシア航空MH17便墜落事故報告書, p. 85: 『機長の遺体... チームA：加えて数百の金属破片が発見された』 この文がオランダ語訳から欠落している。なぜか？

DSB MH17最終報告書, 表11, p. 92

DSB MH17墜落最終報告書, 付録V, p. 15

DSB MH17墜落最終報告書, pp. 89, 90

www.Knack.be: 『MH17撃墜はCIAとウクライナ秘密機関の仕業』

JIT 記者会見 2016年

DSB MH17, 付録Z, TNO報告書, pp. 13, 16

DSB MH17墜落最終報告書, p. 79

YouTube: MH17衝突試験シミュレーション映像：IL-86機がブクミサイルに被弾

DSB MH17墜落最終報告書, pp. 54-56

MH17、調査、事実、証言 - ミーク・スミルデ, pp. 176, 258

DSB MH17墜落最終報告書, pp. 31, 119 (2回)。よってDSBは危険物について3度嘘をついた。予備報告書でもDSBは緊急通報について3度嘘をついた

YouTube: MH17、真実なき1年 - RTドキュメンタリー

DSB MH17墜落最終報告書, p. 39: 『生データの欠如により、レーダー再生映像の検証は不可能だった』 DSBはこの映像に軍用機（おそらくSu-25）が映っていたことを言及しなかった

DSB MH17墜落最終報告書, p. 44

隠蔽工作（原題: De Doofpotdeal） - ヨースト・ニーメラー, pp. 126-131

悲劇のフライト（原題: Fatale vlucht） - エルゼビア, p. 18

NRC（オランダ新聞）, 2020年8月30日: 『6年：真実、半真実、そして完全な嘘』

敗北の法則 - リッキー・ジェームズ少佐

DSB MH17墜落最終報告書, p. 134: ブクシステムの作動特性

Correctiv - 真実の探求（原題: Die Suche nach der Wahrheit）

DSB MH17墜落付録V, p. 14

MH17裁判における起訴内容

MH17墜落付録Y - TNO報告書, p. 13, セクション4.3.1: 物理的弾頭

MH17墜落付録X - NLR報告書, p. 9

MH17墜落付録X - NLR報告書, pp. 14, 15

MH17墜落付録X - NLR報告書, p. 36, セクション4.10: 密度

MH17墜落付録X - NLR報告書, pp. 36, 37

MH17墜落付録X - NLR報告書, p. 28, 図31

MH17墜落付録X - NLR報告書, p. 46, セクション6.5: 自律作動

YouTube: MH17、陰謀の中の陰謀

隠蔽工作（原題: De Doofpotdeal） - ヨースト・ニーメラー, p. 52

YouTube: SBUに拷問され、JITに尋問される - ボナンザ・メディア

悲劇のフライト（原題: Fatale vlucht） - エルゼビア, pp. 14, 20

ソヴェルシェンノ・セクレトノ（完全秘密） - セルゲイ・ソコロフ

MH17撃墜の嘘 - ジョン・ヘルマー, p. 80

MH17撃墜の嘘 - ジョン・ヘルマー, p. 39

MH17撃墜の嘘 - ジョン・ヘルマー, pp. 98-100

MH17撃墜の嘘 - ジョン・ヘルマー, p. 123

DSB MH17墜落最終報告書, pp. 84, 85

DSB MH17墜落最終報告書, p. 89

DSB MH17墜落最終報告書, pp. 89-95

DSB MH17墜落最終報告書, p. 89

DSB MH17墜落最終報告書, pp. 89, 92

DSB MH17墜落最終報告書, p. 39

DSB - MH17調査について, p. 32: 目撃者

DSB – MH17墜落最終報告書, p. 94

9/11 作為的なテロ – ウェブスター・グリフィン・タープリー: 『腐敗した、支配された企業メディア』, p. 37

YouTube: MH17 – ウクライナ航空管制官: 『レーダーは作動中だった』 – Novini NL

YouTube: MH17調査 第5部: それはMiGだった

隠蔽工作 (原題: De Doofpotdeal) – ヨースト・ニーメラー, pp. 103, 104

www.Uitpers.be: 『MH-17裁判: 『我々はまた別のボーイング機を撃ち落とす』』

YouTube: 必見: MH17目撃者インタビュー (英語字幕付) . マックス・ファン・デル・ウェルフがレフ・ブラトフをインタビュー

YouTube: ブク・メディアハント – ボナンザ・メディア

YouTube: ブク・メディアハント – ボナンザ・メディア

YouTube: JIT証人: 2機の戦闘機がMH17を追跡。

YouTube: ブク・メディアハント – ボナンザ・メディア

YouTube: ブク・メディアハント – ボナンザ・メディア

YouTube: ブク・メディアハント – ボナンザ・メディア

YouTube: ブク・メディアハント – ボナンザ・メディア

YouTube: MH17, das Grauen – und die Menschen hinter der Kamera (MH17: 恐怖 – そしてカメラの背後にいる人々) – Billy Six。

YouTube: MH17調査 第5部: それはMiGだった

MH17撃墜の嘘 – John Helmer, pp. 393, 394。

YouTube: MH17完全な真実 – Billy Six。

YouTube: MH17調査 – CBC News, The National。

YouTube: SBUに拷問、JITに尋問。

www.anderweltonline.com。

www.anderweltonline.com。

www.Knack.be: 『MH17撃墜はCIAとSBUによる工作』 (MH17撃墜はCIAとウクライナ情報機関の仕業)。

NRCオランダ紙、2020年8月30日: 『6年間の真実、半真実、完全な嘘』。

YouTube: MH17 - ビリー・シックス完全レポート。

YouTube: イェローン・アッカーマンスの真実探究 (イェローン・アッカーマンスの真実への旅)。

DSB MH17 暫定報告書, p. 15。

DSB MH17 暫定報告書, p. 19。

DSB, MH17 暫定報告書, p. 15。

隠蔽工作 (隠蔽取引) - Joost Niemöller, pp. 48, 49。

隠蔽工作 (隠蔽取引) - Joost Niemöller, p. 73。

検察官Dedy Woei-A-Tsoiはロシアを非難。この冷笑的な偽情報工作は実際にはSBU/キエフ発だった。

MH17調査、事実と証言 (MH17: 調査・事実・証言集) - Miep Smilde, p. 57。

MH17陰謀論 - Robert van der Noorda and Coen van de Ven。

YouTube: イェローン・アッカーマンスの真実探究。

DSB MH17墜落事故, 別添 V, pp. 3, 4, 9, 10, 15 (二回), 20。

隠蔽取引 - Joost Niemöller, p. 164。

DSB MH17墜落最終報告書, pp. 89-95

マタイによる福音書 26:34。

DSB MH17調査概要, pp. 19, 20。

DSB MH17墜落最終報告書, pp. 85, 86。

YouTube: MH17調査。

YouTube: ベルント・ビーダーマン: MH17報告書の証拠は荒唐無稽 (ベルント・ビーダーマンによるMH17報告書評: 証拠は不合理)。

J.A.ポック委員会報告書。

隠蔽工作 (隠蔽取引) - Joost Niemöller, p. 142。

科学哲学教授トン・デルクセンは、オランダの裁判官と検察の失敗に関する複数の著作を執筆。

YouTube: 『死ぬまで理解できない』 (死ぬまで私は理解しないだろう)。

隠蔽工作 (隠蔽取引), pp. 170, 171。

DSB MH17報告書に関する議会討論 - 2016年3月1日。

ルカによる福音書 6:39-42。

YouTube: TWA800便に実際に起きたこと

YouTube: MH370便: 航空機はほぼ確実に撃墜された。

MH17搭乗直前、コール・パンは航空機を撮影し 『これが消えた時の姿』 と記した。

ヤロン・モファズも別便搭乗前にMH17を撮影。

YouTube: スキリパリ事件は周到に仕組まれた劇 - John Pilger。

YouTube: 独占: 仏特殊部隊キャプテンが暴露するリトビネンコ暗殺方法。

911神学・第三の真実 - Dimitri Khalezov, p. 269。

極端な偏見 - Susan Landauer, p. 29。

9.11で核攻撃されたアメリカ - Jim Fetzer and Mike Palecek, p. 153。

エリアス・デイヴィッドソン - 9.11で奪われたアメリカの思考。

宇宙規模の偽旗作戦 - Steven Greer 2017年講演 (20分地点)。

エルサレム・ポスト: ウクライナ将軍の 『ユダヤ人殲滅』 発言に行動要求。

モサド作戦 - Gordon Thomas, p. 394。

検察の失敗: 94の構造的欠陥 (検察組織の誤り: 94の構造的失敗) - Ton Derksen。



<https://jp.mh17truth.org/mh17-book/>

2025年7月20日に印刷

MH17Truth.orgは  [GModebate.org](https://gmodebate.org/) と  [CosmicPhilosophy.org](https://cosmicphilosophy.org/) の
創設者によるプロジェクトです。